千葉県文化財センター調査報告第153集

千葉市荒久遺跡(1)

－千葉県立中央博物館野外観察地建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

1989

千葉県教育委員会
財団法人 千葉県文化財センター

千葉市荒久遺跡(1)

ちばしあらくいせき

－千葉県立中央博物館野外観察地建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

1989

千葉県教育委員会
財団法人 千葉県文化財センター

荒久遺跡全景

1．土器（竪穴住居010・012）

2．銅鏃

3．石製品

序　　文

千葉県では，現在までに県立博物館を県内6地域に設置してきました。これらは各テーマに基づいた専門館と地域に根ざした地域館の両面をもって運営しているものですが，これら博物館を有機的に結びつけ，より活発な活動を促進させるための中核となる中央博物館の設置が急務となってきました。そしてこの中央博物館を千葉市青葉町の農林水産省畜産試験場跡地に造られる県立青葉の森公園内に建設することになりました。

一方，千葉市は東京湾に面した温暖な地域で自然条件に恵まれているため，著名な貝塚や古墳，古代集落が多数存在し，埋蔵文化財の宝庫ともいえる土地柄です。畜産試験場内にも古くから荒久古墳の存在することが知られ，千葉市の指定史跡となっています。千葉県教育委員会と千葉県都市部では，本事業の計画にあたり埋蔵文化財の保護を充分考慮した設計を行いましたが，野外観察地の一部については設計上どうしても遺跡を避けられない状況となり，やむをえず発掘調査による記録保存の措置を講ずることになりました。発掘調査は財団法人千葉県文化財センターが担当することになり，昭和62年度に実施しました。

発掘調査の結果，荒久遺跡(1)では弥生時代から古墳時代にかけての竪穴住居が45軒検出され，この時期に大規模な集落が存在したことがわかりました。また，先土器時代の石器群も多数出土し，この地域の古代の人々の生活や文化を解明するための貴重な資料を提供することができたといえましょう。

このたび，この調査の成果を報告書として刊行するに当たり，本書が学術資料としてはもとより文化財の保護と普及のために広く一般の方々に活用されることを願ってやみません。

終わりに，千葉県教育庁文化課の御指導と御協力，千葉県都市部都市整備課，千葉県千葉都市計画事務所の御協力に御礼申し上げると共に，酷暑の中で調査に協力された調査補助員の皆様に心から謝意を表します。

平成元年3月

財団法人　千葉県文化財センター
理事長　岩　瀬　良　三

凡　　例

1．本書は，荒久遺跡(1)(千葉市青葉町654-1他)の発掘調査報告書である。

2．調査は，千葉県立中央博物館野外観察地建設に先立ち，千葉県教育委員会の指導のもとに財団法人千葉県文化財センターが実施した。調査面積は7372m²である。

3．調査で使用したコード番号は201-048-1である。

4．調査期間は昭和62年4月1日から昭和62年9月30日までである。
現地の調査は，調査部長堀部昭夫，調査部長補佐岡川宏道の指導の下に班長大原正義，主任調査研究員山口典子が担当した。また，同期間に荒久遺跡(2)(201-048-2)の調査を行っていた主任調査研究員金丸誠，同小林清隆の協力を得た。

5．整理は昭和62年度と昭和63年度の2年度にわたって行った。整理期間は，昭和62年10月1日から昭和62年12月28日，昭和63年3月1日から平成元年1月31日である。

6．整理作業および本書の作製は調査部長堀部昭夫，調査部長補佐岡川宏道，調査部長補佐兼班長西山太郎の指導の下に，班長代理田村隆，主任調査研究員今泉潔，同上守秀明，同山口が行った。作業及び執筆分担は，田村（Ⅲ－1・Ⅳ－1），今泉（Ⅲ－5・6・先土器時代遺物以外の遺物写真），上守（Ⅲ－2(5) 縄文式土器・Ⅲ－4 石器）で，これ以外を山口が担当した。
また荒久遺跡(2)の整理作業を行った田村，主任調査研究員萩原恭一，調査研究員小林信一とは打ち合わせを行い，できるかぎり記載内容の統一がとれるようにした。

7．遺物の実測にあったっては，慶応義塾大学大学院　神野信氏の御協力を得た。

8．炭化材の取り上げ，土層断面の剝ぎ取り作業などで，同センター研究部主任調査研究員服部哲則氏の御協力を得た。

9．発掘調査から本書の刊行に至るまで，千葉県教育庁文化課，千葉県都市部都市整備課，千葉県千葉都市計画事務所の関係各位，並びに杉山晋作氏，野島則幸氏はじめ多くの方々の御指導，御協力を得た。ここに謝意を表します。

10．石器属性表の見方は tab. 17（本文80ページ）末尾に付した。

目　　次

序　文
凡　例
I　序　章…… 1
1．調査に至る経過…… 1
2．荒久遺跡の立地と周辺の遺跡…… 2
3．調査の概要…… 5

II　遺　構…… 7
1．竪穴住居…… 7
(1)弥生時代終末期～古墳時代前期 …… 7
(2)古墳時代中期 …… 30
(3)古墳時代後期 …… 34
(4)時期不明 …… 44
2．炉穴…… 47
3．土壙墓…… 47
4．土坑…… 48
5．溝状遺構…… 50

III　遺　物…… 54
1．先土器時代の遺物…… 54
(1)上層石器群 …… 54
(2)下層石器群 …… 63
(3)表面採集の遺物 …… 106
(4)要約 …… 106
2．土器類…… 108
(1)弥生時代終末期～古墳時代前期 …… 108
(2)古墳時代中期 …… 119
(3)古墳時代後期 …… 124
(4)その他の遺構 …… 128
(5)遺構外出土土器 …… 129

3．銅鏃・鉄製品…… 131
4．土製品・石製品類…… 132
5．銭貨…… 136
6．瓦…… 137

Ⅳ まとめ…… 138
1．先土器時代…… 138
(1)上層石器群 …… 138
(2)下層石器群 …… 139
2．遺構・遺物…… 143
(1)調査の成果 …… 143
(2)集落について …… 144
(3)遺物の出土状態について …… 148
(4)土壙墓について …… 151
(5)土器以外の遺物について …… 151

挿　図

fig. 1 荒久遺跡周辺の地形
fig. 2 荒久古墳全景
fig. 3 荒久古墳石室
fig. 4 遺跡周辺図
fig. 5 小グリッド
fig. 6 荒久遺跡(1)遺構配置図
fig. 7 竪穴住居003
fig. 8 竪穴住居004遺物出土状態
fig. 9 竪穴住居004
fig. 10 竪穴住居006
fig. 11 竪穴住居009・011・020
fig. 12 竪穴住居013
fig. 13 竪穴住居030
fig. 14 竪穴住居015
fig. 15 竪穴住居022・023・025
fig. 16 竪穴住居027・029
fig. 17 竪穴住居034・033・037
fig. 18 竪穴住居036
fig. 19 竪穴住居038
fig. 20 竪穴住居040
fig. 21 竪穴住居060
fig. 22 竪穴住居044遺物出土状態
fig. 23 竪穴住居041・043・044・056・061
fig. 24 竪穴住居010・012
fig. 25 竪穴住居031・035
fig. 26 竪穴住居001・002
fig. 27 竪穴住居008炭化材出土状態
fig. 28 竪穴住居008
fig. 29 竪穴住居016
fig. 30 竪穴住居026炭化材出土状態
fig. 31 竪穴住居014・026・042
fig. 32 竪穴住居039
fig. 33 竪穴住居024・047・049・055・057・065
fig. 34 竪穴住居063
fig. 35 炉穴051・土壙墓007
fig. 36 土坑005・017・059・062
fig. 37 土坑045・050・064・066
fig. 38 溝018・021
fig. 39 溝048・052
fig. 40 溝028・032・046
fig. 41 荒久遺跡基本層序
fig. 42 荒久遺跡(1)先土器時代ブロック検出状況(1/2,000)
fig. 43 第1ブロック器種別遺物分布状況(1/80)

fig. 44　第1ブロック母岩別遺物分布状況(1/80)
fig. 45　第1ブロック出土遺物(4/5)
fig. 46　第2ブロック器種別(上)・母岩別(下)遺物分布状況(1/80)
fig. 47　第2ブロック出土遺物(4/5)
fig. 48　第3ブロック全体図(1/150)
fig. 49　第3ブロック・クラスターa器種別遺物分布状況(1/80)
fig. 50　第3ブロック・クラスターa母岩別遺物分布状況(1/80)
fig. 51　第3ブロック・クラスターb器種別(上)・母岩別(下)遺物分布状況(1/80)
fig. 52　第3ブロック・クラスターc器種別(上)・母岩別(下)遺物分布状況(1/80)
fig. 53　第3ブロック・クラスターd器種別(上)・母岩別(下)遺物分布状況(1/80)
fig. 54　第3ブロック・クラスターe器種別(上)・母岩別(下)遺物分布状況(1/80)
fig. 55　第3ブロック出土遺物(1)(4/5)
fig. 56　第3ブロック出土遺物(2)(4/5)
fig. 57　第3ブロック出土遺物(3)(4/5)
fig. 58　第3ブロック出土遺物(4)(4/5)
fig. 59　第3ブロック出土遺物(5)(4/5)
fig. 60　第3ブロック出土遺物(6)(4/5)
fig. 61　第3ブロック出土遺物(7)(4/5)
fig. 62　第3ブロック出土遺物(8)(4/5)
fig. 63　第3ブロック出土遺物(9)(4/5)
fig. 64　第3ブロック出土遺物(10)(4/5)
fig. 65　第3ブロック出土遺物(11)(4/5)
fig. 66　炭塊(4/5)
fig. 67　貝製品(4/5)
fig. 68　第4ブロック器種別(上)・母岩別(下)遺物分布状況(1/80)
fig. 69　第4ブロック出土遺物(4/5)
fig. 70　第5ブロック器種別(上)・母岩別(下)遺物分布状況(1/80)
fig. 71　第5ブロック出土遺物(4/5)
fig. 72　ブロック外の遺物(1)(4/5)
fig. 73　ブロック外の遺物(2)(4/5)
fig. 74　荒久遺跡(1)表面採集の先土器時代の遺物(4/5)
fig. 75　竪穴住居004出土土器
fig. 76　竪穴住居006・009出土土器
fig. 77　竪穴住居011・013出土土器
fig. 78　竪穴住居015・022・025出土土器
fig. 79　竪穴住居027・030・033・034出土土器
fig. 80　竪穴住居036・037・038・044出土土器
fig. 81　竪穴住居040・056・060出土土器
fig. 82　竪穴住居010炉遺物出土状態
fig. 83　竪穴住居010貯蔵穴遺物出土状態
fig. 84　竪穴住居010出土土器(1)
fig. 85　竪穴住居010出土土器(2)
fig. 86　竪穴住居012・031・035出土土器
fig. 87　竪穴住居001・002・008出土土器
fig. 88　竪穴住居039遺物出土状態
fig. 89　竪穴住居039竈遺物出土状態
fig. 90　竪穴住居014・016・026・039・042出土土器
fig. 91　土壙墓007・溝021・土坑059・遺構外出土土器
fig. 92　遺構外出土土器拓影図
fig. 93　銅鏃・鉄製品
fig. 94　玉類・土製品
fig. 95　石器・砥石・石製品
fig. 96　銭貨
fig. 97　瓦
fig. 98　荒久遺跡周辺の遺跡
fig. 99　荒久遺跡の地形
fig. 100　竪穴住居039焼土・炭化材出土状態
fig. 101　竪穴住居008・012焼土・炭化材出土状態
fig. 102　竪穴住居026焼土・炭化材出土状態
fig. 103　竪穴住居010遺物出土状態
fig. 104　竪穴住居016焼土・炭化材出土状態

表目次

tab. 1　第1ブロック遺物の垂直分布
tab. 2　第1ブロック細石刃の長・幅(左)，幅・厚(右) 分布
tab. 3　第1ブロック遺物集計表
tab. 4　第1ブロック遺物属性表
tab. 5　第2ブロック遺物集計表
tab. 6　第2ブロック遺物属性表
tab. 7　第3ブロック・クラスター別遺物集計表
tab. 8　第3ブロック・クラスターa遺物の垂直分布
tab. 9　第3ブロック・クラスターa遺物集計表
tab. 10　第3ブロック・クラスターb遺物の垂直分布
tab. 11　第3ブロック・クラスターb遺物集計表
tab. 12　第3ブロック・クラスターc遺物の垂直分布
tab. 13　第3ブロック・クラスターc遺物集計表
tab. 14　第3ブロック・クラスターd遺物集計表
tab. 15　第3ブロック・クラスターe遺物集計表
tab. 16　第3ブロック黒曜石1剝片の長・幅(左)，幅・厚(右) 分布
tab. 17　第3ブロック黒曜石1遺物属性表
tab. 18　第3ブロック黒曜石2剝片の長・幅(左)，幅・厚(右) 分布
tab. 19　第3ブロック黒曜石2遺物属性表
tab. 20　第3ブロック黒曜石3遺物属性表
tab. 21　第3ブロック黒曜石4遺物属性表
tab. 22　第3ブロック黒曜石5遺物属性表
tab. 23　第3ブロック黒曜石6遺物属性表
tab. 24　第3ブロック黒曜石7遺物属性表
tab. 25　第3ブロック黒曜石8遺物属性表
tab. 26　第3ブロックチャート1遺物属性表
tab. 27　第3ブロックチャート2遺物属性表
tab. 28　第3ブロック珪質頁岩1遺物属性表
tab. 29　第3ブロック珪質頁岩2遺物属性表
tab. 30　第3ブロック珪質頁岩3遺物属性表
tab. 31　第3ブロック珪質頁岩4遺物属性表
tab. 32　第3ブロック珪質頁岩5遺物属性表
tab. 33　第3ブロック珪質粘板岩1遺物属性表
tab. 34　第3ブロック粘板岩1遺物属性表
tab. 35　第3ブロック砂岩1遺物属性表
tab. 36　第3ブロック砂岩2遺物属性表
tab. 37　第3ブロック凝灰質砂岩1遺物属性表
tab. 38　第3ブロック流紋岩1遺物属性表
tab. 39　第3ブロック流紋岩2遺物属性表
tab. 40　第3ブロック流紋岩3遺物属性表
tab. 41　第4ブロック遺物集計表
tab. 42　第4ブロック遺物属性表
tab. 43　第5ブロック遺物集計表
tab. 44　第5ブロック遺物属性表
tab. 45　玉類計測表
tab. 46　土玉・土錘計測表
tab. 47　銭種・計測値一覧
tab. 48　千葉県内銅鏃出土集落
tab. 49　竪穴住居一覧
tab. 50　出土土器観察表

巻首図版

1　荒久遺跡全景
2　(1)土器（竪穴住居010・012）
　(2)銅鏃
　(3)石製品

写真図版

PL. 1　荒久遺跡周辺の航空写真
PL. 2　荒久遺跡全景
PL. 3　(1)荒久遺跡基本層序，(2)第1ブロック，(3)第4ブロック
PL. 4　(1)第5ブロック，(2)第3ブロック，(3)第3ブロック
PL. 5　(1)竪穴住居022，(2)竪穴住居030，(3)竪穴住居031
PL. 6　(1)竪穴住居023，(2)竪穴住居034，(3)竪穴住居049
PL. 7　(1)竪穴住居035，(2)竪穴住居038，(3)竪穴住居039
PL. 8　(1)竪穴住居027，(2)竪穴住居036，(3)竪穴住居037
PL. 9　(1)竪穴住居008，(2)竪穴住居009，(3)竪穴住居012
PL. 10　(1)竪穴住居013，(2)竪穴住居014，(3)竪穴住居015・026
PL. 11　(1)竪穴住居040，(2)竪穴住居060，(3)竪穴住居063

ＰＬ．12　(1)竪穴住居002，(2)竪穴住居003，(3)竪穴住居006
ＰＬ．13　(1)竪穴住居001，(2)竪穴住居010，(3)竪穴住居004
ＰＬ．14　(1)竪穴住居010，(2)竪穴住居010，(3)竪穴住居010
ＰＬ．15　(1)竪穴住居016，(2)竪穴住居029，(3)竪穴住居042
ＰＬ．16　(1)炉穴051，(2)土壙墓007，(3)土坑017，(4)土坑059，(5)土坑045
ＰＬ．17　(1)溝018，(2)溝021，(3)溝048
ＰＬ．18　第１ブロック・第２ブロック出土遺物
ＰＬ．19　ブロック外・第４ブロック・第５ブロック出土遺物
ＰＬ．20　第３ブロック出土遺物(1)
ＰＬ．21　第３ブロック出土遺物(2)
ＰＬ．22　第３ブロック出土遺物(3)
ＰＬ．23　第３ブロック出土遺物(4)
ＰＬ．24　第３ブロック出土遺物(5)
ＰＬ．25　第３ブロック出土遺物(6)
ＰＬ．26　第３ブロック出土遺物(7)・表面採集先土器時代遺物
ＰＬ．27　竪穴住居004・006出土土器
ＰＬ．28　竪穴住居004出土土器
ＰＬ．29　竪穴住居013・015出土土器
ＰＬ．30　竪穴住居015・022・027出土土器
ＰＬ．31　竪穴住居030・033・034・036・038出土土器
ＰＬ．32　竪穴住居035・038・040・044・056・060出土土器
ＰＬ．33　竪穴住居010・012出土土器
ＰＬ．34　竪穴住居010出土土器
ＰＬ．35　竪穴住居010・012出土土器
ＰＬ．36　竪穴住居001・002・008出土土器
ＰＬ．37　竪穴住居014・016・026・039・042出土土器
ＰＬ．38　土壙墓007・溝021・032・遺構外出土遺物
ＰＬ．39　土製品・石製品・石器・鉄製品

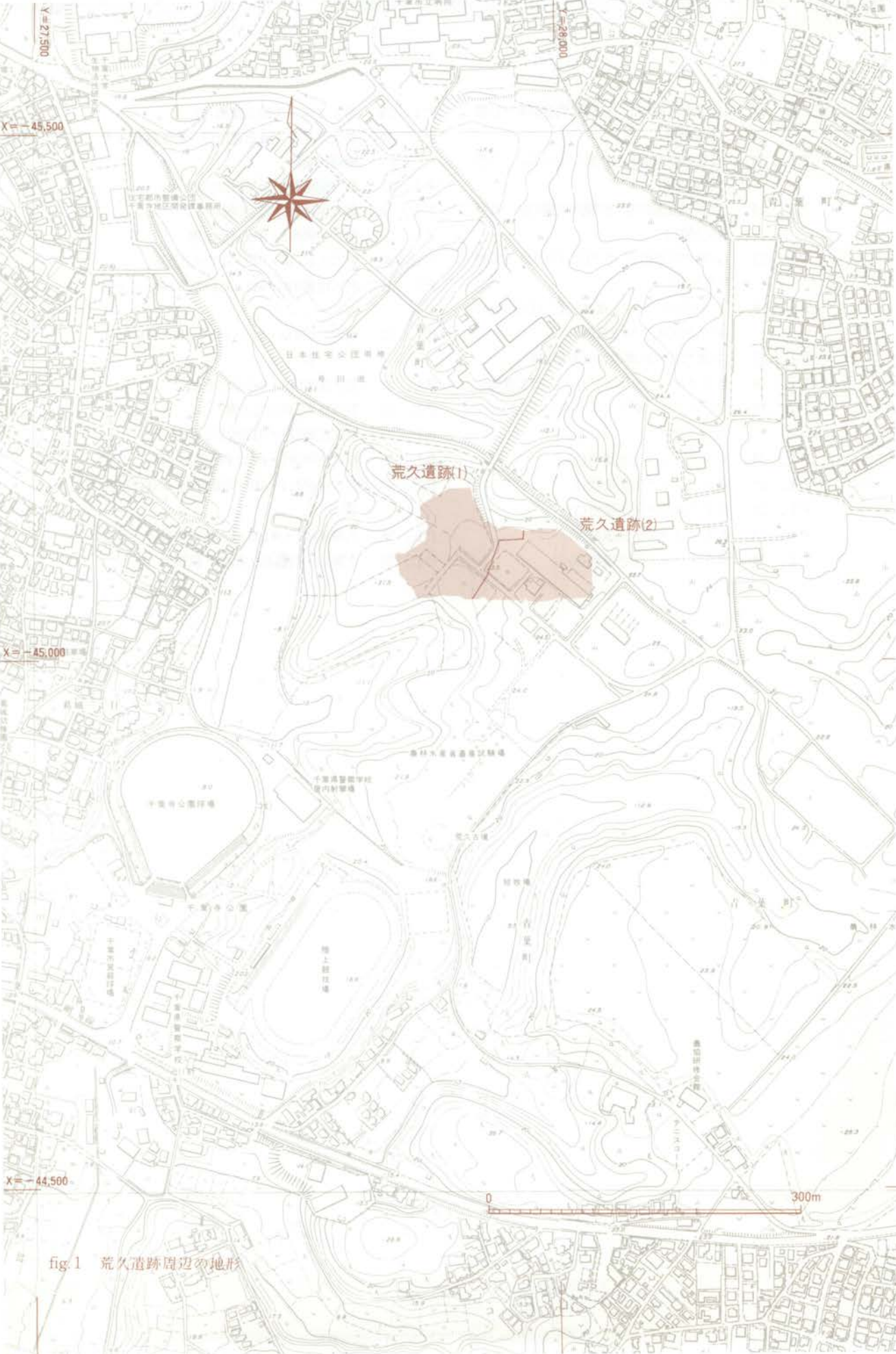


fig. 1　荒久遺跡周辺の地形

I 序　　章

1．調査に至る経過

千葉県では，博物館ネットワーク構想に基づき現在までに博物館を各地域に設置してきた。これらはそれぞれの立地条件を生かした特色をもつものであるが，これらの中核となる博物館の設置が必要となってきた。そして，これと併せてこれまでの博物館にない情報機能部門や自然誌の部門をもつ総合博物館として野外観察地を併設する中央博物館を建設することにした。

一方，昭和55年千葉市青葉町に所在した農林水産省畜産試験場が茨城県の筑波研究学園都市に移転した。千葉県では国の跡地利用方針の決定に基づき，跡地内に県立青葉の森公園を建設することにし，このなかに中央博物館を建設することになった。

ところで農林水産省畜産試験場跡地には，古くから荒久古墳が存在することが知られ千葉市指定史跡になっている。しかし包蔵地についての詳細は不明で，千葉県都市部都市整備課では千葉県教育委員会と協議の上，財団法人千葉県文化財センターに委託して昭和57年度・昭和58年度に試掘調査，確認調査を実施した。この結果，公園予定地内には荒久古墳のほか多数の竪穴住居・方形周溝状遺構・溝が検出され，また先土器時代の遺物も出土し，かなりの規模の遺跡であることがわかった[1]。

千葉県教育庁文化課中央博物館準備室と千葉県都市部都市整備課ではこの結果を踏まえて慎重に事業の設計を行った。しかし野外観察地と中央博物館から野外観察地に至る主園路は公園全体の設計計画上どうしても遺跡を避けることができず，協議の結果，野外観察地と，隣接する主園路のあわせて7372m²については，発掘調査による記録保存の措置を講ずることになった。野外観察地の残りの西側の部分については埋蔵文化財を痛めないよう盛土により保存する事にした。発掘調査は当センターが実施することになり，昭和62年4月1日より調査を開始した。

1．この試掘調査と確認調査の詳細については『千葉市荒久遺跡(2)』(財) 千葉県文化財センター　1989を参照されたい。

fig.2　荒久古墳全景

fig.3　荒久古墳石室

2．荒久遺跡の立地と周辺の遺跡(fig. 1・2・3・4・98・99, PL.1)

千葉市は東京湾に面し，房総半島の付け根に位置している。市内の殆どは下総台地といわれる標高20～30m の低い台地によって占められる。この台地は花見川，都川等の東京湾に注ぐ河川やその支流により開析されたり，また東京湾から入り込む溺れ谷によって樹枝状に刻まれ複雑な地形をつくり出している。台地は，千葉市幕張から千葉市登戸付近までは海岸線ぎりぎりまで迫っているが，そこから南は台地の前に幅 1 km以上の海岸平野が開け，村田川や養老川の三角洲へ続いている。

荒久遺跡は東京湾から入り込む谷の奥部に面した標高22m～23m の台地上に立地する。この谷は千葉市末広町付近の海岸平野から北にのびる細長い谷で，通称『千葉寺谷』といわれる。千葉寺谷は更に木の枝のように両脇に小支谷を形成しているが，これらに面して幾つかの遺跡が存在する。中でも千葉寺谷の東側の台地は近年の宅地開発などの波により発掘調査が進み，現在も継続中でその内容が明らかになりつつある地域である。これら周辺の遺跡のうち，調査が行われた遺跡を中心に幾つかを紹介しておく。

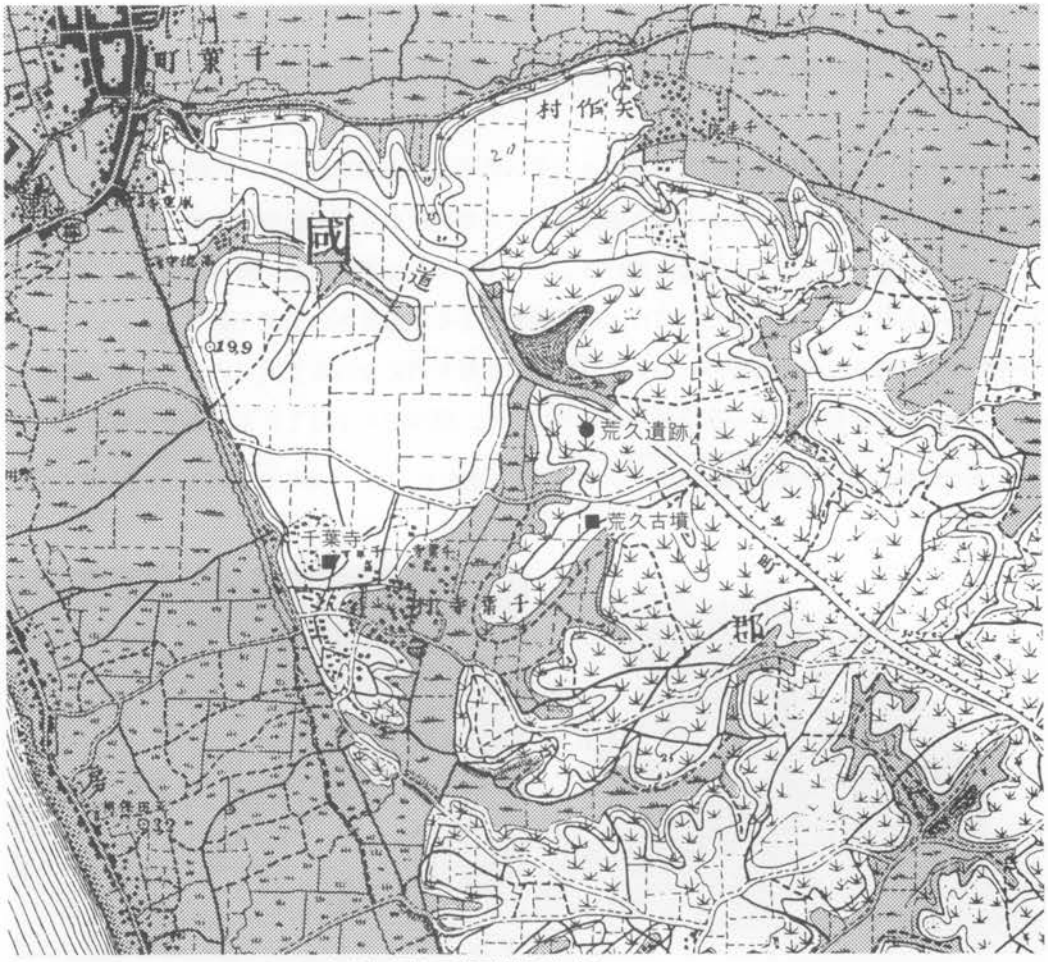


fig. 4　遺跡周辺図（明治15年参謀本部陸軍部測量局作成）

荒久遺跡　今回調査したのは荒久遺跡の一部である。昭和58年度の確認調査の結果，本遺跡は大きく分けて３つの地域に分けられる。まず今回調査した荒久遺跡(1)・(2)を中心とした地域で，両調査区であわせて，55軒の竪穴住居(弥生時代終末期から古墳時代)が検出された。台地は更に西にのびており，確認調査で多数の竪穴住居の存在を確認している。古墳時代前期を中心としたかなりの規模の集落であったようである。ここでは先土器時代の遺物も多数検出した。もう１つはこれより北東部の小支谷をはさんだ台地上で，確認調査では方形周溝状遺構(方墳)を17基検出している。奈良・平安時代の遺物を出土し，遺構の時期もこれに近いものであったと思われる。やはり先土器時代の遺物も出土した。３つ目は荒久古墳を中心とした地域である。荒久古墳については別に述べる。また荒久古墳の西側の台地の縁辺部で先土器時代の遺物がまとまって出土している。

荒久古墳[1]　千葉市指定史跡。荒久遺跡内にあり，昭和62年度の調査区からは約250m 南に立地する。南に横穴式石室が開口するため「石の唐戸」ともいわれる。墳丘はかなり改変されているが，方墳である。現状では１辺 9m を測る。明治24年に発掘調査を行っているが，遺物は散逸し詳細は不明である。その後昭和34年に再度石室内の精査を行い，人骨１体分と琥珀製棗玉３点・鉄製馬具破片等を出土した。石室は凝灰質性砂岩の切石積みで，短い羨道と玄室からなり，天井には６枚の巨石を使用している。床には粘土を敷き両隅に排水溝を設けている。昭和58年度の確認調査時にも墳丘の周辺にトレンチを設定し，削平された北西側の一部を除き方形に周溝が巡っていることを確認した。周溝の規模は１辺24m，幅1.9～2.2m，深さ0.5～0.8m である。従って本来は１辺20m 程の方墳であったろうと思われる。石室の主軸方向は古墳の主軸方向とは若干ずれているようである。

中野台遺跡[1,2,3,4]　千葉寺谷の西側の台地上に立地する。千葉寺谷の入り口近くにある。昭和31年に発掘調査され，ほぼ完形の弥生式土器の壷２点を出土した。遺構は検出されなかったが，弥生時代の再葬墓ではないかと言われる。その後，昭和60年・61年度の調査で縄文時代早期から中近世の遺構・遺物を検出し，この中で竪穴状区画遺構は中世から近世の居住区，墓域と思われ，区画内から柱穴列，土壙，地下式土壙等を検出した。弥生時代から奈良・平安時代の集落，弥生時代・中近世の墓域であったと考えられる。遺跡の一部については調査が終了していない。

1．『千葉市誌』千葉市　1953
　『千葉市史　第一巻』千葉市　1974
　『千葉市史　資料編１』千葉市　1976

2．なお千葉寺地区の遺跡(中野台遺跡・鷲谷津遺跡・地蔵山遺跡・観音塚遺跡)については現在，住宅・都市整備公団による土地区画整理事業に伴い調査中である。調査の概要については調査担当の伊藤智樹氏，福田誠氏に御教示をうけた。

3．『千葉県文化財センター年報　No.11』　(財)千葉県文化財センター　1985

4．伊藤智樹　「土壙群を伴う竪穴状区画について」『研究連絡誌』第17号　(財)千葉県文化財センター　1986

鷲谷津遺跡[1,2,3]　昭和53年度に発掘調査が行われ，奈良・平安時代の竪穴住居17軒の他，溝・土壙等を検出した。その後，昭和61年度からも調査され，現在継続中である。奈良・平安時代を中心とする集落である。また縄文時代早期の遺物包含層を確認した。昭和62年度の調査で，鷲谷津遺跡Ｂ区から奈良時代の終わりから平安時代初頭のものと思われる合口甕棺墓を発見し，注目された。

地蔵山遺跡　荒久遺跡の南と鷲谷津遺跡の北の２つの小支谷にはさまれた細尾根上にある。荒久古墳からは僅かに230m のところに位置する。現在確認調査中で，縄文時代早期の包含層，古墳時代の竪穴住居などを検出している。荒久遺跡と近い時期の集落である可能性が高く，本遺跡との関係が注目される。

観音塚遺跡[1,2]　鷲谷津遺跡の東側の台地で，小支谷により画されている。古墳時代後期～奈良・平安時代を中心とする集落跡。やはり昭和54年に調査が行われ，鍛冶遺構の検出で注目された。さらに昭和60年度から昭和63年度の調査でかなりの規模の集落であることがわかった。フイゴ羽口・鉄滓のほか畿内系螺旋状暗文土器が出土している。地名の由来となった観音塚が所在したが封土はほとんど湮滅している。方形の塚で，布目瓦を出土したと言われ，千葉寺の縁起によれば創建の地とされている。

山の神遺跡[1]　観音塚遺跡の南東に位置する。奈良・平安時代の竪穴住居３軒のほか土壙，集石礫群が検出された。

千葉寺[4]　千葉市指定史跡。荒久遺跡とは千葉寺谷をはさんで南東約600m の西側の台地に立地する。当寺に伝わる縁起によればその創建は和銅２年(709)といわれる。考古学的な調査は昭和５年，10年，24年，25年，27年の５回にわたって行われ，多数の布目瓦・土師器・須恵器のほか瓦塔を出土した。創建瓦の内容からも古代下総国千葉郡の「郡名寺院」に相応しいものである。伽藍構成などは不明であるが，一町四方程度の寺域が想定されている。これまでに軒丸瓦としては4弁複複弁が２種，軒平瓦にはロクロ挽き３重弧文・４重弧文・５重弧文が出土している。なかでも４弁複複弁軒丸瓦という４弁構成を基本とする文様は大椎廃寺・光善寺廃寺・九十九坊廃寺などの上総国北半部を中心に分布し，下総国にあって上総国的な色合いが濃いものである。しかしいずれにしても創建期以降となる軒瓦の組合わせはいまのところなく，「郡名寺院」としては比較的短期間でその終焉を迎えているのかもしれない。

1．『千葉急行線内埋蔵文化財発掘調査報告書　Ｉ』(財)千葉県文化財センター　1983

2．『千葉県文化財センター年報　№12』(財)千葉県文化財センター　1986

3．福田誠「千葉寺地区鷲谷津遺跡Ｂ区において検出された合口甕棺墓について」『研究連絡誌』第22号（財）千葉県文化財センター　1988

4．『千葉市誌』千葉市　1953
『千葉市史　第一巻』千葉市　1974
『千葉市史　資料編１』千葉市　1976

3．調査の概要（fig.5）

荒久遺跡(1)は千葉県千葉市青葉町654－1に所在する。調査地の面積は7372m²で，調査の期間は昭和62年4月1日～昭和62年9月30日である。

千葉県立中央博物館野外観察地埋蔵文化財調査と並行して県立青葉の森公園関係（青葉の森公園第2期整備事業埋蔵文化財調査）でも発掘調査を行った。調査の期間はやはり昭和62年4月1日～昭和62年9月30日で同じである上，同一遺跡で隣接した地区であるため，両者を区別するために遺跡名を荒久遺跡(1)（千葉県立中央博物館野外観察地埋蔵文化財調査），荒久遺跡(2)（青葉の森公園第2期整備事業埋蔵文化財調査）とした[1]。しかし，実際の作業にあたっては，作業の能率上同一の調査として作業工程を組み，両方の調査員が協力して調査を行った。

調査はまず測量によって調査区を明確にすることから行った。これは台地西側部分が盛土による保存区域となるためである。その後，調査範囲の表土をバックホウによって検出面まで除去し，遺構の検出を行った。しかし，畜産試験場時代の建物跡や，鉄柵，井戸，コンクリート道路などが遺存し，これらを遺構をいためないように除去するのにかなりの手間と時間がかかってしまった。

上層の調査は7月半ばにほぼ終了し，航空写真撮影後，下層の確認調査，続いて下層の本調査を行い9月30日にすべての調査を終了した。

現地の調査にあたっては国土地理国家座標(第IX座標系)を使用した基準点測量を行い，50mごとに方眼の地区割りを行った。この大グリッドは，北から南に1,2,3・・・，西から東にA,B,C・・・とし，これを組み合わせてA1,A2,A3，の名称で呼称した。そしてこれをさらに5m四方の小グリッド(fig.5)に分割して，西から東へ00～99の番号を付け，これに先の大グリッドの名称を組み合わせてA1-00, A1-01というように呼称した。これは確認調査の際行った地区割りと名称をそのまま踏襲したものである。

遺構番号は遺構の種類に関係なく検出された順に通し番号を付けた。本報告書ではこの通し番号をそのまま踏襲している。そして，分かり易くするため，番号の前に竪穴住居・溝と言った遺構の種類を付けて竪穴住居001，溝028のように記述した。

整理作業は昭和62年度と昭和63年度の2年度にわたって行った。昭和62年度には主として，水洗，注記，図面整理，写真整理などの基礎整理を行い，昭和63年度に報告書刊行までの全ての作業を終了した。

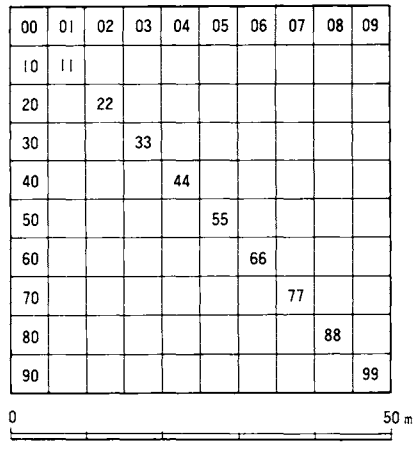


fig.5　小グリッド

1．昭和63年4月1日から5月31日にも青葉の森公園関係で調査を行いこの調査区については荒久遺跡(3)（調査コード201-048-3)とした。

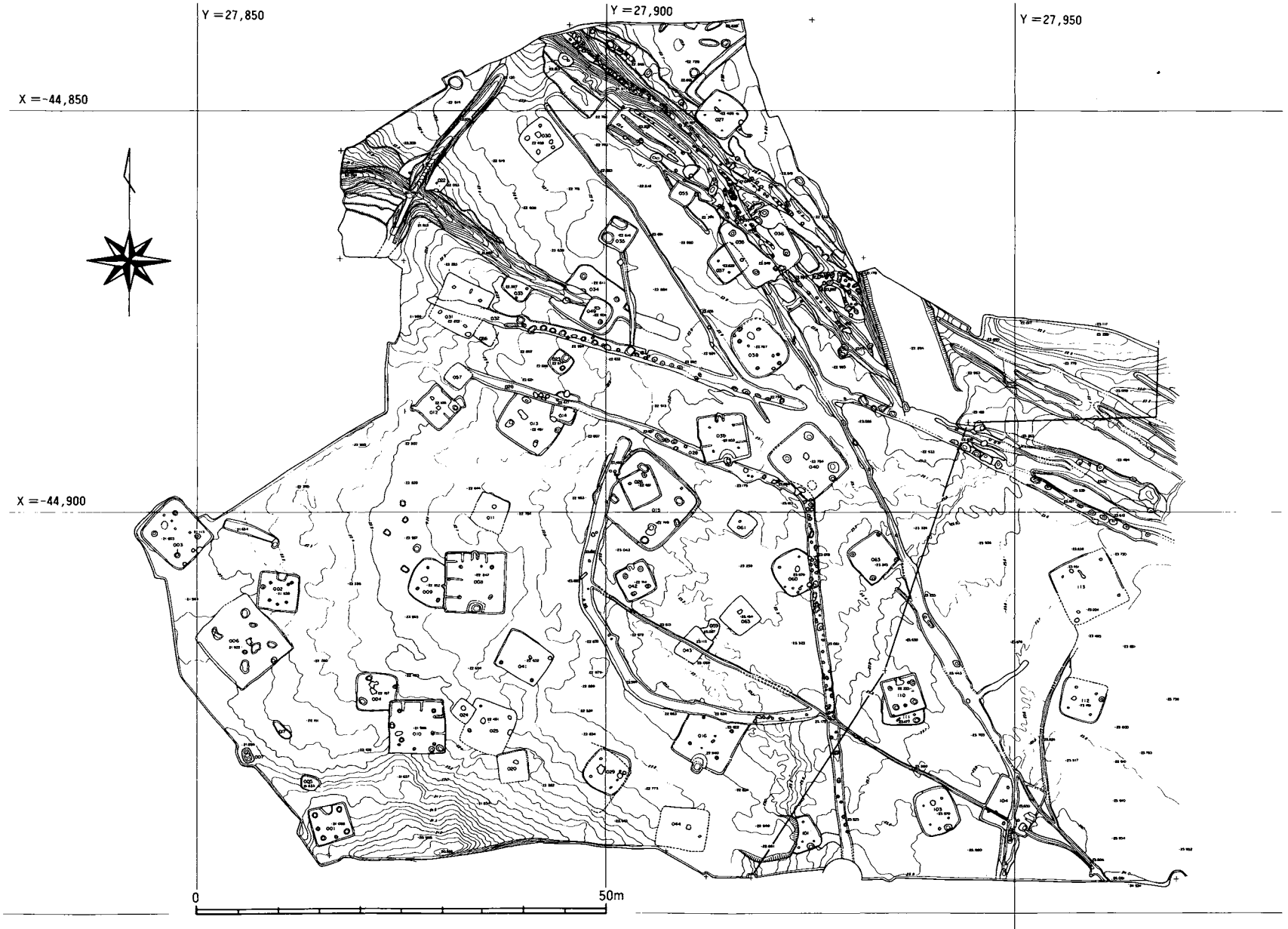


fig.6　荒久遺跡(1)遺構配置図

II 遺　　構

検出した遺構は，竪穴住居45軒，炉穴１基，土壙墓１基，土坑９基，溝10条である(fig.6, PL.2)。竪穴住居の時期は弥生時代終末期から古墳時代前期が26軒，古墳時代中期が４軒，古墳時代後期が８軒，出土遺物がなく時期が不明の竪穴住居が７軒である。これらは炉を持つものが多く，竈を有するものを含まないため，弥生時代終末期から古墳時代前・中期に属する可能性が高い。しかし，遺物による時期の確定が出来ないため，時期不明の竪穴住居として取り扱っておく。土壙墓は古墳時代後期に属する。土坑10基のうち２基には貝が堆積し，うち１基は古墳時代前期に属するが，他の８基については遺物を伴わないため所属する時期は不明である。溝も遺物を殆ど伴わないため時期，性格などが不明なものが多いが，１条はピットを伴う柵列で，文字瓦１点を出土した。

竪穴住居の平面規模は原則として，竪穴住居中央で交わる軸を設定し，この軸長を縦軸×横軸のかたちで記載した。隅丸方形を呈するものが多く壁の長さを測定しにくいためである。ピットの規模も同様で，縦軸×横軸×深さである。壁高は床面から検出面までの高さである。炉穴・土壙墓・土坑についても軸の長さを記載した。遺構図の縮尺は，竪穴住居1/80，竈1/40，炉穴・土壙墓1/40，土坑1/60，溝1/400である。なお焼土・炭化材や遺物の出土状態が煩雑になるものについては，別に出土状態図を作り写真図版の対向ページに掲載した。

以下，竪穴住居・炉穴・土壙墓・土坑・溝の順に遺構の種類ごとに説明を行う。遺構番号はＩ－３で説明したように通し番号を使用している。001から066まであり019は欠番となっている。竪穴住居は遺物から大きく３時期に分けられるので便宜的に弥生時代終末期～古墳時代前期，古墳時代中期，古墳時代後期として古い時代順に説明する。同時期の中では遺構番号が若いものから並べることを原則としている。また，竪穴住居一覧(tab.49)を巻末に付した。

１．竪穴住居

(1)弥生時代終末期～古墳時代前期

検出した45軒のうち26軒がこの時期に属する。平面形態は縦長の隅丸長方形のものとやはり隅が丸く各辺が僅かに張る小判形のものが大半を占める。隅丸長方形の住居のほうが全体的に大型である。主軸方向は北西のものが多い。

竪穴住居003(fig.7, PL.12)

調査区西端部(C3)に位置する。縦長の隅丸長方形(7.40×6.55m)で，主軸はN-46.0°-Wである。竪穴住居のほぼ中央を東西に溝状に撹乱されているが検出面からの掘り込みは深く遺存状態は良好である。床面は軟弱で，壁溝は浅いがほぼ全周する。柱穴４本は対角線上に位置し，竪穴住居上半部の２本の柱穴のほぼ中央に炉跡がある。炉跡は半分を撹乱によって破壊されている。柱穴はP1(0.55×0.54×0.63m)，P2(0.75×0.75×0.59m)，P3(0.67×0.58×0.53m)，

P4(0.75×0.72×0.54m)で，いずれも大きくしっかりしたものである。柱穴の覆土は上層はローム粒子を少量含んだ黒褐色土，下層はローム土を主体とする暗黄褐色土で，柱痕は認められない。既に抜柱していたものと思われる。その他，出入口関係施設として主軸上南東壁際にP5(0.45×0.45×0.22m)がある。

覆土は1層（ローム粒子・ロームブロックを多量に含む暗褐色土），2層(ローム土・ローム粒子を多量に含み1層より明るい暗褐色土)，3層（ロームブロック・ローム粒子を含む黒褐色土），4層（ローム土を多量に含む黒褐色土），5層（ローム粒子を含む暗褐色土），6層（ローム土を主体とする暗黄褐色土）である。

遺物は僅かで，炉跡周辺と北隅で小破片がいくらかまとまって出土したにすぎず，覆土中からは殆ど出土しなかった。実測可能なものはなかったが，破片から古墳時代前期に属する竪穴住居であると考えられる。

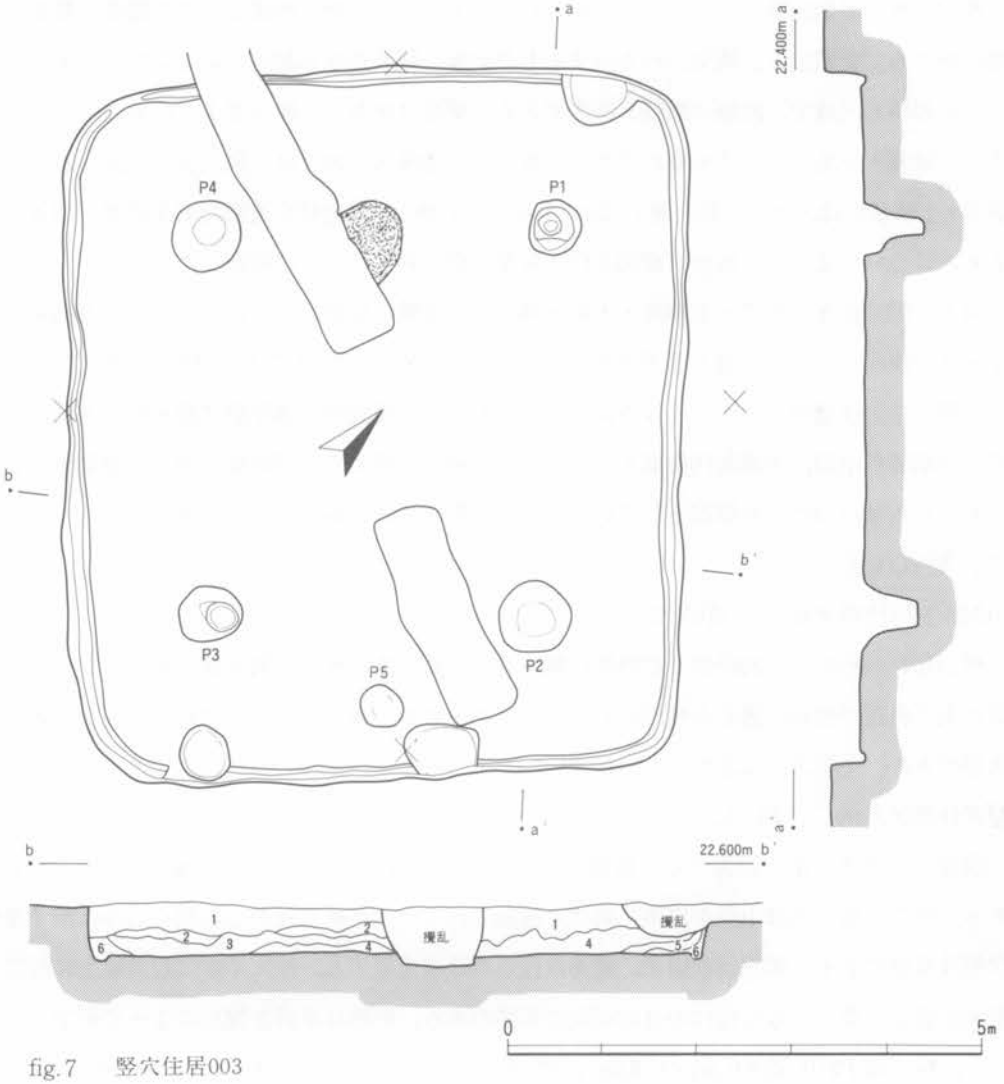


fig.7　竪穴住居003

竪穴住居004(fig.8・9, PL.13)　　［遺物109ページ］

調査区南西に位置し（C3），南東隅を竪穴住居010（古墳時代中期）によって切られている。主軸はN-90.0°-Wで東西方向を向いている。縦長の隅丸長方形（4.94×4.70m）で北壁下にのみ壁溝がある。南側は緩斜面となるため検出面から浅いが北側の壁高は遺存が良好なところで27cmをはかる。

本竪穴住居に伴うピットは東壁際ほぼ中央の1本のみである。平面形態は不整形であるがこれは貯蔵穴と考えられる（0.48×0.40×0.37m）。柱穴は精査したがない。床面は全体に凹凸があり軟らかい部分が多い。

炉は主軸上とそのすぐ北側に新旧2つが認められる。どちらも掘込んではおらず床面が赤変しているだけである。北側の炉（炉2）のほうが新しい。

覆土は北半分と南半分で全く違った堆積状態を見せる。北側は5層（ローム粒子・焼土粒子を含む黒色土），6層（5層よりローム粒子が多い黒褐色土），7層（ローム粒子を所々に含む黒

fig.8　竪穴住居004遺物出土状態

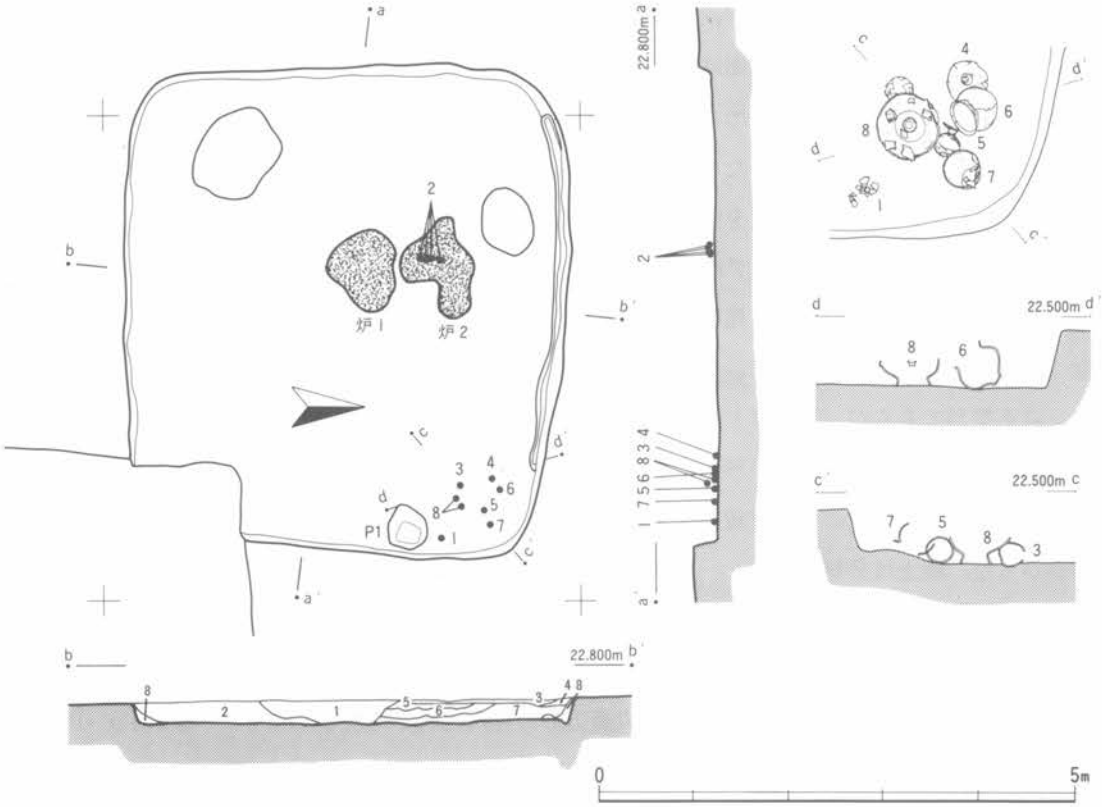


fig.9　竪穴住居004

色土)，８層（ソフトローム粒子・ロームブロック・黒色土が混ざり合う黄褐色土）が堆積しており，南側は１層（ローム粒子を含む暗褐色土)，２層（10㎜程と50㎜程のロームブロックを多量に含む黒褐色土）が堆積する。１・２層については人為的な埋戻し土である可能性がある。３層はローム粒子と黒色土が混じった暗黄褐色土で堅くしまっており，竪穴住居の覆土上に再堆積した土層であろう。

遺物は炉から１点と貯蔵穴脇の北東隅の床面に鉢１，高杯２，壷２，甕１，台付甕２が出土した。一通りの器種は揃っている。どれも完形に近く，まとまって出土した。廃棄時に近い状態を示していると思われる。この他の遺物は土師器の小破片が僅かで埋没過程での混入品は少ない。

竪穴住居006(fig.10，PL.12)　　[遺物110ページ]

調査区南西部，竪穴住居003の南東にこれと主軸(N-46.5°-W)をほぼ同じにして位置する(C3)。縦長の方形(9.38×8.60m)で調査した中では竪穴住居015に次ぐ大型住居である。北東壁の一部を竪穴住居002(古墳時代後期)により切られている。また，中央部よりやや下に土坑045が重複している。

検出時にはプランをきちんと確認できたが，掘り始めるとソフトロームを掘り込んでいるだけで検出面から浅く壁は殆ど遺存していないため調査に手間取った。従って図面では住居の隅が直角に近い状態になっているが，同時期の竪穴住居の平面形態を考え合わせると隅丸長方形を呈していた可能性が高い。床面は軟らかく凹凸がある。壁溝は南壁と東壁の一部にある。

床からは，焼土と炭化材が検出された。床面は火熱により赤変して脆くなっており，焼失住居と思われる。検出面から浅いためか炭化材の遺存は良好とは言えない。西壁側には焼土が検出されていないが，床面には火を受けた跡がある。

柱穴は４本（P1～P4)で，いずれも２つのピットが切り合っており，柱の建替えを行っている。それぞれ対角線上の外側に建替えており，建替え前と後で柱穴の規模・深さに大きな差はなく，深さ0.85～0.98m である。２本の柱の掘方を一緒に掘ってしまっているため，上場のプランは不整形であるが，下場はどれも方形を呈している。また，４本とも２回目の柱穴の底面には直径30cm程の浅く小さな円形のピットを伴っている。柱穴の覆土はローム土を主体とし，ロームブロックを多量に含んだ黄褐色土で床面と色調の差がなかったため，その検出には時間がかかった。覆土は分層出来ず，一度に埋め戻されたような堆積状態を示していた。柱痕は確認されず，このことは，柱が抜かれて，その跡を故意に埋め戻していることを想定させる。柱穴の掘方が方形となる竪穴住居はこの他に竪穴住居013・竪穴住居015・竪穴住居034がある。いずれも006と主軸方向をほぼ同じにする隅丸長方形の竪穴住居で時期もほぼ同じである。P5～P7は浅く平面形態が不整形で底面も平らではない。本跡に伴うものかどうか不明である。

覆土はローム粒子・ローム土・焼土を含む暗褐色土でしまりない。

炉は殆ど掘り込んでいなかったものと思われる。焼失住居であるために炉以外にも焼土が存在し，その下は赤変しているため，どれが炉になるか確認出来なかった。主軸上の焼土のいずれかが炉に伴うものであろう。

遺物はP3のすぐうえの床面からまとまって出土した。大型の破片ではあったが，接合したのは僅かで，実測できたのは7点にとどまった。しかし，これらも殆どが復原実測である。破片は刷毛調整を行った甕胴部が大方を占める。検出面から浅いためかなりの遺物が散逸してしまったようである。

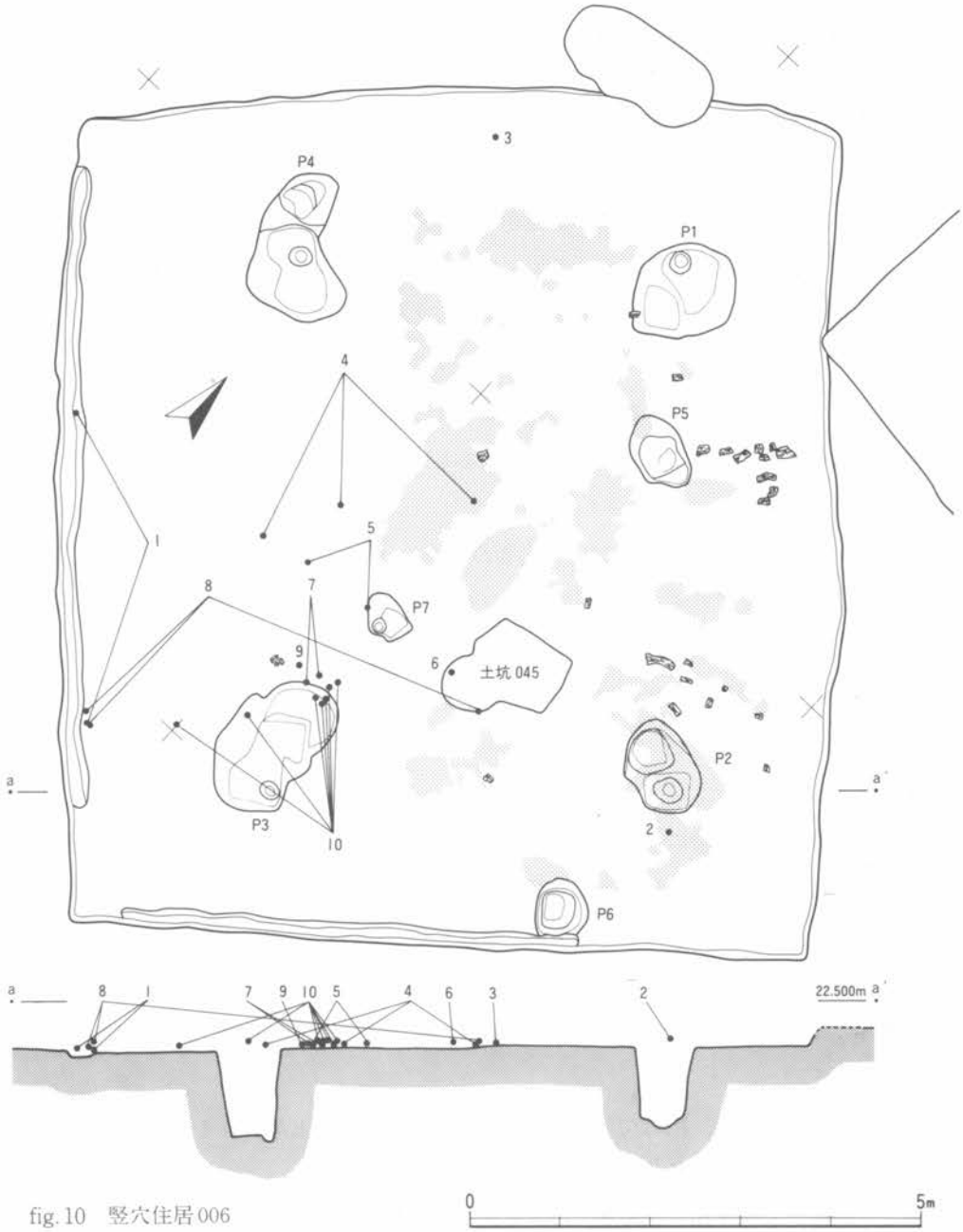


fig. 10　竪穴住居006

竪穴住居009(fig.11, PL.9) [遺物110ページ]

東側約3分の1を竪穴住居008(古墳時代後期)によって切られる。このほかにも畜産試験場時代の建造物の基礎により，撹乱が各所に入り，プランの確認は難しかった。隅が丸く各壁に幾分張りをもついわゆる小判形を呈するものと考えられる。主軸の方位は，N-60.5°-W。柱穴は対角線上に4本検出した。P2は竪穴住居008の床面に底部に近い部分のみが遺存していたものであるが，位置から考えて本跡の柱穴と考えて良いであろう。また，4本とも底面のレベルはほぼ同じである。貯蔵穴は遺存部分では検出していない。

炉はP1とP2の真ん中，主軸上で検出された。僅かに床面より窪んでおり，底面は赤変し堅くなっている。

床面は建物の基礎があった部分は幾らか低くなっているが，全体的には平坦に整えられた様子がうかがわれる。特に4本の柱穴の間では図に示したように硬質な面を認めることができる。

覆土は，1層（黒色土とローム粒子が混ざり所々に小ロームブロックを含む褐色土）を主体とし，3層（1層と同じ土だがロームブロックを含まない），4層（黒色土を主体とし，ローム粒子が少量含まれる黒褐色土）が壁際に堆積する。2層は小ロームブロックを含む黒色土である。

遺物は少なく全部で10余点を数える。実測できたのは底部が1点のみであるが，他の破片から，弥生時代終末期または古墳時代前期に属するものと思われる。

竪穴住居011(fig.11) [遺物111ページ]

竪穴住居009の北側に位置する(C3)。検出面から浅く，壁の立ち上がりは北と東の一部にごく僅かに検出できただけであるが，方形のプランを持ち，主軸の方位はN-25.5°-Eである。主軸上の北壁よりの焼土検出部分が炉であると思われる。柱穴・貯蔵穴は検出されなかった。

遺物は小破片10余点で，高杯脚部と台付甕脚部が床から出土し，これにより本跡の時期は古墳時代前期であることがわかった。

竪穴住居020(fig.11)

遺存状態が悪く，検出時にプランを確認することができなかったが，かろうじて北壁の遺存により，その形態と規模をうかがうことができた。東壁は大きく撹乱され，かなりの部分が破壊されている。また南壁は谷の肩部にあたり遺存していない。

主軸より僅かに東によった所に炉を検出した。炉は掘込んではおらず，床が赤変している。床面が遺存しているのはこの炉の周辺のみであり，他はすでに床が破壊されており，軟らかく，僅かに低くなる。

柱穴は検出していない。P1は位置関係から出入口に伴うものと思われる。

覆土は黒褐色土の単一土層で分層できなかった。

遺物は土師器の小破片10点で古墳時代前期に属する可能性が高い。

竪穴住居009

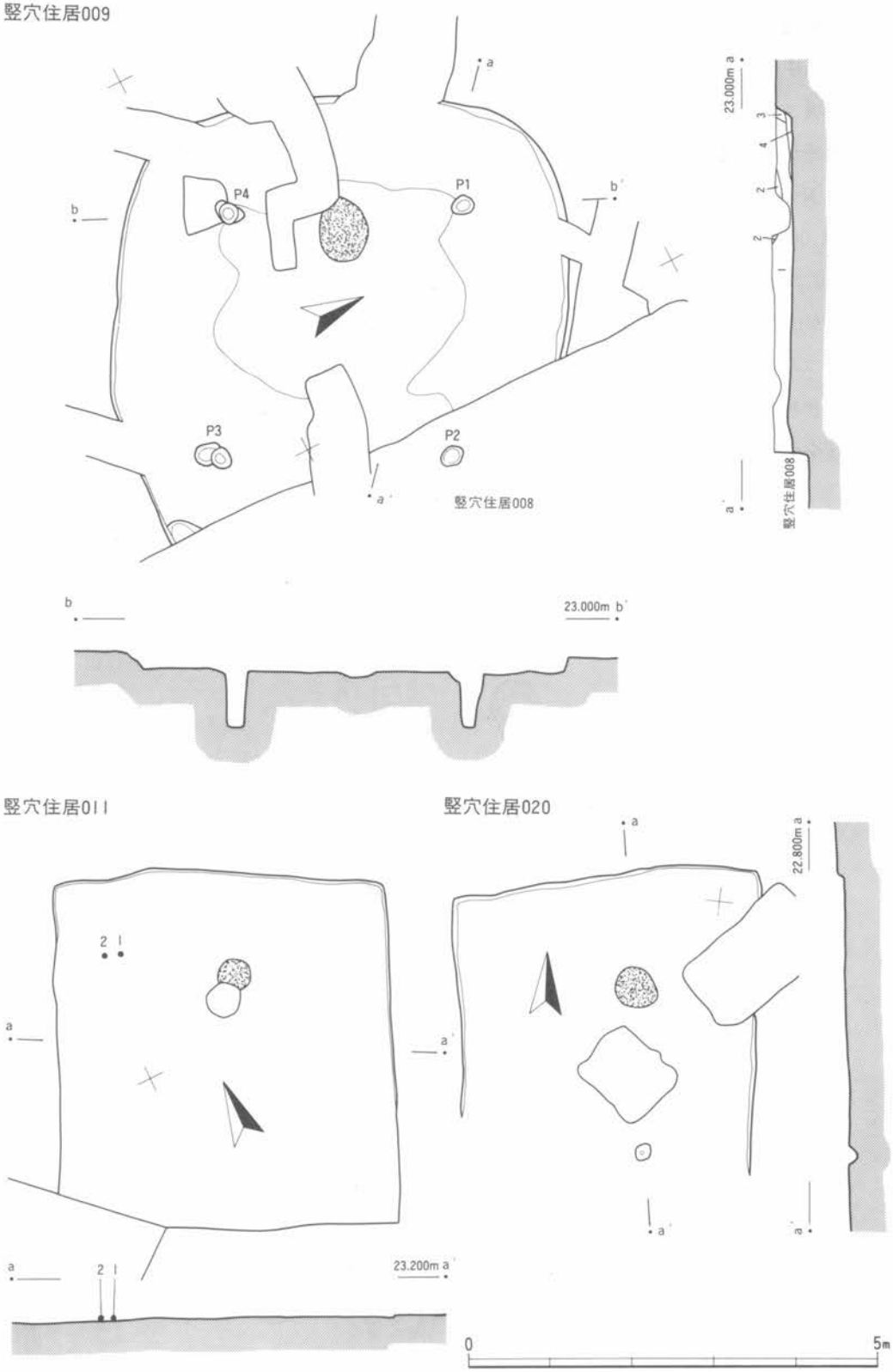


fig.11　竪穴住居009・011・020

竪穴住居013(fig.12, PL.10)　　［遺物111ページ］

調査区中央よりやや北西に位置する（C2)。北壁を竪穴住居014（古墳時代後期）と溝028によって破壊されている他，床まで達しない撹乱が何か所か認められた。平面形態は4本の柱穴の位置関係から主軸方向が長い隅丸方形を(主軸の長さは7.28m)呈していたと思われる。主軸の方位はN-57°-Wである。検出面から浅く，壁高は遺存の良いところで20cm前後である。

P1(1.06×0.84×0.71m)，P2(0.78×0.52×0.78m)，P3(0.94×0.52×0.69m)，P4(0.95×0.65×0.75m)は柱穴で主軸方向に長い方形の掘方を持つ。床面精査時には4本とも直径10cm程の柱痕が確認出来た。P5(0.66×0.52×0.45m)は貯蔵穴である。炉はP1とP4の間の主軸上にある。2つの掘り込みがあり，主軸方向に細長い8の字状を呈する。焼土もそれぞれに堆積し，底面はどちらも火熱により堅くなっている。

床は全体に堅くしまっている。図示したP4西のコーナー付近とP2とP5の間は特に堅い。た

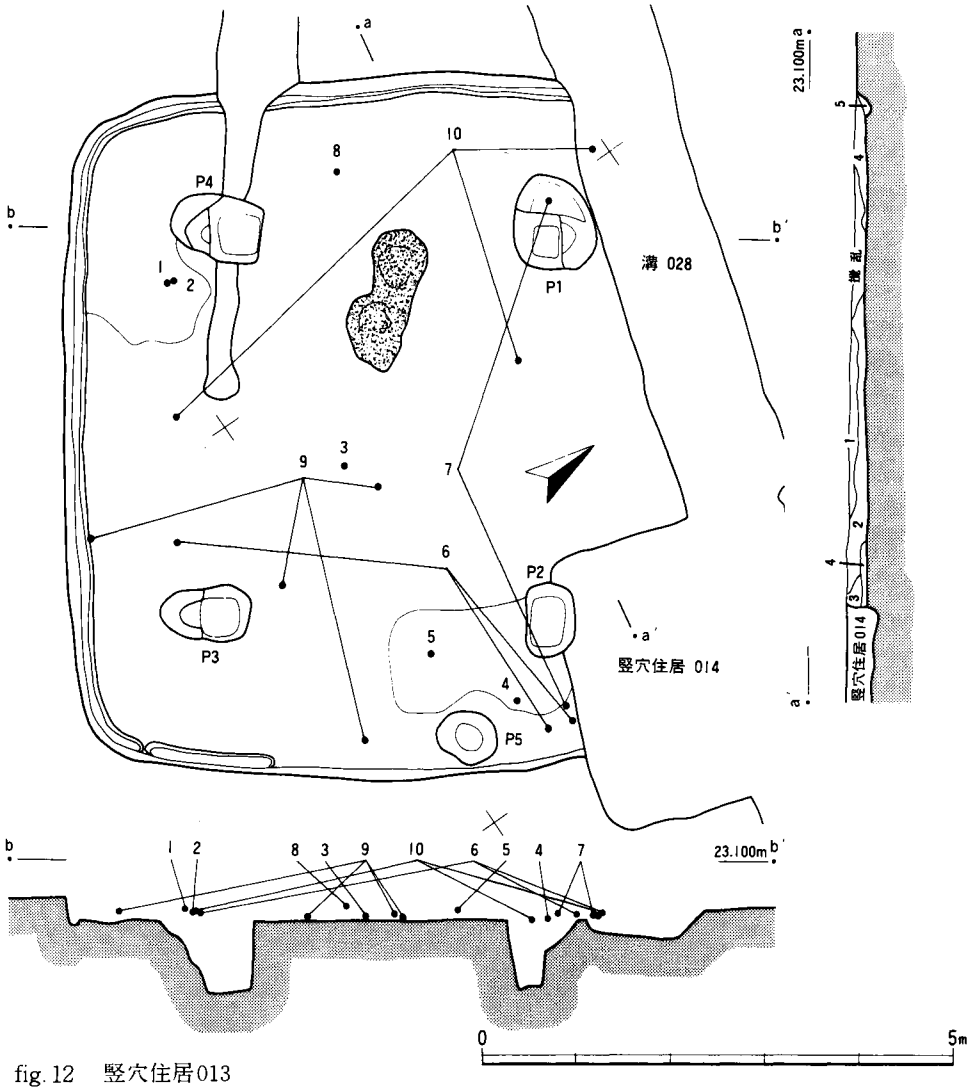


fig.12　竪穴住居013

だしP2とP5の間は床よりも若干高くなっており，他の竪穴住居で見られるような貯蔵穴を囲む土堤状の施設の可能性もある。壁溝は東壁の一部を除き巡っている。

覆土は1層（ローム粒子を含む黒褐色土），2層（ローム粒子を1層より多く含む暗褐色土），3層（暗褐色土と黒色土がブロック状に混合しローム粒子を含む黒褐色土），4層（1に近似するが明るい暗褐色土），5層（ローム粒子を多量に含む褐色土）で，主体となるのは2層である。

遺物は全部で50点余りである。いずれも床または床近くからの出土だが全体から均一に出土する。破片が多く遺存が良好なものは少ない。殆どが埋没過程での混入品であろう。

竪穴住居030(fig.13，PL.5)　　［遺物115・131ページ］

調査区北西（C2)にある。主軸より横軸のほうが僅かに長い（4.34×4.42m)隅丸長方形で，主軸の方位は，N-41.0°-W。柱穴はP1～P4。P2は柱痕で，他は掘方である。P2の直径は24cm。P5(0.45×0.39×0.38m)は貯蔵穴，P6(0.52×0.32×0.40m)は浅いが出入口施設である。

床は貼床しており，堅緻である。特に図示した部分はよく踏み固められていた。床を剝いで掘方を確認してみたところ竪穴住居を構築する範囲全部を掘り込んでおらず，壁際50cm程は掘り残し，中央部分のみ荒掘りしていた。荒掘りは検出面から40cm～50cmで，中央部分では，周辺部分より，僅かに高い。柱穴には建替えの跡は認められないため，荒掘り後竪穴住居の規模を当初の予定より大きく変更したのであろうか。柱穴の掘方の規模はP1（0.56×0.36×0.72

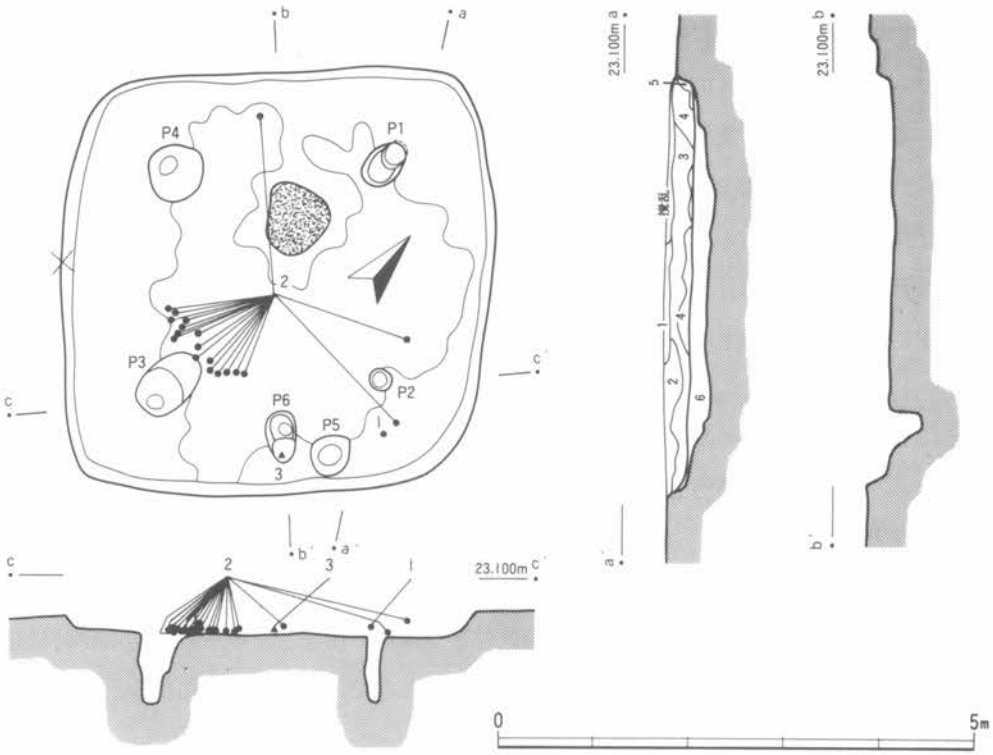


fig.13　竪穴住居030

m)，P2(0.51×0.40×0.57m)，P3(0.74×0.49×0.73m)，P4(0.59×0.59×0.62m)。炉はP1とP4の間よりやや南東(中央寄り)の主軸上にある。

覆土は1層(1㎜前後のローム粒子を含む暗褐色土)，2層（ローム粒子と少量のロームブロックを含む暗褐色土)，3層(ローム粒子，ロームブロックを少量含む黒褐色土)，4層（ローム粒子，ロームブロックを少量含む暗褐色土)，5層（崩壊したローム土)。6層は荒掘りを埋め戻した土で，ローム粒子，少量のロームブロックを含む暗褐色土である。

遺物は貯蔵穴北側とP4西側に集中していた。貯蔵穴脇からは甑が出土。P6の覆土上面からは鎌が出土した。この他は3～4㎝程の破片が50点余りでこれらの殆どが刷毛調整した甕胴部の破片である。

竪穴住居015(fig.14，PL.10)　　［遺物113ページ］

調査区の中央(C3・D3)，竪穴住居013の南東に位置し，西側を溝046に切られる。また，調査中にさらにもう1軒の竪穴住居（竪穴住居026)が検出され，土層断面の観察により，本跡のほうが古いことがわった。平面形態は隅丸長方形(10.10×9.66m)で，調査区内では最大規模の竪穴住居（復原面積100.23㎡)である。主軸はN-48.0°-W，壁高は30㎝程である。

主柱穴は対角線上に4本ある。どれも竪穴住居と長軸方向が同じ縦長の方形である。規模も竪穴住居の大きさに相応しくP1(1.25×0.80×1.08m)，P2(1.30×1.05×1.01m)，P3(1.54×0.97×0.99m)，P4(1.21×0.79×0.92m)と大きい。覆土は，大型のロームブロックを多量に含んだ暗黄褐色土。竪穴住居013と同じ様に床面精査時に柱痕が確認できた。柱痕は直径0.6m前後で平面形態は円形である。P5は南側の壁に接して検出された。2段に落込み，中にはさらに2本のピットがある（深さ0.54m・0.29m)。覆土はローム土を主体とする黄褐色土で床面の色調と殆ど変わらず，埋め戻されたような状況を示していた。位置からすると出入口関係の施設が考えられる。P6は本竪穴住居に伴うものかどうか不明である。

床面は堅く，凹凸があるものの良好な状態を示している。特に図示した部分は堅緻でよく踏み固められている。壁溝は全周する。幅20㎝，深さ12㎝程で，しっかりした掘り込みである。

炉はP1とP4間の主軸上にあったと思うが，竪穴住居026の構築により破壊されたのであろうか。

覆土は1層(竪穴住居026の1層に近似し，褐色土を多く含む黒色土)，2層(黒色土・褐色土・ローム粒子の混じった黒褐色土)，3層(ローム粒子と少量のロームブロックを含み，部分的に黒色土が混入する暗褐色土)，4層（ローム粒子を少量含む黒色土)，5層（ローム粒子と暗褐色土の混合土で褐色を呈する)。壁際から埋まっていったような堆積状態を示す。

遺物は床または床からやや浮いた状態で竪穴住居全体から出土している。住居廃絶時に遺棄したものか，混入品としてもそう時間差がない時期のものであろう。実測可能な土器は14点で復原実測が多い。

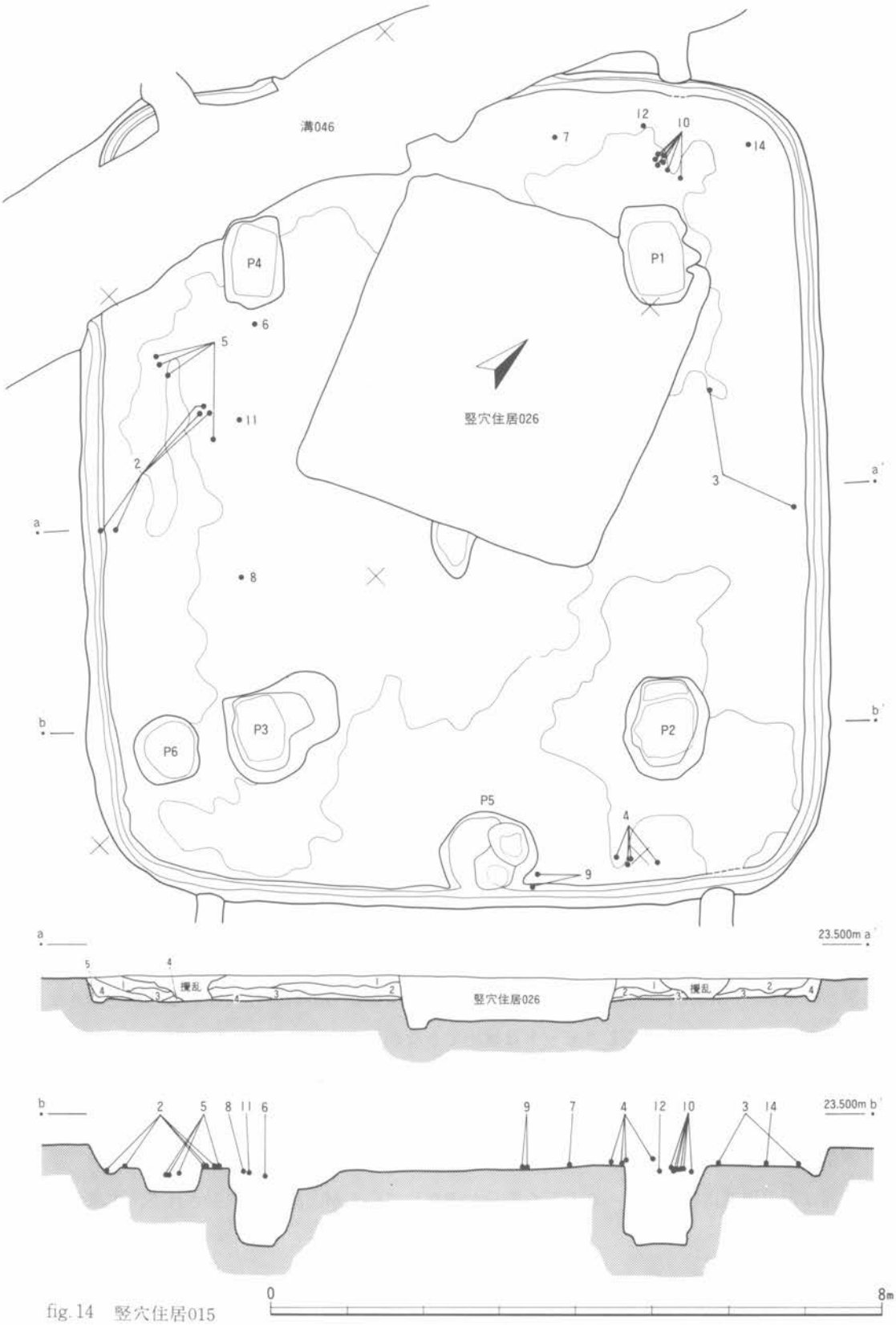


fig. 14　竪穴住居015

竪穴住居022（fig.15，PL.5）　　［遺物113ページ］

調査区北西(C2)に位置する。中央部を溝018と長方形の撹乱に，南側を溝021に大きく破壊されているが，北壁と南東隅が残っており，遺存部分より形態とだいたいの規模は推測することができる。主軸の方位はN-31.0°-Wで主軸の長さは5.30mで，僅かに胴が張った隅丸方形を呈していたと思われる。

柱穴は3本検出された。P2(0.23×0.18×0.53m)・P4(0.26×0.21×0.58m)は良好に遺存していたが，P1は溝018の壁面にかろうじて底面付近が残っていた。P3にあたる柱穴は遺存していないがもともと対角線上に4本の柱を持っていたものであろう。P5(0.49×0.42×0.22m)は中から土器片を出土し，貯蔵穴ではないかと思われる。

床面の状態はP2周辺は幾らか堅くなっていたが，他は軟らかく良好とは言えない。

炉が存在したと思われるP1とP4の間は溝018によりすでに壊されている。

遺物はP2北側床面より，甕が出土した。底部と口縁の一部を欠くが，遺存状態は比較的良好で，検出面より浅かったために一部を欠損してしまったものであろう。

竪穴住居023（fig.15，PL.6）

溝028・032の間，C2グリッド南西に位置する。床面を2つの撹乱により破壊される。平面形態は隅丸正方形(2.52×2.51m)で，主軸はN-42.0°-Eである。

炉，柱穴は精査したが検出されなかった。柱穴はもともと無い可能性があるが，炉は撹乱により，破壊されたことも考えられる。床面は堅い。

遺物は土師器片2点で古墳時代前期に属するものと考えられる。

竪穴住居025（fig.15）　　［遺物113ページ］

調査区南(D2)に位置する。中央部を溝状に撹乱され，東から南にかけての壁も地形が斜面となっているため残っていない。また，東壁は竪穴住居024（時期不明）によっても切られている。方形で，遺存部分での主軸方向の長さは2.79mである。主軸の方向はN-63.5°-W。

P1(0.16×0.13×0.15m)・P2(0.18×0.14×0.33m)・P4(0.25×0.22×0.42m)は柱穴であると思われるが，P3(0.34×0.33×0.33m)は対角線上の位置から外れ，柱穴であると断定できない。しかし，この他に柱穴らしきピットは検出できなかった。西壁際中央のP5(0.74×0.55×0.19m)は貯蔵穴であろう。

炉は主軸上のP1とP4の間を結ぶ線よりやや中央よりから検出された。炉2は床面が火熱により赤変しているが，掘り込まれてはいない。炉3の底面はよく焼けている。

床面は炉の周囲に硬質でしっかりした部分が遺存しているが，南側は削平されて，本来の面が残っていない。

遺物は，P2北床面より甕(1)が出土しこれがかろうじて実測できた。このほか50余点の破片を出土したが，刷毛調整の甕の破片が大方を占める。

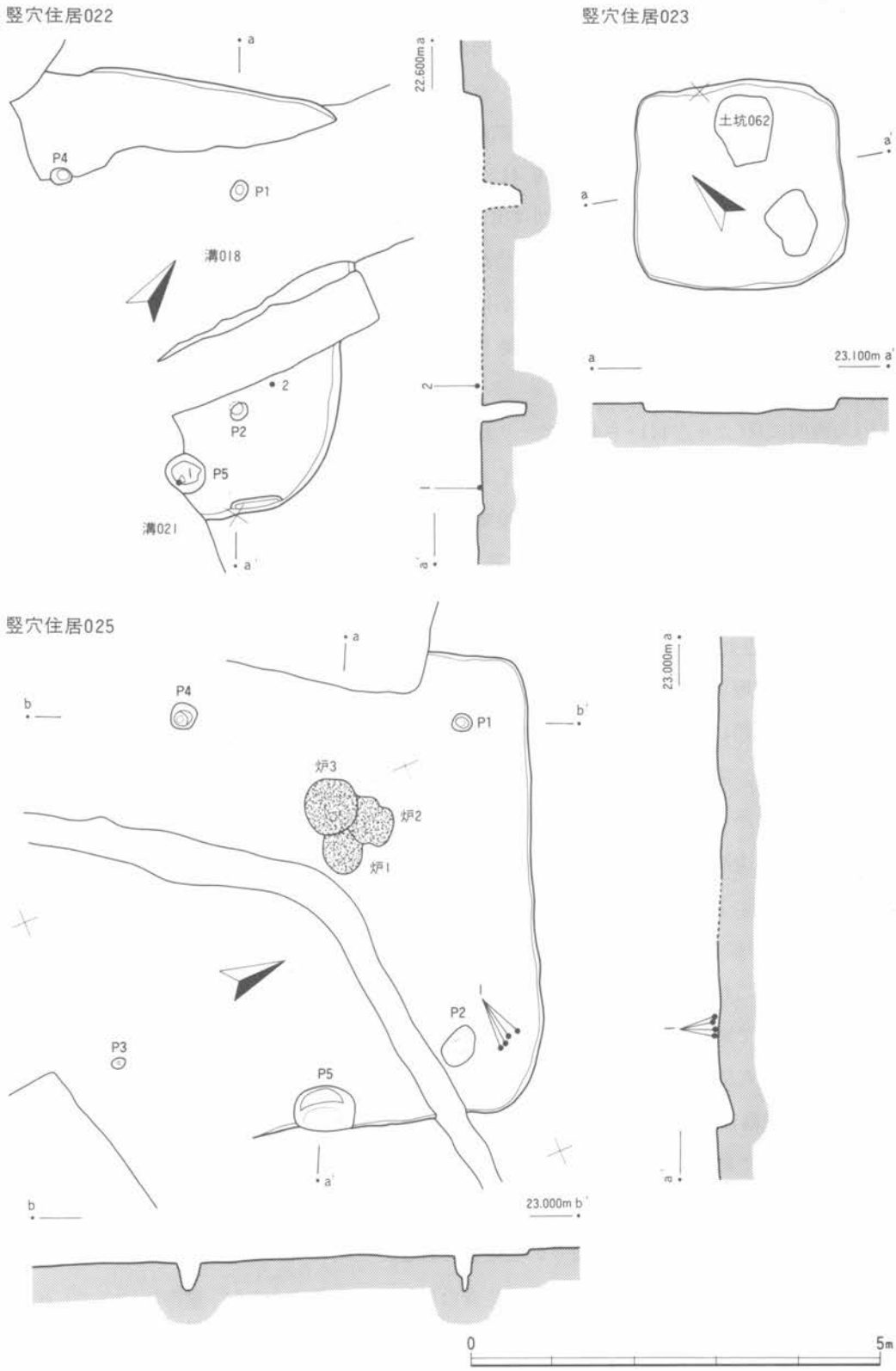


fig. 15　竪穴住居022・023・025

竪穴住居027（fig.16，PL.8）　　［遺物115ページ］

調査区北端(D1・D2)に位置する。主軸方向の方が僅かに長い隅丸長方形(5.28×5.03m)を呈し，主軸の方向はN-47.5°-W。

P1～P4は柱穴である。どれも直径18cm前後で垂直に0.75m程掘り込まれており，下場は計測することができなかった。P5(0.50×0.44×0.47m)は貯蔵穴，方形で南側をロームを突き固めた土堤状の高まりに囲まれている。P6は出入口施設であろう。

床は，貼床している。全体に小さな凹凸があるものの堅くしまっており，図示した部分は特に堅緻である。壁溝は，南西から南東にかけて巡っているが，幅が狭く浅いものである。

炉はP1とP4を結ぶ線よりやや下の主軸上にある。僅かに中央部が窪んでいるが明瞭な掘り込みはない。

P4の西側に貝(カキ左441・右43，アサリ左3・右4，ハマグリ左3・右5，キサゴ172，不明巻貝110)が堆積する。床面からやや浮いており，壁際から斜めに流れ込んだような堆積状態を示しており，竪穴住居が埋まる過程で，投棄されたと考えられる。

覆土は1層（しまりのない黒色土），2層（1層より黒く，ローム粒子を含む黒色土），3層(ロームブロック・ローム粒子を含む黒褐色土)，4層（ローム粒子と僅かな焼土を含む黒色土)，5層（黒色土とソフトローム粒子が混じる。小ロームブロックを多く含む暗褐色土）で，壁際から徐々に埋まったような堆積状況である。

遺物は，中央部に集中している。実測できたもの以外では，刷毛調整した甕胴部の破片が半分以上を占める。完形品はなく床面から僅かに浮いて出土したものが多い。また，中央部に出土していることから，竪穴住居がある程度埋まってから投棄されたものかもしれない。しかし，床から出土した遺物と覆土中の遺物に大きな時期差は認められない。

竪穴住居029（fig.16，PL.15）

調査区南(D3)にある。竪穴住居047の調査を始めたところこれを切って，もう1軒の竪穴住居が確認され，これを竪穴住居029とした。北から東にかけては溝状に攪乱されるのをはじめ，かなり破壊されており，南西のコーナーにも立木があって，遺存状態は良好とは言えない。遺存部分から，隅丸長方形を呈していたと思われ，主軸の長さは4.82m，主軸の方位は，N-59.0°-Wである。壁溝は，壁が遺存している部分では確認できた。

床面は，堅緻である。P1～P4は柱穴，P5(0.81×0.70×0.40m)は貯蔵穴，P6(0.23×0.15×0.12m)は出入口施設である。

炉はP1とP4を結ぶ線より中央寄りの主軸上にある。

覆土は，小ロームブロックと少量の焼土を含む黒褐色土1層であるが，壁際にはソフトローム粒子と小ロームブロックを含む暗褐色土が堆積する。

遺物は少なく，実測できるものはなかった。

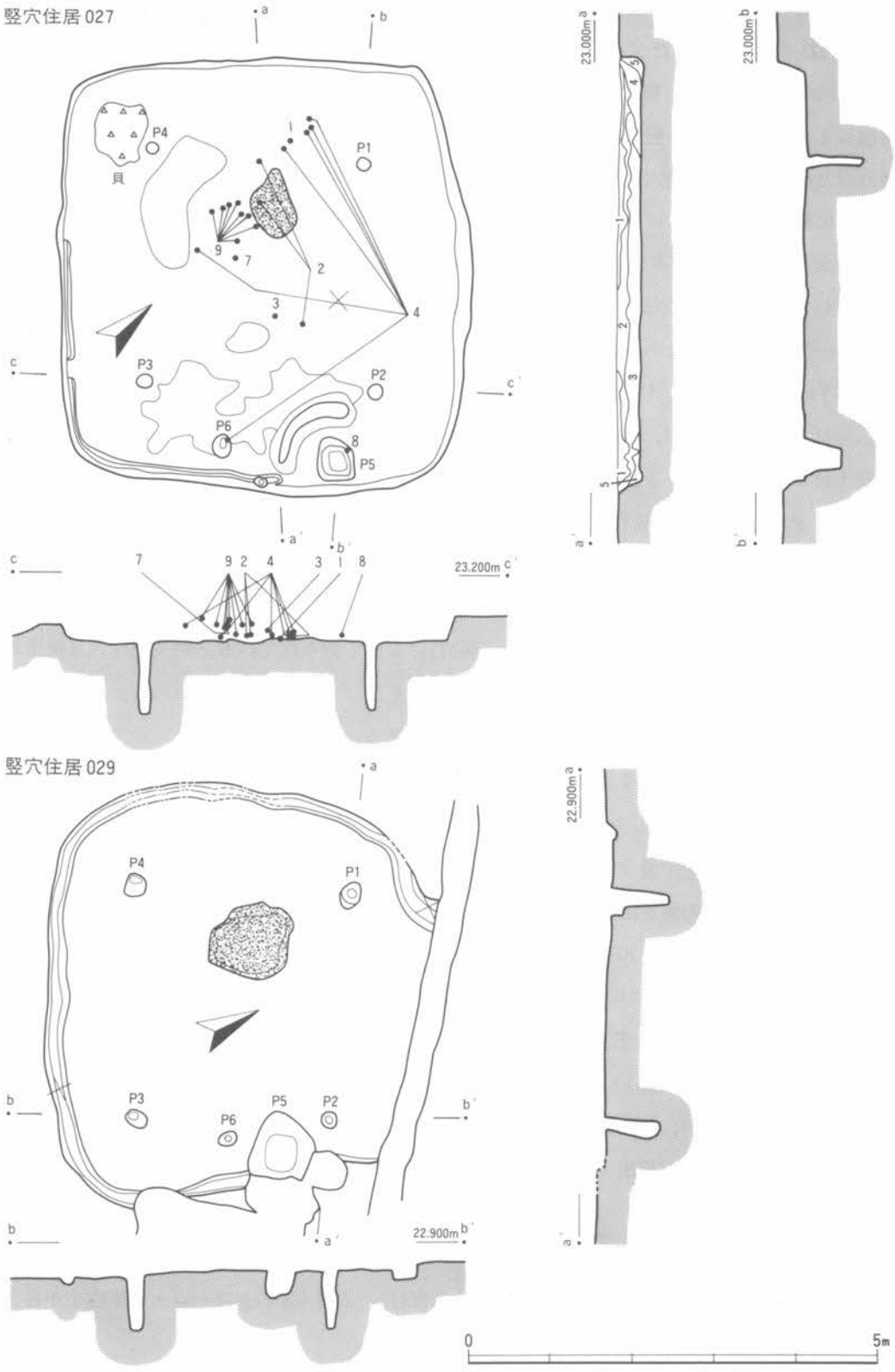


fig. 16　竪穴住居027・029

竪穴住居034（fig.17，PL.6）　　［遺物115ページ］

C2とD2グリッドにまたがって存在する。主軸方向はN-56.0°-Wで隅丸長方形(7.54×6.10m)を呈する。当初1軒の竪穴住居と考えて調査を始めたが，床面の高さがほぼ同じ竪穴住居が重複して存在し，これを竪穴住居049とした。竪穴住居049の床面のほうが貼床しており堅緻であったため，これを本竪穴住居の床面と誤認して調査を進めたが本来の床面はこれよりも僅かに高い位置にあったのではないかと考えられる。従って図示したのは掘方となる。P2周辺で遺物が出土したが，これが本来の床の高さであろう。土層断面の観察でも竪穴住居049の上にこの壁を壊して構築されていたと考えられる。主軸方向には溝021が走り，遺存状態はかなり悪い。北壁の一部は検出できなかった。また，西のコーナーも検出できなかった。

P1～P4は柱穴である。柱痕が確認できた。図示したのは掘方である。やはり方形を呈している。炉は主軸上にあるが，溝021に半分を切られている。

覆土はローム土・ローム粒子を多量に含む暗褐色土1層である。

遺物はP2脇から器台と高杯が並んで出土した他，甕底部がある。検出面から浅いためか3点とも2分の1から3分の2を欠損する。

竪穴住居033（fig.17）　　［遺物115ページ］

竪穴住居034の西側に位置する。北東側を溝021によって切られている。炉及び柱穴は検出されず規模を推定することが出来ないが，隅丸の方形を呈していたものと思われる。主軸の方向はN-46.0°-E。検出面から浅く壁の高さは5cm程である。

床面はローム土に黒色土をまだらに含んだもので，軟らかい。柱穴が発見出来ないので床を剝がしたところP2を検出した。この他のピットは底面が軟らかく浅い。

覆土はローム粒子を少量含む黒褐色土である。

遺物は床から小型の甕を出土した。

竪穴住居037（fig.17，PL.8）

東側を竪穴住居036により切られる。隅丸長方形を呈していたと思われ，横軸は4.00mである。主軸の方位はN-53.0°-E。

P2（0.26×0.23×0.20m）・P3(0.25×0.24×0.67m)は柱穴である。他の2本は竪穴住居036の床面から検出したが，対角線上からはずれるため，柱穴であるか断定できない。

主軸よりやや北に炉が検出された。僅かに掘り込んでおり，底面は火熱によって赤変している。

床面は堅く平坦である。

覆土は1層（黒色土にローム粒子と焼土粒子を含む），2層（ソフトローム土に黒色土が混ざる暗褐色土。しまりがある）である。

遺物はP2脇から器台の脚部破片が出土したが床から浮いており混入品かもしれない。

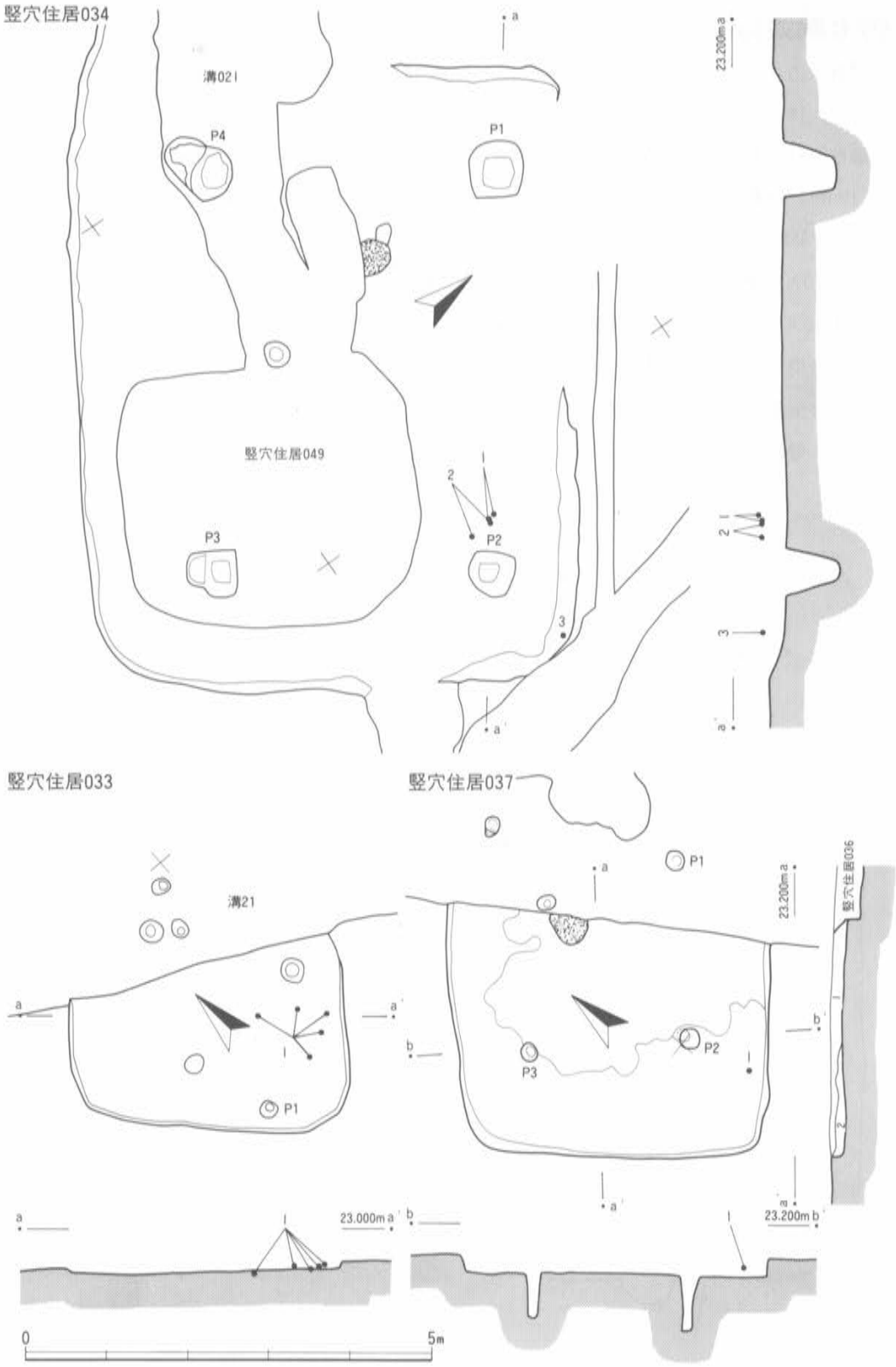


fig. 17　竪穴住居034・033・037

竪穴住居036(fig.18, PL.8)　　[遺物117ページ]

調査区の北（C2)にある。全体の半分以上を溝048により切られているが，3隅が残るため，形態や大体の規模は知ることができた。主軸方向はN-31.5°-W。隅丸長方形で主軸方向の規模は遺存部分で9.00m，横幅は7.56mで調査区の中ではかなり大型の竪穴住居である（復原面積65.19m²)。西壁は竪穴住居037を壊している。壁高は良好なところで35cmある。

P1～P4は柱穴である。P1とP2は溝048の底面から検出した。P3（0.76×0.70×0.98m)とP4（0.79×0.68×0.91m)は方形を呈している。おそらく他の2本も方形であったと思われる。P5（0.40×0.35×0.41m)は貯蔵穴，P6(0.52×0.43×0.34m)は出入口施設である。

覆土は焼土粒子を含む黒褐色土を主体としている。

遺物は全部で30点余と少ないが，P4脇でまとまって出土し，このうち5点は実測することができた。壁の方から流れ込むような出土状態である。

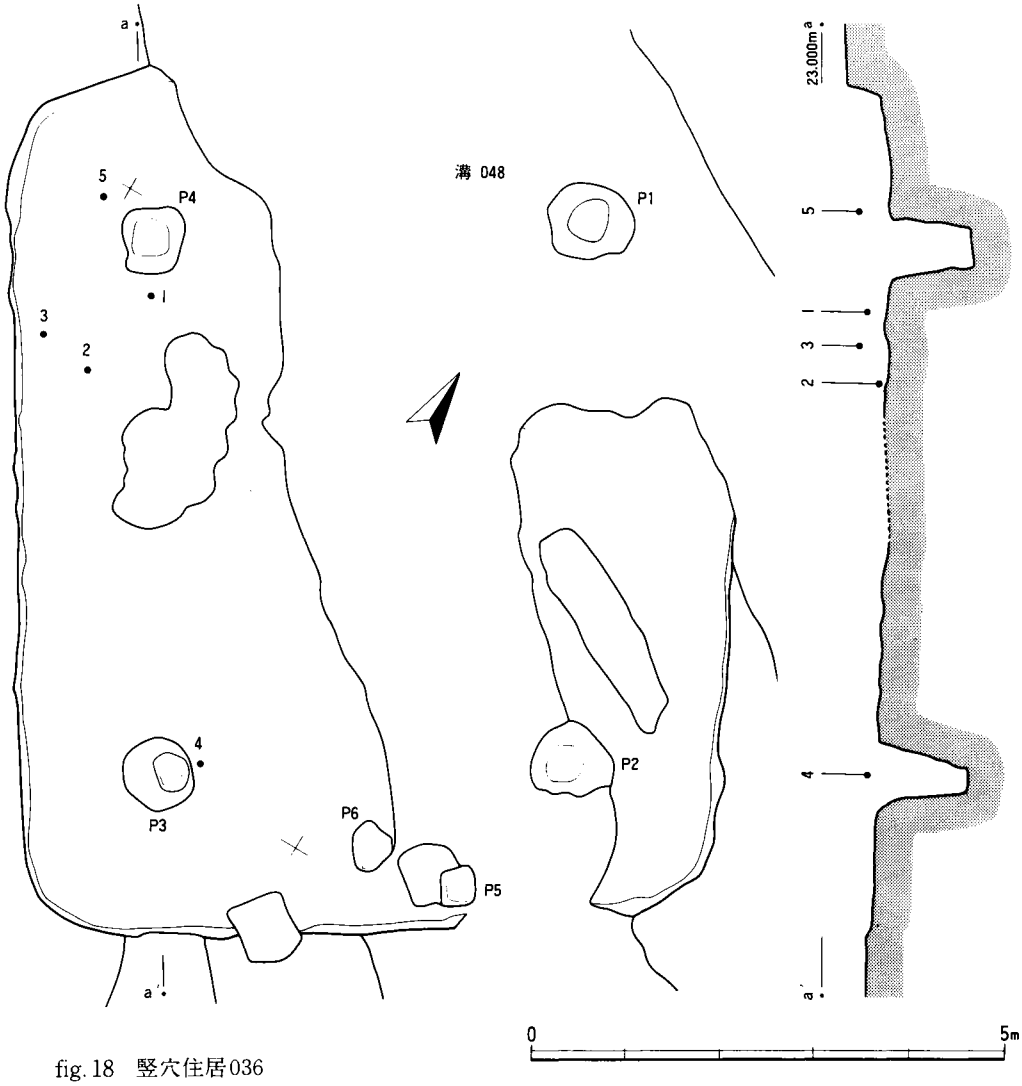


fig.18　竪穴住居036

竪穴住居038(fig.19, PL.7)　　[遺物117ページ]

調査区北西(D2)にある。隅が丸く各辺が僅かに張っており，いわゆる小判形に近い形態である(6.84×5.72m)。主軸の方位はN-32.0°-W。撹乱が各所に入り遺存状態は悪い。北隅は残っていない。

P1～P4は柱穴である。主軸に対して横に長い方形を呈している。P5(0.45×0.41×0.35m)は貯蔵穴で北側にこれを囲うようにロームを突き固めた土堤状の高まり(床から4～5cm)をもつ。P6(0.43×0.36×0.37m)は主軸上の南壁際にある出入口施設である。

柱穴に囲まれた範囲の床面はよく踏み固められている。

炉はP1とP4の間の主軸上にあり一部を壊されている。床を5cm程掘り窪めている。

覆土は1層(ローム粒子を含む暗茶褐色土)，2層(黒色土とローム粒子が混じり合ったなかに小ロームブロックを含む暗褐色土)，3層(2層及び4層より黒く，粗いローム粒子を含む)，4層(黒色土とローム粒子が混じり合う土で，小ロームブロックを含む暗褐色土)，5層(4層よりも小ロームブロックを多く含む暗褐色土)。

遺物は全部で50点余り，床面からわずかに浮いて出土したものが多い。貯蔵穴の脇には特に集中しており，甕と壺(3・8)もここから出土した。

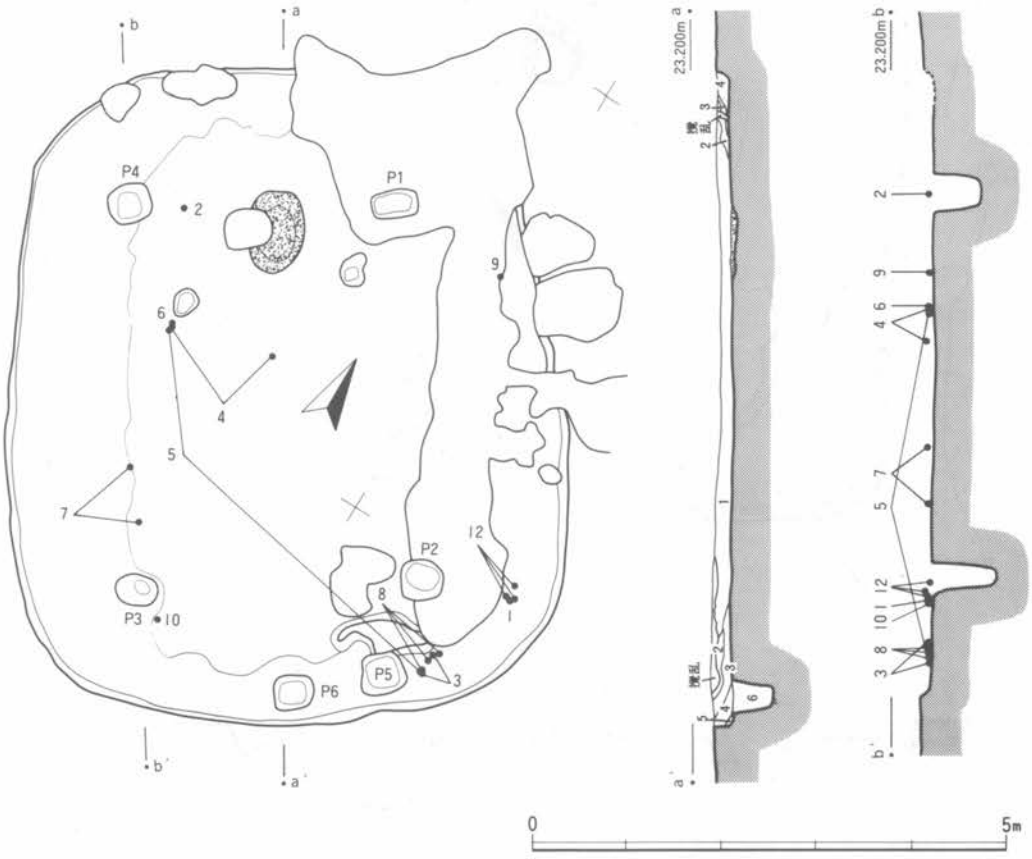


fig.19　竪穴住居038

竪穴住居040(fig.20, PL.11)　　［遺物118ページ］

調査区西部(D2)に位置する。隅丸長方形(8.00×7.18m)で，主軸はN-39.0°-W。南壁側をを溝028が切っている。床は貼床しており，幾らか凹凸があるが全体に堅く，特に踏み固められたところは認められない。多量の焼土が壁際に堆積する。炭化材は僅かしか遺存していないが床面が焼けており，焼失住居である。

P1～P4は柱穴である。P3は壊されて，ごく一部しか残っていないが，他の3本には柱痕が明瞭に観察できた(図のスクリーントーン部分)。直径25cm程である。P5(0.71×0.65×0.51m)は貯蔵穴。東壁際にあり，西側に2～3cmの土堤状の高まりがある。貯蔵穴部分を除いて壁溝が巡る。炉は主軸上の中央より僅かに西にある。6～8cm程掘り窪めており，底面は堅くしまり赤

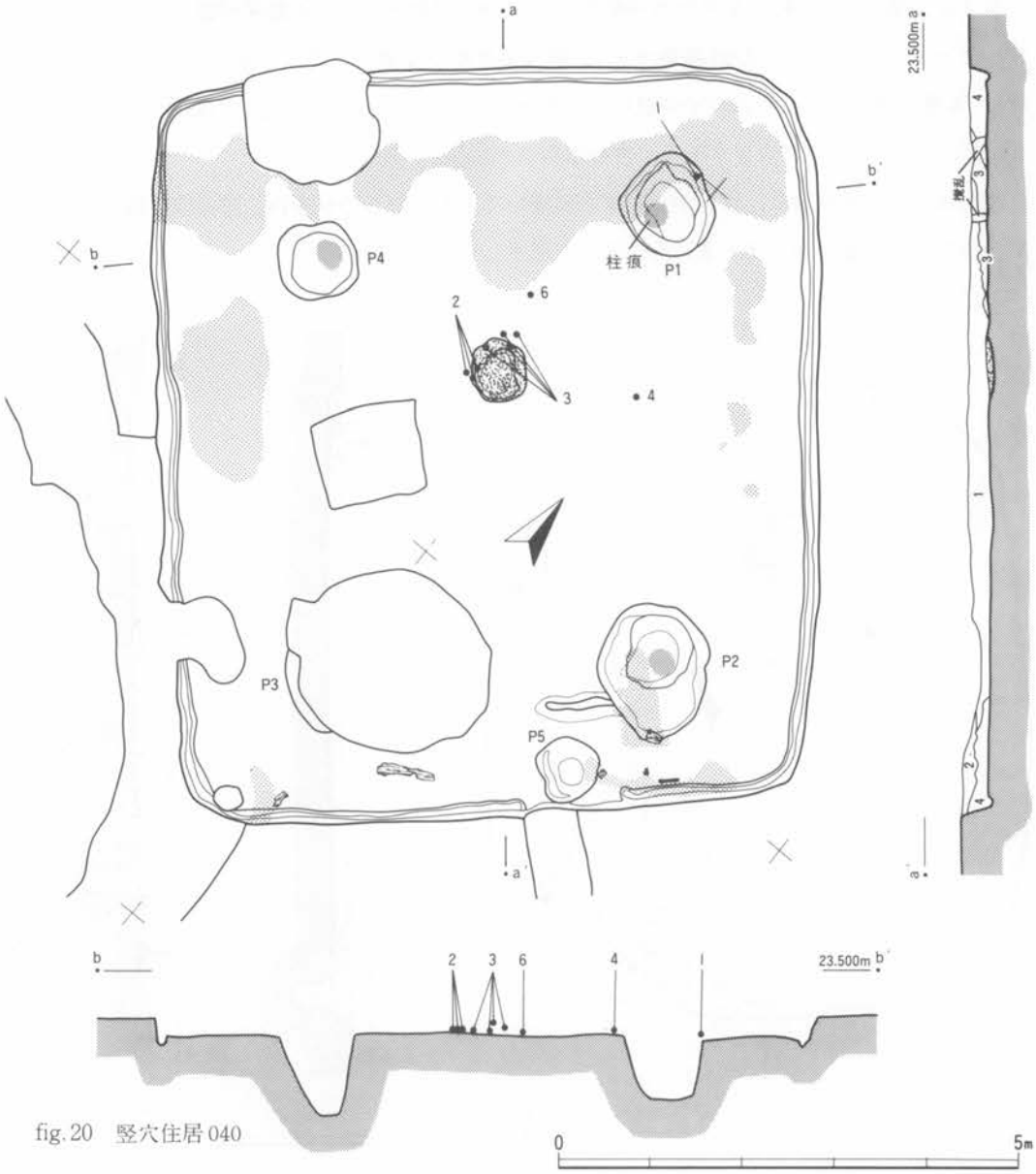


fig.20　竪穴住居040

変する。

覆土は1層（粗いローム粒子と焼土粒子を含む黒色土），2層（小ロームブロック・ローム粒子を含む黒褐色土），3層（ローム粒子・黒色土を含む焼土），4層（1層よりも黒くしまった黒色土。少量のローム粒子が混じる）である。

遺物は50点ほどで，実測可能なものはほとんど炉の周辺から出土した。

竪穴住居060（fig.21，PL.11）　［遺物118・131ページ］

調査区の西に位置する（D3）。西側を溝028によって壊されている。隅が丸く各辺がわずかに張っており小判形に近い形態を呈している（5.40×4.78m）。焼失住居で焼土・炭化材を出土し，床も火を受けている。

P1～P4は柱穴である。P2は溝の底面から検出した。P5（0.58×0.51×0.26m）は貯蔵穴で北側に土堤状の高まり（約2cm）がある。P6は位置からして出入口施設であろう。炉は竪穴住居の中央よりやや北よりにある。底面の南側が特に堅く，また赤くなっている。床は貼床しており，図示した範囲は小さな凹凸があるもののかなり堅く踏み込まれている。

覆土は1層（ソフトローム粒子・粗いローム粒子・焼土粒子を含む暗褐色土），2層（3層よりソフトローム粒子が少なく，3層より焼土粒子が多い黒褐色土），3層（ソフトローム粒子・焼土粒子を含む黒褐色土），4層（黒色土とソフトローム粒子が混じった暗褐色土）。

遺物は西隅に特にまとまって出土した。床から浮いており流れ込んだような堆積状態である。台付甕脚部(3)は貯蔵穴下層から出土した。土器類のほかにやはり西隅から鉄斧を出土した。

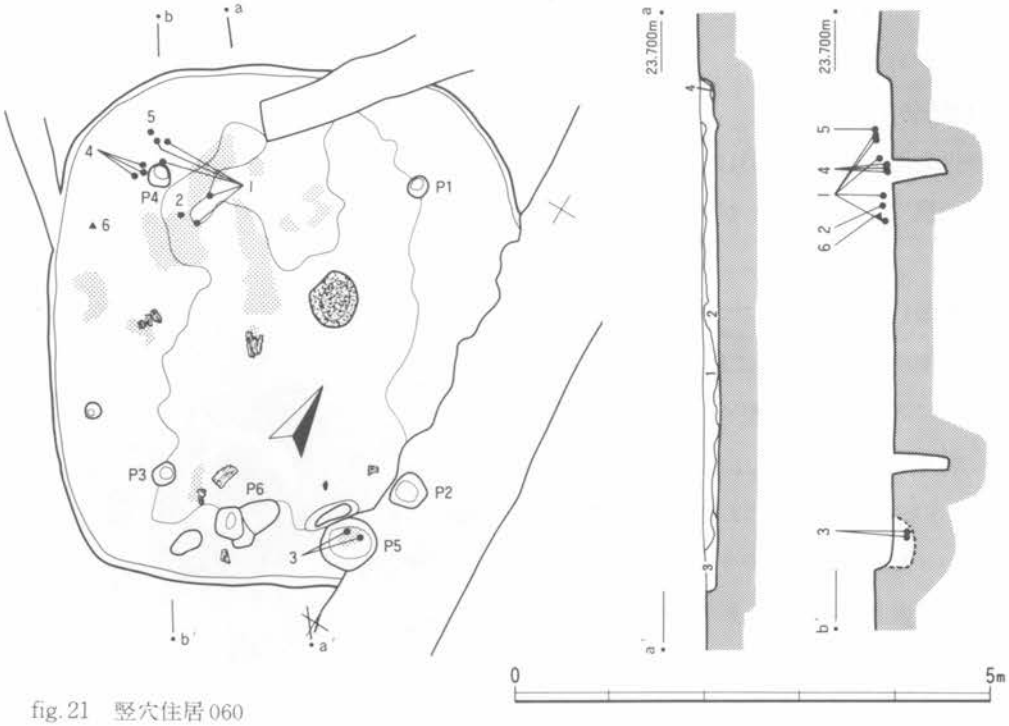


fig.21　竪穴住居060

竪穴住居041(fig.23)

調査区中央よりやや南よりに位置する（C3)。やや歪んだ縦長の方形（6.02×4.98m)で，主軸はN-56.0°-W。検出面から浅く壁の立ち上がりは5㎝程である。柱穴は北隅をのぞくコーナー部分に3本検出した。深さは0.10m～0.26mである。炉は主軸上の中央より僅かに西寄りにある。床面を5㎝掘り窪めている。

覆土は1層（焼土粒子を含むしまりのある黒色土)，2層（ソフトロームと黒色土が混じる暗褐色土)。

竪穴住居043(fig.23)

縦長の長方形（4.12×3.20m)で主軸方向はN-40.0°-E。中央部と南西部は破壊されている。北側に貝が堆積した土坑059がある。どちらも検出面から浅く土層観察によっても新旧関係は明らかにならなかった。また出土した土器はどちらも破片ばかりではあるが，古墳時代前期に属するものである。壁高は2㎝程である。床は軟らかい。柱穴は床を剝がして精査したが検出しなかった。主軸上の中央部より東に焼土が検出されたが床面が焼けており炉だと思われる。遺物は北東壁周辺にまとまっていた。実測できる遺物はなかった。

竪穴住居044(fig.22・23)　［遺物117ページ］

調査区南東端に位置する(D3)。建造物の土台，土管，立木等による破壊が著しく，床は既に削平されていた。炉の一部とピット1本を検出したのみで竪穴住居全体の規模は不明である。ピット(0.40×0.28×0.27m)内中位から脚部を欠損した台付甕(1)が正位で出土した。このピットは炉と1.1m離れており，この時期の竪穴住居の貯蔵穴としては炉に近すぎるので，柱穴である可能性がある。

竪穴住居056(fig.23)　［遺物118ページ］

調査区北西，竪穴住居031の東側に位置する(C2)。北部を溝032に切られ，遺存部分で2.06mの小型の竪穴住居である。炉や柱穴などの施設は検出されなかった。床面から甕(2)を出土した。

竪穴住居061(fig.23)

調査区中央より東(D3)にある。コンクリート道路の下にあり，覆土が堅くしまって調査しにくかった。歪んだ方形を呈し，主軸の長さは2.95×2.62m，主軸の方位はN-57.0°-W。柱穴は検出されなかった。主軸上とやや北よりに炉がある。遺物は20点余りであるが，刷毛調整した甕胴部の破片を含んでいた。実測できるものはなかった。

fig.22　竪穴住居044遺物出土状態

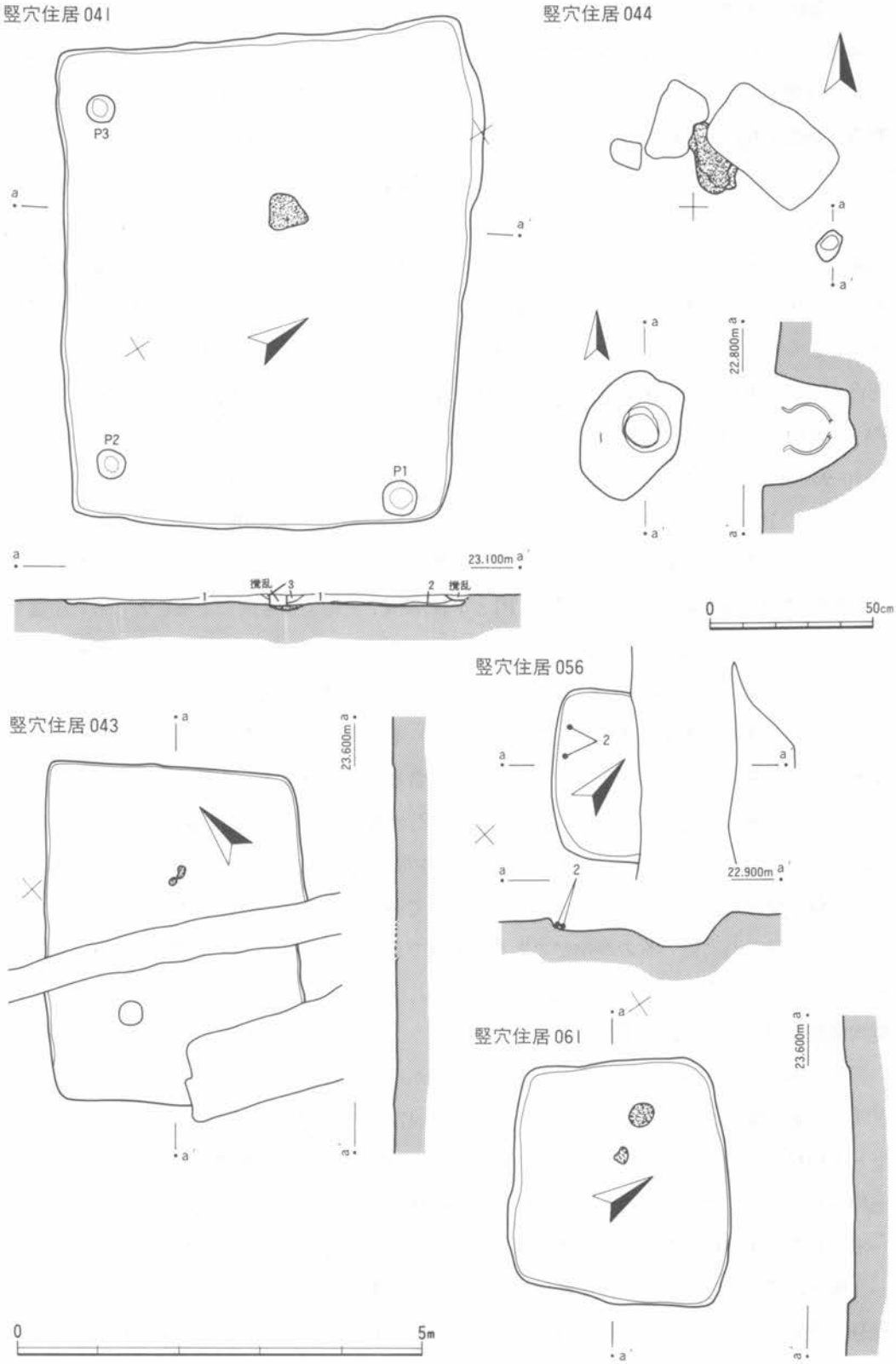


fig. 23　竪穴住居041・043・044・056・061

(2)古墳時代中期

調査区内ではこの時期に属する竪穴住居は4軒であった。弥生時代から古墳時代前期の竪穴住居の各隅が丸みをおびていたのに対し，4隅が直角で正方形に近い平面形態を呈している。

竪穴住居010(fig.24・103，PL.14)　　[遺物120・121・133・135ページ]

調査区南(C3)に主軸を真西に向けて位置する(N-90.0°-W)。縦軸が僅かに長い長方形を呈している(7.04×6.82m)。南側は谷に面し斜面となるため南壁はほとんど遺存していない。北西隅は竪穴住居004(古墳時代前期)を切っている。壁は垂直に立ち上がり，壁高は遺存の良いところで床から35cmを測る。また，北壁下には壁溝がある。焼失住居で，壁際に焼土が堆積し，僅かであるが炭化材も検出した。床は貼床しているが，火を受けているためか全体に軟らかく凹凸がある。P1(0.43×0.40×0.50m)，P2(0.42×0.40×0.57m)，P3(0.32×0.30×0.72m)，P4(0.30×0.26×0.46m)は柱穴である。南東隅に並んでいるP5(0.68×0.59×0.47m)，P6(0.94×0.79×0.44m)は貯蔵穴である。P7(1.00×0.55×0.70m)の用途は不明であるが後述するようにP6の覆土と同じである。この他支柱穴としてP2とP3の間に間仕切り溝と接してP8(0.30×0.39×0.21m)が，P3とP4の間にP9(0.30×0.22×0.16m)がある。間仕切り溝は北壁側に2本，東壁際に2本ある。炉はP1とP4の間で，主軸よりも南によったところに位置する。床を掘り込んではおらず，床が火熱により，赤変している。炉の中から，土製品が出土した。覆土は1層(ローム粒子・焼土粒子を含む粒子の細かい黒色土)，2層(ローム粒子・小ロームブロックを含む。焼土・炭化材も含む黒褐色土)を主体とし，壁際に3層(黒色土とソフトローム粒子が混じり合う暗褐色土。炭化材を少量含む)が堆積する。4層(3層にロームブロックが多量に混じったしまりがある暗褐色土)はP7の覆土である。また貯蔵穴P6には上層に2層，下層にP4と同じく4層が堆積するが，この中間に10cmほどの厚さで純粋な焼土の層がある。南側(壁際)から流れ込んだような堆積状態である。出土した遺物は調査区で最も多く，完形品またはこれに近いものが殆どである。実測できたものだけでも坩9点，壷1点，鉢5点，高杯17点，器台結合土器1点，甕2点の34点ある。

竪穴住居012(fig.24・101，PL.9)　　[遺物123ページ]

調査区中央部より西よりに位置する。主軸が僅かに長い方形を呈している(4.30×4.27m)。東隅と西隅は攪乱を受けている。主軸の方向はN-47.0°-W。壁高は30cmである。焼失住居で焼土と炭化材を出土し床の一部は火を受けて赤変している。炭化材の遺存状態は良好で，直径10cm程の丸太状のものが目立つが，竪穴住居1軒の構築材としては少なく遺存しているのはごく一部である。炭化材は竪穴住居の周縁部に多く，壁から中央に向かって倒れた状態のものが多い。焼土は竪穴住居中央部に多く堆積し多いところで床から約10cm堆積している。床面もこの部分が最もよく焼けていた。床は貼床しており堅緻である。間仕切り溝は床を剝がした時に検出した。柱穴は精査したが検出しなかった。南西隅に『「』状に土堤に囲まれた方形の貯蔵穴

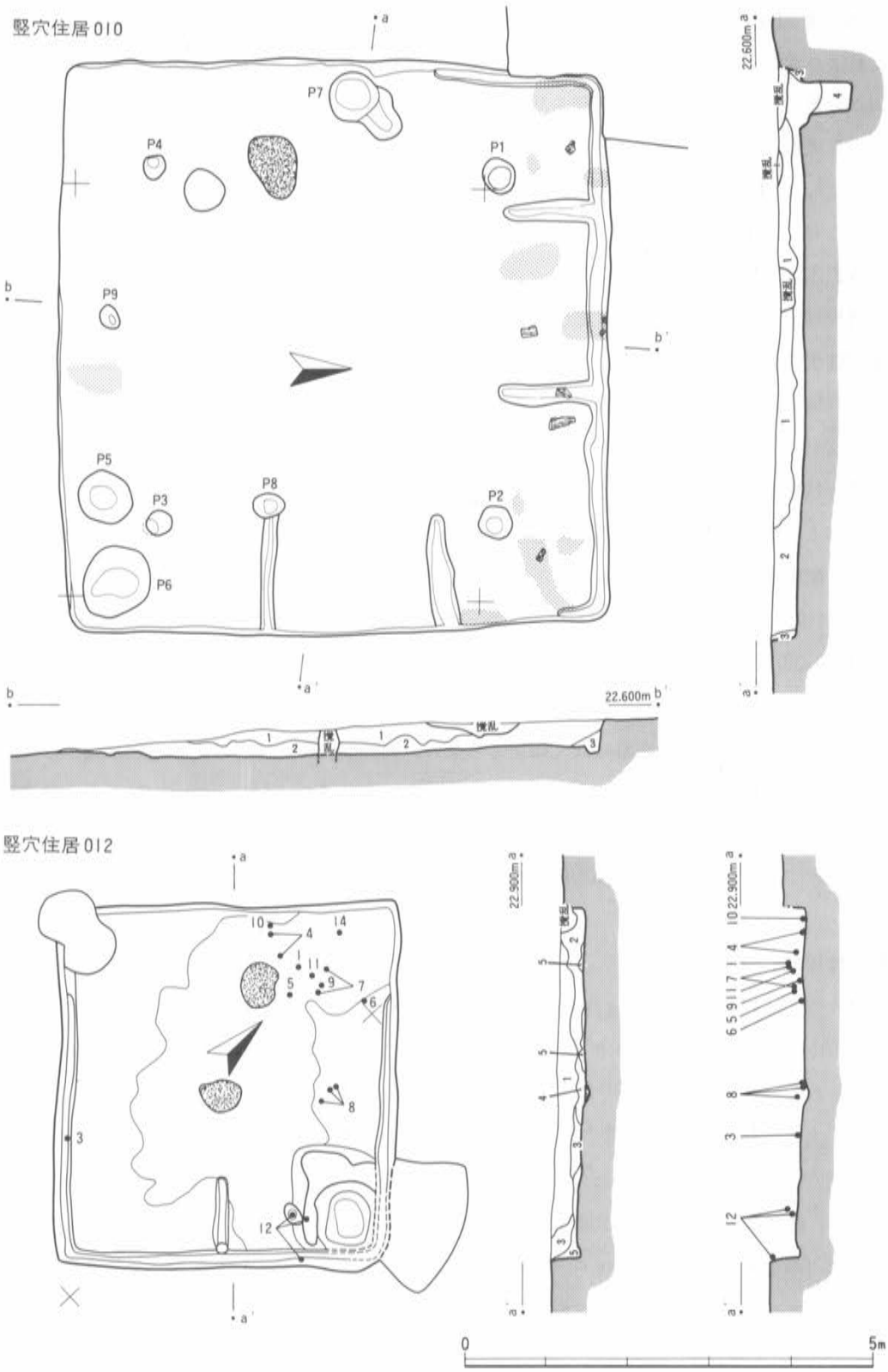


fig.24　竪穴住居010・012

(0.63×0.50×0.39m)がある。土堤は高いところで床から7cm程である。炉は中央部に1か所とこれより北に1か所の計2か所ある。どちらも5cm程掘り窪めており，底面は火熱によりロームが変質している。壁溝は北西部を除いて巡る。覆土は上層は1層（ローム粒子・ロームブロックを斑点状に含む）を主体とし，下層は北西側では2層(ローム粒子・ロームブロックを含む褐色土)，北東側では3層（褐色土と暗褐色土の混合土でローム粒子を多く含む褐色土）を主体としており，床付近には4層（炭化材とローム粒子を含む焼土）と5層（炭化材と焼土を含む暗褐色土）が堆積している。

遺物は主として，北西隅にまとまって出土した。

竪穴住居031(fig.25，PL.5)　　[遺物123ページ]

竪穴住居012から北へ7m程のところに位置する(C2)。検出面から浅く，壁も床も殆ど残っていない。また中央部を溝032と畜産試験場時代のものと思われる溝状の撹乱によって破壊され遺存状態が悪い。しかし，かろうじて掘方の底面が遺存していたため，大方の規模と平面形態を知ることができた。平面形態は正方形(6.33×6.34m)で，主軸はN-63.0°-Wである。対角線上に配置されたP1(0.41×0.39×0.86m)，P2(0.33×0.33×0.86m)，P3(0.29×0.23×0.95m)，P4(0.39×0.34×0.90m)は柱穴で底面の標高はほぼ同じである。南東隅にあるP5(0.72×0.64×0.32m)は貯蔵穴である。この貯蔵穴の覆土は焼土を多量に含む黒褐色土が1層で一度に埋まったような状況を呈している。P1とP2の間に焼土を少量検出し炉であった可能性もあるが，床面は特に火を受けた跡はなく確定できない。同時期の竪穴住居の主軸方向を見ると溝等により破壊された部分にあった可能性もある。覆土は大変薄かったが，ローム粒子を少量含む暗褐色土である。遺物は北壁際と貯蔵穴内からまとまって出土した。破片ばかりで実測できたのは1点である。しかし，高杯の破片など明らかに古墳時代中期に属する特徴を持つものであった。

竪穴住居035(fig.25，PL.7)　　[遺物123・135ページ]

竪穴住居031から北東に15m程の所に位置する(C2・D2)。僅かに主軸方向が長い方形で(3.60×3.46m)，主軸の方向はN-60.0°-W。北隅を土坑064に，西隅を土坑066に，また南隅を溝状遺構に切られている。壁高は20cmである。P1は北隅の土坑064と重複して存在するが，本跡に伴うものか，土坑に伴うものか不明である。P2(0.47×0.44×0.30m)は貯蔵穴ではないかと思われる。柱穴は，精査したがなかった。炉は中央より西寄りに2か所検出した。殆ど掘込んではいないが，底面が赤変し，焼土が堆積していた。南側の炉2は土坑066により切られている。覆土は1層（黒色土・ローム粒子・ロームブロックの混じった暗褐色土）と2層（褐色土・ローム粒子・ロームブロックの混じった暗褐色土）を主体とし，壁際に3層（ロームブロック主体の黄褐色土），4層（ローム粒子を含む黒褐色土）が堆積する。3層は土坑を掘削した際の排土ではないかと思われる。遺物は甕(1・2)が2点復原できたが，他は破片である。

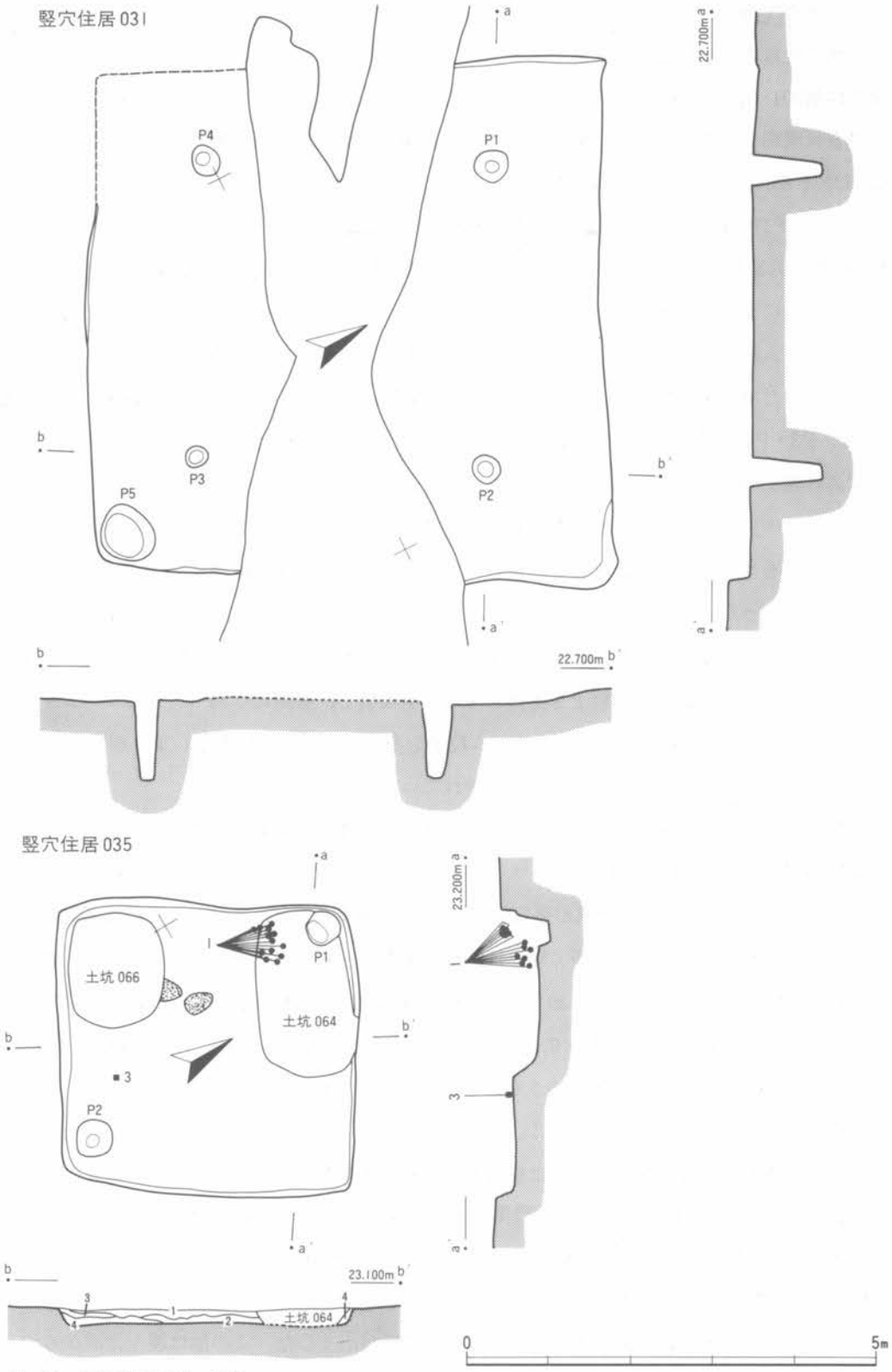


fig.25　竪穴住居031・035

(3)古墳時代後期

古墳時代後期の竪穴住居は8軒である。

竪穴住居001(fig.26, PL.13) [遺物125ページ]

調査区南端に位置する。南に開いた谷の途中に構築しているため南壁の遺存は悪い。正方形(4.62×4.69m)で，主軸の方向はN-14.0°-W。

柱穴はP1(0.70×0.49×0.79m)，P2(0.66×0.57×0.94m)，P3(0.60×0.48×0.88m)，P4(0.62×0.52×0.79m)で，対角線上でもかなり隅に近い所に位置する。図示したのは掘方で，平面的にはおさえられなかったが，半載したところ4本とも断面に，柱痕が認められた。柱痕はローム粒子・ロームブロックを含むしまりのない黒褐色土で，周囲の覆土は，ローム土を主体とした黄褐色土である。P5(0.46×0.33×0.50m)は出入口施設。P6(0.44×0.42×0.31m)は，P3・P4の間に位置する。支柱穴であろう。

壁溝は竈部分と南壁の一部を除いて巡る。床は，南隅が堅かったがその他の部分は軟らかい。

竈は北壁中央に位置する。袖は既に破壊されており，十文字に切断したが，暗褐色土に山砂と焼土粒子を含んだ土を主体として堆積していた。火床部も焼土は堆積しておらず，火を受けた痕跡もなかった。

覆土は，上から1層（ローム粒子を含む黒褐色土)，2層（1層より大粒のローム粒子を含む)，4層（ローム土・ローム粒子を主体とする）が堆積し，壁際に3層（大きなロームブロックを多量に含む）が堆積する。5層（ローム粒子を多量に含む暗褐色土でしまりがない）はP5の覆土である。ローム土を多く含み埋め戻されている可能性がある。

遺物は土師器破片が50～60点出土で，復原できたのは2点。甕胴部の破片を多く含んでいた。

竪穴住居002(fig.26, PL.12) [遺物125・133ページ]

調査区西側に位置する。南西隅が竪穴住居006の一部を切る。また本跡の北西部は溝状の攪乱により破壊される。検出面から浅く壁高は20cm。正方形（4.81×4.96m)で主軸はN-5.0°-E。P1(0.30×0.28×0.52m)，P2(0.39×0.38×0.56m)，P3(0.34×0.29×0.46m)，P4(0.34×0.31×0.44m)は柱穴。P5(0.30×0.29×0.42m)は出入口施設。P6(0.34×0.30×0.18m)，P7(0.46×0.43×0.26m)は本跡に伴うものかどうか不明である。

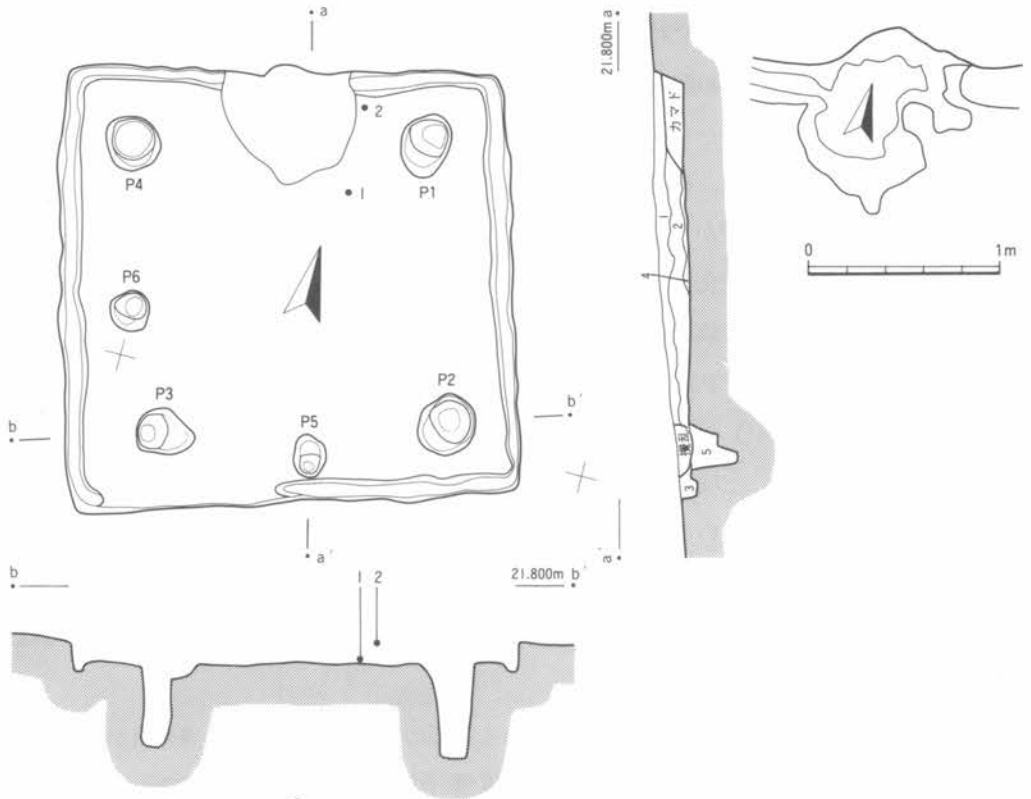
壁溝は竈部分を除いてまわっている。床は軟らかい。

竈は破壊されており，図示したのは構築材の散布範囲である。

覆土は1層（ローム粒子を少量含む暗褐色土)，2層（ローム土・ローム粒子を含む黒褐色土）を主体とし，壁際に4層（ローム粒子・ロームブロックを含む暗褐色土）が，壁溝に5層（ローム粒子を含む暗褐色土）が堆積していた。

遺物は竈の左の床から土製支脚と須恵器長頸壷頸部が出土した。この他は覆土上層から出土し，古い時期のものも混入している。

竪穴住居001



竪穴住居002

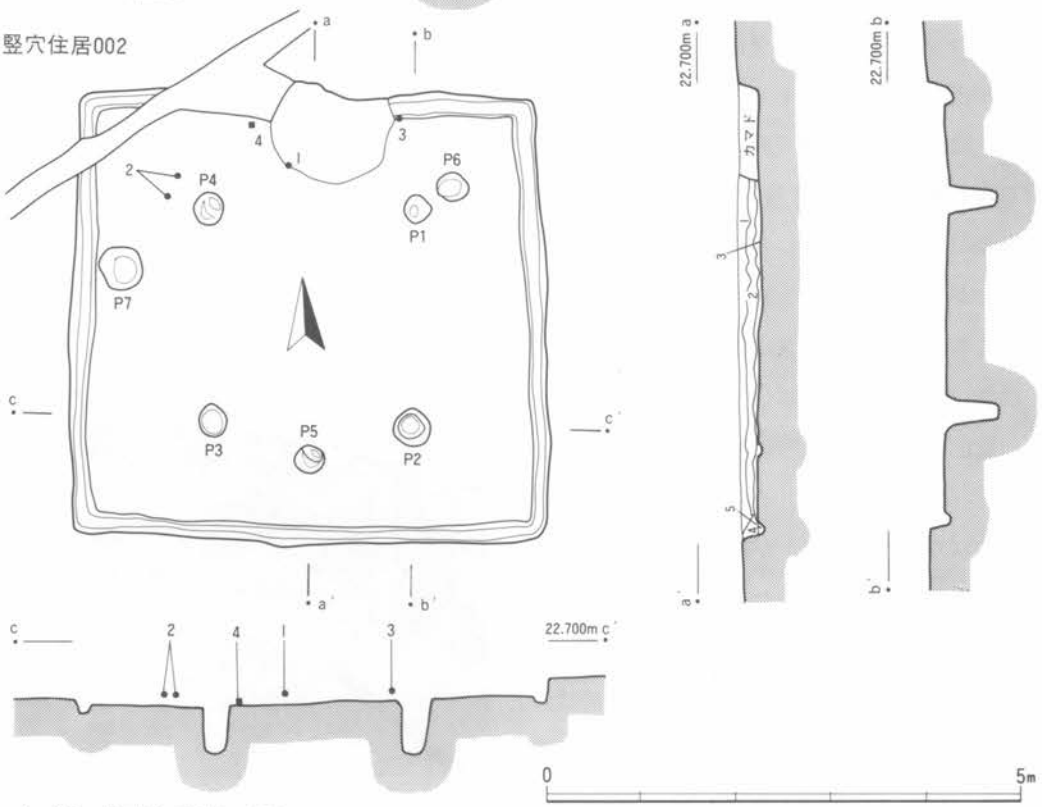


fig. 26　竪穴住居001・002

竪穴住居008(fig.27・28・101, PL.9)　　[遺物125・133ページ]

調査区中央よりやや南西よりに位置する(C2)。主軸が僅かに長い(7.83×7.37m)長方形。主軸の方向はN-0°-W。畜産試験場時代のものと思われる建物の土台により破壊されているが,これより深く構築しているため一部を除いて壁・床は残っている。壁は垂直に立ちあがり，壁溝が竈部分を除いて巡っている。壁高は良好なところで，50cmある。焼失住居で焼土・炭化材を多量に検出した。炭化材は壁から内側に向かって倒れているものが多い。遺存状態は良好で，一辺10cm程の角材のような炭化材も検出しているが用途などについては確定できなかった。柱材は確認できなかったが，柱痕は認められた。

P1(0.44×0.38×0.71m)，P2(0.46×0.39×0.78m)，P3(0.46×0.39×0.48m)，P4(0.44×0.41×0.60m)は柱穴。P5(1.14×1.0×1.08m)は貯蔵穴である。南壁際中央の竈と向かい合う位置にある。底面は平らで，土堤により囲まれる。土堤は高さ2cm程である。

床面は堅く踏み固められている。西壁からは3条の間仕切り溝が内側にのびる。このうち一番南側のものはP3とぶつかる。また，北壁からも竈をはさんで2本の間仕切り溝がある。これらは炭化粒で埋まっており，埋め込まれていた板状のものが，火災によりその根元だけが溝のなかに残ったものと考えられる。

竈は，上の方を削り取られていた。遺存している袖部の内壁は火熱により構築材が赤変する。構築材は黒色土が少量混じる山砂である。竈内は6層（山砂・焼土が混じる暗褐色土，構築材の大ブロックを中位に多量に含むがこれは天井崩落土であろう）と壁際の7層（山砂・ローム粒子が混じる）が堆積する。8層(赤変したローム土)は火床部である。

覆土は，上から1層（細粒子でローム粒子を含む黒色土），2層（黒色土とローム粒子・炭化材を含む黒褐色土），3層（ソフトローム・黒色土・小ロームブロックからなり，焼土と炭化材を多量に含みしまっている暗褐色土）と堆積し，壁際に4層（3層よりも黒色土が多いが焼土の割合が少ない黒褐色土），壁溝内に5層（ロームブロックを主体とする暗褐色土）が堆積する。このうち3層は一気に埋め戻した土のようで貯蔵穴内の覆土もこの3層だけである。

遺物は貯蔵穴内から鉢(4)と甕(7)が出土した。また竈前の床からは完形に近い甕(6)が,P4脇からは高杯（5)が出土した。その他手捏土器が3点あり，甑以外は一応セットが揃っている。破片の大半は竈周辺に集中していた。しかし深く掘り込まれた大型の竪穴住居としては全体の遺物量が少なく下層に集中し，混入品は少ない。覆土の状況と遺物の出土状況から火災後埋め戻した可能性が考えられる。

fig.27　竪穴住居008炭化材出土状態

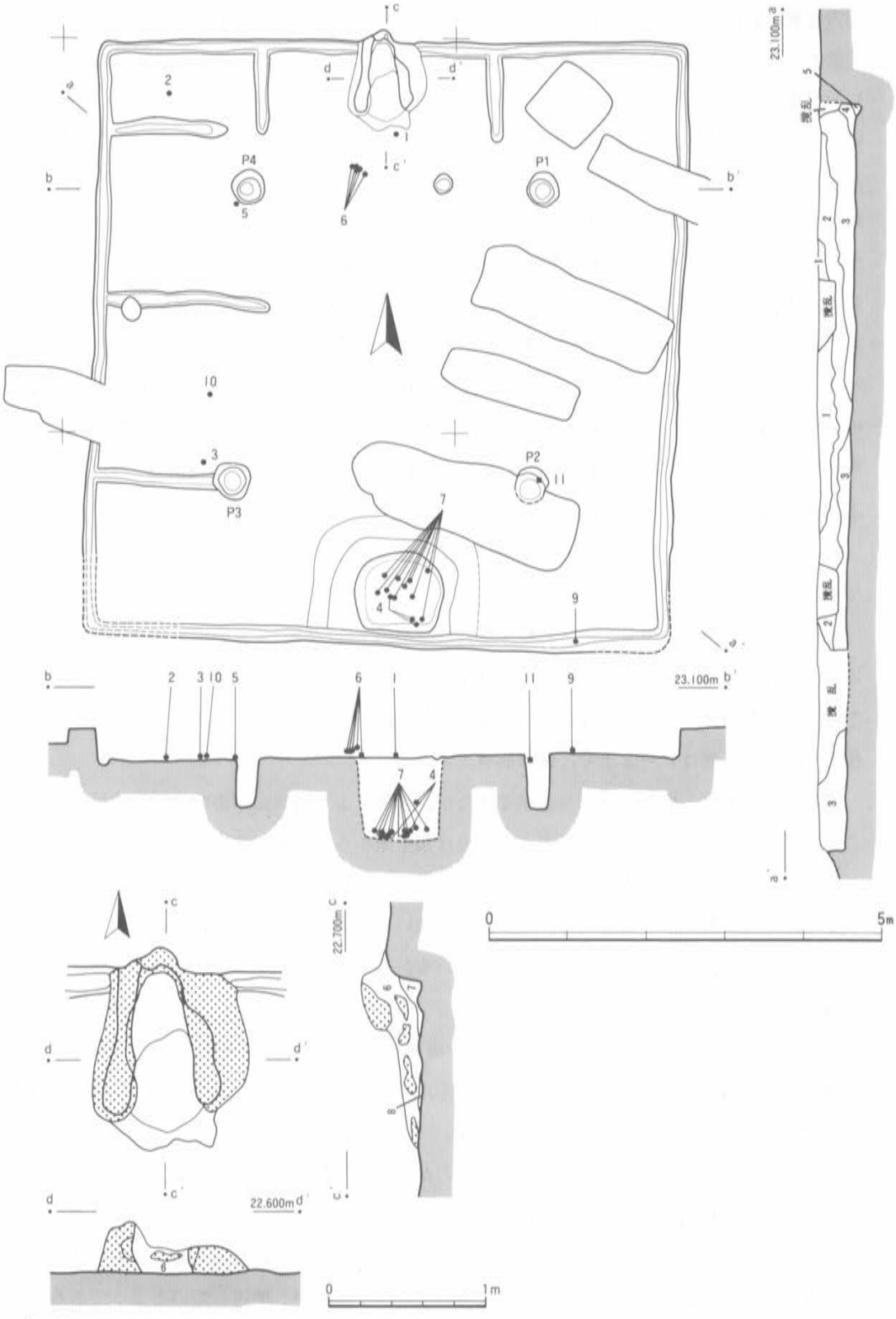


fig. 28　竪穴住居 008

竪穴住居016(fig.29・104, PL.15)　　[遺物127・131・133ページ]

調査区南西に位置する(D3)。北側を溝046により破壊され，北壁はほとんど残らない。しかし，4隅がかろうじて残っているので形態・規模は知ることができる。正方形(7.19×7.16m)を呈するが，南壁中央に方形の張り出しをもつ。張り出しを含めた主軸の推定の長さは，8.30mである。主軸の方位はN-25.5°-E。検出面から浅く，畜産試験場時代の建物跡と重なっているため遺存状態は悪い。炉・竈とも検出しない。しかし，出土遺物や竪穴住居の形態から，竈をもつ竪穴住居と考えられる。北壁中央にあったものが溝046により破壊されたのであろう。焼失住居で床に炭化材・焼土を検出した。炭化材は主として，南側に，焼土は北側に多く堆積している。焼土が堆積していた部分の床は火熱による赤変化が著しい。

P1(0.48×0.42×0.79m)，P2(0.38×0.37×1.08m)，P3(0.34×0.32×0.83m)，P4(0.36×0.34×0.85m)は柱穴。対角線上にある。張り出し部にあるP5(0.93×0.62×0.83m)は貯蔵穴。前を囲うように逆U字形に土堤が造られている。張り出し部は南壁から1.2m程であり，貯蔵穴と土堤の間には0.8mの平坦部ができる。

床は貼床しており，堅緻である。壁溝は一部を除き巡っている。おそらく張り出し部を除いて全周していたのではないかと思われる。

覆土は1層(褐色土・少量のローム粒子を含む暗褐色土)，2層(少量の焼土と，炭化材，ローム粒子を多量に含む褐色土）が中央部に堆積し，周縁部には3層（多量の焼土を含む。炭化材をかなり含むが2層よりは少ない褐色土)，4層（ローム粒子・炭化粒子を含む暗褐色土）が堆積している。5層はローム土で，壁の崩壊土とみられる。

遺物は，杯・甕・甑が1点ずつ図示できたが，火熱により器表面があれ，遺存度は良くない。このほか土玉が7点出土した。このうち4点は東壁際からまとまって出土した。7点とも床から出土し，2次的な火熱を受けている。また南壁際から銅鏃が出土した。一応床からの出土であるが，そばに撹乱溝があること，検出面から浅いこと等から直接本跡に伴うかどうかは断定できない。このほか破片が40点ほど出土している。やはり，火熱を受けたものが多い。

竪穴住居014（fig.31, PL.10)　　[遺物127ページ]

竪穴住居013(古墳時代前期)の北側にこれを破壊して位置する。中央部から北を溝028と溝状の撹乱により切られる。南壁の一部は竪穴住居013の柱穴と重複する。長方形(3.55×2.83m)の小型の竪穴住居で，主軸の方向はN-18.0°-E。

4本のピットを検出したが，本跡に伴うものかどうか不明である。深さ40cm前後で柱穴にしては浅く底面が軟らかい。この他に柱穴と思われるピットはない。竈は北壁中央よりやや西側にあるが，溝状の撹乱によりほとんど破壊される。撹乱底部の山砂を取り除き掘方を検出した。掘方は床面から40cmほどで一度掘り込んだ後ローム土で埋め戻し使用しているようである。

竪穴住居の覆土は1層（ブロック状の褐色土・ローム粒子を含む暗褐色土)，2層（ローム粒

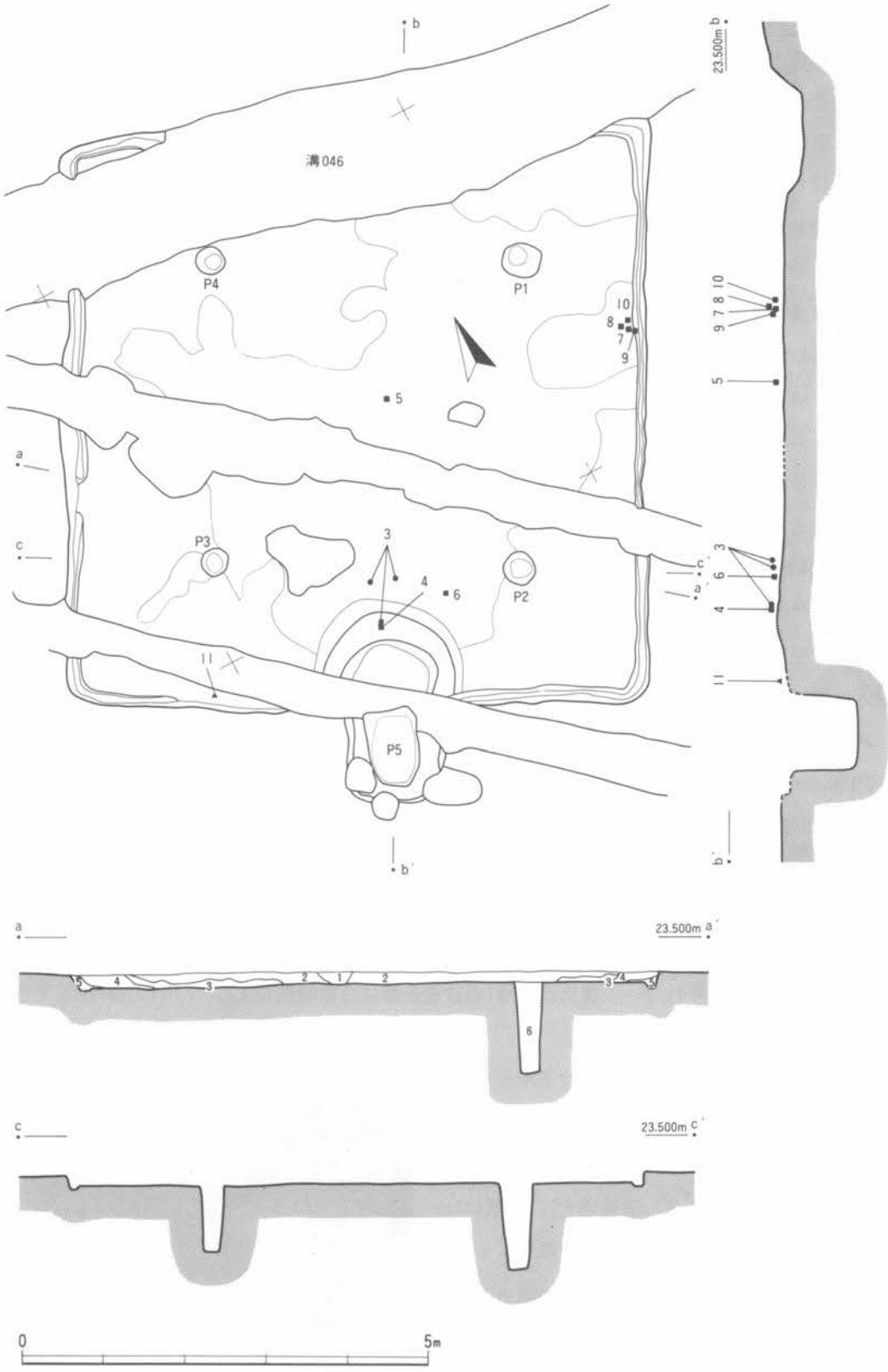


fig. 29　竪穴住居016

子を含む暗褐色土，1層より明るい）を主体とし，壁際に3層（ローム粒子・ロームブロックを含む褐色土）が堆積する。遺物は杯と甕の胴下半部が1点ずつ出土している。その他の破片は刷毛目のある甕胴部等を含み混入品がかなりある。

竪穴住居026（fig.30・31・102，PL.10）　　［遺物127ページ］

竪穴住居015と重複しこれを切る(D2)。正方形(4.20×4.18m)で，主軸はN-23.5°-W。壁面，床面とも精査したが，炉も竈も検出しなかった。床からの出土遺物は古墳時代後期に属する。検出面からの深さは60cmで，壁溝は全周する。焼失住居で焼土・炭化材を多量に検出した。炭化材の遺存は良好で，壁際に多く検出し，壁の上から崩れ落ちたのか壁に寄り掛かるようにして検出したものが多い。10cm程の丸太状の炭化材が目立った。またかやもあった。

ピットは2本検出した。どちらも底面が不整形で柱穴ではないようである。覆土は1層（少量のローム粒子と褐色土ブロックを含む黒色土），2層（褐色土・黒色土・ローム粒子・ロームブロックの混合土），3層（ローム粒子を含む暗褐色土）を主体とし，5層（ローム粒子を少量含む黒色土）が壁際に，4層（ローム粒子・焼土を含む黒褐色土）と6層(ローム粒子を含む暗褐色土)が下層に堆積する。この中で4層は盛り上がるような堆積状態で人為的堆積の可能性がある。遺物は杯(1)が床から出土したのみである。臼玉は覆土上層から出土し，混入品の可能性が高い。竪穴住居015を切っていることもあり混入品が多い。

竪穴住居042（fig.31，PL.15）　　［遺物127ページ］

調査区中央より僅かに南に位置する(D3)。正方形(4.30×4.27m)で，主軸の方位はN-26.0°-W。

P1(0.63×0.60×0.62m)，P2(0.68×0.43×0.59m)，P3(0.63×0.39×0.57m)，P4(0.59×0.47×0.59m)は対角線上にあり柱穴である。柱痕が確認できた。平面的には明瞭ではなかったが断面観察で認められた。周囲の覆土は黒褐色土を含むローム土。壁溝は竈部分を除いて全周する。床面は堅くしまっていた。

竈は北壁中央にある。床は掘り込んでおらず火床部も余り火を受けていない。袖も火熱を受けた痕跡が殆ど認められない。覆土は6層(山砂を多量に含む暗褐色土)，7層(山砂・焼土を含む暗褐色土）を主体とする。

竪穴住居の覆土は1層（ローム粒子を多量に含む黒褐色土），2層(ローム粒子を含む黒褐色土)，壁際に3層（2層よりローム粒子が少ない黒褐色土），4層(ローム土を含む暗褐色土)，5層(ローム粒子・ローム土を多量に含む）が堆積する。

遺物はいずれも床から浮いている。須恵器杯蓋と甕は下層から，杯(2)・手捏土器(4)は上層から出土した。

fig.30　竪穴住居026炭化材出土状態

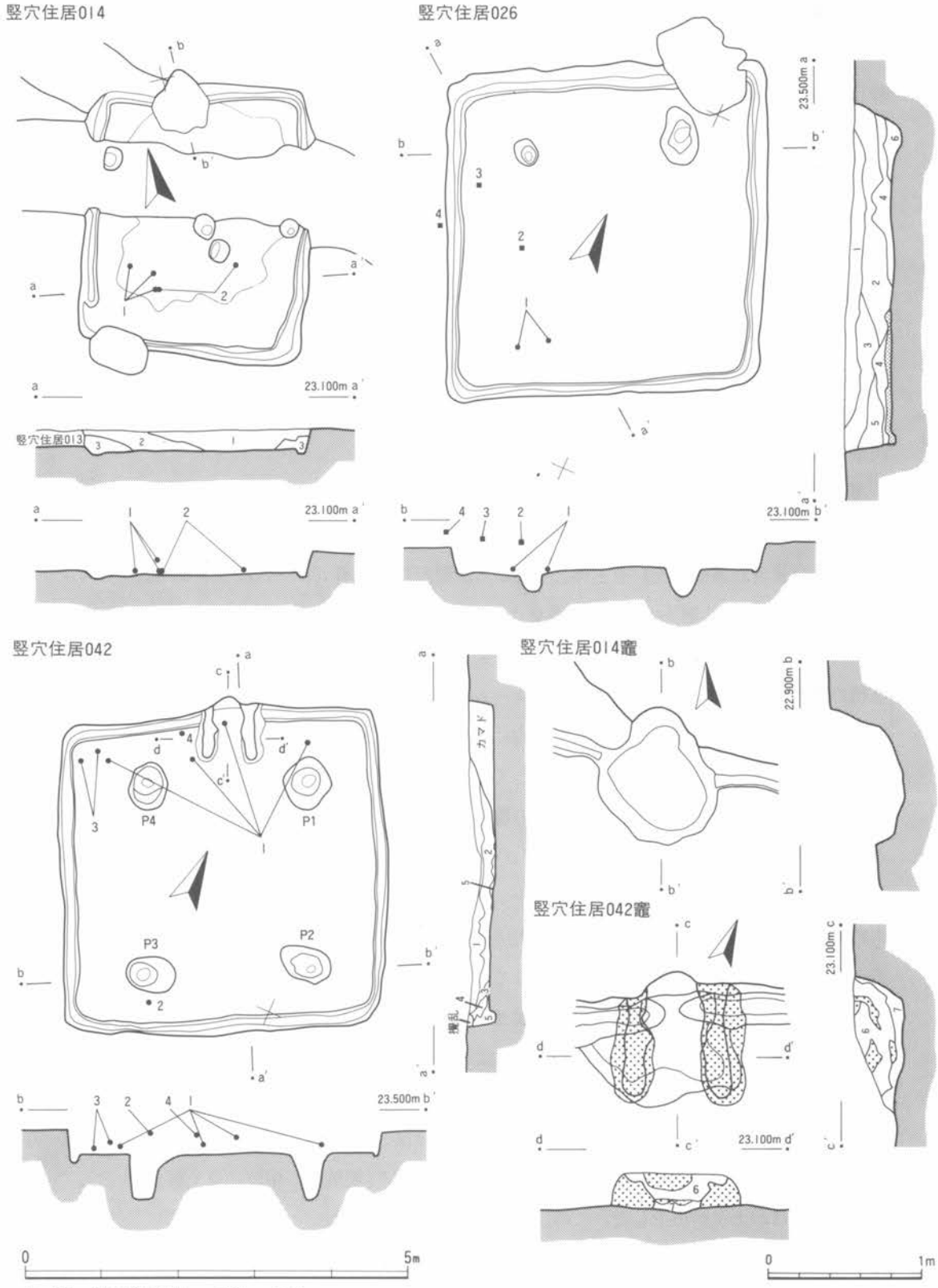


fig.31　竪穴住居014・026・042

竪穴住居039（fig.32・100，PL.7）　　［遺物127・131・133・135ページ］

調査区中央より僅かに北東に位置する(D2)。溝028により，南西壁の上部は破壊される。正方形(5.90×5.90m)で南壁中央に方形の張り出しを持ちこれを含めた主軸の長さは6.80m。主軸の方位はN-9.0°-W。焼失住居で，床に炭化材・焼土を多量に検出した。炭化材は壁際を中心に検出され，壁の上から落ちてきたような状態のものが多く見られた。

P1(0.46×0.37×0.64m)，P2(0.36×0.31×0.68m)，P3(0.45×0.41×0.76m)，P4(0.40×0.36×0.79m)は柱穴で，このうちP1とP2の覆土上には高さ6cm程の柱材が炭化して遺存していた。半載したところ炭化材は床から上だけでその下には柱痕が認められた。P3とP4には柱材はなかったが，断面観察により柱痕が認められた。柱材はどちらも半分ほどしか残っていないが丸太であろう。P5(2.07×1.30×0.73m)は貯蔵穴で，方形の張り出しのなかに設けられ，前に逆U字形の土堤が巡る。壁溝は竈部分を除いてまわる。また，間仕切り溝が東壁から2本，西壁から1本伸びている。

覆土は1層(ローム粒子を含む黒褐色土)，2層（ローム土・ローム粒子を多量に含む黒褐色土)，3層(ローム粒子・ロームブロック・ローム土を多量に含む暗黄褐色土)，4層（ロームブロックを少量含む黒褐色土）を主体としている。壁際には5層（ローム粒子・ロームブロックを含む黒褐色土)，6層（ローム土を多量に含む暗褐色土）が堆積する。7層は焼土を主体とし炭化材も含む。また8層は土堤でローム土を突き固めたものである。このように覆土には自然堆積の際には混入しにくいと考えられるローム土やロームブロックを多量に含んでおり比較的堅くしまっていた。1層を除いて，人為的に埋め戻された土である可能性が高い。これは遺物が覆土中には全くといっていいほど混入していないことからも証明できよう。遺物を含んでいたのは最下層の床近くである。貯蔵穴内の覆土は9層（ローム土・ロームブロックを多量に含む暗褐色土)，10層（ローム土・ロームブロックを多量に含む暗黄褐色土)，11層（ロームブロックを主体とする暗黄褐色土)，12層（ローム土・ロームブロックを含む暗褐色土)，13層（ローム粒子を少量含む暗褐色土)，14層（炭化物を多量に含む黒褐色土）で，14層上面には炭化材と焼土が，底面には炭化材がそれぞれ堆積していた。

竈は北壁中央部にある。竈構築範囲を大きく掘り込んだ後ローム土(24層)で埋め戻して袖を構築する。袖は内面だけでなく外側も火災により火を受けて赤変している。覆土は15・23層が山砂・焼土粒子を含む黒褐色土。16・17・22層がローム土を主体とした層，それぞれ焼土・ロームブロック・山砂などを含む。山砂を含むことを除けば3層に近い。18・19・20・21層は山砂ブロックを含んだ暗褐色土で山砂の混入度がそれぞれ違う。燃焼部の中位には土器(2)を含んでいた。このほか土玉が出土した。この土玉は火を受けていない。

遺物は西壁際から完形の壷(1)と砥石を出土した。どちらも炭化材の上にのっていた。壷は火熱により器表面の荒れが著しい。また鉢(2)は竈内から出土したが半分を欠損している。

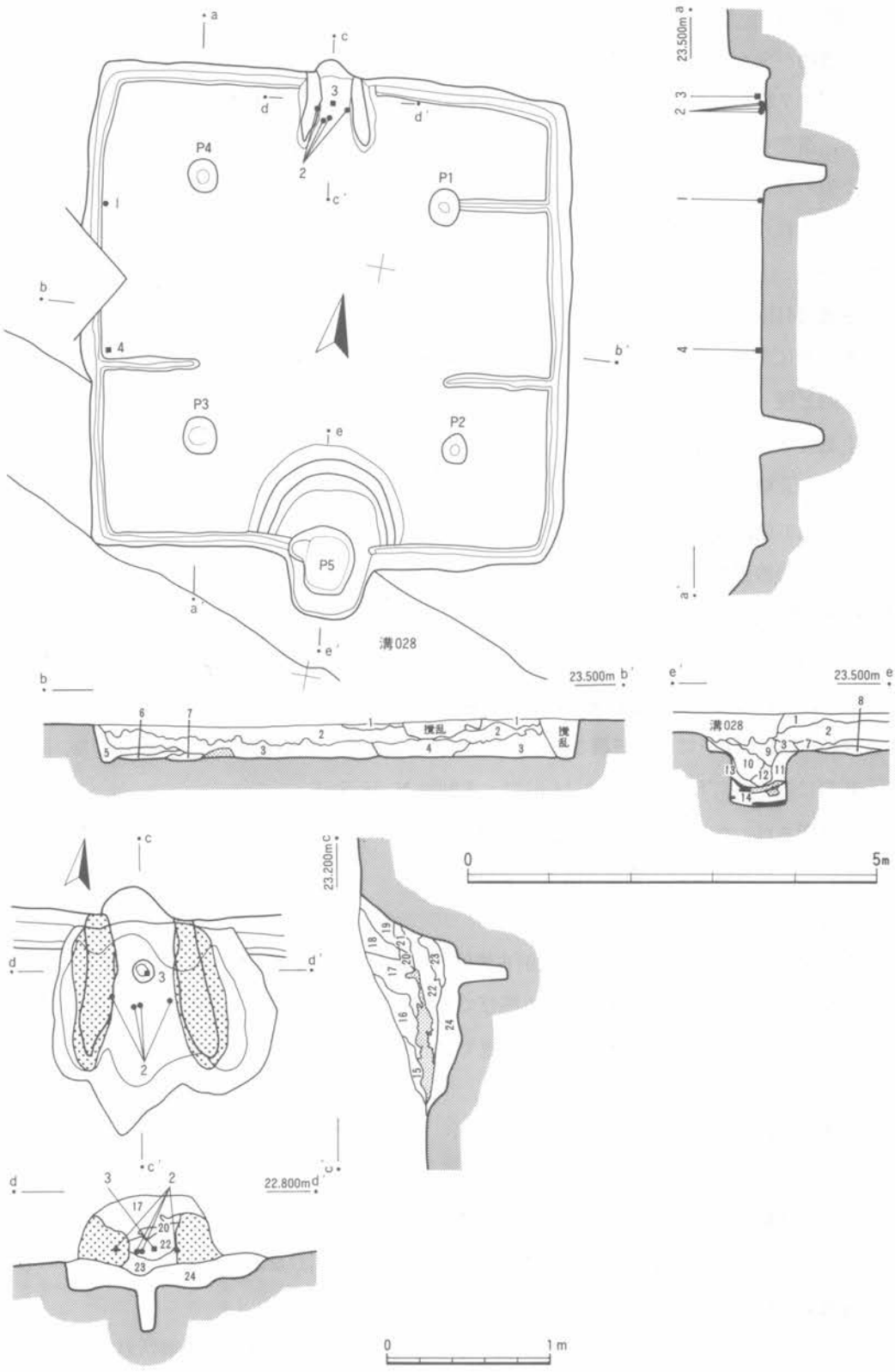


fig.32　竪穴住居039

(4)時期不明

出土遺物が全くないか，わずかな破片のため，明確に時期を判断できなかった竪穴住居である。全部で7軒ある。いずれも検出面からきわめて浅いため，平面形態がはっきりしないものが多く，遺物も散逸してしまったものであろう。柱穴や貯蔵穴等の施設が検出できたものが少なく小型の竪穴住居が多いようである。しかし炉を持つ竪穴住居があり，竈を持つものは含まれない。これらは，調査区で半分以上を占める弥生時代終末期から古墳時代前期に属する可能性が高い。

竪穴住居024(fig.33)

調査区南(C3)に位置する。東側の竪穴住居025を破壊する。検出面から浅く西から南にかけての壁は殆ど残っていない。方形を呈すると思われ，横軸は2.50mである。小型の竪穴住居である。主軸はN-34.0°-E。

中央から北壁に寄ったところに炉がある。底面に小ピットを伴い焼土が堆積していた。柱穴及びその他の施設は検出しなかった。

遺物は土師器破片が1点である。

竪穴住居049(fig.33, PL.6)

調査区中央から北よりに位置する（C2・D2)。竪穴住居034(古墳時代前期)と重複して構築されており，これにより全壁を破壊される。北側は，溝021により切られている。また南東部は竪穴住居034の柱穴(P4)により破壊される。このため平面形態，規模は掘方により確認した。掘方は小判形に近い隅丸方形(3.60×3.18m)で，主軸はN-28.5°-E。

床は貼床され，かなり堅緻である。炉は中央からやや北に位置する。底面の焼土が僅かに遺存していた。柱穴はない。遺物は出土しなかった。

竪穴住居047(fig.33)

調査区南端(D3)にある。竪穴住居029(古墳時代前期)により破壊され，北壁しか遺存しない。柱穴も検出しなかった。北東隅は丸みを帯びており，北壁は直線的に延びているので，隅丸方形を呈していると思われる。北西壁隅の付近では壁溝が巡っている。床は堅くしまっていた。遺物はない。

竪穴住居057(fig.33)

調査区西部(C2)，竪穴住居012(古墳時代中期)の北に位置する。半分以上を溝028により切られている。横軸は2.40mで，方形を呈する小型の竪穴住居である。主軸はN-33.0°-E。壁高は良好なところで，5cm程である。遺存部分では炉も柱穴も検出しなかった。

竪穴住居055(fig.33)

調査区北部(D2)に位置する。北側を溝048により破壊される。また南側には溝状の撹乱が入っている。方形で縦軸は2.78mである。やはり小型の竪穴住居である。壁高は良好なところで8

fig.33　竪穴住居 024・047・049・055・057・065

cm。西壁はほとんど残っていない。北西に炉があり，主軸の方位はN-60.0°-W。

床は軟らかく，柱穴はなかった。遺物も出土しなかった。

竪穴住居065(fig.33)

調査区南西(D3)に位置する。やや歪んだ方形を呈する。主軸の長さは，3.82×3.72mである。検出面から浅く，壁高は10cmほどである。

炉を中央から西に寄ったところにに検出した。床から2cmほど窪み，焼土が堆積する。柱穴などの施設は検出されない。遺物は土師器破片が10余点だけであるため時期を確定することができなかった。

竪穴住居063(fig.34，PL.11)

調査区西端(D3)の中央部に位置する。ほぼ正方形(5.20×5.22m)を呈するがかなり歪んでいる。コンクリート道路の下から検出したため，覆土が移植ごてがささらないほど堅くなっており，調査は困難であった。従って，床・壁の検出面は本来の形態より幾分あまいものとなった可能性がある。平面形態の歪みはこのためであろう。本来はきちんとした方形であったと思う。炉が検出されないため主軸を確定できないが，弥生時代終末期から古墳時代前期の竪穴住居とほぼ同じ方向を向いているため，これを主軸とするとN-38.5°-Wとなる。

覆土はローム粒子とかなり大きなロームブロックを含む暗褐色土で，堅くしまっていた。焼土ブロックも所々に混入していた。壁高は12～13cmである。

床を精査したが，炉・柱穴は検出できなかった。しかし，床を剝がして掘方を検出してみたところ4隅にそれぞれP1(0.41×0.29×0.28m)，P2(0.49×0.36×0.42m)，P3(0.65×0.54×0.37m)，P4(0.54×0.53×0.55m)を検出し，これらは柱穴の掘方であろう。4隅に柱穴を持つ形態のものは調査区内では本跡のみである。

床は堅くしまっているがこれは本来の堅さではなく道路の下に存在したためである。

遺物は土師器の小破片が少量で，どれも摩耗が著しい。木葉痕を持つ土師器底部を含んでいるが，時期の確定は出来ない。

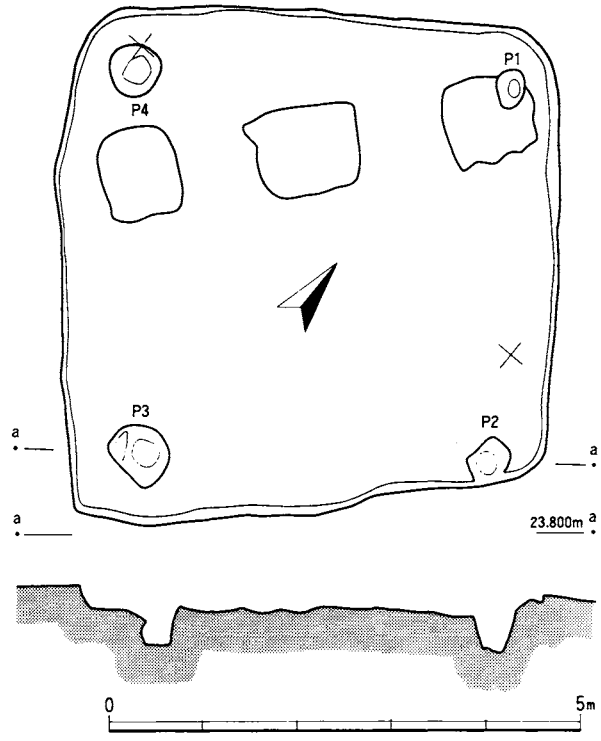


fig.34　竪穴住居063

2．炉穴

炉穴051(fig.35，PL.16)

調査区北西端に位置する。平面形態は円形である(3.30×3.14×0.77m)。燃焼部は向かい合った位置に2か所認められる。覆土は1層（黒色土とローム粒子が混じり合う。焼土粒子を所々に含む黒褐色土)，2層（1層よりローム粒子を多く含む。しまった暗褐色土）を主体とし，3層（ソフトロームを主体とする褐色土。焼土粒子を含む）が壁際に4層（ソフトロームと焼土粒子が混入する褐色土)，5層(ソフトロームと火熱によりぼろぼろになったローム土を含む褐色土）が下層に堆積する。

遺物は出土しなかったが，東へ1mほどのところにある溝018から縄文式土器4点が出土し，この時期の遺構はこの他には検出されていないため，本跡との関係が考えられる。

3．土壙墓

土壙墓007(fig.35，PL.16)　　[遺物128ページ]

調査区南西(C3)に位置する。隅丸長方形(1.84×1.18×0.50m)で主軸はN-12.0°-W。2段に落込み，2段目は角がほぼ直角の長方形(1.54×0.56×0.35m)である。底面には長軸に直行する方向に3条の溝を掘り込んでいる。

覆土は上から1層(ローム粒子を多量に含む黒褐色土)，2層(ローム粒子・ローム土を含む黒褐色土)，3層（ローム土・ロームブロックを含む黒褐色土）が堆積し，段の部分には4層(ローム土・ロームブロックを含む茶褐色土)が堆積する。

遺物は西壁際中位より，須恵器長頸壷の口縁部が出土した。復原したが3分の1周程しか遺存していない。この肩部と思われる破片が出土しているが接合しなかった。

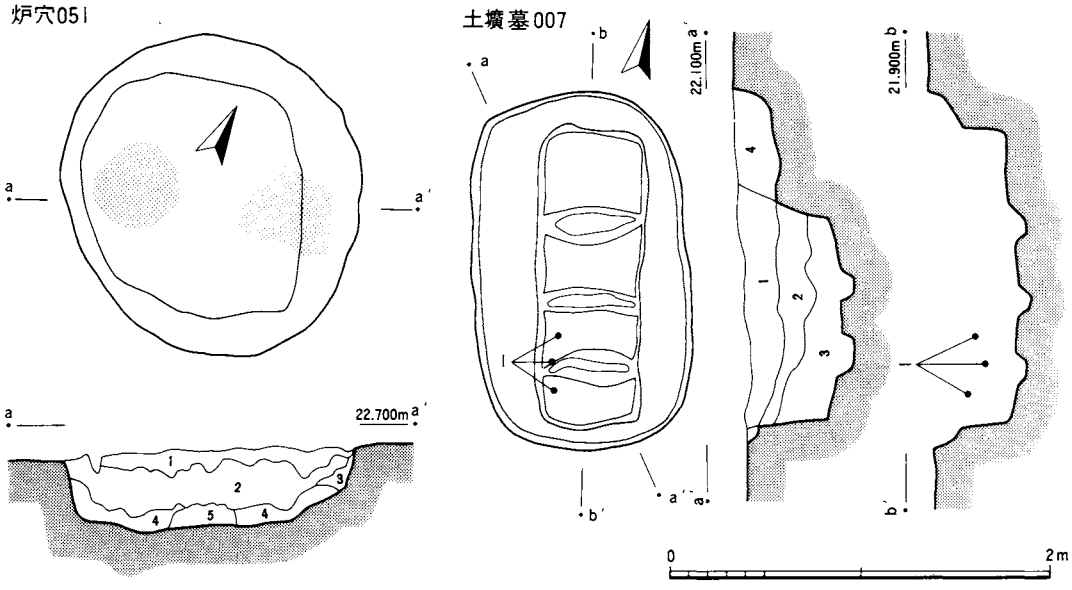


fig.35　炉穴051・土壙墓007

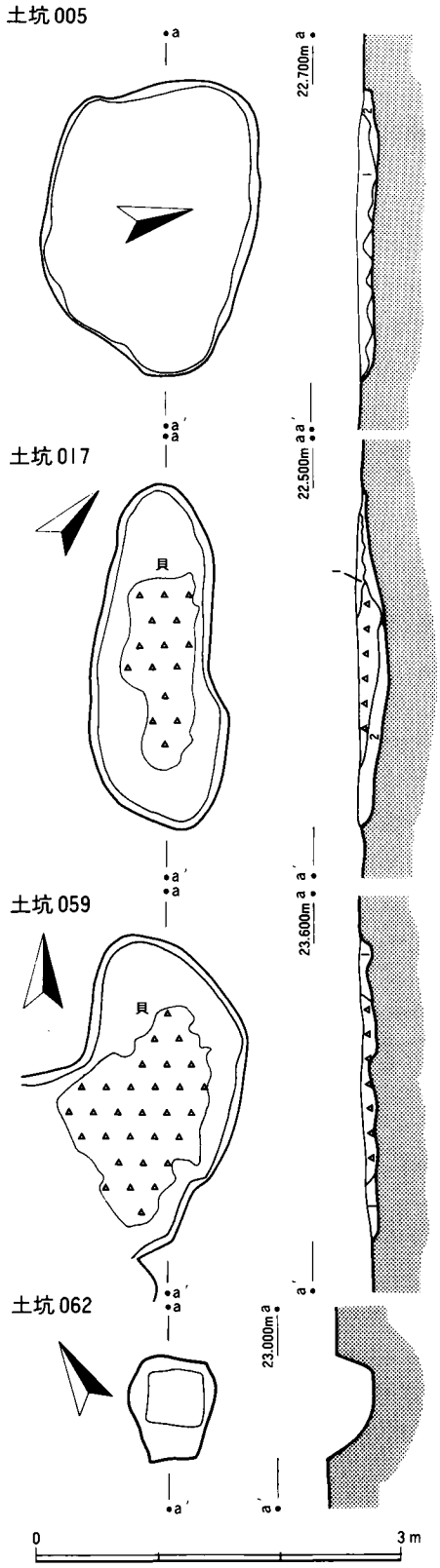


fig.36　土坑005・017・059・062

4．土坑

土坑005(fig.36)

竪穴住居001の北に位置する。角の丸い台形を(2.31×1.72×0.13m)呈する。1層はローム土を含む黒褐色土，2層はローム土を主体とする暗褐色土。床は軟らかく，立ち上がりもあまい。遺物は土師器破片が20点余で，刷毛調整した甕胴部破片を主体とする。

土坑017(fig.36，PL.16)

縦長の楕円形(2.76×1.04×0.26m)を呈する。中央部に貝が堆積するが，しっかりした掘り込みではない。1層はローム土と焼土粒子を少量含む黒褐色土，2層はローム土を主体とする黄褐色土である。貝はカキ(左1,912・右1,668)・キサゴ(300)を主体とし少量のハマグリ(左7・右10)・アサリ(左2・右1)を含む。遺物は土師器小破片が20点余。貝層中にも混入していた。刷毛調整した破片が多い。

土坑059(fig.36，PL.16)

竪穴住居043の北に一部を重複して位置する。新旧関係は不明である。平面形態は不整形で，底面は軟らかく立ち上がりもはっきりしない。中央部に貝が堆積する。貝はカキ(左916・右842)・キサゴ(891)を主体とし少量のハマグリ(左9・右5)・アサリ(左10・右6)を含み，土坑017と似ている。両脇に堆積する1層は黒色土にローム粒子が混入したものである。土坑017・059とも窪みとなったところに貝が投棄されたものではないかと考えられる。貝はこの他竪穴住居027から出土した。やはり主体はカキである。

土坑062(fig.36)

竪穴住居023と重複し，これを切っている。方形(0.84×0.70×0.35m)である。

土坑045(fig.37, PL.16)

竪穴住居006（古墳時代前期）と重複しこれを切っている。長方形で(1.06×1.12×0.44m)，骨片が覆土中層から出土した。この他に遺物は出土していない。覆土は大型のロームブロック多量に含んだ黒色土である。

土坑050(fig.37)

溝046に半分以上を破壊される。方形を呈していたと思われる。1層はローム粒子を少量含む黒褐色土，2層はロームブロックを含む暗褐色土。覆土上層から古墳時代前期に属する高杯の破片1点を出土したが混入品であろう。

土坑064(fig.37)

竪穴住居035（古墳時代中期）と重複しこれを切っている。長方形(2.60×1.22×0.30m)で，北西隅にピットを有するが，本跡に伴うものかどうか不明である。覆土は南から流れ込んだような堆積状態である。上層は1層（褐色土ブロックが混じる黒色土），2層(ローム粒子を含む黒褐色土）を主体とし北壁際に4層（黒色土と褐色土の混合土），5層（褐色土とローム土の混合土），6層（ローム粒子・炭化粒子を含む黒褐色土）が堆積する。下層には3層（ローム粒子・ロームブロック・黒色土が混じる明褐色土），8層（焼土・炭化粒子を含む黒褐色土）が堆積している。中位から甕を出土したが，遺物の時期からみて竪穴住居035の遺物が混入したものと考えられる。

土坑066(fig.37)

土坑064と同様竪穴住居035と重複し，これを切っている。方形(1.37×1.23×0.22m)である。1層は褐色土を含む黒色土。2層はローム粒子を含む黒褐色土，3層はローム土。遺物は土師器小破片が少量のみである。

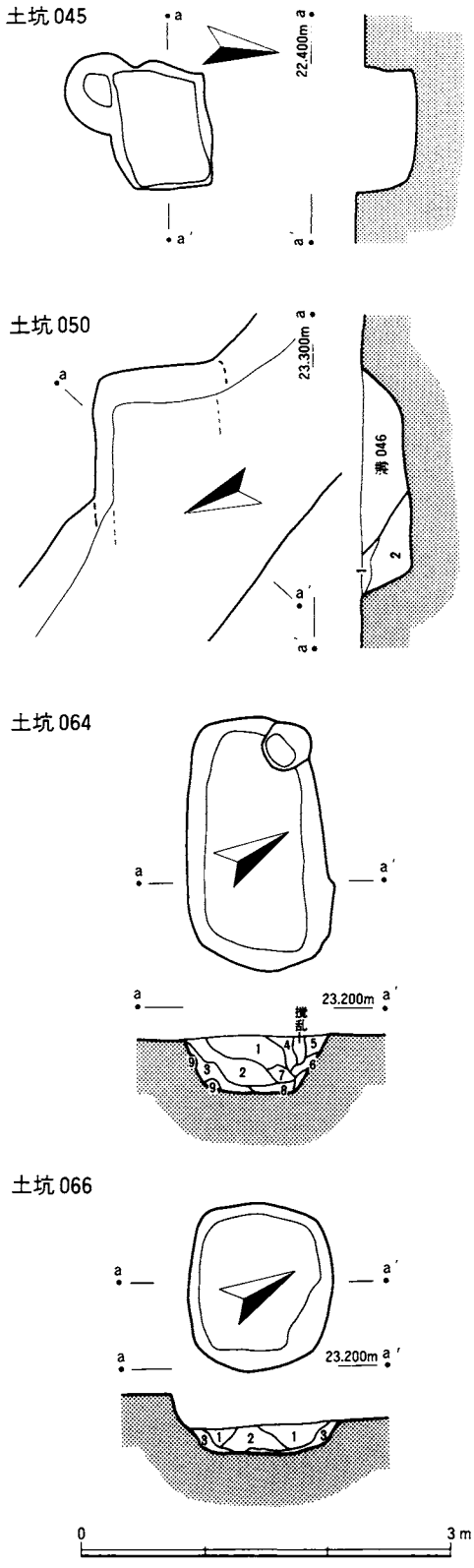


fig.37　土坑045・050・064・066

5．溝状遺構

溝状遺構は10条検出した。出土遺物が少ないため，明確な時期を押さえることができなかった。しかしどの溝も竪穴住居を切っており，集落が営まれた古墳時代以降に構築されたものであろう。ここで改めて図示した以外に竪穴住居036から溝032を南北につなぐ幅0.5m，深さ0.3mの溝052がある。また荒久遺跡(2)の竪穴住居104から北東に延びる溝状遺構は溝106である。

溝018(fig.38，PL.17)

調査区北西端に位置し，北東から南東にのびる。東西にはしる溝021と直交し，この部分が検出面から1 mと最も深くなり，北東部・南東部へ向かって徐々に浅くなる。北東部は緩やかに立ち上がるが，南東部は調査区外へ更に伸びる様相をみせる。溝021との新旧関係は断面観察で溝018が新しい。また竪穴住居022を破壊する。遺物は土器の小破片が20点ほどで，このほか石製品2点を出土した。土器破片の中には縄文式土器の破片が含まれ，西へ2 mほどのところにある炉穴051との関係が考えられる。どれも混入品で溝に伴うものではない。

溝021(fig.38，PL.17)　　[遺物128ページ]

北西部から南東部に向かってのびる。南東部に向かって徐々に浅くなり，調査区中央部付近で，緩やかに立ち上がる。直交する溝018により切られる。また竪穴住居022・033・034を破壊する。調査区の立地する台地は小支谷が入り込んでいるが，この溝はこの小支谷の延長線上にある。

遺物はC2-14グリッドの溝肩部から，土師器杯を出土し，3点を図示できた。

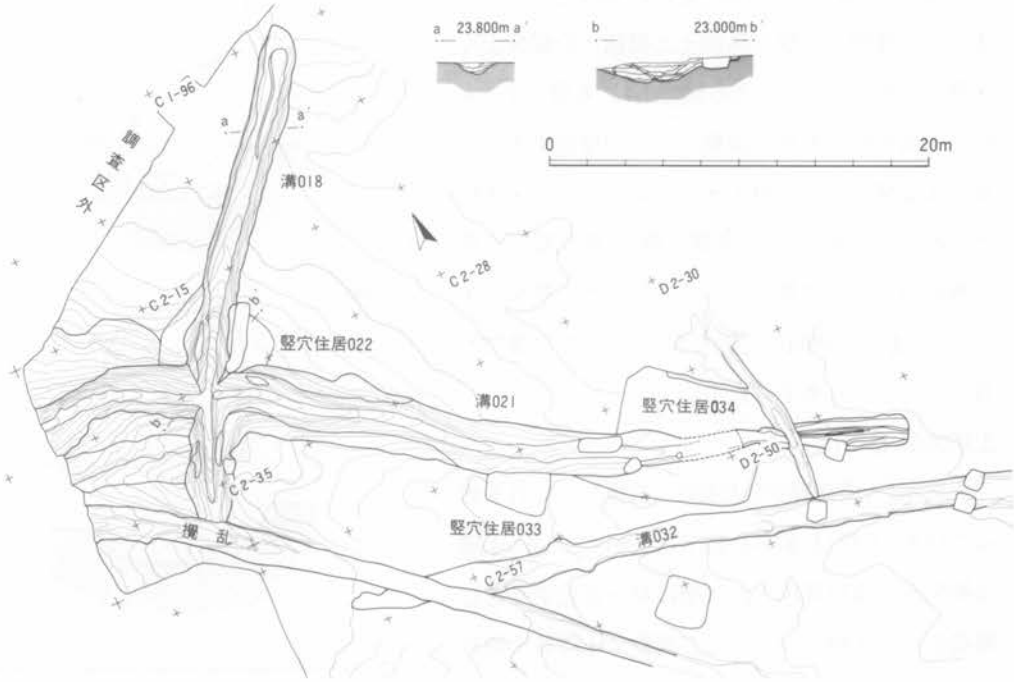


fig.38　溝018・021

溝048(fig.39, PL.17)

調査区北西端から南東に向かって延び,荒久遺跡(2)の調査区へ続く。北西端では深さ1.4mであるが，徐々に浅くなる。最も深い所では断面が逆三角形で，狭い底面に浅い小ピットが並ぶ。幅は調査区端で約10mを測る。大きくは2段に落ち込んでおり更に浅い段が数段はいる。また途中で幾つかの溝状遺構に分れるなど複雑な様相を呈する。このうち荒久遺跡(2)の竪穴住居104に向かってのびる溝を溝058としたが，出土遺物はなかった。覆土は大きく分けて上から暗茶褐色土，暗褐色土，ローム土を多量に含む暗黄褐色土の3層に分かれるがローム粒子，ロームブロックの量などで10cm～20cm程の厚さで，かなり細かく分層することができ，何か所か厚さ10cm程の堅くしまった層が認められる。溝021と同じ様に小支谷の延長線上にある事などを考え合わせると谷を利用した道路状遺構のような性格が考えられる。出土遺物はかなりの規模を持つにしては少なく，50点程しかない。土師器の小破片が主体であるが寛永通宝，近世の擂鉢破片等を含んでいる。

溝052(fig.39)

溝048の南をこれと平行に走る。総長26.5m，幅0.5m，深さ0.3～0.4mの細い溝状遺構で，出土遺物は土器片1点のみであった。

溝032(fig.40) [遺物137ページ]

調査区中央部よりやや北を東西にのびる。東端，西端とも緩やかに立ち上がり総長48mで，幅1.5～2.0m，深さ0.3～0.5mである。底面に直径1m前後のピットが並んでおり柵列であろう。底面と立ち上がりの境は明瞭ではなく，底部の断面形は緩い弧を描く。竪穴住居031(古墳時代中期)を切っている。遺物は土師器小破片がほとんどでこれらは周辺の竪穴住居からの流れ込みであろう。ピット上層から文字瓦片を出土した。

溝028(fig.40)

調査区中央を東西に横切った後，逆くの字状に曲がり南へのびる。古墳時代の竪穴住居057・013・014・039・040・060を破壊している。幅1.0～1.2mで深さ0.2～0.4mである。底面に小ピットがあるが溝032に見られるようなしっかりした掘り込みではなく,また並び方も一定ではない。断面は逆台形を呈するが下場ははっきりしない。出土遺物は20点弱である。古墳時代に属する高杯脚部を実測できたが混入品と思われ，遺構外出土土器として扱った。

溝046(fig.40)

調査区南東部に円の3分の1を切り取った様な弧を描いて巡り両端とも立ち上がる。竪穴住居015・竪穴住居016・土坑050を破壊する。幅1.5m，深さ0.3mを測り，断面は角のあまい逆台形を呈する。出土遺物は100点以上を数え，他の溝と比較するとかなり多い。実測可能な遺物も数点あったが遺存状態は良好とは言えず，いずれも覆土中層あるいは上層から出土しているため，遺構外出土の遺物として取り扱った。

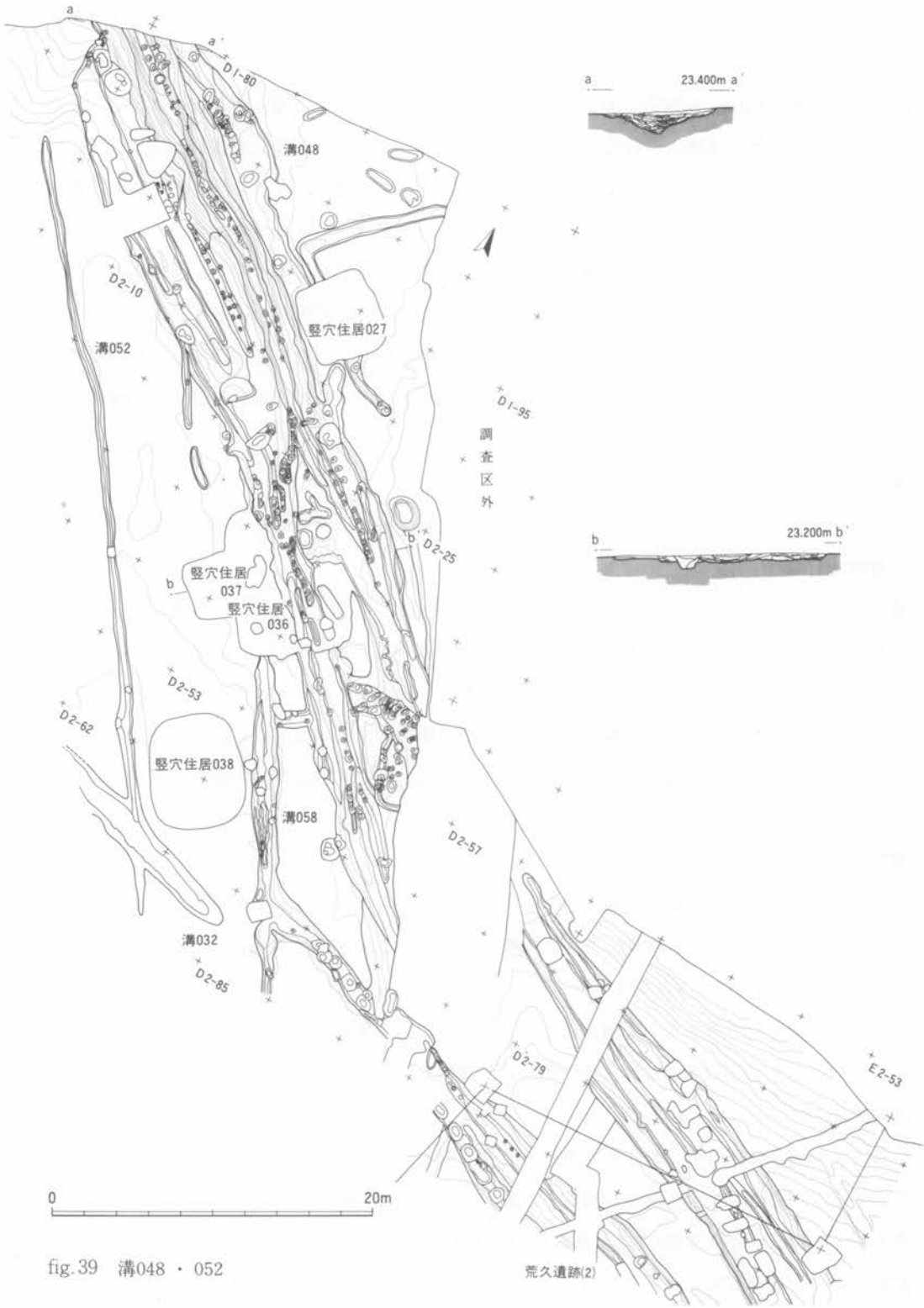


fig.39　溝048・052

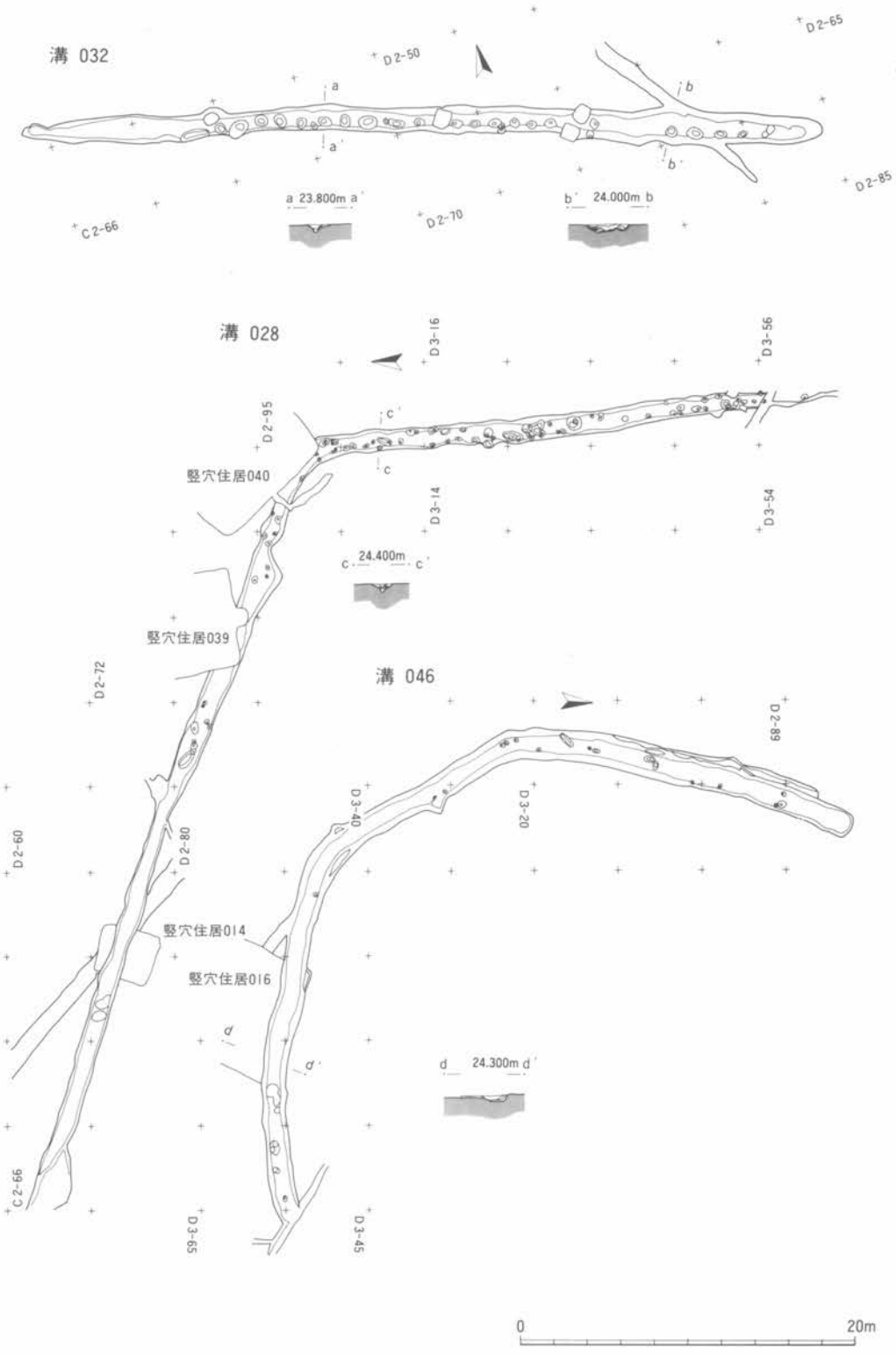


fig. 40　溝028・032・046

III 遺　　物

1．先土器時代の遺物

概要　確認調査の結果立川ローム層内から遺物の検出された地点は7箇所であったが，本調査に移行した段階で，そのうち2地点は確認時の資料以外に出土遺物のないことが判明したので，主として残りの5地点に関して報告を行う。また，これ以外に，上層遺構調査時に採集された遺物が少量あるので，それらもあわせて報告の対象とした。全般的に遺物の量は多くないが，重要な資料が含まれており，できるだけ詳細な観察を心がけた。なお，遺跡の層序区分に関しては，下層台地西縁部の標準的分層に従い第2黒色帯の細分を行ったが，IXb層は明瞭でないため，IX層を色調によって2分し，VII層，IXa層，IXc層という第2黒色帯の区分を採用している。IXa層はIX層上部の明色部，IXc層は同暗色部に相当している（fig.41，PL.3）。

調査の結果，ソフトローム層であるIII層に2ブロック，IX層で3ブロックを検出した。III層のブロックは細石刃を含み，IX層からは剝片製小型ナイフの良好な資料が得られている。前者を上層石器群，後者を下層石器群とした。就中，下層石器群の発見は，従来の所謂茂呂型ナイフ形石器の発生に関連する新たな知見をもたらすものであった。

(1)上層石器群

上層石器群は2箇所のブロックから構成されている・西側のものを第1ブロック，東側を第2ブロックとした。

A　第1ブロック（fig.43・44・45，PL.3・18）

a．分布状況　C2-59区を中心とする東西9.4m，南北5.3mの範囲に石器が散在している。ブロックの規模は小さくないが，資料数が少ないので分布密度は低い。また，ブロック内に特に遺物の集中する部分は認められず，一様な分布状況と言える。器種別の分布で注意したいのは細

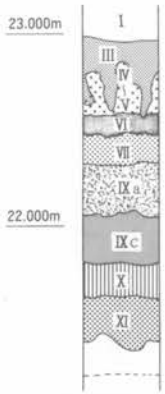
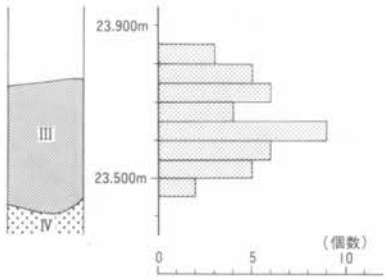


fig.41　荒久遺跡
基本層序



tab.1　第1ブロック遺物の垂直分布

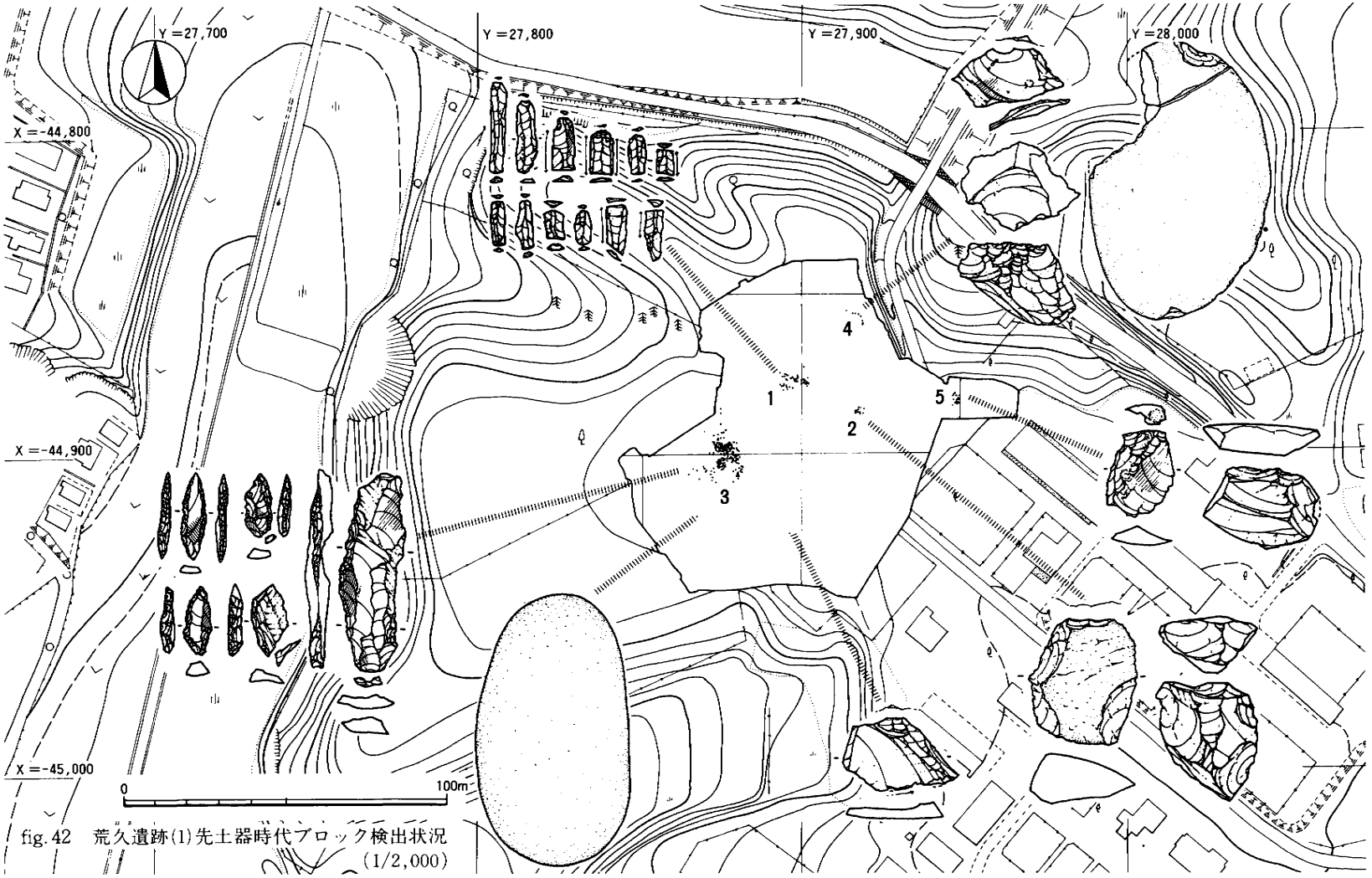


fig. 42　荒久遺跡(1)先土器時代ブロック検出状況
(1/2,000)

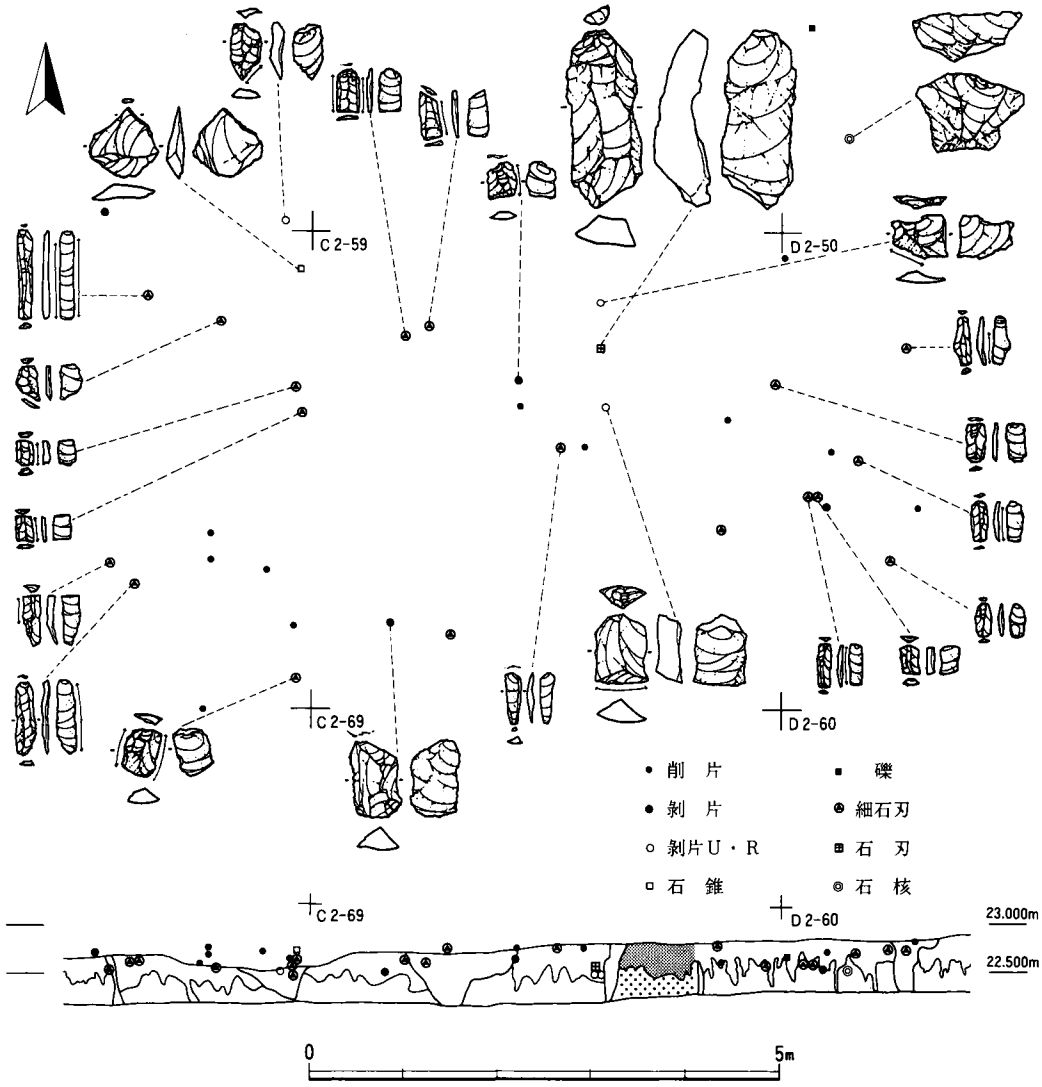


fig. 43　第1ブロック器種別遺物分布状況（1/80）

石刃で，2点1組で近接して検出されたものが4組分8点ある。垂直分布状況はtab. 1に示したが，ほぼⅢ層の中位にピークをもつ状況が窺われる。

b．出土遺物　44点の遺物がある。構成はナイフ形石器1点，石錐1点，楔形石器2点，石刃1点，細石刃19点，使用痕のある剥片3点，剥片4点，削片11点，石核1点，礫1点であるが，このうちナイフ形石器は近傍の採集品であるため共存したとは断定できない。同様に楔形石器のうち1点と石核もブロック外の資料で共存とするには疑問が残る。従って，確実に本ブロックに帰属するのは41点となり，石器組成にも若干の変動を生じる。

細石刃（1～17，19）　19点あり，石器群の主体を構成しているが，細石核を遺存していない。遺存状況は，完形のもの4点，頭部5点，中間部7点，尾部2点である。tab. 2に長さ，

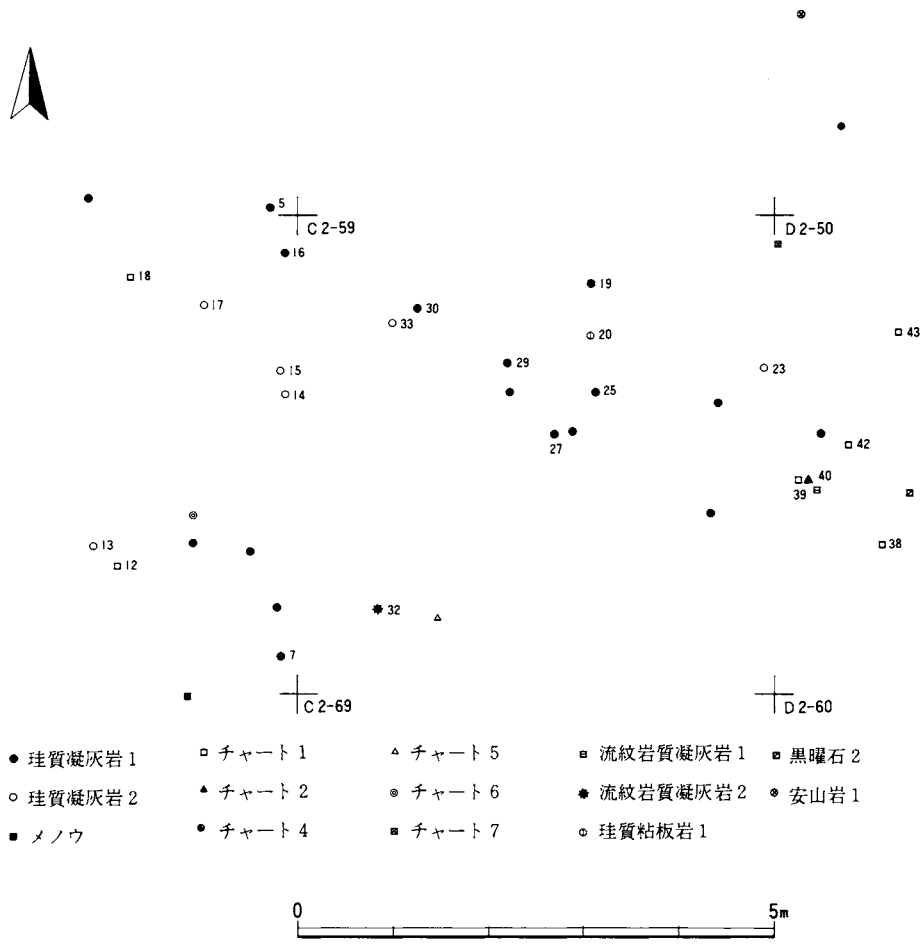


fig.44　第1ブロック母岩別遺物分布状況（1/80）

幅，厚さの3属性の分布を図示した。長幅分布からは，長さよりも幅に対する規制が大きかったことが読み取れよう。幅は4㎜～6.5㎜の範囲に大半の資料が帰属しているのに対して，長さは10㎜の前後に広い分布域をもっている。使用痕跡のあるものは13例あり，両側3例，片側10例と，片側にのみ認められる場合が多いが，その場合，背面右側3例，背面左側2例，腹面右側2例，腹面左側3例という内容で，左右は大体同数の値を示している。石材としては，チャート3母岩，珪質粘板岩1母岩，珪質凝灰岩2母岩，計6母岩が識別された。このうちチャート1は，珪質凝灰岩2に6点が集中しているが，両母岩には他に同一母岩と思われるものがないので，細石刃自体の移動が想定される。一方，4点の細石刃をもつ珪質凝灰岩1には，他に石錐1点，使用痕ある剝片3点，剝片2点，削片7点が含まれ，ブロック近傍での細石刃生産が考えられる。

石錐（18）　小型の貝殻状剝片の一端に細かい細部加工を錯向的に施して尖頭部を作出するもの。珪質凝灰岩1の剝片を使用している。この石材は細石刃4点を含んでいるので，細石核の

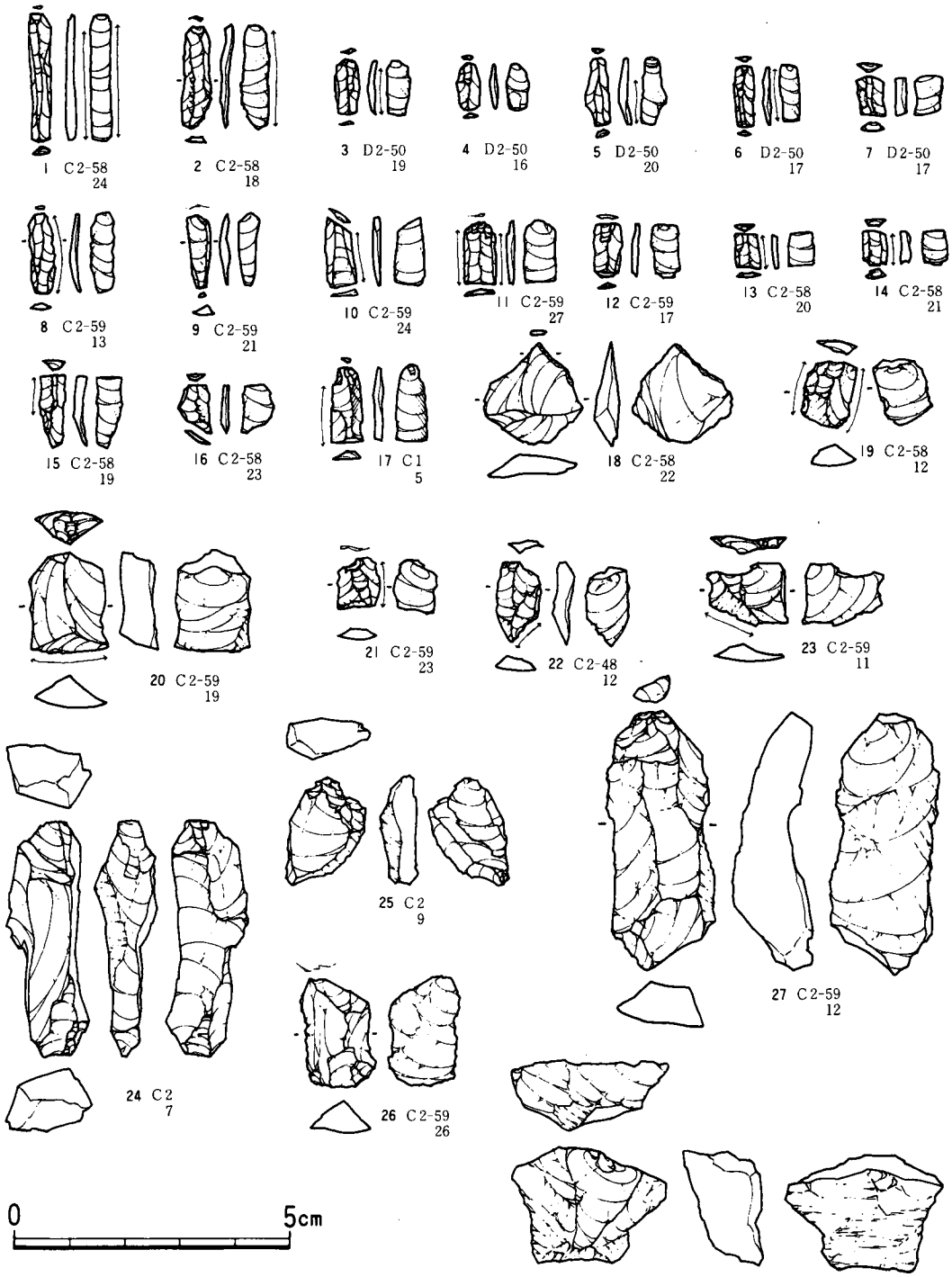


fig. 45　第1ブロック出土遺物(4/5)

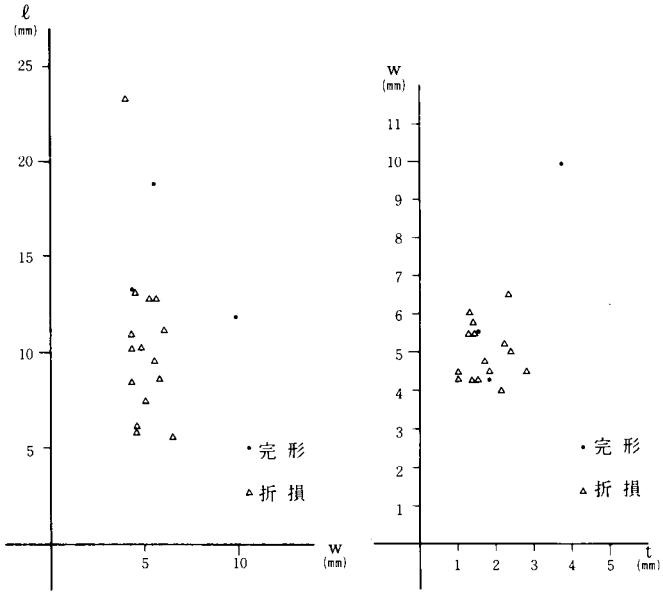
調整剝片を素材としている可能性が高い。

楔形石器(24)　チャート製のものが1例ある。厚い剝片の頭部，尾部両端に剝離痕が認められる。両極石核ではなく，ピエスエスキーユとしての機能(ウェッヂング)が考えられる。

25も珪質頁岩製の類例であるが，ブロック近傍の採集品。

石刃（27） 珪質粘板岩製の石刃が1例ある。同一の母岩から細石刃も得られている。企図的な石刃であるとすれば，本地域では稀な例となろう。平坦打面をもち，背面2稜型の整った形態をしている。

剝片（20～23,26） 珪化した石材から剝離された不定形な剝片類が19点ある。これらのうち，明瞭な使用痕の観察されるものが4例あるが，いずれも珪質凝灰岩1の不定形剝片で細石核の調整剝片と見られる。細石核の



tab.2 第1ブロック細石刃の長・幅(左)、幅・厚(右)分布

tab. 3 第1ブロック遺物集計表

母岩番号	ナイフ	削器	石錐	楔形石器	石刃	細石刃	剝片U・R	剝片	削片	石核	石槌	礫	総数	数量比(%)	総重量(g)	重量比(%)
チャート 1	0	0	0	0	0	6	0	0	0	0	0	0	6	13.6	0.60	1.6
チャート 2	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	2.3	0.10	0.3
チャート 3	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	2.3	5.14	13.6
チャート 4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	2.3	6.09	16.2
チャート 5	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	2.3	0.07	0.2
チャート 6	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	2.3	0.17	0.5
チャート 7	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	2.3	0.11	0.3
珪質頁岩 1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	2.3	1.90	5.0
珪質粘板岩 1	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	2	4.5	10.78	28.6
珪質凝灰岩 1	0	0	1	0	0	4	4	1	7	0	0	0	17	38.6	8.37	22.2
珪質凝灰岩 2	0	0	0	0	0	6	0	0	0	0	0	0	6	13.6	0.41	1.1
流紋岩質凝灰岩 1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	2.3	1.56	4.1
流紋岩質凝灰岩 2	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	2.3	1.30	3.5
黒曜石 1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	2.3	0.39	1.0
黒曜石 2	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	2.3	0.04	0.1
安山岩 1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	2.3	0.42	1.1
メノウ 1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	2.3	0.22	0.6
総数	1	0	1	2	1	19	4	3	11	1	0	1	44	100	37.67	100
組成比（%）	2.3	0	2.3	4.5	2.3	43.2	9.1	6.8	25.0	2.3	0	2.3				

生産・修整に伴う調整剝片の一部が石器として利用されていることを示唆するものであるが，各地に類例が知られている。

石核（28） チャート製の石核が1例ある。節理面に沿って破損しており，あるいは細石核のブランクであったのかもしれない。

C．小結 資料数が少ないが，19点の細石刃が含まれているので，先土器時代終末期のブロックであることが知られる。細石器石器群は，千葉県内に約15遺跡程の報告例があるが，野辺山型細石核を保有する遺跡が多く，少数の札滑型を伴う例が知られている。両者は細石核以外の石器組成も全く異っているばかりか，使用石材にも大きな違いがあるので同一系統と考えることは困難であると言われている。本ブロックの細石刃を剝離した細石核は遺存していないが，素材にチャートや珪質凝灰岩を多用しているので，野辺山型であったと考えて差し支えない。

ところで，野辺山型細石器石器群は，大きく3つの剝片剝離・細部加工の体系を構造的に保持していた。ひとつは石刃技法であり，先行するナイフ形石器群の遺産を継承している。もうひとつは，諸種の横打剝片剝離手法であり，横打剝片素材の削器類はこの体系に帰属している。最後に，チョパー・コアの生産＝消費体系が挙げられる。片刃打割器と大型の不定形横長剝片が生産されている。これらの2要素も先行するナイフ形石器群を母胎としている。本ブロックの石器群は，敍上の3項のうち，細石刃生産体系のみから構成されているが，これは言うまでもなく，3項間の推移的関係を示しており，この段階の石器製作技術の一部分が呈示されているにすぎない点に留意しなければならない。

tab. 4 第1ブロック遺物属性表

No	遺物No	分 類	長×幅×厚（mm）	重(g)	図	打 面	打面長×高	打 角	背面構成	末端	使用痕	折面	母 岩
1	C2-0007	楔形石器	41.8×12.7×10.2	5.14	24								チャート 3
2	C2-0008	ナイフ形石器	11.8×11.2× 5.1	0.39									黒曜石 1
3	C2-0009	楔形石器	20.2×13.4× 7.3	1.90	25								珪質頁岩 1
4	C2-48-11	剝片	13.7×29.8× 7.4	2.42					II			M	珪質凝灰岩 1
5	C2-48-12	剝片U	14.9× 9.0× 4.0	0.41	22	1(0)	7.5× 3.0	108°	II	F			珪質凝灰岩 1
6	C2-58-11	削片	6 × 9.5× 4.8	0.22									メノウ 1
7	C2-58-12	細石刃	11.9× 9.9× 3.7	0.40	19	1(0)	7.5× 2.5	116°	II	H			珪質凝灰岩 1
8	C2-58-13	削片	11.7×10.0× 2.1	0.20									珪質凝灰岩 1
9	C2-58-14	削片	7.5× 9 × 1.4	0.07									珪質凝灰岩 1
10	C2-58-15	削片	7.9× 6.3× 6.8	0.24									珪質凝灰岩 1
11	C2-58-16	削片	9.98× 6.8× 4.2	0.17									チャート 6
12	C2-58-18	細石刃	18.8× 5.5× 1.5	0.14	2	1(0)	2 × 1	91°	II	F			チャート 1
13	C2-58-19	細石刃	13.1× 4.5× 2.8	0.11	5				II	F		B	珪質凝灰岩 2
14	C2-58-20	細石刃	6 × 4.5× 1.0	0.03	13				II			M	珪質凝灰岩 2
15	C2-58-21	細石刃	6.1× 4.5× 1.8	0.06	14				II			M	珪質凝灰岩 2
16	C2-58-22	石錐	16 ×17.1× 6.8	1.06	18								珪質凝灰岩 1
17	C2-58-23	細石刃	8.7× 5.8× 1.4	0.06	16				II			M	珪質凝灰岩 2

No	遺物No	分　類	長×幅×厚（mm）	重(g)	図	打　面	打面長×高	打　角	背面構成	末端	使用痕	折面	母　岩
18	C2-58-24	細石刃	23.4× 4 × 2.1	0.20	1	1			II			H	チャート 1
19	C2-59-11	剝片U	14 ×11.5× 3.5	0.39	23	5(0)	5.5× 2.5	105°	II	F			珪質凝灰岩 1
20	C2-59-12	石刃	45.7×19 ×13.9	10.70	27	2(0)	14 × 6	122°	II	O			珪質粘板岩 1
21	C2-59-13	細石刃	14.5× 4.4× 1.8	0.08	8	1			II	F			珪質粘板岩 1
22	C2-59-16	細石刃	10.2× 4.3× 1.0	0.05					IV	F		B	珪質凝灰岩 1
23	C2-59-17	細石刃	9.6× 5.5× 1.3	0.07	12	1(0)	4.5× 1	96°	II			H	珪質凝灰岩 2
24	C2-59-18	削片	3 × 5.5× 1.3	0.01									珪質凝灰岩 1
25	C2-59-19	剝片U	19 ×14.2× 7.1	1.64	20	7(2)	13 × 6	124°	II			H	珪質凝灰岩 1
26	C2-59-20	削片	7 × 4.6× 1.3	0.02									珪質凝灰岩 1
27	C2-59-21	細石刃	13.4× 4.3× 1.8	0.09	9	1			II	F			珪質凝灰岩 1
28	C2-59-22	削片	4.5× 7.5× 3.3	0.06									珪質凝灰岩 1
29	C2-59-23	剝片	8.6× 9.5× 1.4	0.10	21	1(0)	5 × 1	110°	II	F			珪質凝灰岩 1
30	C2-59-24	細石刃	12.8× 5.5× 1.4	0.08	10				II			M	珪質凝灰岩 1
31	C2-59-25	細石刃	5.5× 6.5× 2.3	0.07					II			M	チャート 5
32	C2-59-26	剝片	20.3×12.7× 6.5	1.30		1			II＋III＋IV	F			流紋岩質凝灰岩 2
33	C2-59-27	細石刃	11.2× 6.0× 1.3	0.08	11	1(0)	4 × 1	90°	II			H	珪質凝灰岩 2
34	D2-40-11	礫	11.9×10.4× 4.7	0.42									安山岩 1
35	D2-40-12	石核	21.5×28.4×12.6	6.09	28								チャート 4
36	D2-50-11	削片	8.1× 4.1× 2.2	0.05									チャート 7
37	D2-50-15	削片	5 × 7.5× 1.9	0.04									黒曜石 2
38	D2-50-16	細石刃	8.5× 4.3× 1.4	0.03	4	p			II			H	チャート 1
39	D2-50-17	細石刃	11 × 4.3× 1.5	0.05	6	1(0)	3 × 1	105°	II			H	チャート 1
40	D2-50-17	細石刃	7.5× 5.0× 2.4	0.10	7				II			M	チャート 2
41	D2-50-18	削片	10 × 8.5× 2.8	0.13									珪質凝灰岩 1
42	D2-50-19	細石刃	10.3× 4.8× 1.7	0.07	3	2(0)	3 × 1	89°	II			H	チャート 1
43	D2-50-20	細石刃	12.8× 5.2× 2.2	0.11	5				II			M	チャート 1
44	D2-50-21	剝　片	16.5×14.5× 7.3	1.56					II＋IV			M	流紋岩質凝灰岩 1

B　第2ブロック（fig.46・47, PL.18）

tab. 5　第2ブロック遺物集計表

母岩番号	ナイフ	削器	石錐	楔形石器	石刃	細石刃	剝片U・R	剝片	削片	石核	石槌	礫	総数	数量比(%)	総重量(g)	重量比(%)
珪質粘板岩 1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	9.1	10.80	23.1
砂　岩 1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	3	27.3	9.87	21.1
安山岩 1	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	2	18.2	1.14	2.4
安山岩 2	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	9.1	10.29	22.0
安山岩 3	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	9.1	2.63	5.6
安山岩 4	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	9.1	1.88	4.0
安山岩 5	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	9.1	0.17	0.4
凝灰角礫岩	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	9.1	9.97	21.3
総数	0	1	0	0	0	0	0	4	2	0	0	4	11	100	46.75	100
組成比（%）	0	9.1	0	0	0	0	0	36.4	18.2	0	0	36.4				

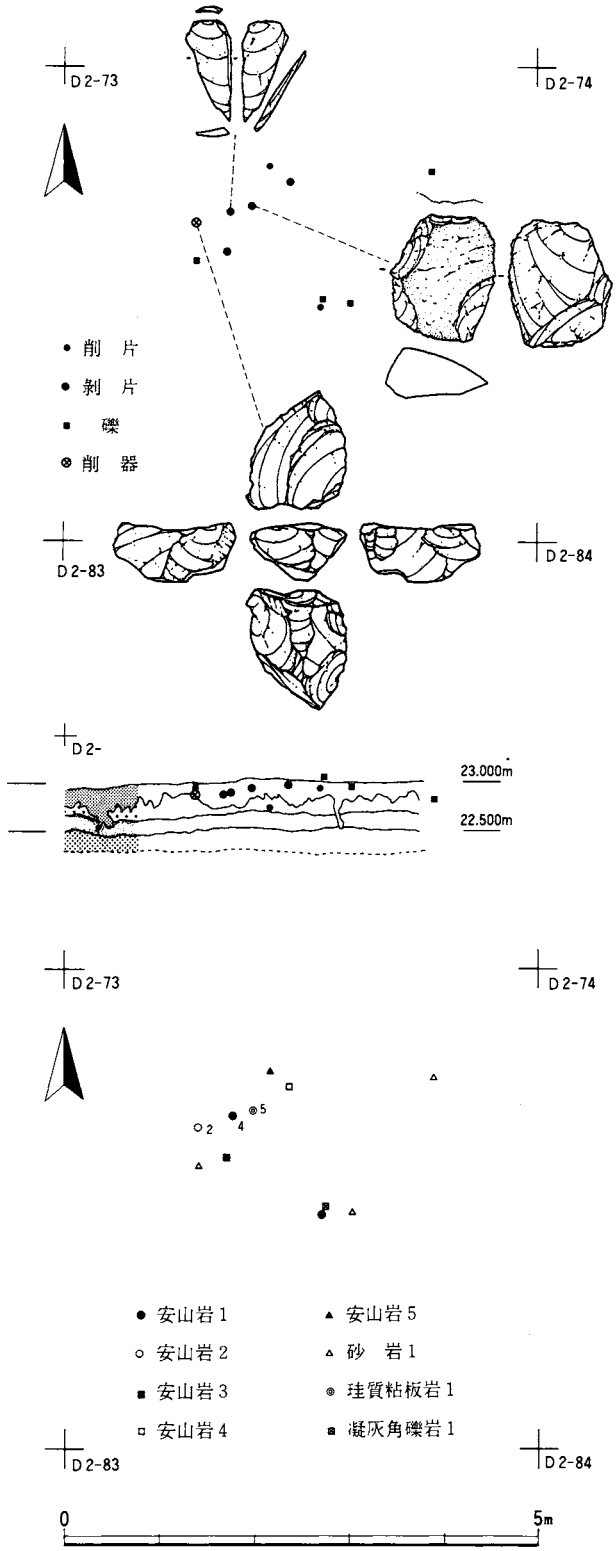


fig.46　第2ブロック器種別(上)・母岩別(下)遺物分布状況（1/80）

a．分布状況　D2-73区の東西2.6m，南北1.8mの範囲内から，11点の遺物を検出した。産出層準は第1ブロックに近い。

b．出土遺物　11点の遺物の内訳は，石核転用の削器1点（3），剥片2点（1，2）などがあるが，2次加工の著明なものがない。3は安山岩製の分厚い剥片の腹面を打面とした石核であるが，一側縁に細部加工があり，側削器に転用されたものと見られる。

C．小結　帰属時期の判定基準となる石器が含まれていないので，編年的な位置づけは困難である。第1ブロックと共通する母岩はないが，産出層準から近接した時期の所産であると考えられる。前項で指摘したように，この段階の石器群には細石刃の生産過程に伴って，各種の一般的剥片剥離手法による剥片の作出・使用が認められる。仮に，本ブロックの資料がその種の過程に帰属するものであれば，興味深いが，何分確実な証拠がないので，結論は保留せざるをえない。

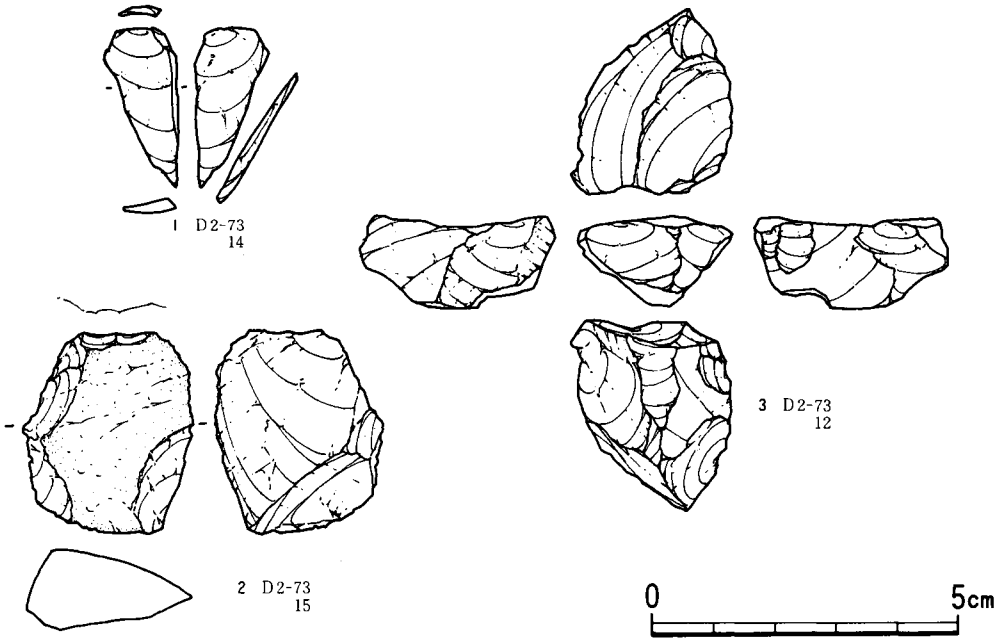


fig.47　第2ブロック出土遺物(4/5)

tab. 6　第2ブロック遺物属性表

No.	遺物No.	分　類	長×幅×厚 (mm)	重(g)	図	打　面	打面長×高	打　角	背面構成	末端	使用痕	折面	母　岩
1	D2-73-11	礫	30 ×25 ×9	8.27									砂岩 1
2	D2-73-12	削器	31 ×25 ×14	10.29	3								安山岩 2
3	D2-73-13	剝片	28.5×17.5× 6	2.63		4(0)	12 × 4	80°	II	F			安山岩 3
4	D2-73-14	剝片	27.5×12.5× 3	1.01	1	2(0)	8.5× 2	122°	II	F			安山岩 1
5	D2-73-15	剝片	26.5×32 ×13	10.80		1			II＋IV	F			珪質粘板岩 1
6	D2-73-16	削片	10 × 6.5× 2	0.17									安山岩 5
7	D2-73-17	剝片	23 × 27 × 3.5	1.88		1(0)	8 × 2	120°	II	F			安山岩 4
8	D2-73-18	礫	9.5×20.5× 4	0.66									砂岩 1
9	D2-73-19	礫	4 ×31 × 4.5	0.94									砂岩 1
10	D2-73-20	礫	43.5×25 ×10.5	9.97									凝灰角礫岩 1
11	D2-73-21	削片	6 ×10.5× 2	0.13									安山岩 1

(2)下層石器群

下層石器群は，3箇所のブロックからなるが，他に2地点から単独で遺物が採集されている。ブロックは西から順次第3，第4，第5ブロックとした。

A　第3ブロック (fig.48～65, PL. 4・20～26)

a．分布状況　C3-05ポイントを中心とる東西約10m,南北約15mの範囲に遺物が集中していたが，この範囲内にも分布の疎密があるので，5箇所のクラスターに分けることにした。すなわ

ち，C2-95ポイント南側を中心とするクラスターa，C3-05区にあるクラスターb，C3-04区を中心とするクラスターc，C3-16ポイント周辺のクラスターd，C3-14ポイント周辺のクラスターeがこれである。各クラスター毎に分布状況を観察したい。

tab. 7　第3ブロック・クラスター別遺物集計表

母岩番号	ナイフ	削器	石錐	楔形石器	石刃	細石刃	剝片 U・R	剝片	削片	石核	石槌	礫	総数	数量比(%)	総重量(g)	重量比(%)
クラスター a	9	2	1	4	0	0	14	24	65	3	0	1	123	52.8	20.37	37.1
クラスター b	0	1	0	0	0	0	4	10	10	1	0	0	26	11.2	93.09	16.4
クラスター c	1	1	0	2	0	0	6	10	37	1	0	0	58	24.9	150.23	26.5
クラスター d	0	0	0	3	0	0	4	5	2	2	0	0	16	6.9	47.47	8.4
クラスター e	0	0	0	0	0	0	2	6	0	2	0	0	10	4.3	66.37	11.7
総数	10	4	1	9	0	0	30	55	114	9	0	1	233	100	567.53	100
組成比（%）	4.3	1.7	0.4	3.9	0	0	12.9	23.6	48.9	3.9	0	0.4				

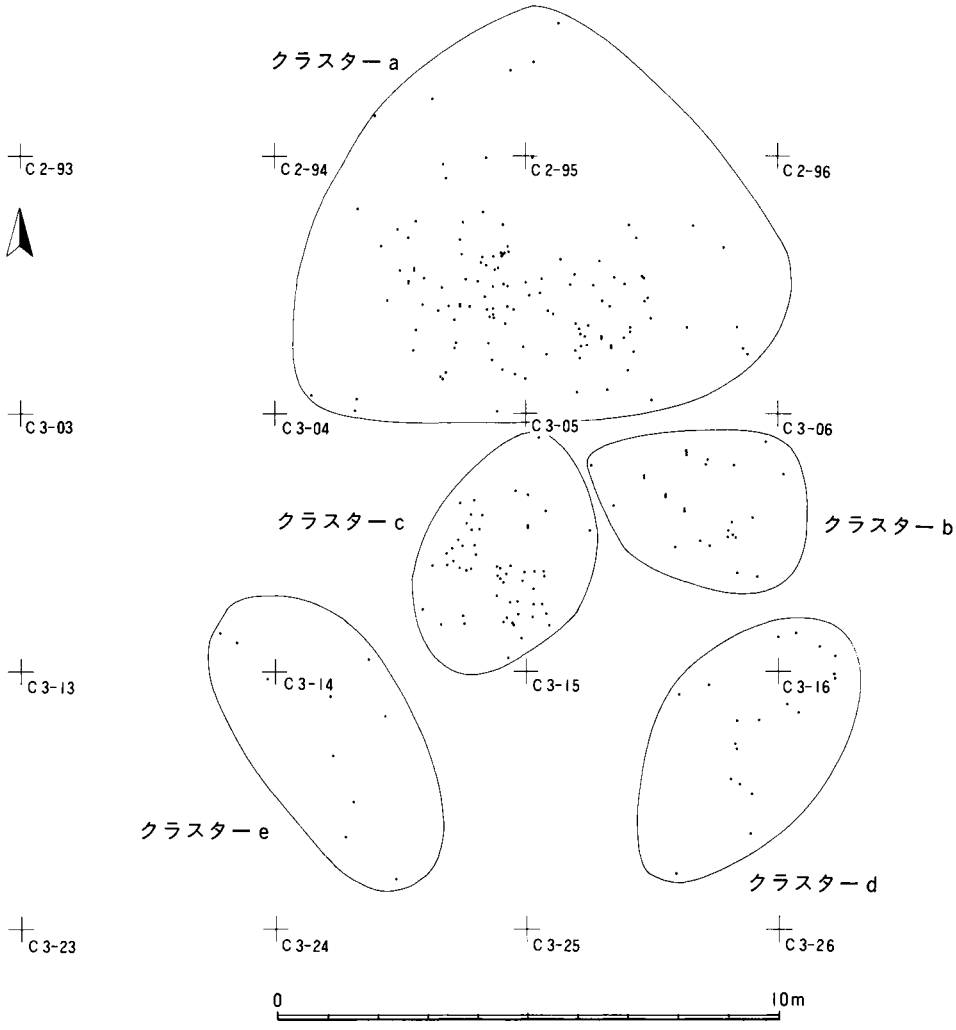


fig. 48　第3ブロック全体図（1/150）

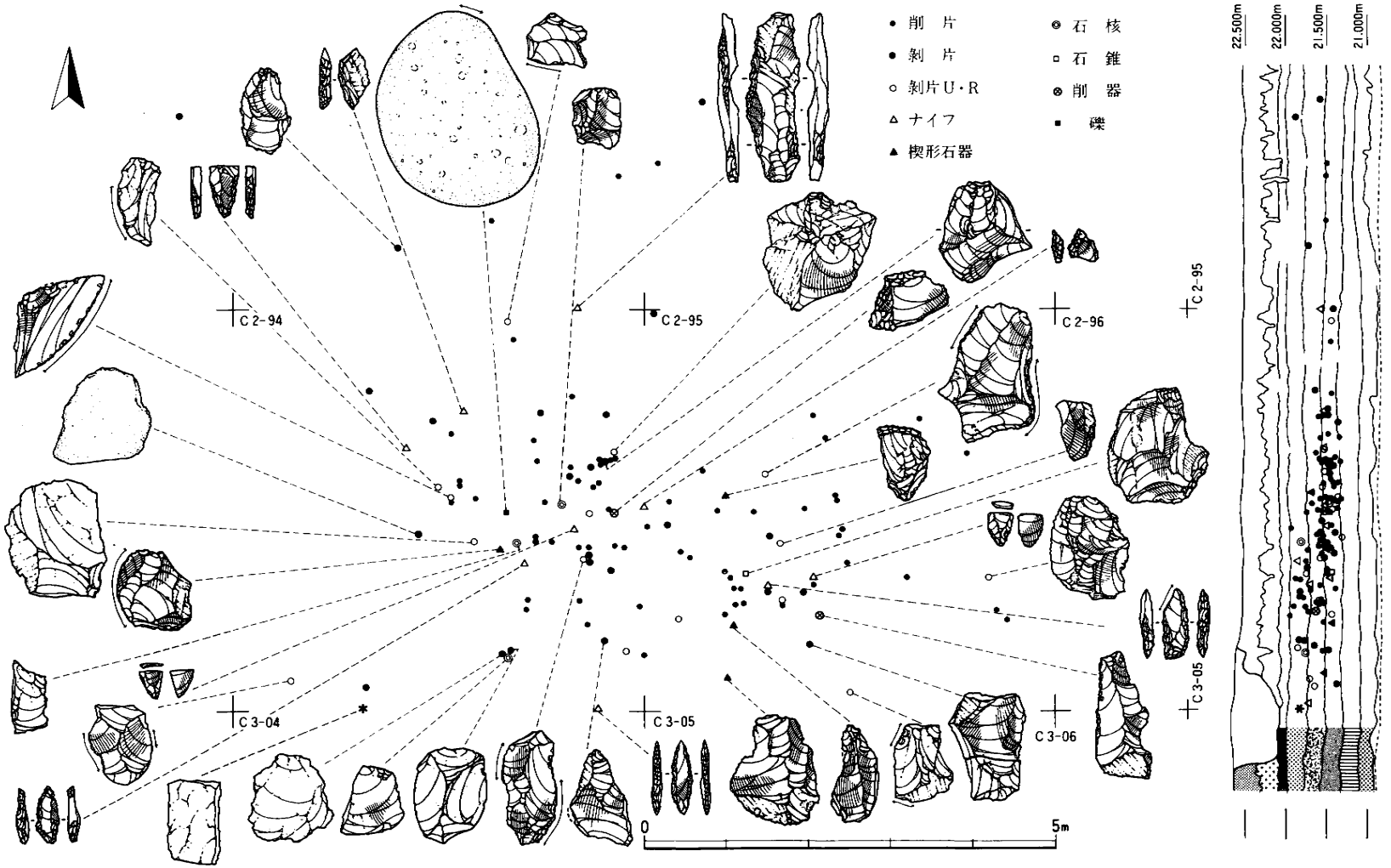


fig.49　第3ブロック・クラスターa器種別遺物分布状況（1/80）

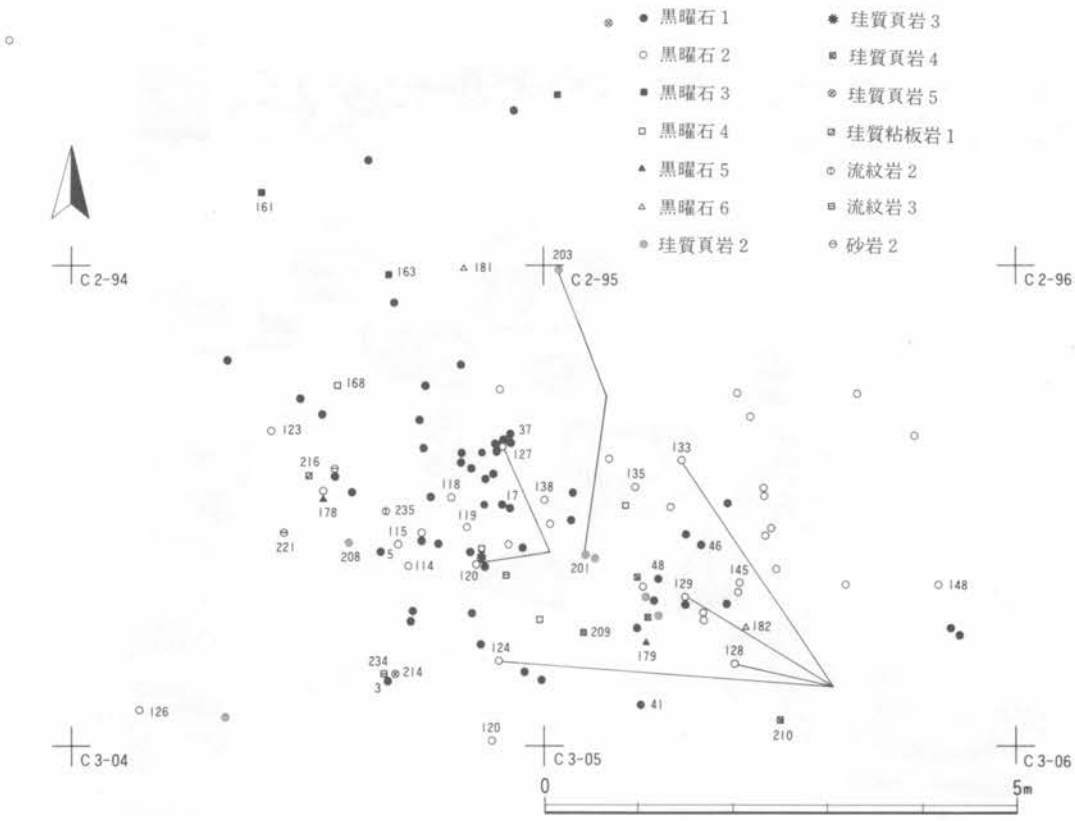
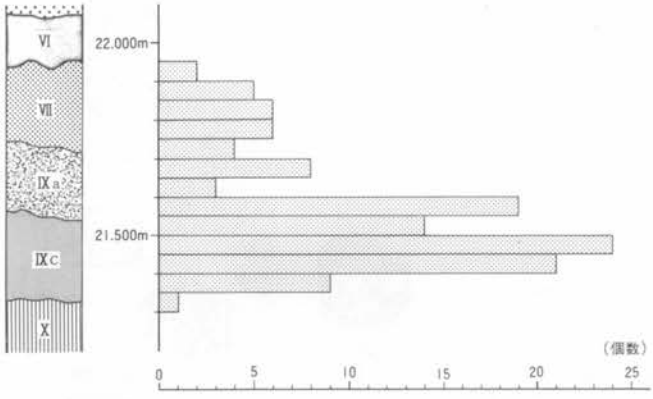


fig.50　第3ブロック・クラスターa母岩別遺物分布状況（1/80）

クラスターa　C2-94区から90区にかけて，東西5.8mの楕円形の集中部分と，その外縁部を含めてクラスターを設定した（fig.49）。34点の遺物があり，本ブロックの資料の半数以上がこのクラスターに帰属していることになる。遺物としては各種石器類の他に，ブロック外縁部Ⅶ層より角柱状の化石化した炭塊を検出した。発掘調査時の記録によれば，遺物集中部分の土層の色調は周辺部に較べて暗く，かつ，この範囲に炭化物片の顕著な集中が認められたという。

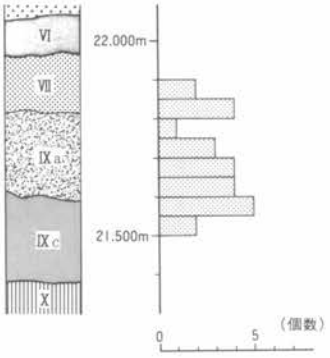


tab.8　第3ブロック・クラスターa遺物の垂直分布

さらに，垂直分布状況から明らかなように，石器が集中し，土色が暗く，炭化物片の集中していた部分の遺物産出層準はⅨc層中位であり，これは周辺部分よりもかなり低いレヴェルである。tab.8に本クラスターの遺物の垂直分布状況を示したが，他のクラスターと比較すると，遺物分布が深層に及ぶことが読

tab. 9　第3ブロック・クラスターa遺物集計表

母岩番号	ナイフ	削器	石錐	楔形石器	石刃	細石刃	剝片U・R	剝片	削片	石核	石槌	礫	総数	数量比(%)	総重量(g)	重量比(%)
珪質頁岩 2	0	0	0	0	0	0	0	2	4	0	0	0	6	4.9	8.13	3.9
珪質頁岩 3	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0.8	0.89	0.4
珪質頁岩 4	0	0	0	0	0	0	3	0	2	0	0	0	5	4.1	16.82	8.0
珪質頁岩 5	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	2	1.6	6.45	3.1
珪質粘板岩 1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0.8	1.25	0.6
砂岩 2	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	2	1.6	7.53	3.6
流紋岩 2	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	2	1.6	2.93	1.4
流紋岩 3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0.8	69.14	32.9
黒曜石 1	0	1	1	2	0	0	3	10	35	1	0	0	53	43.1	42.22	20.1
黒曜石 2	7	0	0	1	0	0	5	5	19	2	0	0	39	31.7	37.15	17.7
黒曜石 3	0	0	0	0	0	0	1	1	1	0	0	0	3	2.4	3.43	1.6
黒曜石 4	1	0	0	0	0	0	0	0	3	0	0	0	4	3.3	0.81	0.4
黒曜石 5	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	2	1.6	6.13	2.9
黒曜石 6	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	1.6	7.49	3.6
総数	9	2	1	4	0	0	14	24	65	3	0	1	123	100	210.37	100
組成比(%)	7.3	1.6	0.8	3.3	0	0	11.4	19.5	52.8	2.4	0	0.8				



tab.10　第3ブロック・クラスターb遺物の垂直分布

み取れるばかりか，Ⅶ層～IXa層とIXc層中位に2つのピークをもつことも窺われ，間接的にではあるが，窪地状の部分の存在が想定される。

クラスターb　東西4.1m，南北2.9mの範囲に27点の遺物が分布していた。垂直分布のピークはIXa層下部にある。剝片類を中心とした集中であるが，クラスター東縁部から貝製品を検出した。貝製品の産出層準はIX層上面であった。

tab. 11　第3ブロック・クラスターb遺物集計表

母岩番号	ナイフ	削器	石錐	楔形石器	石刃	細石刃	剝片U・R	剝片	削片	石核	石槌	礫	総数	数量比(%)	総重量(g)	重量比(%)
チャート 1	0	0	0	0	0	0	0	3	0	0	0	0	3	11.5	7.94	8.5
チャート 2	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	2	7.7	1.54	1.7
珪質頁岩 1	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	2	7.7	13.95	15.0
砂岩 1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	3.8	29.91	32.1
黒曜石 1	0	1	0	0	0	0	4	0	7	0	0	0	12	46.2	36.44	39.1
黒曜石 4	0	0	0	0	0	0	0	4	2	0	0	0	6	23.1	3.31	3.6
総数	0	1	0	0	0	0	4	10	10	1	0	0	26	100	93.09	
組成比(%)	0	3.8	0	0	0	0	15.9	38.5	38.5	3.8	0	0				

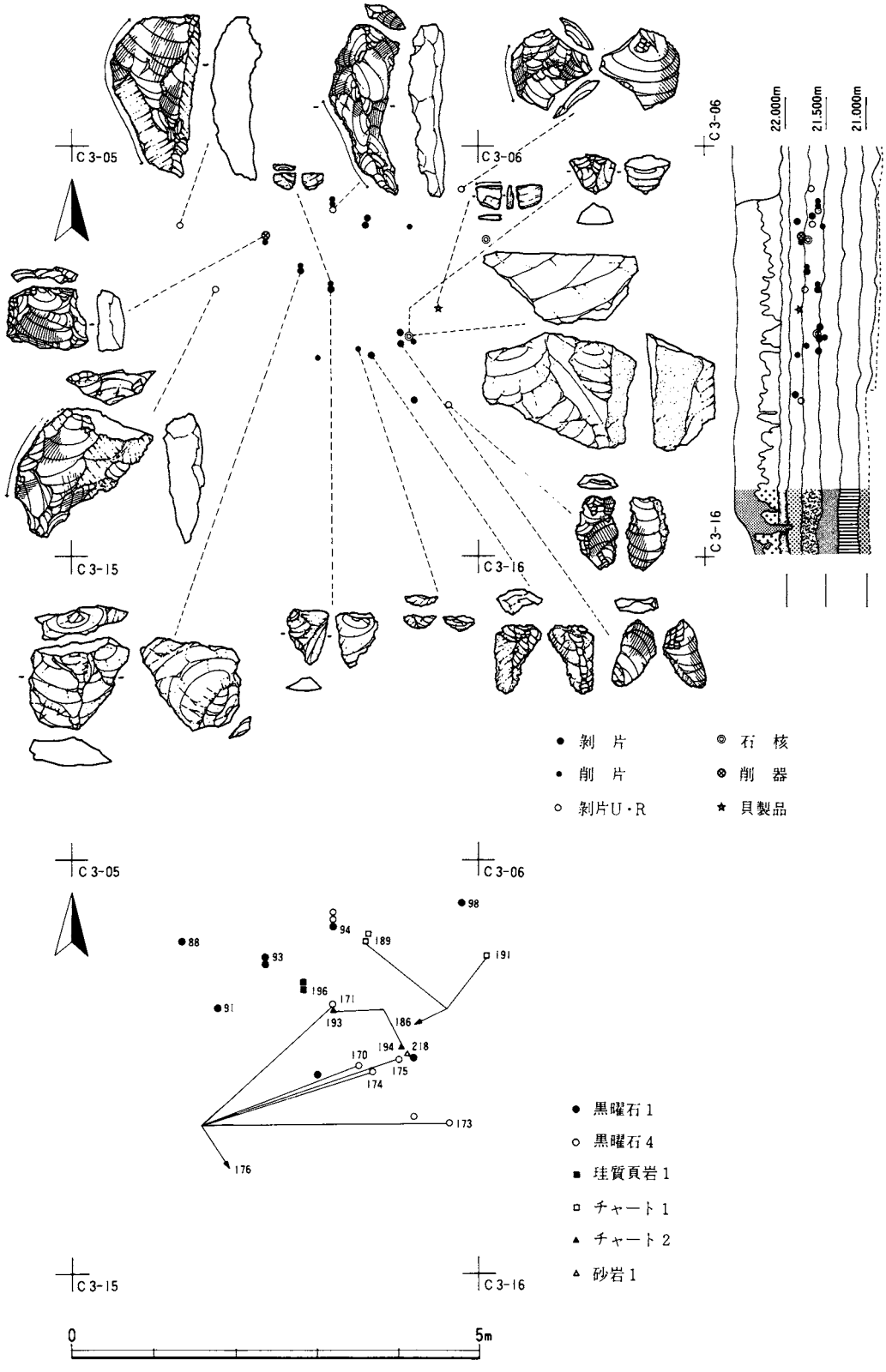
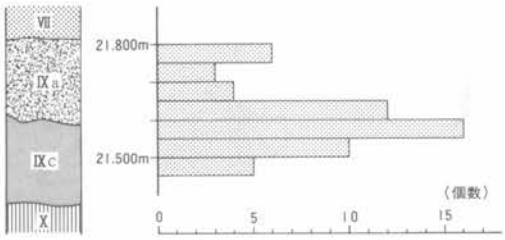


fig.51　第3ブロック・クラスターb器種別(上)・母岩別(下) 遺物分布状況 (1/80)

クラスターc　C3-04区から05区にかけて，径約3.5mの略円形の集中部が形成されている。58点の遺物があり，これはクラスターaに次ぐ出土量である。比較的コンパクトにまとまったクラスターである。黒曜石の削片が多く，ある程度の石材消費が反映されているものと見られるが，作業内容まで示唆するものではない。tab.12に垂直分布状況を示した。IXc層最上部付近にピークをもち，本ブロックがおおむねIX層中部に石器産出層準をもつことを示している。



tab.12　第3ブロック・クラスターc遺物の垂直分布

tab. 13　第3ブロック・クラスターc遺物集計表

母岩番号	ナイフ	削器	石錐	楔形石器	石刃	細石刃	剝片U・R	剝片	削片	石核	石槌	礫	総数	数量比(%)	総重量(g)	重量比(%)
チャート 1	0	1	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	3	5.2	33.7	22.4
珪質頁岩 1	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	2	3.4	20.57	13.7
粘板岩 1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	1.7	17.44	11.6
流紋岩 1	0	0	0	1	0	0	0	2	4	0	0	0	7	12.1	50.15	33.4
黒曜石 1	1	0	0	0	0	0	5	3	26	0	0	0	35	60.3	15.71	10.5
黒曜石 2	0	0	0	0	0	0	0	1	6	0	0	0	7	12.1	0.9	0.6
黒曜石 3	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	2	3.4	9.81	6.5
黒曜石 8	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	1.7	1.95	1.3
総数	1	1	0	2	0	0	6	10	37	1	0	0	58	100	150.23	100
組成比(%)	1.7	1.7	0	3.4	0	0	10.3	17.2	63.8	1.7	0	0				

クラスターd　C3-16ポイント周辺の，長軸5.3m，短軸2.3mの集中部である。15点の遺物からなり，まばらな印象を受ける。しかし，ほとんど石屑の類を含まず，刃器あるいはピエスエスキーユを主体とする石器類から構成されている。遺物はIV層からIXc層まで約0.5mの幅をもって分布しているが，IXa層下位に位置するものが多い。

tab. 14　第3ブロック・クラスターd遺物集計表

母岩番号	ナイフ	削器	石錐	楔形石器	石刃	細石刃	剝片U・R	剝片	削片	石核	石槌	礫	総数	数量比(%)	総重量(g)	重量比(%)
珪質頁岩 5	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	6.3	10.56	22.2
砂岩 2	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	6.3	7.86	16.6
黒曜石 1	0	0	0	2	0	0	4	3	2	2	0	0	13	81.3	27.44	57.8
黒曜石 4	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	6.3	1.61	3.4
総数	0	0	0	3	0	0	4	5	2	2	0	0	16	100	47.47	100
組成比(%)	0	0	0	18.8	0	0	25.0	31.3	12.5	12.5	0	0				

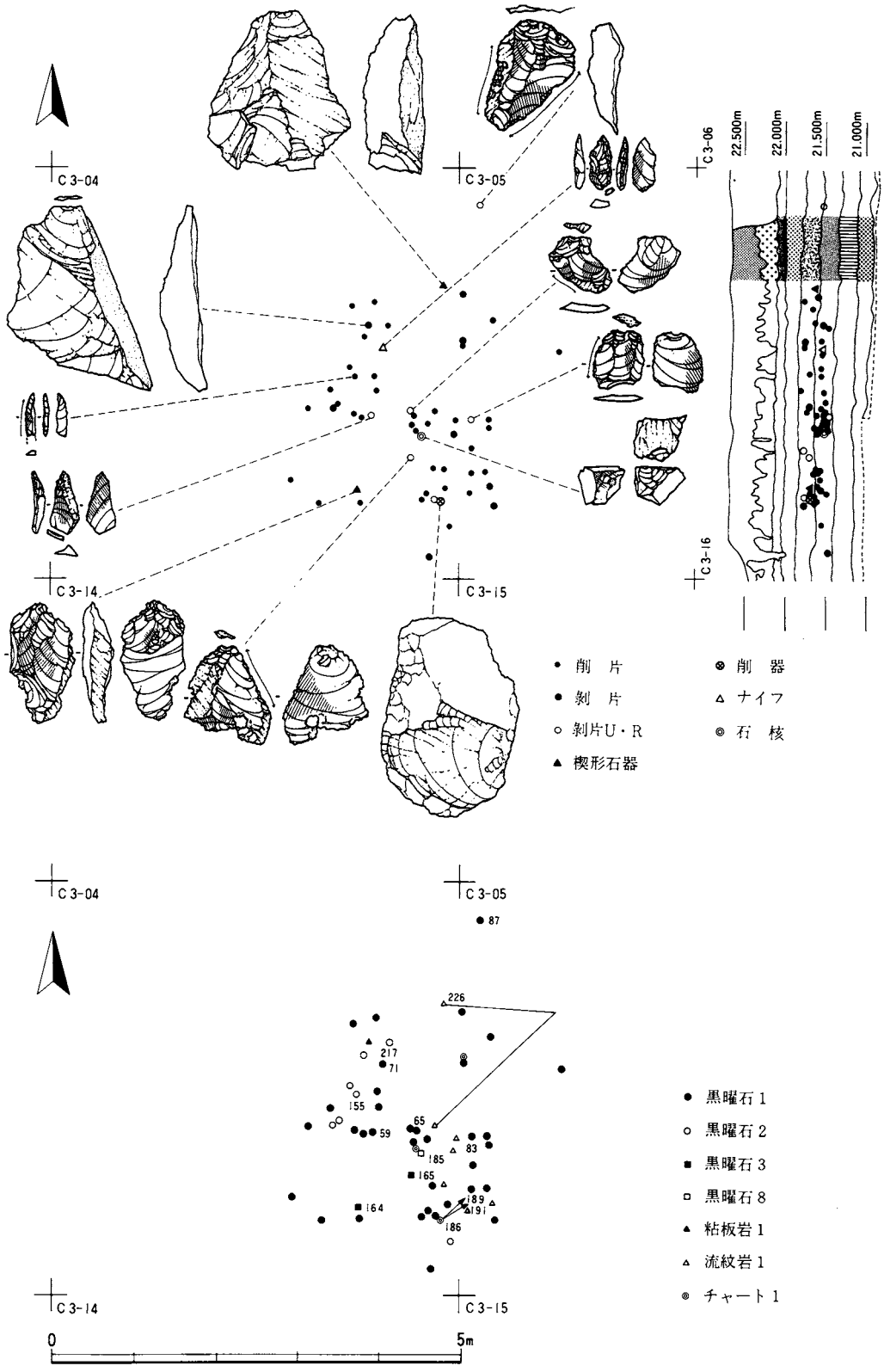


fig.52　第3ブロック・クラスターc器種別(上)・母岩別(下) 遺物分布状況 (1/80)

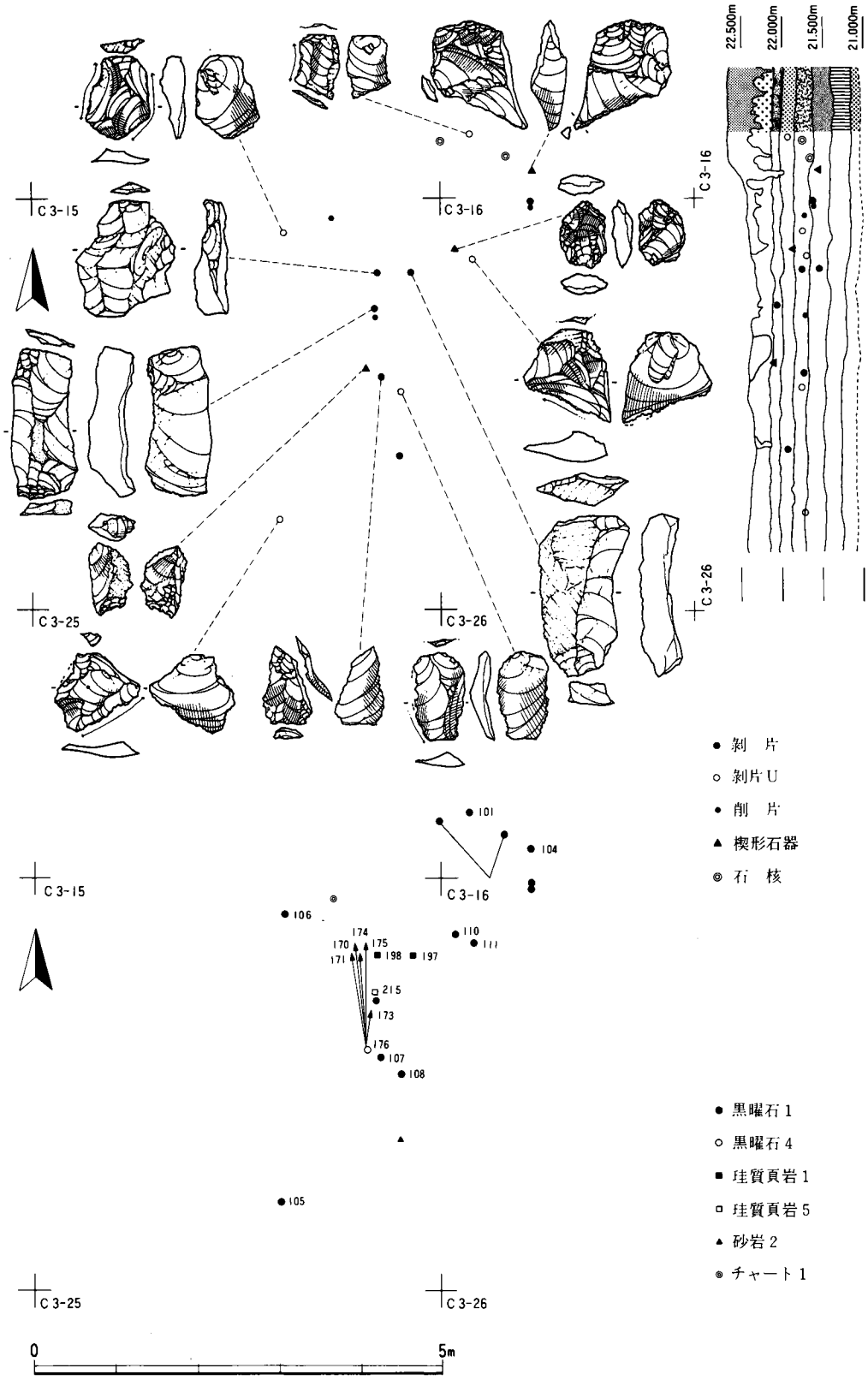


fig.53　第 3 ブロック・クラスター d 器種別(上)・母岩別(下) 遺物分布状況 (1/80)

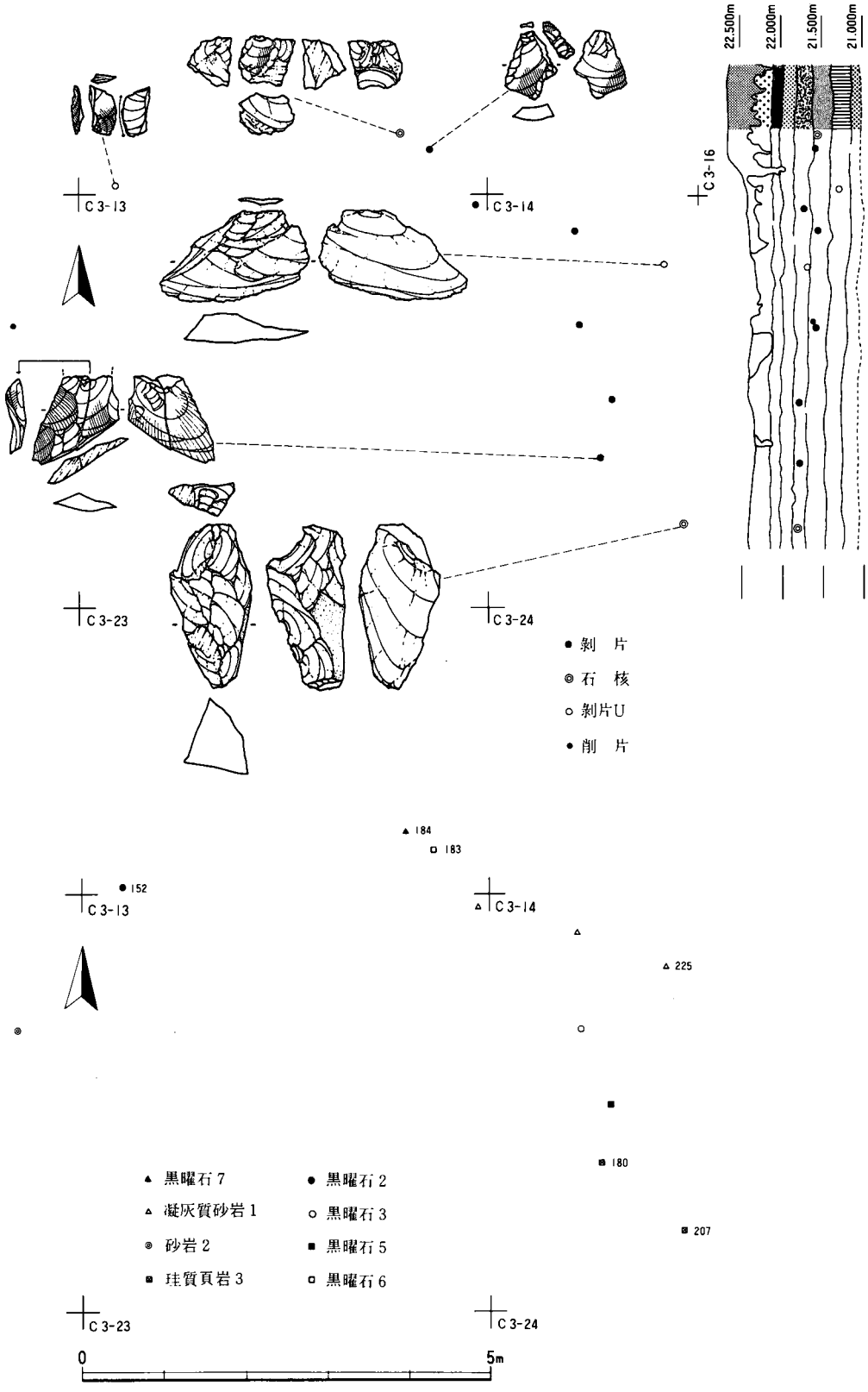


fig.54　第3ブロック・クラスターe器種別(上)・母岩別(下) 遺物分布状況 (1/80)

クラスターe　ブロック南西部に点々と遺物が分布しており，これらを一括した。1点の削片も含まれていない，比較的多種類の母岩が少量ずつ廃棄された状況を呈している。垂直分布状況は，IXa層からIXc層にかけて，あまりレヴェル差なく分布している。

tab. 15　第3ブロック・クラスターe遺物集計表

母岩番号	ナイフ	削器	石錐	楔形石器	石刃	細石刃	剝片 U・R	剝片	削片	石核	石槌	礫	総数	数量比(%)	総重量(g)	重量比(%)
珪質頁岩　3	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	2	20.0	26.06	39.3
凝灰質砂岩　1	0	0	0	0	0	0	1	2	0	0	0	0	3	30.0	32.40	48.8
黒曜石　2	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	10.0	0.31	0.5
黒曜石　3	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	10.0	0.97	1.5
黒曜石　5	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	10.0	3.10	4.7
黒曜石　6	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	10.0	1.11	1.7
黒曜石　7	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	10.0	2.42	3.6
総数	0	0	0	0	0	0	2	6	0	2	0	0	10	100	66.37	100
組成比（%）	0	0	0	0	0	0	20	60	0	20	0	0				

b．出土遺物　クラスター別の出土遺物の状態については表に譲ることにし，ここでは母岩毎に遺物の内容を検討する。検出された母岩の内訳は，黒曜石8種，珪質頁岩5種，チャート2種，流紋岩3種(うち1種は円礫)，砂岩2種，珪質粘板岩，粘板岩，凝灰質砂岩各1種の合計23母岩で，全資料を完全に各帰属母岩に還元し得た。

黒曜石1（fig.55～fig.57）　乳白色の地に灰黒色の縞目が多く入る良質の黒曜石である。流紋岩質の不純物を極少量含む。これには球果状の大粒のものもある。総数で113点あり，ナイフ形石器1点，削器2点，石錐1点，楔形石器4点，剝片類102点，石核2点という構成となる。剝片のうち刃こぼれ，あるいは細部の簡略な加工痕と見られる小剝離のあるものが16点含まれている。クラスター別の分布は，クラスターaに53点，bに12点，cに35点，dに13点となり，各クラスターの資料数の多寡に比例するように分布している。

この母岩は本来かなり大型の角礫であったと見られるが，風化面を留めるものが7例しかなく，分割礫の状態でブロックに搬入されたものかと見られる。剝片の長幅分布・幅厚分布をtab.16に示したが，長幅指数50から200の間に大半の資料が包括され，明らかに100前後を中心とするまとまりが看取される。大きさは，長さ・幅共に20㎜以内に分布が集中しており，これを超える相対的に大型のものは少数である。あるいは，この母岩は分割礫ではなく，大型の剝片の状態で搬入された可能性もあり，20㎜以下の細かい剝片は，大型のものの再加工時に生産された剝片であるのかもしれない。特に4点と，まとまって検出されている楔形石器の生産・消費過程と関連する可能性が高い。

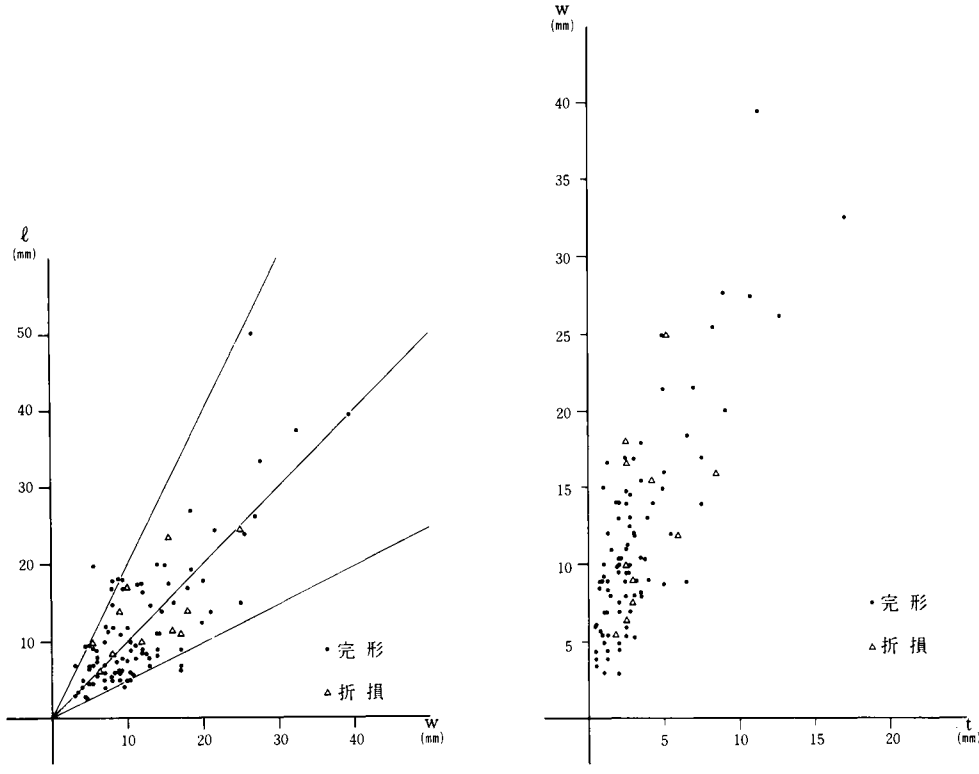
石器実測図1～25に代表的な資料を図示した。1はナイフ形石器。縦長剝片素材で，両側縁に細部加工が認められるが，背面右側縁のものは細密なブランティングであるのに対し，左側

縁のものは大き目の剝離痕2面によって構成されている。基部の背面右側は折れ面，左側は折れ面に切られる旧い剝離面であるが，この腹面側にも背面を切る末端ステップとなる幅広の小剝離痕がある。あるいは，基部側は大きく破損しているのかもしれないが，判然としない。なお，腹面の状況から，素材剝片を斜めに截ち切るような細部加工の状況が窺われる。2と3はリタッチのある剝片で，加工は1のブランティングに近くナイフ形石器未製品か撥ね物である可能性が強い。

4，6，7，8の4点は楔形石器である。5もこの工程に属するが，一端に細部加工があるので石錐とする。11，12はこの種の石器から得られる剝片で，刃こぼれの顕著なもの。5～8などは両極石核と見られるが，4では加撃縁の90°転位を伴う細かい砸撃剝離が重ねられており，ピエスエスキーユの消耗過程を示唆しているものと考えられるが，これ自体を別種の石器と考え，砸撃法自体を細部加工の一環に位置づけることもできよう。

9，10は削器としたが，9では横長剝片を，10では折断され横長の形状となった剝片の短い一側縁に細部加工が加えられている。やや特異なものなので，今後の類例検出を期待したい。

13～23に剝片，特に使用痕の認められるものを中心に掲げた。13は尾端に砸撃加撃痕様の小剝離痕がある。14は稜付剝片である。本母岩の石核の一部が，打面と作業面の反転を伴うものであったこと，さらに転位打面をもつこと等が看取される重要な資料である。これらの剝片の



tab.16　第3ブロック黒曜石1剝片の長・幅(左)、幅・厚(右)分布

黒曜石 I

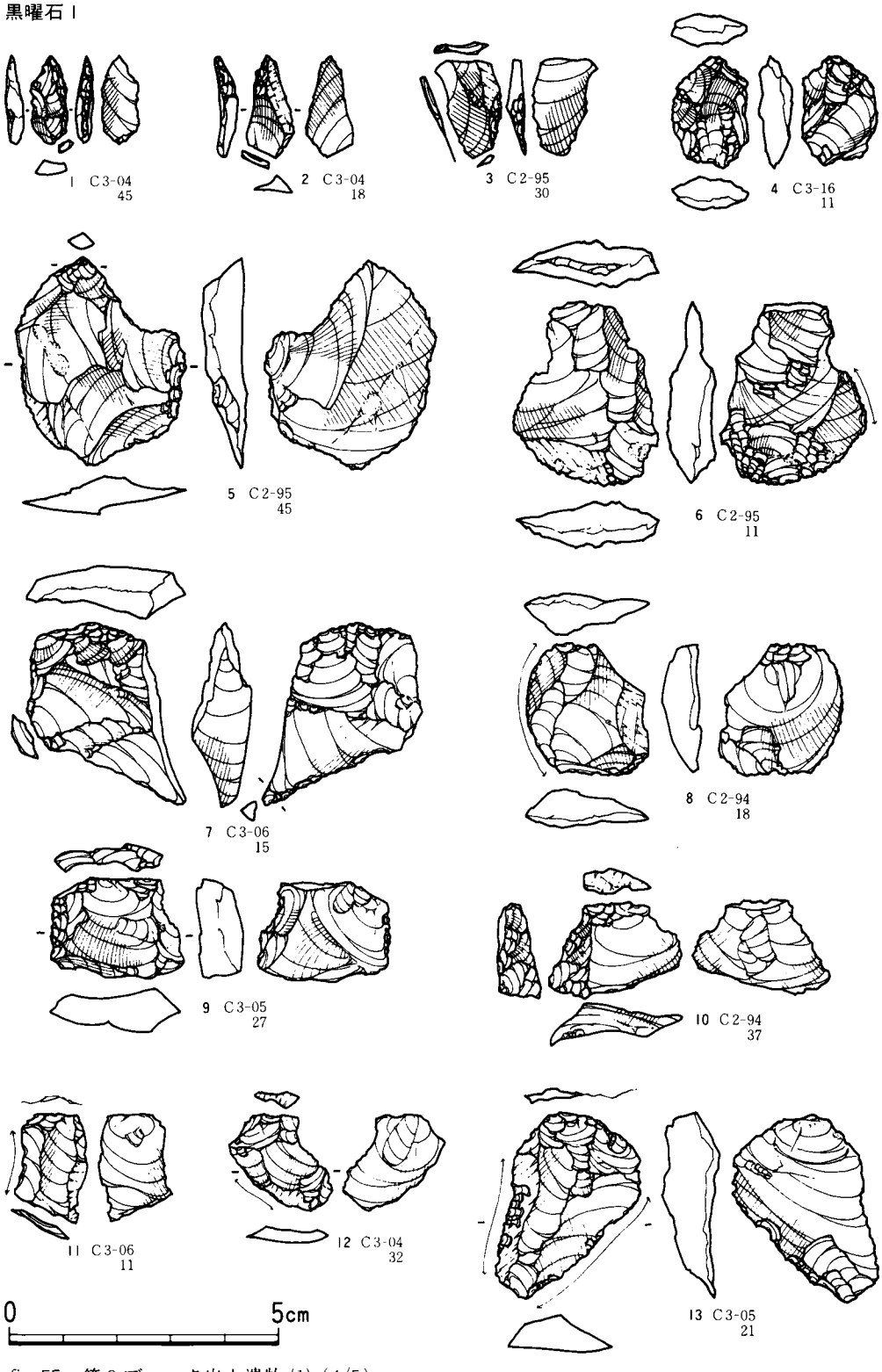


fig.55　第3ブロック出土遺物(1)(4/5)

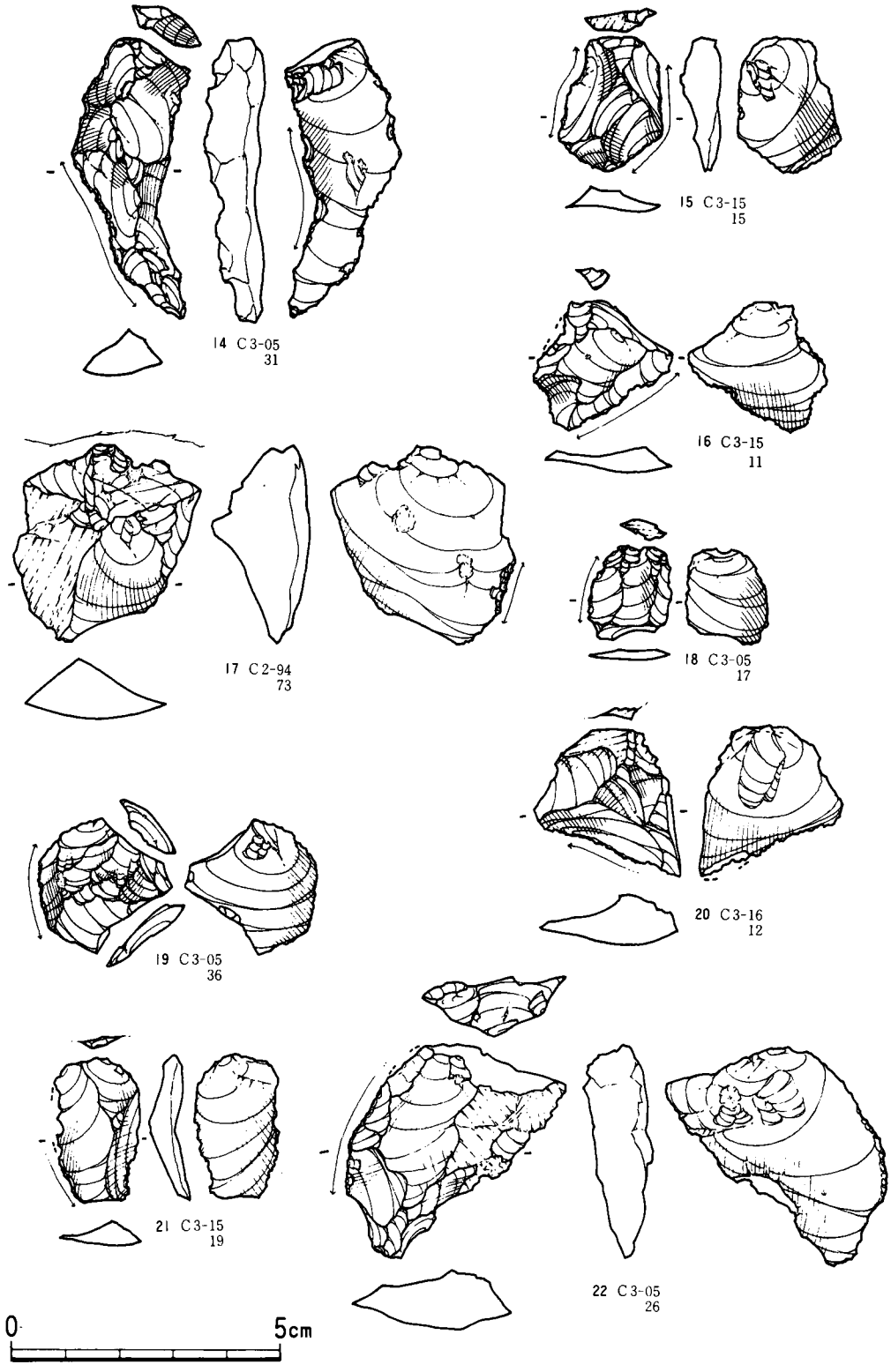


fig.56　第3ブロック出土遺物(2)(4/5)

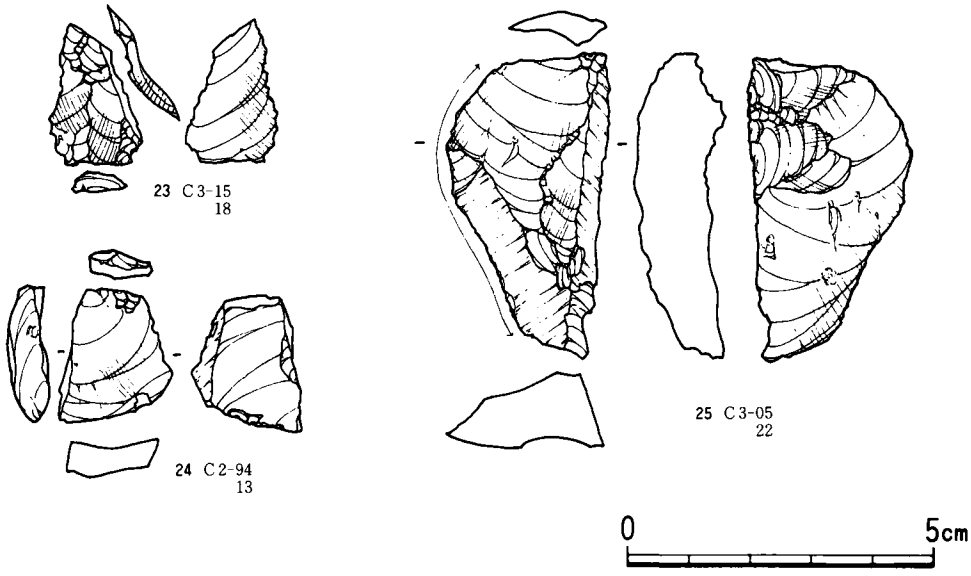


fig.57　第3ブロック出土遺物(3)(4/5)

背面構成は，一般に多方向からの加撃痕による場合が多く，複剥離打面をもつものも散見されるところから，上述した反転型と共に，求心型の剥片剥離工程の存在が予測される。

石核は2例あり，24は最終的な残核である。25は，やや厚味のある剥片の腹面に，相互に切り合うような剥離痕がある。一応石核と分類したが，剥片側縁には刃こぼれがあり，これ自体刃器として機能しているので，腹面の剥離痕は単なる打瘤除去を目的とするものであるのかもしれない。

tab. 17　第3ブロック黒曜石1遺物属性表

No.	遺物No.	分　類	長×幅×厚（mm）	重(g)	図	打　面	打面長×高	打　角	背面構成	末端	使用痕	折面	クラスター
1	C2-84-12	削片	9 ×14 × 2	0.19									a
2	C2-84-13	削片	15 ×13 × 2.5	0.29									a
3	C2-94-13	石核	21.5×16 × 6	2.17	24								a
4	C2-94-15	削片	10 × 7 × 2	0.09									a
5	C2-94-18	楔形石器	24.5×23 × 6.5	2.79	8						+		a
6	C2-94-21	削片	6 × 9 × 1	0.09									a
7	C2-94-22	削片	17.5×12 × 5.5	0.56									a
8	C2-94-24	削片	4 × 7 × 1	0.02									a
9	C2-94-25	削片	4.5× 5.5× 1	0.03									a
10	C2-94-26	削片	3 × 3 × 1	0.01									a
11	C2-94-29	剝片	14 ×21 × 5	1.06		1(0)	10 × 5	112°	II	H			a
12	C2-94-30	削片	11.5× 7.5× 2	0.11									a
13	C2-94-33	剝片U	17 ×10 × 2.5	0.32					II	H	+	B	a
14	C2-94-34	削片	9 × 5.5× 1	0.06									a

No	遺物No	分　類	長×幅×厚（mm）	重(g)	図	打　面	打面長×高	打　角	背面構成	末端	使用痕	折面	クラスター
15	C2-94-35	剝片	14 ×18 × 2.5	0.37		I			II	F		L	a
16	C2-94-36	削片	7.5×10 × 2	0.11									a
17	C2-94-37	削器	2.5×17 × 6	2.15	10						+		a
18	C2-94-38	削片	8.5×12 × 3	0.28									a
19	C2-94-41	削片	9 ×12 × 3	0.27									a
20	C2-94-42	剝片	15 ×16 × 5	0.68		I			II＋III＋IV	H	−		a
21	C2-94-44	削片	4 × 4 × 0.5	0.01									a
22	C2-94-46	削片	8 × 6 × 1.5	0.06									a
23	C2-94-49	剝片	17 ×18 × 3.5	0.72		1(0)	9 × 2		II＋III	F			a
24	C2-94-50	削片	9.5× 5 × 2	0.05									a
25	C2-94-52	削片	12 × 8 × 3.5	0.22									a
26	C2-94-55	剝片U	15 ×25 × 5	1.48		2(0)	18 × 5.5	108°	II	H			a
27	C2-94-56	削片	11 × 9 × 2.5	0.17									a
28	C2-94-62	剝片	10 ×12 × 6	0.59		2(0)	12 × 6	113°	IV			H	a
29	C2-94-63	削片	7 ×13 × 2	0.17									a
30	C2-94-64	削片	6.5× 5 × 2.5	0.05									a
31	C2-94-67	削片	7 × 7 × 1	0.03									a
32	C2-94-68	剝片	11 ×17 × 2.5	0.44					II	H		B	a
33	C2-94-69	削片	7 × 3 × 2	0.04									a
34	C2-94-70	削片	18 × 8 × 3	0.30									a
35	C2-94-71	削片	11 ×14 × 2	0.22									a
36	C2-94-72	削片	5 ×10 × 1	0.04									a
37	C2-94-73	剝片U	37.5×32.5×17	13.02	17	1(0)	21 ×20		II	H	+		a
38	C2-94-75	削片	5 × 9 × 1	0.05									a
39	C2-94-76	削片	9.5×11 × 2.5	0.23									a
40	C2-94-78	削片	9 ×17 × 6.5	0.65									a
41	C2-95-11	楔形石器	33 ×25 ×17.5	4.33	6						+		a
42	C2-95-14	削片	10 ×10.5× 3.5	0.21									a
43	C2-95-17	削片	5.5× 8 × 1.5	0.05									a
44	C2-95-18	剝片	12 ×10 × 3	0.32		I			II	H			a
45	C2-95-29	剝片	6 × 6.5× 2.5	0.09					III	H		B	a
46	C2-95-30	剝片R	18.5×10.5× 3	0.46	3								a
47	C2-95-32	剝片	8.5× 8 × 3	0.18					II＋III	O		B	a
48	C2-95-45	石錐	32 ×37.5× 7	5.46	5						+		a
49	C2-95-49	削片	8 ×13 × 4	0.35									a
50	C2-95-50	削片	6.7×17 × 2.5	0.17									a
51	C2-95-54	削片	17 × 9.5× 2.5	0.29									a
52	C2-95-59	削片	6 ×10.5× 2	0.10									a
53	C2-95-23	削片	3 × 4.5× 2	0.02									a
54	C3-04-11	削片	6 × 7 × 1	0.03									c
55	C3-04-12	削片	5 ×10 × 2	0.06									c
56	C3-04-13	削片	6 ×10.5× 2	0.08									c
57	C3-04-15	削片	16.5×12 × 1.5	0.20									c
58	C3-04-17	削片	6 × 9 × 4	0.13									c
59	C3-04-18	剝片R	9 ×19 × 3	0.34	2								c

No	遺物No	分　類	長×幅×厚（mm）	重(g)	図	打　面	打面長×高	打　角	背面構成	末端	使用痕	折面	クラスター
60	C3-04-19	削片	5 × 4 × 1.5	0.01									c
61	C3-04-20	削片	5.5× 6 × 0.5	0.01									c
62	C3-04-24	削片	4.5× 5 × 1	0.02									c
63	C3-04-27	削片	5 × 7 × 1	0.04									c
64	C3-04-28	削片	3.5× 3.5× 0.5	0.01									c
65	C3-04-32	剝片U	20 ×15 × 5	0.97	12	c	9 × 2.5	89°	II	F			c
66	C3-04-33	削片	8 ×14 × 7.5	0.70									c
67	C3-04-37	削片	8 ×11 × 2	0.12									c
68	C3-04-38	剝片U	14 × 9 × 3	0.29		l			II＋IV	F			c
69	C3-04-42	削片	7 × 5 × 1	0.03									c
70	C3-04-44	削片	17 × 8 × 3.5	0.29									c
71	C3-04-45	ナイフ	16 × 7 × 3	0.32	1								c
72	C3-04-46	削片	6 × 9 × 1	0.11									c
73	C3-04-48	削片	15 × 8 × 2.5	0.31									c
74	C3-04-50	削片	5 × 8 × 3	0.14									c
75	C3-04-52	削片	7 × 5.5× 1.5	0.06									c
76	C3-04-53	削片	7 ×17 × 3	0.38									c
77	C3-04-55	剝片	15.5×20 × 9.0	1.85		1(0)	15 × 7	92°	IV	H			c
78	C3-05-12	剝片	11.5×16 × 3.5	0.53					II＋IV	F		B	c
79	C3-05-13	削片	8 × 9.5× 1	0.04									c
80	C3-05-14	削片	9 × 6 × 1	0.03									c
81	C3-05-15	削片	9 ×10.5× 3.5	0.29									c
82	C3-05-16	削片	9.5× 4.5× 1.5	0.06									c
83	C3-05-17	剝片U	17.5×15.5× 3.5	0.74	18	C	9 × 2.5	94°	II＋IV	F	＋		c
84	C3-05-18	削片	12 × 7 × 2.5	0.22									c
85	C3-05-19	削片	11 ×14 × 4	0.56									c
86	C3-05-20	剝片	18 × 9 × 6.5	0.74		p			II＋III＋IV	F			c
87	C3-05-21	剝片U	33.5×27.5×11	5.77	13	c	10 × 2	122°	II＋III	F	＋		c
88	C3-05-22	剝片R	50 ×26.5×12.5	13.04	25	p			II＋IV	O	＋		b
89	C3-05-23	削片	17.5×11.5× 2.5	0.23									c
90	C3-05-24	削片	7.5× 8.5× 1.5	0.06									b
91	C3-05-26	剝片U	39.5×39.5×11	10.87	22	3(1)	26 ×10	120°	II＋III	F	＋		b
92	C3-05-27	削器	18.5×24 × 7.5	2.99	9								b
93	C3-05-27	削片	13.5×14.5× 3	0.30									b
94	C3-05-31	剝片U	45 ×32.5×10	6.29	14					F	＋		b
95	C3-05-31	削片	6 × 8.5× 5.0	0.18									b
96	C3-05-31	削片	75 × 6 × 0.5	0.02									b
97	C3-05-35	削片	18 × 9.5× 2.0	0.27									b
98	C3-05-36	剝片U	24.5×25 × 5	2.22	19	1(0)	15 × 4		II	F	＋	L	b
99	C3-05-43	削片	20 × 5.5× 3.5	0.19									b
100	C3-05-45	削片	3 × 4.5× 0.5	0.01									b
101	C3-06-11	剝片U	20 ×14 × 2.5	0.45	11	1(0)	8 × 1	90°	II＋III	H	＋		d
102	C3-06-12	石核	16 ×27.5× 7	2.73									d
103	C3-06-14	石核	19.5×31 ×10.5	4.61									d
104	C3-06-15	楔形石器	25.5×39 ×10	5.92	7						＋		d

No.	遺物No.	分　類	長×幅×厚（mm）	重(g)	図	打　面	打面長×高	打　角	背面構成	末端	使用痕	折面	クラスター
105	C3-15-11	剝片U	24　×25.5× 8	2.53		6(3)	21.5× 9	74°	II	F	+		d
106	C3-15-15	剝片U	24.5×21.5× 7	2.45	15	c＋1(0)	8　× 4	117°	III＋IV	H	+		d
107	C3-15-18	剝片	23.5×15.5× 4.5										d
108	C3-15-19	剝片U	27　×18.5× 6.5	1.64	21	1			II＋IV	O	+		d
109	C3-15-21	削片	4　× 9.5× 2.5	0.08									d
110	C3-16-11	楔形石器	18　×16.5× 7.5	1.33	4								d
111	C3-16-12	剝片U	26.5×28　× 9	4.42	20	c	9　× 3	102°	II＋III	F	+		d
112	C3-16-13	剝片	10　× 5.5× 2	0.09					II＋IV	F		B	d
113	C3-16-14	削片	8.5×12.5× 3	0.19									d

（注）石器属性表の見方

打面　打面を構成する剝離面数を示す。括弧内はその内ネガティブバルブのあるものの数である。pは点状打面を，1は線状打面である。またcは自然面である。

背面構成　Iは原礫面に大きく被覆されるもの。IIは腹面の剝離方向と一致する剝離面。IIIは腹面に直行もしくは斜交する方向から加撃された剝離面とする。IVは腹面と逆位の剝離面。ゴチ表記をとるものは礫面付の剝離面である。また，剝離方向の識別の困難な節理面はFとする。背面が複方向の剝離面から構成される場合は，以上の記号を組み合わせて表示する。

末端　剝片末端の形状は3種に分類する。FはFeather end，HはHinge fracture，あるいはStep fracture，OはOutrepassé あるいは石核底面を切るもの。

折面　折損した剝片の遺存部を表記している。Hは頭部，Mは中間部，Bは尾部，Rは背面に対して右側，Rは左側となる。

黒曜石2（fig.58・59）　乳白色の部分と黒味の勝る灰黒色の部分とが不均等な網目状に入り組んだ良質の黒曜石。不純物をほとんど含まず，鈍い光沢を放っている。総数47点の資料からなり，ナイフ形石器7点，楔形石器1点，使用痕，あるいは簡略なリタッチのある剝片5点，剝片7点，削片25点，石核2点という組成を示している。クラスター別の分布は，クラスターaに39点が集中し，他には，クラスターcに7点，eに1点分布している。

本母岩も角礫であったと見られるが，原礫面を留めるものは1例しかなく，剝片剝離の進行した石核か，あるいは剝片の状態での搬入形態が考えられるが，接合資料もあるので，一応前者の可能性を指摘したい。剝片の属性分布をtab.18に示したが，長・幅分布，幅・厚分布ともに黒曜石1に極めて近く，両者の剝片生産技術が相似的であったことが推測される。

石器実測図26～40に本母岩の代表的な石器を示した。26～31，40aはナイフ形石器である。ナイフ形石器の製作技術を知る上で，40の接合資料は極めて重要である。すなわち，縦長剝片を目的的に選択し，この剝片の中央部分を平行四辺形に折断することによって形態を決定するという過程を明らかに示しており，これは，斜めの整形の茂呂型ナイフの生産技術そのもので

黒曜石 2

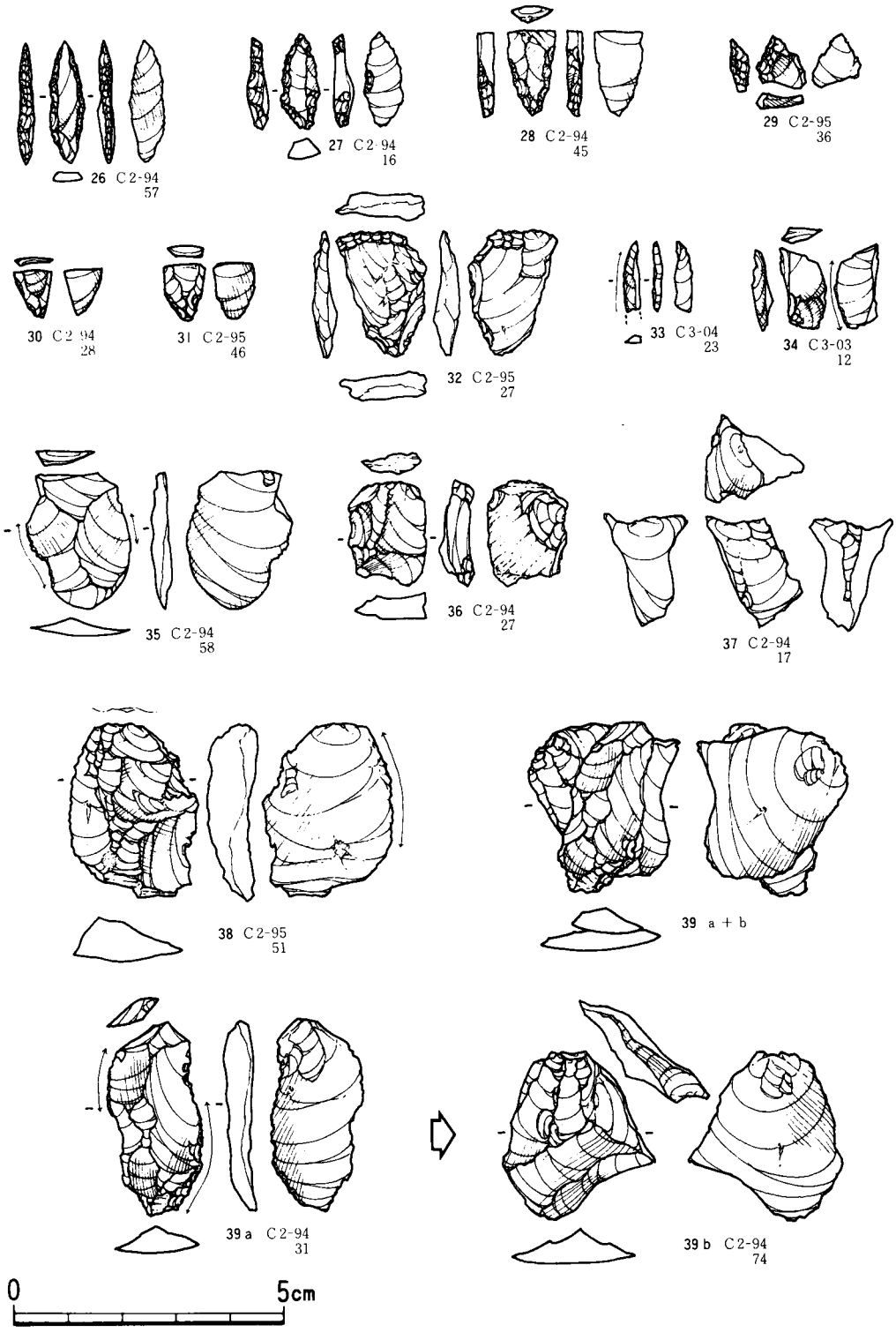
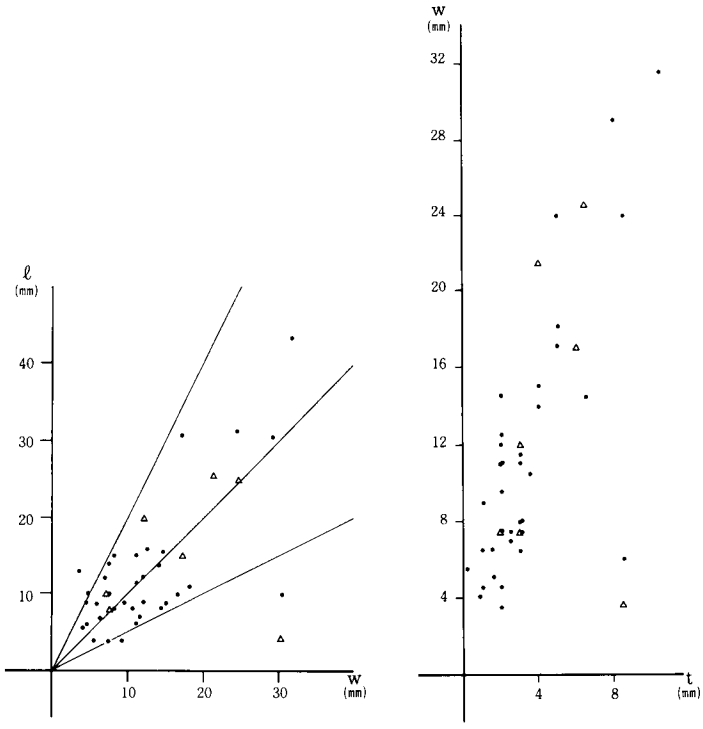


fig. 58　第 3 ブロック出土遺物 (4) (4/5)



tab. 18　第3ブロック黒曜石2剝片の長・幅(左)、幅・厚(右)分布

ある。この，折断整形には精細なブランティングが用いられている。個別に観察しよう。

26は完形の全周加工柳葉形のもの。明らかに斜めの整形手法がとられ，精緻なブランティングが周縁部全体に認められる。器体中央がほぼ平行する細身のもので，尖頭部はたいへん鋭利である。27は両側縁から加工され，特に入念に作出されている。26と同様に縦長剝片を素材とし，打面部を尖頭部側におくことも共通している。腹面の一部に旧いダメージがある。28は約½を欠損しており全体の形状を知ることができない。基部側を尖らすように細かいブランティングがあるが，両側縁とも途中までしか加えられていない。26，27と異なる細部加工状況を示すものかもしれないが，製作中に破損した可能性もある。29～31は細片である。撥ねものであろう。40aは斜め整形の2側縁型であるが，基部に未加工の縁辺が残されること，刃部が斜刃となることなど，26，27とは異なる点が多い。刃部には微細な刃こぼれがある。

32は楔形石器。偏平板状の小型の剝片の両端に砸撃痕がある。図の上縁が加撃部で，下縁の細剝離痕は使用痕かもしれない。両端ともたいへん鋭い。

33～35，38に使用痕のある剝片，36，37に石核を示した。石核は消耗していて本来の状況を知ることができない。

39は剝片2点の接合資料である。同一作業面内における打点位置の大きな移動が窺われる。

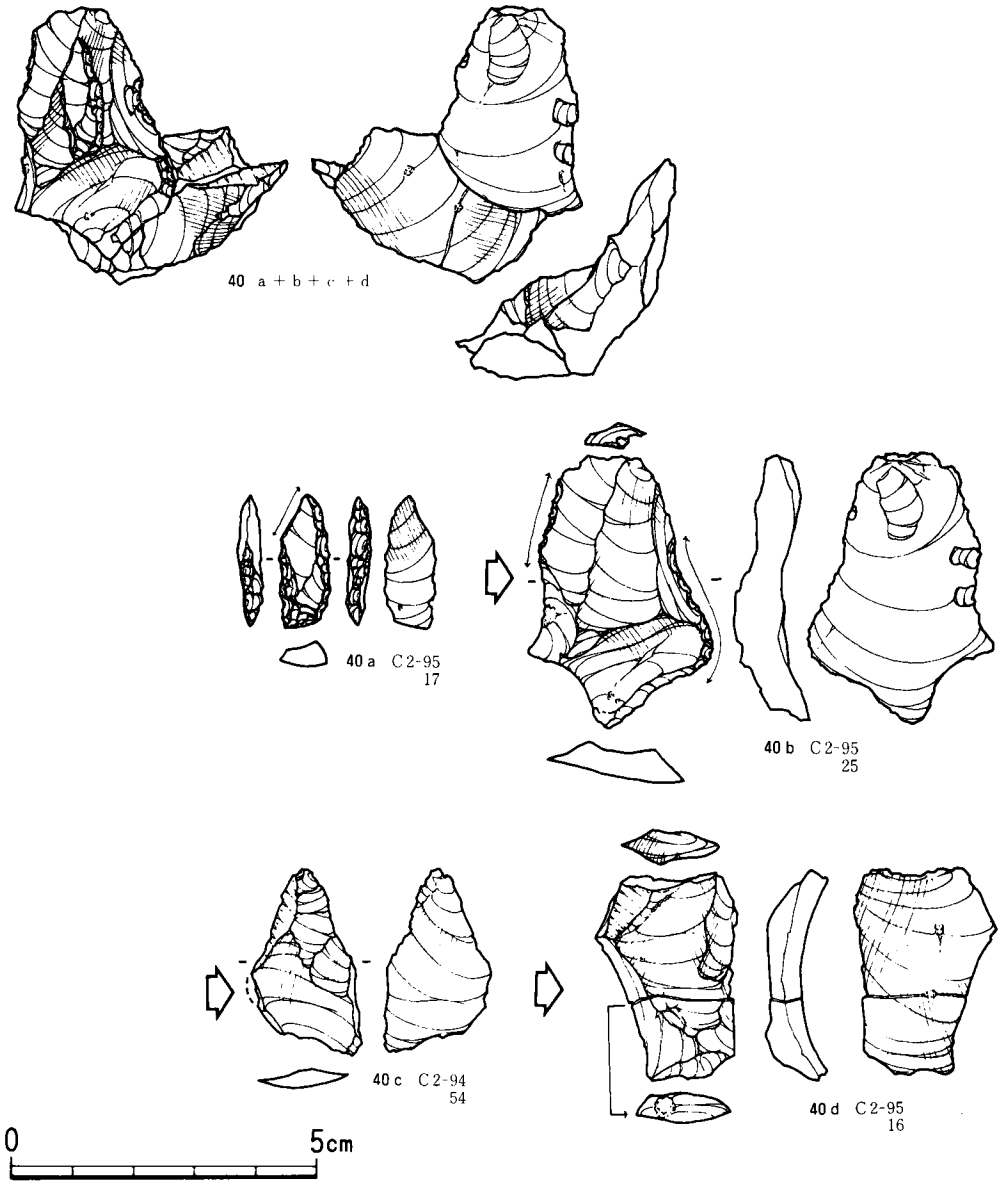


fig.59 第3ブロック出土遺物(5)(4/5)

39aの両側縁には刃こぼれが著明である。背面尾部側右側縁の小剥離はリタッチによるものかもしれない。39bでは，剥片側面にネガティブバルブをもつ旧剥離面があり，これが打面転位の顕著な石核から得られた剥片であることを物語っている。

40はナイフ形石器1点，2次加工ある剥片1点，剥片2個体分3点，計5点からなる接合資料である。40aについては既に触れた。40bは背面右側縁に細部加工がある剥片で，39aと近い刃器であろう。各資料の最終的接合状況から窺われるように，打点位置が作業面の周辺をまわるように移動するとともに，側縁部の一部に作業面と直交するネガ面があり，39と全く同一の剥片生産技術の存在が復原される。

tab. 19　第3ブロック黒曜石2遺物属性表

No.	遺物No.	分　類	長×幅×厚（mm）	重(g)	図	打　面	打面長×高	打　角	背面構成	末端	使用痕	折面	クラスター
114	C2-94-16	ナイフ	17 × 7.5× 4	0.38	27								a
115	C2-94-17	石核	23.5×14.5×11	2.15	37								a
116	C2-94-21	削片	8.5× 6.5× 1.5	0.05									a
117	C2-94-25	削片	7 × 6.5× 1	0.03									a
118	C2-94-27	石核	18.5×14.5× 6	0.61	36								a
119	C2-94-28	ナイフ	8 × 7.5× 2	0.08	30				II	F		B	a
120	C2-94-31	剝片U	30.5×24 × 5	2.39	39a	1(0)	10 × 4	94°	II	F	+		a
121	C2-94-39	削片	4 × 9 × 1	0.03									a
122	C2-94-40	剝片	17.5×12 × 2.5	0.46		1			II	H		R	a
123	C2-94-45	ナイフ	16 × 8 × 3	0.39	28								a
124	C2-94-54	剝片	30.5×16.8× 4.5	1.16	40c	p			II+III	F			a
125	C2-94-57	ナイフ	23 × 6.5× 3	0.36	26								a
126	C2-94-58	剝片U	25.5×21.5× 4	1.27	35				II	H	+	B	a
127	C2-94-74	剝片	30.5×29 × 8	3.90	39b	1(0)	3 × 1.5	131°	II+III+IV	F			a
128	C2-95-16	剝片	15 ×17 × 6	1.20	40d				II+IV	H		B	a
129	C2-95-17	ナイフ	22 × 9 × 4	0.59	40a								a
130	C2-95-19	削片	7 ×11.5× 3	0.15									a
131	C2-95-20	削片	8 × 8 × 2.5	0.13									a
132	C2-95-22	削片	9 × 4.5× 2	0.03									a
133	C2-95-25	剝片U	43.5×31.5×10.5	8.07	40b	1(0)	10 × 4	117°	II+III+IV	O	+		a
134	C2-95-26	削片	4 × 5.5× 0.5	0.01									a
135	C2-95-27	楔形石器	17 ×23.5× 4	1.42	32								a
136	C2-95-31	削片	6 ×11 × 2	0.09									a
137	C2-95-35	削片	15 ×11 × 3	0.36									a
138	C2-95-36	削片	8 ×10.5× 3.5	0.25	29								a
139	C2-95-38	削片	10 × 7.5× 2.5	0.12									a
140	C2-95-40	削片	12 ×12 × 2	0.25									a
141	C2-95-41	削片	11.5×18 × 4.5	0.82									a
142	C2-95-42	削片	10 × 6.5× 3	0.16									a
143	C2-95-43	削片	8.5×14.5× 6.5	0.55									a
144	C2-95-44	削片	16 ×12.5× 2	0.32									a
145	C2-95-46	ナイフ	10 × 7.5× 3	0.21	31				II	F		B	a
146	C2-95-47	剝片U	25 ×24.5× 6.5	3.02					II+IV		+	M	a
147	C2-95-47	削片	9 ×15 × 4	0.35									a
148	C2-95-51	剝片U	31.5×24 × 8.5	5.02	38	1(0)	10 × 3	112°	II+IV	H	+		a
149	C2-95-52	削片	10 × 5 × 1.5	0.05									a
150	C2-95-53	削片	13.5×14 × 4	0.45									a
151	C2-95-58	削片	9 × 9.5× 2	0.11									a
152	C3-03-12	剝片U	15 × 8.2× 3	0.31							+		nd
153	C3-04-16	剝片	15.5×14.5× 2	0.40	34					F			c
154	C3-04-22	削片	5.5× 4 × 1	0.02		1			II				c
155	C3-04-23	削片	13 × 3.5× 1.5	0.07	33						+		c
156	C3-04-30	削片	12 × 7 × 2.5	0.14									c
157	C3-04-54	削片	14 × 7.5× 3	0.23									c

No.	遺物No.	分　類	長×幅×厚（mm）	重(g)	図	打　面	打面長×高	打　角	背面構成	末端	使用痕	折面	クラスター
158	C3-04-26	削片	6 × 4.5× 1	0.01									c
159	C3-04-39	削片	4 × 7.5× 2	0.03									c
160	C2-83-11	剝片	11.5×11 × 2	0.16		c	7 × 1	114°	II	F			a

黒曜石3（fig.60）　濃淡のある乳灰色の縞目が認められる。良質のものであるが，大き目の浮石片が少量混入する。黒曜石2と近似し，やはり光沢に劣る。全体でも5点しか識別されず，楔形石器1点，使用痕のある剝片2点，剝片，削片各1点という内訳となっている。クラスターaに3点，クラスターcに2点分布している。

41は楔形石器である。厚味のある縦長剝片の頭部側に2次的な加撃痕が多く観察される。腹面のポジ面もアンジュレイションを起しており，これ自体が砸撃剝離の所産である可能性を示唆している。尾部側のハジケは軽微である。42〜44に剝片を示した。接合するものがなく，削片も1点しかないので，ブロック内での消費母岩ではあるまい。

tab. 20　第3ブロック黒曜石3遺物属性表

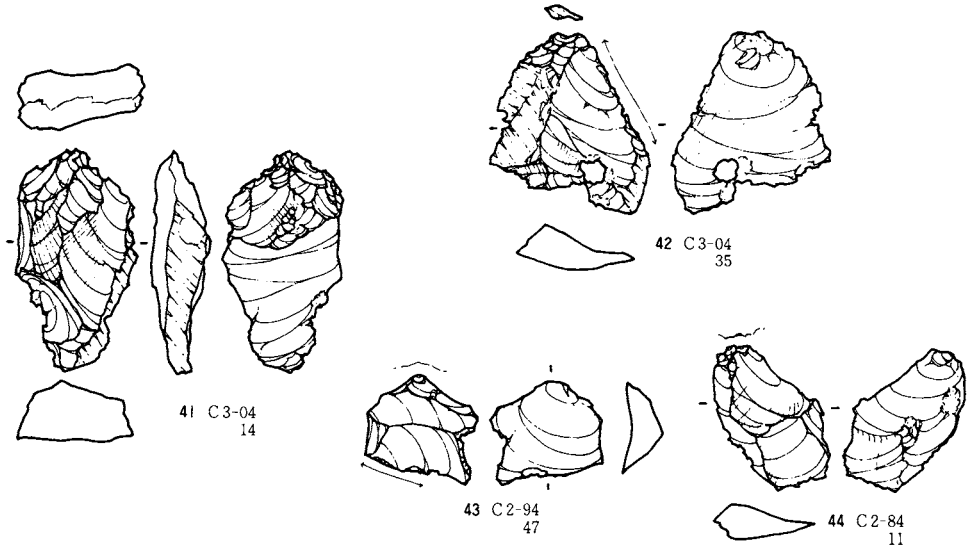
No.	遺物No.	分　類	長×幅×厚（mm）	重(g)	図	打　面	打面長×高	打　角	背面構成	末端	使用痕	折面	クラスター
161	C2-84-11	剝片	24.5×17 × 9.5	1.80	44	1(0)	3 × 1.5	62°	II	F			a
162	C2-85-11	削片	15 ×14 × 4	0.41									a
163	C2-94-47	剝片U	17 ×18.5× 2.5	1.22	43	p			IV	F	+		a
164	C3-04-14	楔形石器	35.5×20 × 8.5	5.43	41								c
165	C3-04-35	剝片U	30 ×26.5× 9	4.38	42	1(0)	6 × 2	97°	II＋III	H	+		c
166	C3-14-13	剝片	25.5×11.5× 4	0.97					III＋IV	H		B	e

黒曜石4（fig.60）　透明な地に明灰色の斑紋の入る特徴がある石材である。ナイフ形石器1点，楔形石器1点，剝片4点，削片5点の計11点の資料から構成されている。分布は，クラスターaに3点，cに6点，またdに1点となっているが，クラスターbの5点とクラスターdの1点は接合して1枚の剝片にもどされているので，ブロック搬入時の構成は，剝片2〜3点とナイフ形石器1点であった可能性が高い。

45はナイフ形石器。本ブロックにあっては例外的に横長剝片を素材としている。細部加工は剝片頭部側を横に切るように加えられている。精細なブランティングである。

46はクラスターbの接合資料。背面を礫面に覆われた厚手の剝片を砸撃法で打ち割っている。おそらく小型縦長の剝片生産を企図しており，そのうち1例（46a）には尾部に小剝離があり，楔形石器として機能していたものと見られる。この楔形石器のみがクラスターdから検出されているので，クラスターcにおける両極石核による剝片剝離によって生産された小剝片がクラスターdに搬入され，ピエスエスキーユ，あるいはその他種々の機能の予測される石器として機能していた過程が想定される。

黒曜石 3



黒曜石 4

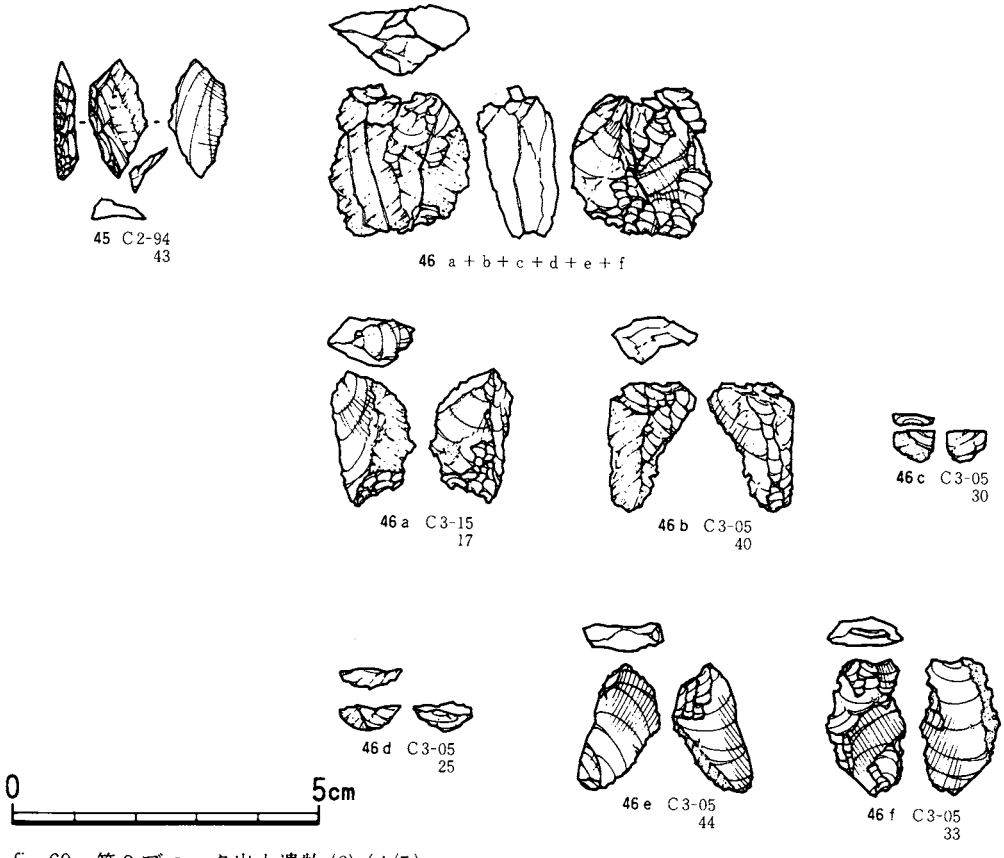


fig.60　第 3 ブロック出土遺物 (6) (4/5)

tab. 21　第3ブロック黒曜石4遺物属性表

No.	遺物No.	分　類	長×幅×厚（mm）	重(g)	図	打　面	打面長×高	打　角	背面構成	末端	使用痕	折面	クラスター
167	C2-94-32	削片	5 × 9 × 2	0.07									a
168	C2-94-43	ナイフ	9 ×18 × 3.5	0.51	45								a
169	C2-95-28	削片	5 ×10 × 3	0.11									a
170	C3-05-25	削片	4 ×10 × 4	0.11	46d								b
171	C3-05-30	削片	6 × 4 ×2.5	0.08	46c								b
172	C3-05-32	剝片	13 × 9 × 3.5	0.37		p			II	O			b
173	C3-05-33	剝片	21.5×13 × 5	0.86	46f	l			III	F	+		b
174	C3-05-40	剝片	21.5×13.5×17	1.25	46b	l			II	F	−		b
175	C3-05-44	剝片	20.5×11 × 4	0.64	46e	p			III	F	−		b
176	C3-15-17	楔形石器	21.5×12 × 7	1.61	46a								d
177	C2-94-53	削片	9 × 8.5×2.5	0.12									a

黒曜石5（fig.61）　半透明の部分と漆黒の部分とが網目状になった良質の石材である。光沢に富み，ごく少量の不純物が点在している。クラスターaに楔形石器1点，使用痕のある剝片1点，クラスターeに剝片1点が分布するにすぎない。従って，本ブロック内で生産された可能性は低く，全て別地点からの搬入品と見られる。

47，49に剝片を，48に楔形石器を示した。楔形石器は角柱状のタイプで，両極石核の一種としたい。背面に2条，腹面に1条縦長の剝片を落した痕跡が残されている。加撃部は打面側にあり，41と近いものであろう。

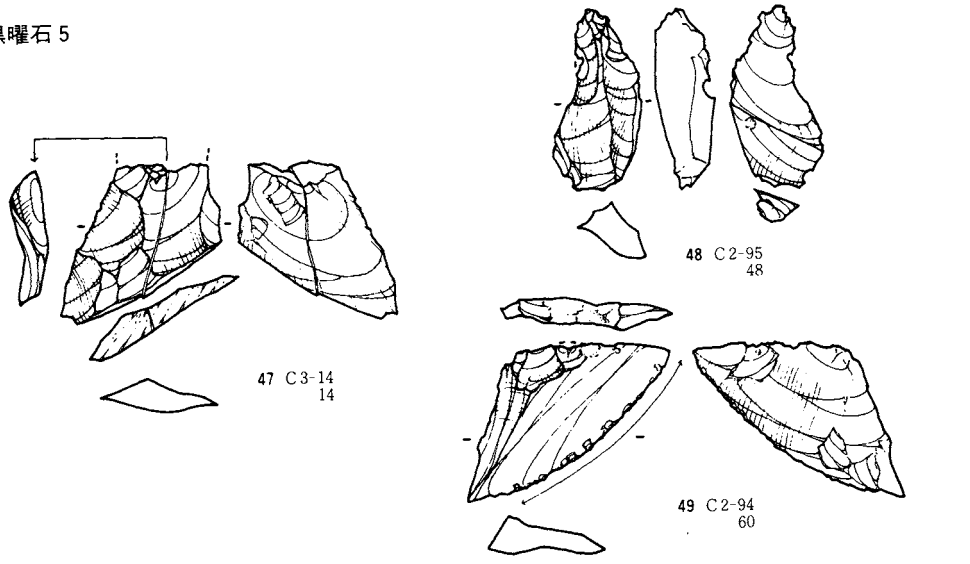
tab. 22　第3ブロック黒曜石5遺物属性表

No.	遺物No.	分　類	長×幅×厚（mm）	重(g)	図	打　面	打面長×高	打　角	背面構成	末端	使用痕	折面	クラスター
178	C2-94-60	剝片U	19 ×41 × 7	3.69	49				IV	H	+	B	a
179	C2-95-48	楔形石器	30 ×14.5× 9	2.44	48								a
180	C3-14-14	剝片	27 ×26.5× 8	3.10	47				II	O	−		e

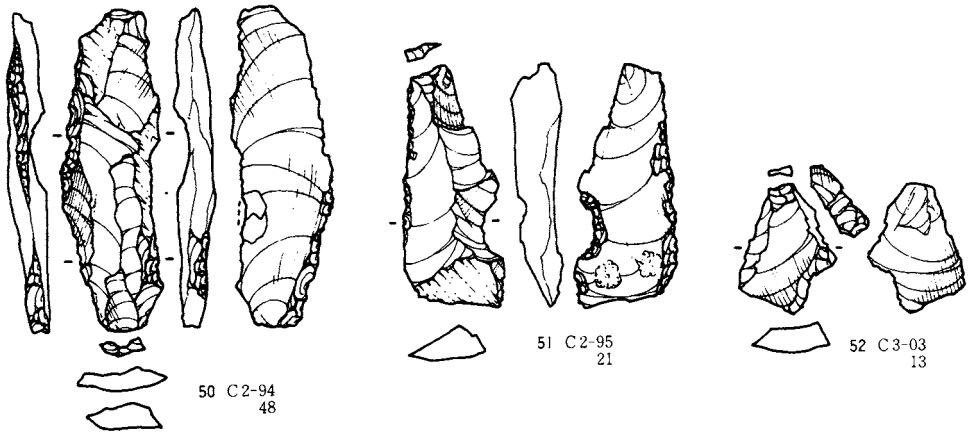
黒曜石6（fig.61）　薄墨を流したような半透明な地に乳白色の細縞が平行に密接して観察される。光沢のある良質の母岩であるが，比較的大き目の球果が少量入る。特徴ある母岩であり，識別は容易であるが，3点あるにすぎず，黒曜石5と同様の遺存形態と評価されよう。分布は，クラスターaにナイフ形石器1点，削器1点，クラスターeに剝片1点がある。

50は石刃状の縦長剝片側縁部に細部加工があり，ナイフ形石器とした。素材が石刃であるか否かは断定できないが，51の例も参考にすると，背面構成が打面部側からの単一方向の加撃軸をもつ剝離面によって構成されていること，また，背稜と側縁が併行になることなど，石刃としてもよいかもしれない。細部加工は基部両側に錯向的にある他，側縁の一部にも及んでいる。とくに，背面左側縁は，途中で一回の反転が介在するが連続性をもったブランティングが施さ

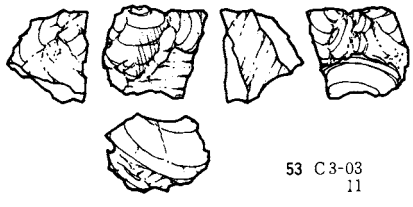
黒曜石 5



黒曜石 6



黒曜石 7



黒曜石 8

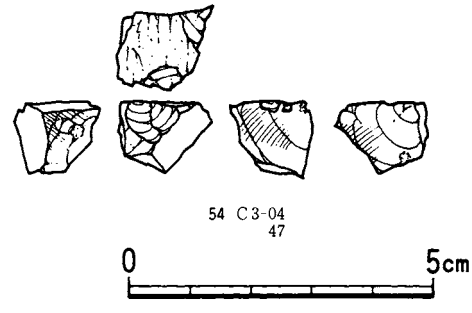


fig. 61　第 3 ブロック出土遺物 (7) (4/5)

れている。打面は除去されておらず，小さ目の複剥離打面が残されている。尖頭部には末端ヒンヂの逆位の小剥離痕が残されているので，おそらく僅かに欠損しているのであろう。

51は石刃素材(？)の抉り入り凹削器かと見られる。抉入部とそれに対応する側縁腹面には小魚鱗状の細部加工があり，抉入部がアクシデントによるものでなく，企図性をもった加工による蓋然性を示唆している。52は不定形な小剥片であるが，側縁部右側にネガティブバルブのある剥離面を留め，打面の転位を示す資料であるのかもしれない。

tab. 23　第3ブロック黒曜石6遺物属性表

No.	遺物No.	分　類	長×幅×厚 (mm)	重(g)	図	打　面	打面長×高	打　角	背面構成	末端	使用痕	折面	クラスター
181	C2-94-48	ナイフ	51.5×16.5× 7	4.18	50								a
182	C2-95-21	削器	40 ×19 × 6.5	3.31	51	P			II	O	+		a
183	C3-03-13	剥片	20.5×16 × 4.5	1.11	52	1(0)	5 × 2	105°	II+IV	F			e

黒曜石7（fig.61）　漆黒を呈し，流紋岩片様の不純物の多く入る石材。他の母岩に比較して粗悪なもので，原産地を異にする可能性が高い。クラスターeに残核が1点あるにすぎない。次に述べる黒曜石8と同様に砕片化している。

tab. 24　第3ブロック黒曜石7遺物属性表

No.	遺物No.	分　類	長×幅×厚 (mm)	重(g)	図	打　面	打面長×高	打　角	背面構成	末端	使用痕	折面	クラスター
184	C3-03-11	石核	16 ×15 ×12	2.42	53								e

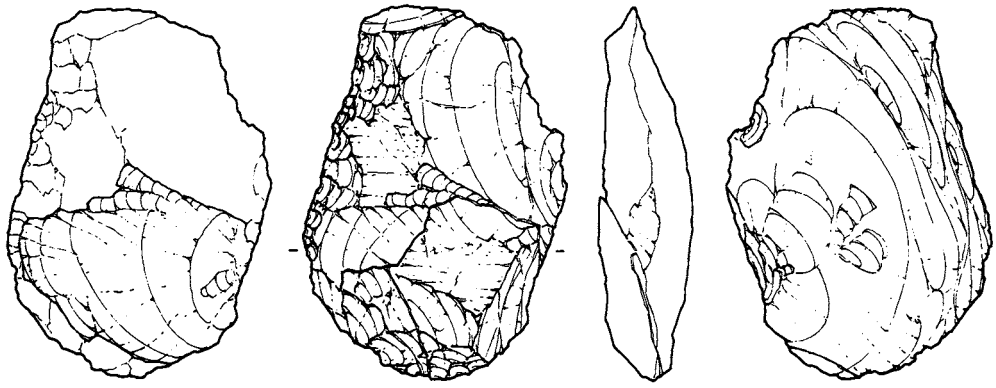
黒曜石8（fig.61）　黒曜石6と似ているが，縞目が太く，かつ密に併走しているので一応別母岩としたが，同一母岩の局所的な差異である可能性は否定できない。クラスターcの中央部に残核が1点検出された。

tab. 25　第3ブロック黒曜石8遺物属性表

No.	遺物No.	分　類	長×幅×厚 (mm)	重(g)	図	打　面	打面長×高	打　角	背面構成	末端	使用痕	折面	クラスター
185	C3-04-47	石核	14 ×14 ×11	1.95	54								c

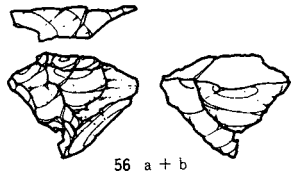
チャート1（fig.62）　青灰色を呈し縞目の多く認められる石材。最も一般的なチャートである。比較的大型の削器1点と，これから剥離されたらしいが剥片4点，削片1点から構成されているが，削器本体に剥片2点1個体分が接合し，本来は削器のみが単体で搬入され，そのリサイクルの過程で剥片類が生産されたと見るべきである。55に削器と剥片の接合状況を示した。横長剥片の底辺から側縁にかけて細部加工があるが，機能中に打面部側を加撃して刃部を切り取るように剥片を落としている。この剥離面を切ってさらに細部加工が施されている。この剥離は明らかに砸撃法によるものであるので，あるいは，剥片生産を目的とするものではなく，ピエスエスキーユへの機能転化に起因するものとも考えられる。

チャート 1

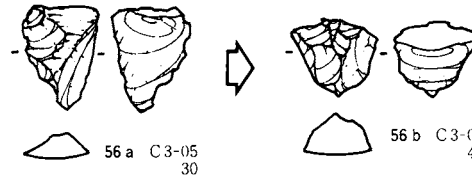


55 C3-04 C3-05 C3-06
49 29 13

チャート 2



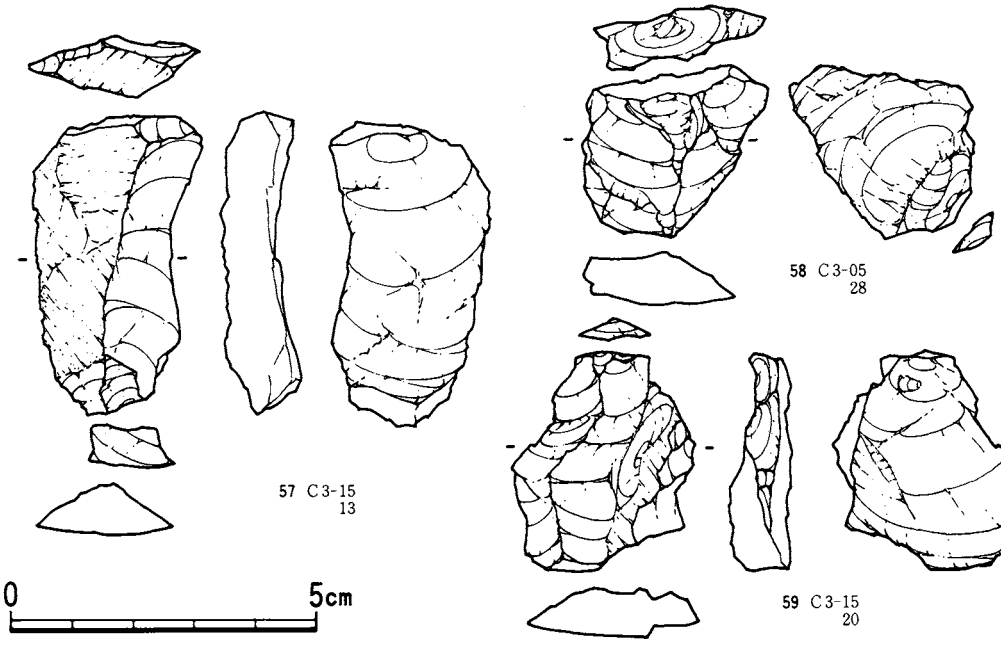
56 a + b



56 a C3-05
30

56 b C3-05
42

珪質頁岩 1



57 C3-15
13

58 C3-05
28

59 C3-15
20

0 5cm

fig.62 第 3 ブロック出土遺物 (8) (4/5)

tab. 26　第3ブロックチャート1遺物属性表

No.	遺物No.	分　類	長×幅×厚（mm）	重(g)	図	打　面	打面長×高	打　角	背面構成	末端	使用痕	折面	クラスター
186	C3-04-49	削器	40.5×58　×12.5	30.86	55								c
187	C3-04-51	削片	8　× 5.5× 3	0.09									c
188	C3-05-18	剝片	21.5×22　× 7.5	2.75					I＋IV	H		B	c
189	C3-05-29	剝片	22　×11.5× 5.5	1.04	55				II	F	－	B	b
190	C3-05-34	剝片	27　×18　× 7	2.66		p			IV	F	－		b
191	C3-06-13	剝片	27.5×26　× 6	4.24	55	1(0)	12　× 2		II＋III＋F			H	b
192	C3-15-14	削片	8　×12.5× 2.5	0.20									d

チャート2（fig.62）　暗い青灰色に半透明の縞が入る。クラスターbに剝片2点があり，接合関係をもつ(56)。打角の大きな平坦打面から剝離された剝片で，その特徴から，部厚い剝片端部を打ち落とす過程で生じたものと見られる。2例共に使用痕は観察されず，企図的剝片の生産に先行して剝離されたものかもしれない。

tab. 27　第3ブロックチャート2遺物属性表

No.	遺物No.	分　類	長×幅×厚（mm）	重(g)	図	打　面	打面長×高	打　角	背面構成	末端	使用痕	折面	クラスター
193	C3-05-30	剝片	17　×12.5× 4.5	0.66	56a	1(0)	11　× 2		II＋III＋F	F			b
194	C3-05-42	剝片	13　×14　× 6.5	0.88	56b	1(0)	14　× 7		II	F			b

珪質頁岩1（fig.62）　流紋岩質凝灰岩と珪質頁岩の互層構造の看取される石材。前者は明黄褐色でやや脆い。後者は茶褐色を基調とする珪化度の高い緻密な岩石である。クラスターbに剝片1点，削片2点が，クラスターcに剝片2点が分布している。57～59に剝片の3例を示した。57は背面に原礫面を留める縦長のもの。上下に打面を残している。この石器の尾部側が凝灰岩となっていた。58，59は不定形の例で，58では折断後に腹面から剝片2枚を落しており，石核に転用されている。59の側面には腹面側を打面とする剝片剝離痕があるので，本母岩の剝片生産技術が石核の回転を伴う多打面型のものであったことが知られるが，57例のように，側縁と背稜の並行する石刃状の剝片を企図的に生産している点に注意したい。

tab. 28　第3ブロック珪質頁岩1遺物属性表

No.	遺物No.	分　類	長×幅×厚（mm）	重(g)	図	打　面	打面長×高	打　角	背面構成	末端	使用痕	折面	クラスター
195	C3-05-28	削片	9　×19　× 6.5										b
196	C3-05-28	剝片	29　×26.5×11	6.50	58	1(0)	8　× 4.5		IV	F			b
197	C3-05-13	剝片	48　×17.5×14	11.50	57	1(0)	16　× 4		II	O			c
198	C3-05-20	剝片	35　×30　×11	9.07	59	1(0)	13　× 4		II	O			c

珪質頁岩2（fig.63）　青灰色で白色の細縞の入るもの。やや粘板岩質の石材である。クラスターaに剝片2点，削片4点が集中している。60に剝片の一例を示したが，資料が少なく詳細

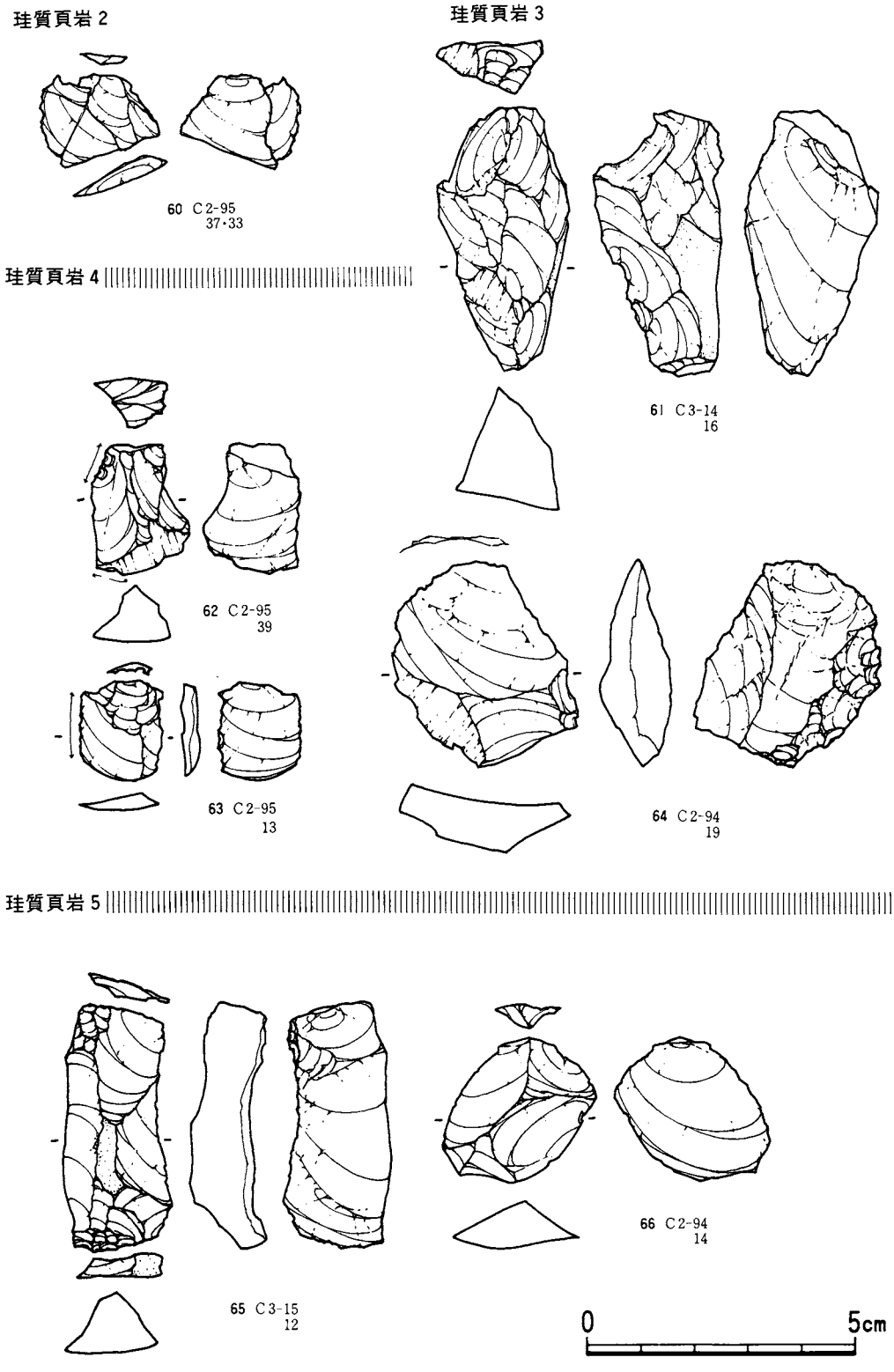


fig.63　第3ブロック出土遺物(9)(4/5)

の分からない母岩である。

tab. 29　第3ブロック珪質頁岩2遺物属性表

No.	遺物No.	分　類	長×幅×厚（mm）	重(g)	図	打　面	打面長×高	打　角	背面構成	末端	使用痕	折面	クラスター
199	C2-94-59	剥片	33　×22.5×13	6.24		2(0)	21　×10		II＋F	H			a
200	C2-95-15	削片	10　× 4.5× 1.5	0.05									a
201	C2-95-33	削片	9　×14.5× 2.5	0.24	60								a
202	C2-95-34	削片	10　×14　× 2.5	0.26									a
203	C2-95-37	剥片	15.5×19.5× 4	1.26	60	1(0)	8.5× 2		II			H	a
204	C2-95-56	削片	9.5× 6　× 2.5	0.08									a

珪質頁岩3（fig.63）　僅かに緑色を帯びた青灰色をした珪化岩。白色の細い縞が縦横に認められる。クラスターaに剥片が1点，クラスターeに剥片と，剥片化した石核が1点ずつある。61にそれらのうち一例を示す。分割面を打面として横長貝殻状の剥片を剥離した後，打面を石核側面に転移している。これと同一の剥片剥離過程は，黒曜石1に存在した(fig.56 14)。本例の場合，あるいは打面の更新を企図したものかもしれないが，同一母岩を対象として異種剥片を生産している点は指摘しておきたい。

tab. 30　第3ブロック珪質頁岩3遺物属性表

No.	遺物No.	分　類	長×幅×厚（mm）	重(g)	図	打　面	打面長×高	打　角	背面構成	末端	使用痕	折面	クラスター
205	C2-94-77	剥片	10.5×18　× 4.5	0.89					II	F		B	a
206	C3-14-15	剥片	15　×21　×10	2.43					II＋IV			M	e
207	C3-14-16	石核	50　×24.5×24	23.63	61								e

珪質頁岩4（fig.63）　流紋岩質の部分と珪化した部分との互層が観察される。流紋岩質の部分は灰色で，斑晶が多い。珪化部は青灰色で均質な石材となっている。珪化凝灰岩とも見られるが，暫定的に頁岩とした。5点あり，使用痕あるいはリタッチのある剥片が3点，削片が2点という構成となっている。全てクラスターaに集中的に分布していた。62，63は使用痕のある剥片，64は腹面に簡単な細部加工と見られる剥離痕があり，削器のように使われたものとも考えられる。

tab. 31　第3ブロック珪質頁岩4遺物属性表

No.	遺物No.	分　類	長×幅×厚（mm）	重(g)	図	打　面	打面長×高	打　角	背面構成	末端	使用痕	折面	クラスター
208	C2-94-19	剥片R	29　×36　×12	11.45	64	1(0)	26　×10		II＋IV	F	＋		a
209	C2-95-13	剥片U	18.5×16　× 3	0.88	63	1(0)	7.5× 1		II	H	＋		a
210	C2-95-39	剥片U	24　×18.5× 9.5	3.39	62	3(0)	13　× 9		II	H	＋		a
211	C2-95-55	削　片	13.5×14　× 5.5	0.45									a
212	C2-95-57	削　片	9　×12.5× 5	0.65									a

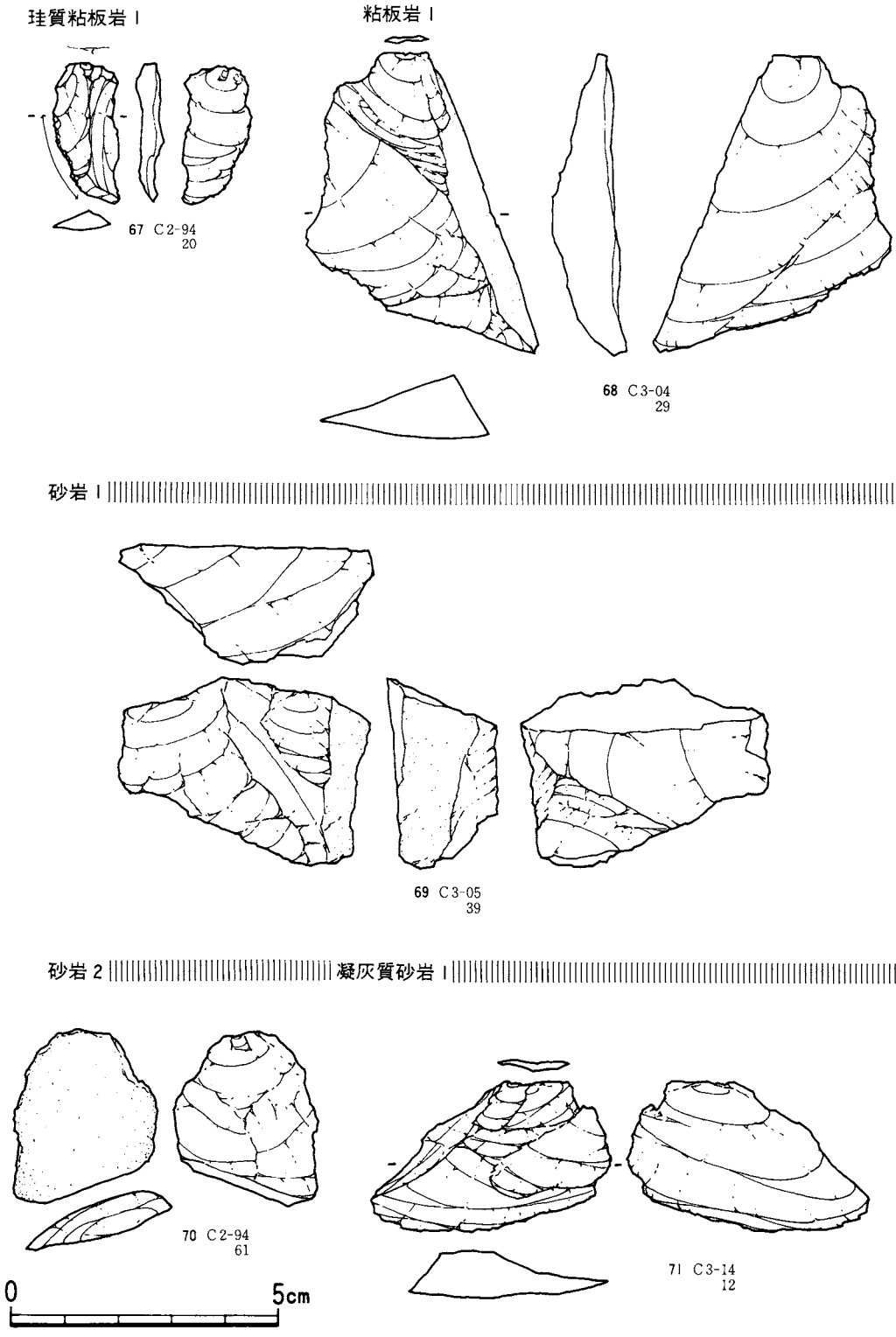


fig. 64　第 3 ブロック出土遺物 (10) (4/5)

珪質頁岩5（fig.63） 茶褐色の均質で緻密な石材である。剝片3点からなり，クラスターaに2点，クラスターbに1点ある。65は両設打面をもつ石核から剝離された縦長剝片。打面は平坦で，打面に接して頭部調整痕かとも見られる細かい剝離痕がある。珪質頁岩1の例(57)と比較することができるかもしれない。66は不定形の剝片で，求心状の剝離痕が看取される。特に65のような側縁と背稜のそろった石刃状の剝片の存在が注目される。

tab. 32 第3ブロック珪質頁岩5遺物属性表

No.	遺物No.	分 類	長×幅×厚（mm）	重(g)	図	打 面	打面長×高	打 角	背面構成	末端	使用痕	折面	クラスター
213	C2-85-12	剝 片	13 ×19 × 6.5	1.48		1(0)	7 × 2		II＋II	F			a
214	C2-94-14	剝 片	25 ×31 ×11	4.97	66	2(0)	11 × 4.5		II＋III	F			a
215	C3-15-12	剝 片	45.5×22 ×16.5	10.56	65	1(0)	15 × 3		II	O			d

珪質粘板岩1（fig.64） 黒味の強い青灰色をしている。使用痕と見られる刃こぼれの著明な縦長剝片が1例ある。縦長先細りの剝片であるが，背面にはいろいろな方向から加えられた剝離痕が切り合い，求心的剝離による石核から得られたものと考えられる。クラスターaの検出。

tab. 33 第3ブロック珪質粘板岩1遺物属性表

No.	遺物No.	分 類	長×幅×厚（mm）	重(g)	図	打 面	打面長×高	打 角	背面構成	末端	使用痕	折面	クラスター
216	C2-94-20	剝片U	27 ×13.5× 5.5	1.25	67	1			II＋III＋IV	F	−		a

粘板岩1（fig.64） 暗灰色を呈し，僅かにホルンフェルス化している。クラスターcに剝片が1点分布するのみである(68)。剝片は背面右側に原礫面を留める縦長のものであるが，背面を構成する3枚の剝離面の加撃方向と切り合い関係から，打点を大きく移動しながら先細りの縦長剝片を順次剝離した過程が窺われる。

tab. 34 第3ブロック粘板岩1遺物属性表

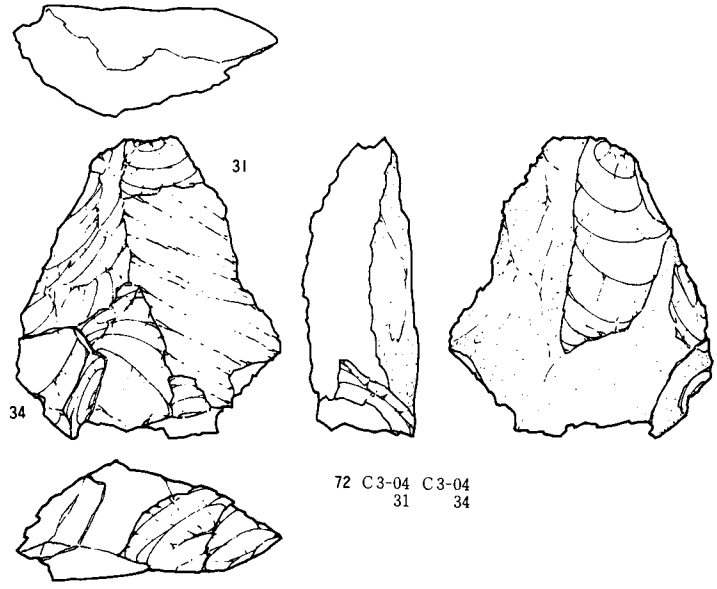
No.	遺物No.	分 類	長×幅×厚（mm）	重(g)	図	打 面	打面長×高	打 角	背面構成	末端	使用痕	折面	クラスター
217	C3-04-29	剝片	57 ×44 ×10.5	17.44	68	1(0)	9 × 1.5		II	F	−		c

砂岩1（fig.64） 暗灰色の若干粗粒の石材であり，剝片石器の素材としては不適であろう。しかし，石核が1点クラスターbから検出された(69)。大型の剝片，あるいは分割礫を用いており，ラフな剝離痕が観察される。

tab. 35 第3ブロック砂岩1遺物属性表

No.	遺物No.	分 類	長×幅×厚（mm）	重(g)	図	打 面	打面長×高	打 角	背面構成	末端	使用痕	折面	クラスター
218	C3-05-39	石核	34.5×47 ×18	29.91	69								b
219	C3-12-11	削片	10.5× 9 × 3	0.38									

流紋岩 I



流紋岩 2　　流紋岩 3

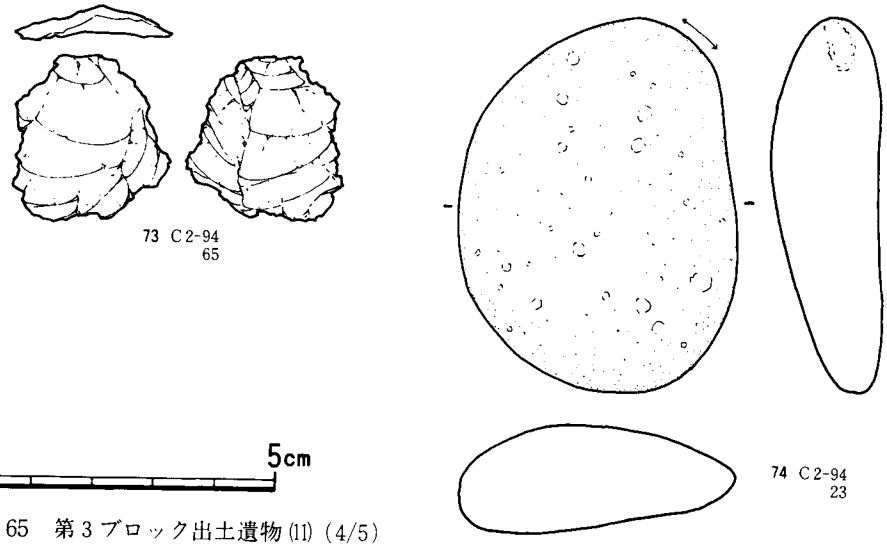


fig. 65　第 3 ブロック出土遺物 (11) (4/5)

tab. 36　第 3 ブロック砂岩 2 遺物属性表

No.	遺物No.	分　類	長×幅×厚 (mm)	重(g)	図	打　面	打面長×高	打　角	背面構成	末端	使用痕	折面	クラスター
220	C2-94-60	削片	9 ×11.5× 1.5	0.23									a
221	C2-94-61	剝片	32 ×26.5× 7	7.30	70				I		−	B	a
222	C3-15-16	剝片	28.5×34.5× 7	7.86		c	16 × 5		不　明	H	−		d

砂岩2（fig.64） 明灰色の粗粒な石材で，剝片2点と削片1点の計3点の資料を含む。分布はクラスターaに剝片1点，削片1点が，クラスターdに剝片が1点ある。おそらく，石槌の加撃時に生じた剝落片であろう。

凝灰質砂岩1（fig.64） 灰緑色に風化しているが，新鮮な断口は暗緑色をしている。若干粒子が粗く，凝灰質砂岩とした。クラスターeに剝片が3点あるにすぎない(68)。剝片はいずれも横長のものである。この母岩に関しては，あるいは石斧の製作過程に生じたものである疑いが濃いが，石斧本体が遺存していないので，断定することはできない。

tab. 37 第3ブロック凝灰質砂岩1遺物属性表

No.	遺物No.	分 類	長×幅×厚（mm）	重(g)	図	打 面	打面長×高	打 角	背面構成	末端	使用痕	折面	クラスター
223	C3-13-11	剝片	17 ×36 ×12	4.58		1			F	F	−		e
224	C3-14-11	剝片	33 ×50.5×20	17.93		1			II＋IV	F	−		e
225	C3-14-12	剝片U	26.5×46 ×11	9.89	71	1(0)	14 × 1.5		II	F	＋		e

流紋岩1（fig.65） 斑晶の顕著な石材で，礫群構成礫としては良く見かけるが，石器石材としてはほとんど用いられることのないものである。クラスターcに楔形石器1点と，それから剝落した剝片2点，削片4点が集中し，クラスター周辺での母岩消費過程を窺うことができる。72が楔形石器と剝片の接合状況で，節理面で分割された礫片を素材として，砸撃法によって剝片が生産されている。従って，この楔形石器は両極石核の一種と考えねばならない。

tab. 38 第3ブロック流紋岩1遺物属性表

No.	遺物No.	分 類	長×幅×厚（mm）	重(g)	図	打 面	打面長×高	打 角	背面構成	末端	使用痕	折面	クラスター
226	C3-04-31	楔形石器	50 ×42 ×17	29.40	72								c
227	C3-04-34	削片	15 ×21 × 8	1.78									c
228	C3-04-36	削片	7 ×10 × 3.5	0.20									c
229	C3-04-40	剝片	30 ×49 ×10	15.14		p			X＋F	H	−		c
230	C3-04-41	削片	30 ×25 × 4	0.73									c
231	C3-05-11	削片	5 × 6 × 4	0.29									c
232	C3-05-41	剝片	27 ×26 × 0.5	2.61		1(0)	8 × 4		I	H	−		c

流紋岩2（fig.65） やはり斑晶の多い暗灰色の石材で，剝片石器素材としては不適なものである。クラスターaに剝片が2点あるが，いずれも線状打面の偏平なもので，両極石核から剝離されたものと見てよい。流紋岩1と同様の過程が予測される。

tab. 39 第3ブロック流紋岩2遺物属性表

No.	遺物No.	分 類	長×幅×厚（mm）	重(g)	図	打 面	打面長×高	打 角	背面構成	末端	使用痕	折面	クラスター
233	C2-94-51	剝片	12 ×20 × 4	0.72		1			不 明	H	−		a
234	C2-94-65	剝片	27 ×26 × 5	2.21	73	1			II	F	−		a

流紋岩3（fig.65） 偏平な小型の円礫で，外観は流紋岩1，2と近い。礫としたが，側縁の一端に僅かに潰痕様に加撃痕かと見られる部位があるので，石槌の一種かもしれない。クラスターaに帰属している。

tab. 40 第3ブロック流紋岩3遺物属性表

No	遺物No.	分 類	長×幅×厚（mm）	重(g)	図	打 面	打面長×高	打 角	背面構成	末端	使用痕	折面	フラスター
235	C2-94-23	礫	61 ×47 ×17	69.14	74								a

以上の石器類の他に2点ほど特異な遺物が検出されている。

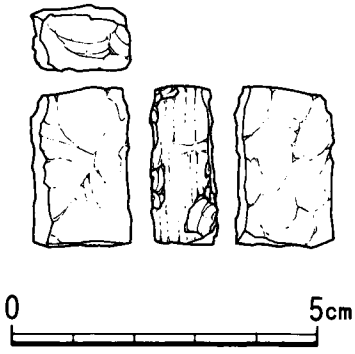


fig.66 炭塊（4/5）

炭塊（fig.66，PL.26） クラスターa外縁部Ⅶ層から検出した。比重が軽いが化石材の一種と判定した。長さ25.0mm，幅14.5mm，厚さ10.2mmのやや偏平な角柱状をしている。漆黒色で全体に微光沢を帯びる。一面に風化面と見られる平滑な部分(図上面)があるが，その他の5面は剝離面と見られる。また，側面に小剝離痕があり，あるいは企図的なものとも考えられるが判然としない。重量3.510g。

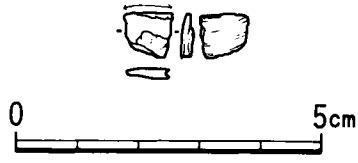


fig.67 貝製品（4/5）

貝製品（fig.67，PL.26） 化石化したカキの貝殻片である。クラスターc Ⅸ層から出土した。7.5mm×7.7mmの方形を呈し，厚さは2.1mmある。重量は0.134g。意図的にトリミングされて方形にされたものか，それとも自然破砕によるものか分からないが，縁辺部には細かい剝離痕が表裏に亘って観察される(図の矢標部)。この剝離痕が人為的なものか，それとも使用痕と考えるかは見解の岐れるところだが，いずれにせよ，本資料が人為的に搬入され，何らかの機能を帯びていたものであることを疑うことはできない。断定し得る材料に欠けるが，貝製の刃器破片，あるいは装身具に関連するものと考えている。なお，化石自体は，化石化の状況から，下総台地基底層の一部に見られる貝化石層から採集された蓋然性が高い。

C．小結 第3ブロックはⅨ層中部を産出層準とするブロックで，a～e 5箇所のクラスターから構成されている。各クラスターは，同一母岩の分布と接合関係によって，ほぼ同時に，あるいは継起的に形成されたものと推定された。検出された遺物は，石器・石製品と貝製品とから構成されている。ナイフ形石器は良質の黒曜石を多用し，斜め整形と呼ばれる剝片の折断加工による小型2側縁加工となるものが主体を占め，ナイフ形石器の編年的研究に一石を投じるものであろう。ナイフ形石器以外には楔形石器が目立つ存在と言えるが，その多くは両極石

核ではないかと思われる。石器以外には，炭塊と貝化石を利用した貝製品とがあり，いずれもブロック内にあり，しかも石器群と同様の層準から産出しているので，その資料的価値は高い。稀少な遺物であるため比較研究は困難であるが，将来の類例増加を俟ちたい。このように，遺物総数234点にすぎないものの，本ブロック調査の意義は大きい。

B　第4ブロック（fig.68・69，PL.3・19）

a．**分布状況**　D2-12区から13区にかけて6点の遺物が散漫に分布していた。ブロックに接して溝が掘り込まれており，掘削によって一部の遺物が失われた可能性もある。6点のうち1点は溝内採集で出土地点が不明であるが，採集地点がブロックの近傍であるので，便宜的にここに含めた。遺物の産出層準はⅨc層である。

b．**出土遺物**　剝片1点，削片2点，石核(溝内採集)1点，石槌2点1個体，合計6点の遺物から構成されている。fig.69に一部を示した。1は砂岩製の石槌で，大小2点が接合したが，少し不足する部分がある。偏平で長円形をした礫の側面に打痕がある。打痕は礫側縁の半分程の範囲に帯状に観察されるが，全周はしない。また，ハジケて小剝離を生じている部分もある。2は黒曜石製で横長剝片。尾部が折れている。乳白色で不純物を含む石質で，第3ブロックには認められない母岩である。3は黒色の珪質頁岩製の石核。平坦打面から小型の剝片を連続的に落している。打面は上下にあり，多打面型の石核かと思われるが，残核状のものであり，本来の剝離工程を復原することは困難である。この石核から剝離された剝片は遺存していない。

C．**小結**　散漫に微量の剝片と石槌が分布するブロックである。産出層準は第3ブロックと

tab. 41　第4ブロック遺物集計表

母岩番号	ナイフ	削器	石錐	楔形石器	石刃	細石刃	剝片U・R	剝片	削片	石核	石槌	礫	総数	数量比(%)	総重量(g)	重量比(%)
珪質頁岩 1	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	2	33.3	21.89	16.0
珪質頁岩 2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	16.7	18.07	13.2
砂岩 1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	2	33.3	94.16	68.9
黒曜石 1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	16.7	2.53	1.9
総数	0	0	0	0	0	0	0	1	2	1	2	0	6	100	136.65	100
組成比（%）	0	0	0	0	0	0	0	16.7	33.3	16.7	33.3	0				

tab. 42　第4ブロック遺物属性表

No.	遺物No.	分類	長×幅×厚（mm）	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	母岩
1	D2-12-11	剝片	18 ×33 × 6.5	2.53	2	1(0)	7.5× 2.0	104°	Ⅱ			H	黒曜石 1
2	D2-12-12	石槌	82.5×56.5×15.5	87.15	1								砂岩 1
3	D2-13-11	石槌	23 ×28.5×13	7.01	1								砂岩 1
4	D2-13-13	削片	7.5×13.5× 4.0	0.19									珪質頁岩 1
5	D2-13-14	削片	30.5×35 ×19	18.05									珪質頁岩 1
6	048-0009	石核			3								珪質頁岩

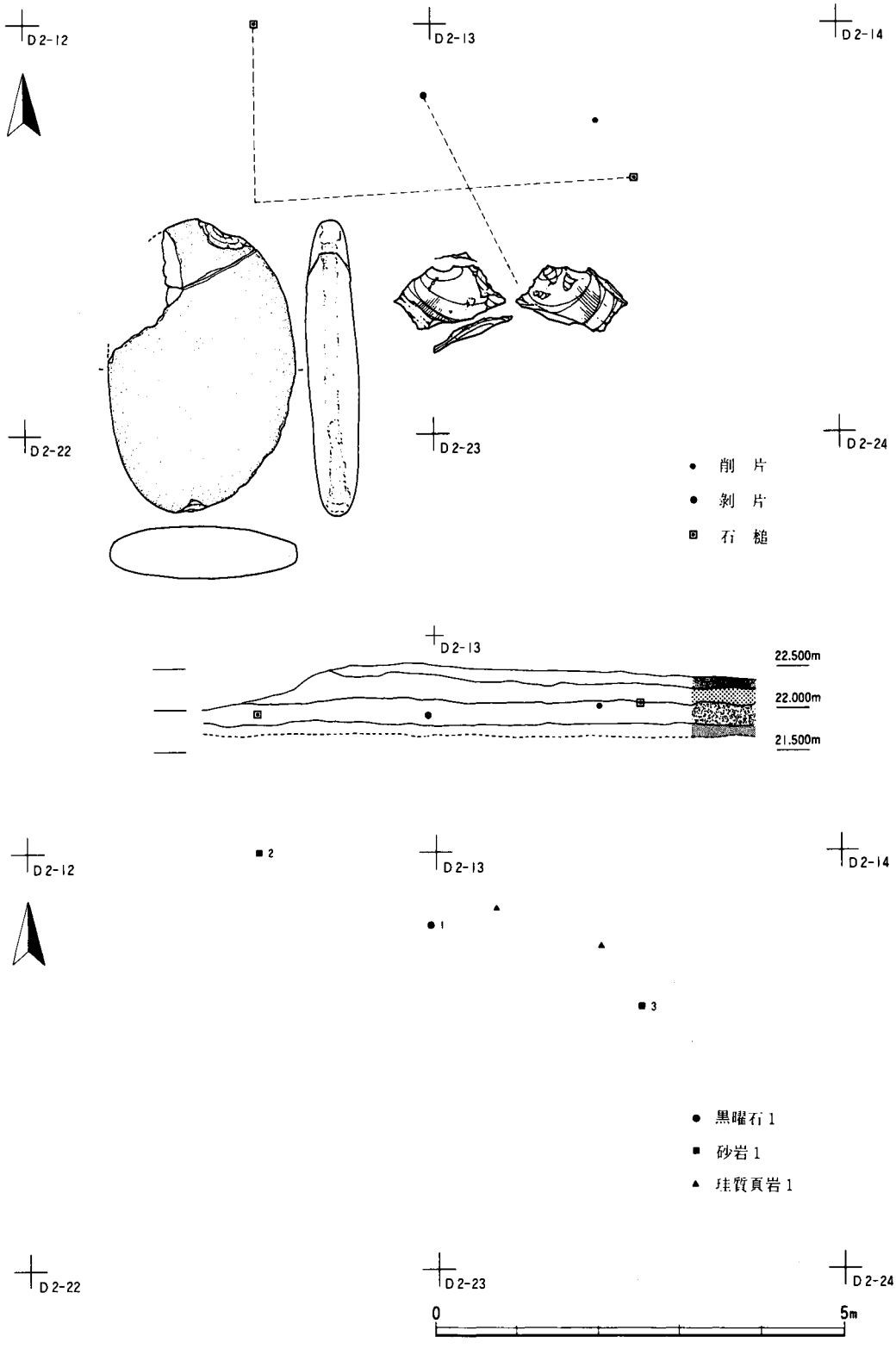


fig.68 第4ブロック器種別(上)・母岩別(下) 遺物分布状況 (1/80)

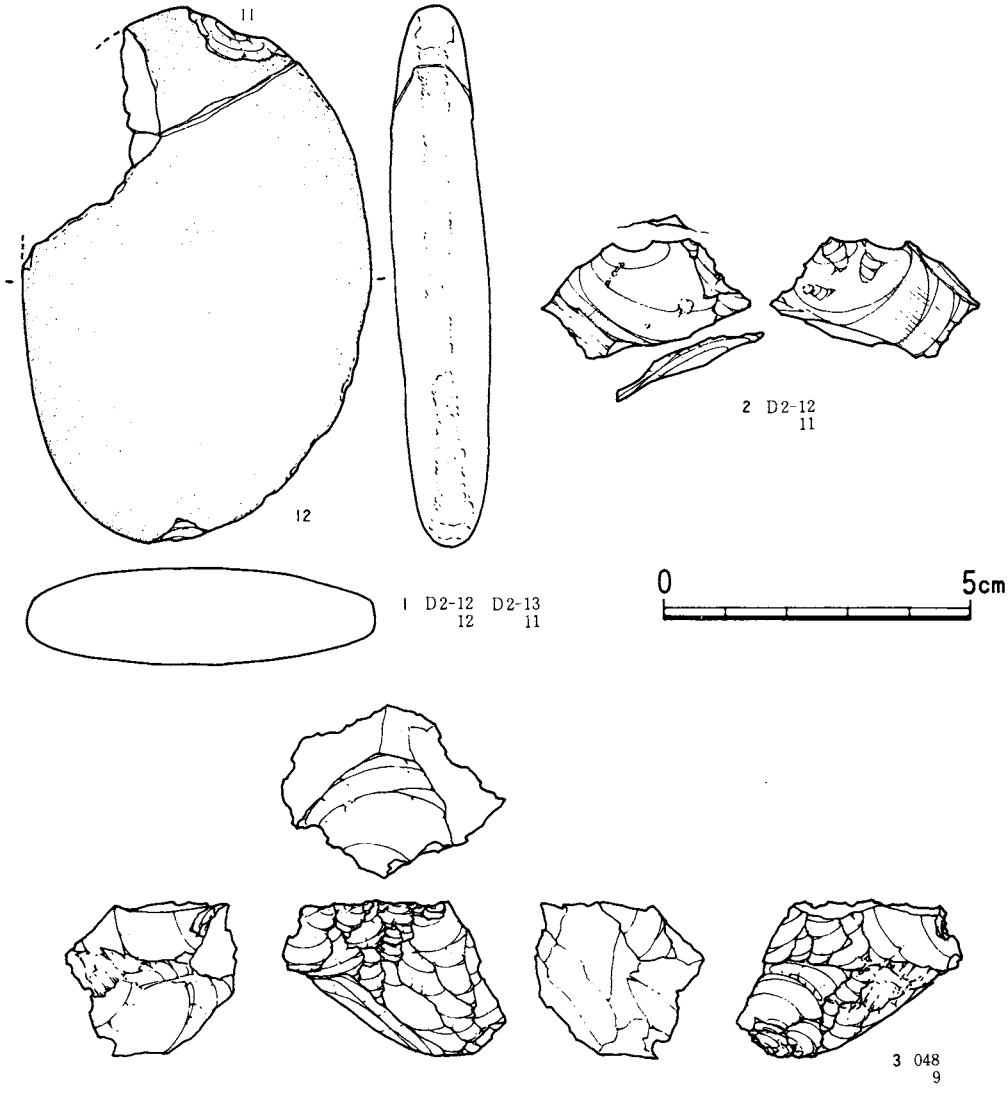


fig.69　第4ブロック出土遺物（4/5）

同じか若干下部に相当しよう。ブロックとしては最も小規模な部類で，これのみをとり上げても情報量は乏しいが，他のブロックと対照することにより意味をもつことになろう。

C　第5ブロック（fig.70・71，PL.4・19）

a．**分布状況**　D2-69区にある。長軸4 m，短軸2 m程度の範囲内に16点の遺物が集中していた。分布域東縁にやや集中度の高い部分があるが，それ以外の部分は低密度である。産出層準はⅨa層からⅨc層にかけてであるが，正確な位置の確定はできない。しかし，第3ブロックと時期的に大きな距たりはないものと見られる。

b．**出土遺物**　総数16点の遺物があるが，剝片類ばかりで，2次加工のある遺物は遺存して

いなかった。fig.71に剝片の一部を示した。1～5が黒曜石製，6，7が安山岩製である。黒曜石は漆黒で光沢に富むものであるが，浮石片を多く含むもの（黒曜石1）と，少ないもの（黒曜石2）の2種を識別した。黒曜石の剝片は1のように平坦打面をもつものもあるが，2～4のよ

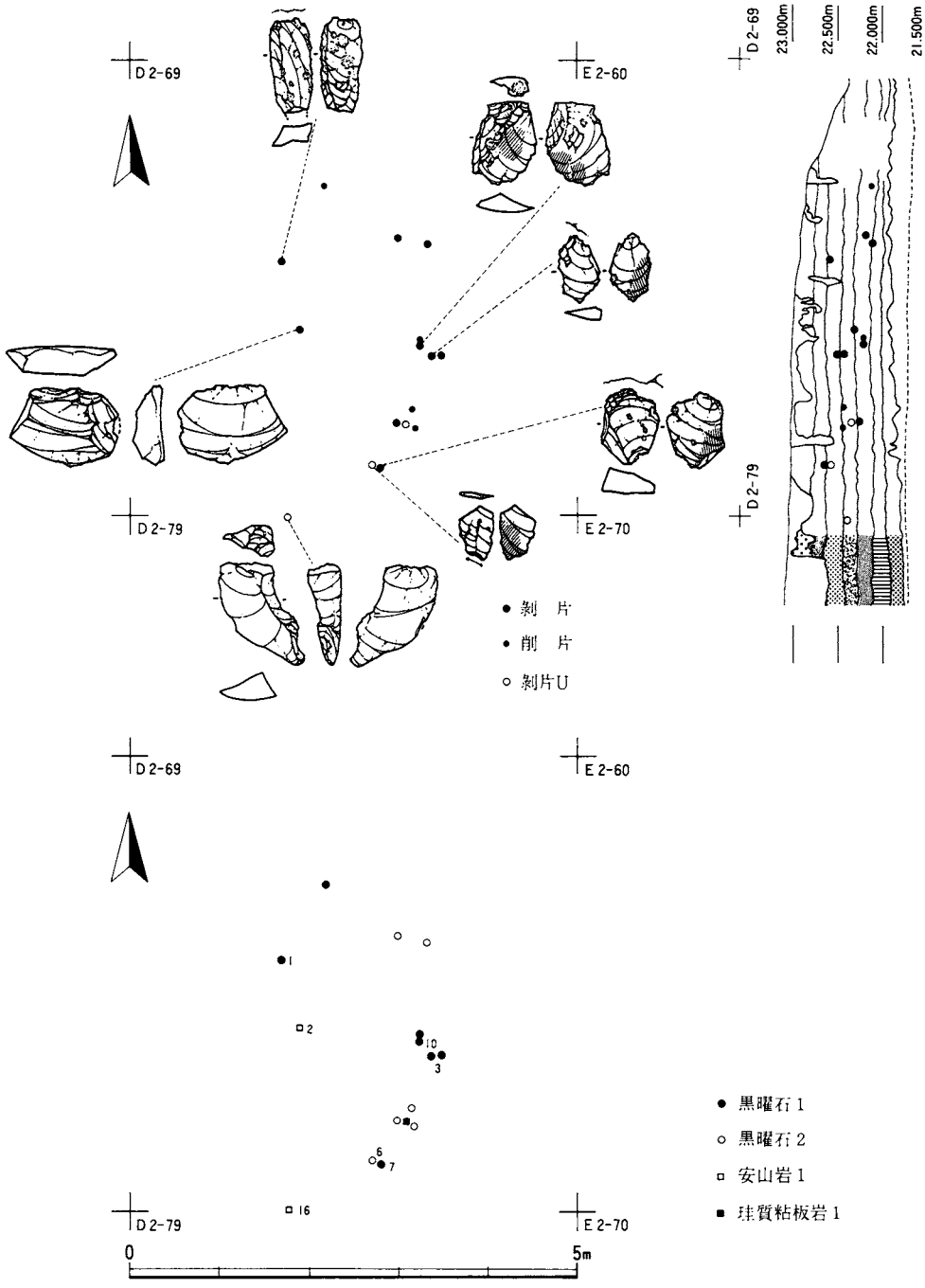


fig.70　第5ブロック器種別（上）・母岩別（下）遺物分布状況（1/80）

うに打面のハジケた小型のものが目立つ。6は，複剝離打面と共に，側面にもネガ面をもつ安山岩の剝片である。多打面の石核の存在が予測されよう。7はこれと同一母岩のものである。本例の打面部もハジケている。いずれの母岩も他と共通するものではない。

c．**小結**　第4ブロックと同様に小規模なブロックである。16点の遺物があるが，そのうち13点が黒曜石2種の小剝片によって占められており，限定的な剝片生産の痕跡を留めている。剝片の多くが線状打面をもつもので，あるいは両極石核から落されたものしれない。また，安山岩の例では，回転系多打面型の石核の存在が予想された。

D　ブロック外の遺物（fig.72・73，PL.19）

a．**C3-33区**（fig.72）　Ⅶ層から砂岩の円礫が1点採集された。偏平で平面形態は卵形をしている。特に使用痕は観察されないが，人為的に搬入されたものであることは疑うことができ

tab. 43　第5ブロック遺物集計表

母岩番号	ナイフ	削器	石錐	楔形石器	石刃	細石刃	剝片 U・R	剝片	削片	石核	石槌	礫	総数	数量比(%)	総重量(g)	重量比(%)
珪質粘板岩 1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	6.3	1.08	5.7
黒曜石 1	0	0	0	0	0	0	0	4	3	0	0	0	7	43.8	7.92	41.7
黒曜石 2	0	0	0	0	0	0	1	3	2	0	0	0	6	37.5	1.47	7.7
安山岩 1	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	2	12.5	8.52	44.9
総数	0	0	0	0	0	0	3	8	5	0	0	0	16	100	18.99	100
組成比（%）	0	0	0	0	0	0	18.8	50.0	31.3	0	0	0				

tab. 44　第5ブロック遺物属性表

No	遺物No	分類	長×幅×厚（mm）	重(g)	図	打面	打面長×高	打角	背面構成	末端	使用痕	折面	母岩
1	D2-69-11	剝片	25.5×12 × 6.5	2.00	2	1			Ⅲ	O			黒曜石 1
2	D2-69-12	剝片	21 ×30 × 7	4.87	7	1			Ⅱ	F			安山岩 1
3	D2-69-13	剝片	18.5×11 × 4.5	0.64	4	p			Ⅱ	O			黒曜石 1
4	D2-69-14	剝片	19.5×15.5× 5.5	1.22		1(0)	9 × 3.5	119°	Ⅱ	F			黒曜石 1
5	D2-69-15	削片	4 ×65 × 1	0.02									黒曜石 2
6	D2-69-16	剝片U	14 ×10 × 1.5	0.20	5				Ⅱ	F		B	黒曜石 2
7	D2-69-17	剝片	20 ×17 × 6	1.57	3	1			Ⅲ+Ⅳ	O			黒曜石 1
8	D2-69-18	削片	5.5× 7 × 1.5	0.06									黒曜石 2
9	D2-69-19	削片	8 × 7.5× 6	0.37									黒曜石 1
10	D2-69-19	削片	24 ×17 × 6	1.91	1	1(0)	11 × 5	不能	Ⅱ	H			黒曜石 1
11	D2-69-20	削片	7 ×16 × 3	0.21									黒曜石 1
12	D2-69-21	剝片	12.5×10 × 2	0.29					Ⅲ	H		B	黒曜石 2
13	D2-69-22	剝片	15 ×21 × 2.5	0.57		1			Ⅱ+Ⅲ+Ⅳ			H	黒曜石 2
14	D2-69-23	剝片U	20 ×13 × 5.5	1.08		1(0)	7 × 8.5	104°	Ⅳ	F			珪質粘板岩 1
15	D2-69-24	剝片	11 ×15 × 2.5	0.33					Ⅳ			M	黒曜石 2
16	D2-79-11	剝片U	31 ×18 ×10	3.65	6	3(1)	15.5×10	105°	Ⅱ+Ⅳ	F			安山岩 1

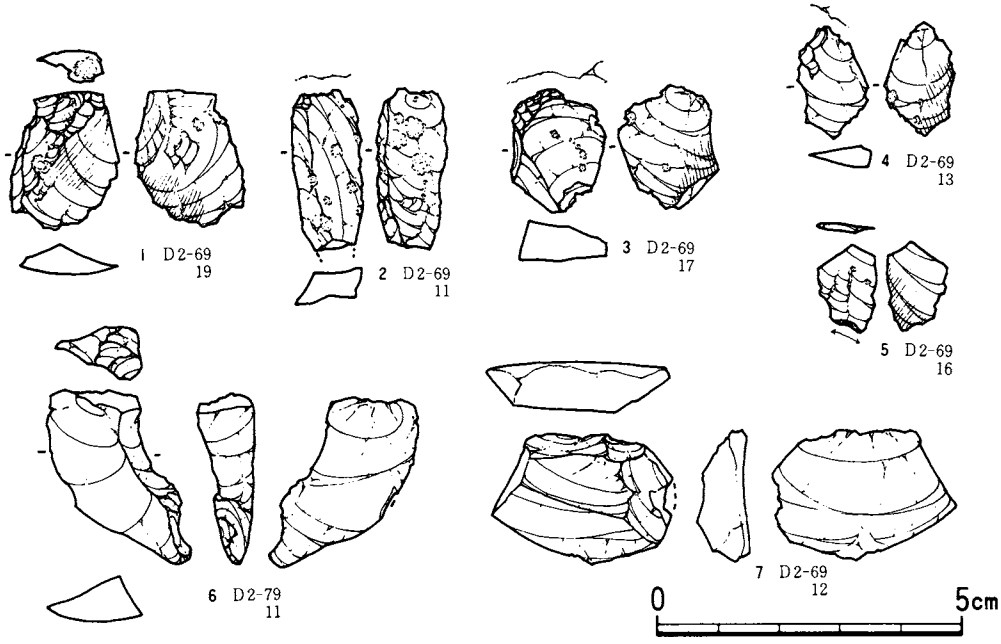


fig.71　第5ブロック出土遺物（4/5）

ない。暗褐色の礫表には微光沢がある。71㎜×40㎜×18㎜。重量77.23g。

b．C3-59区（fig.73）　IX層から珪質頁岩製の剝片が検出された。拡張調査を実施したが他に周辺に遺物は認められなかった。チョコレート色の非常に良質の素材が用いられている。打面は線状で，末端はフェザー。底辺の一部に細かい刃こぼれがある。19㎜×29.5㎜×5.5㎜，重量は1.75gある。

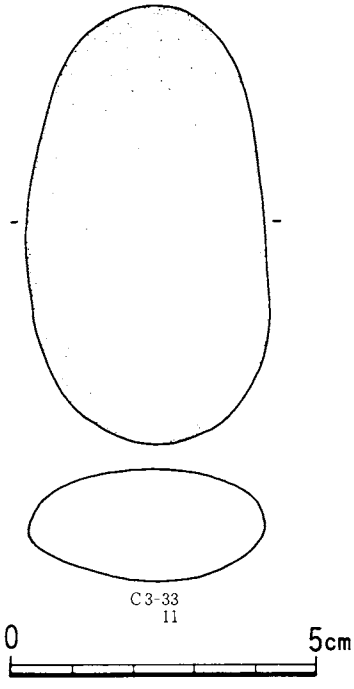


fig.72　ブロック外の遺物(1)

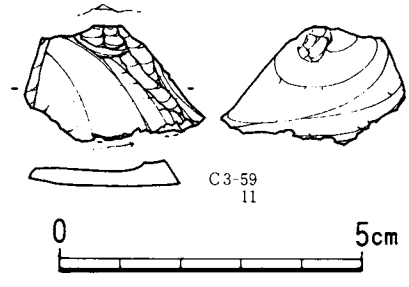


fig.73　ブロック外の遺物(2)

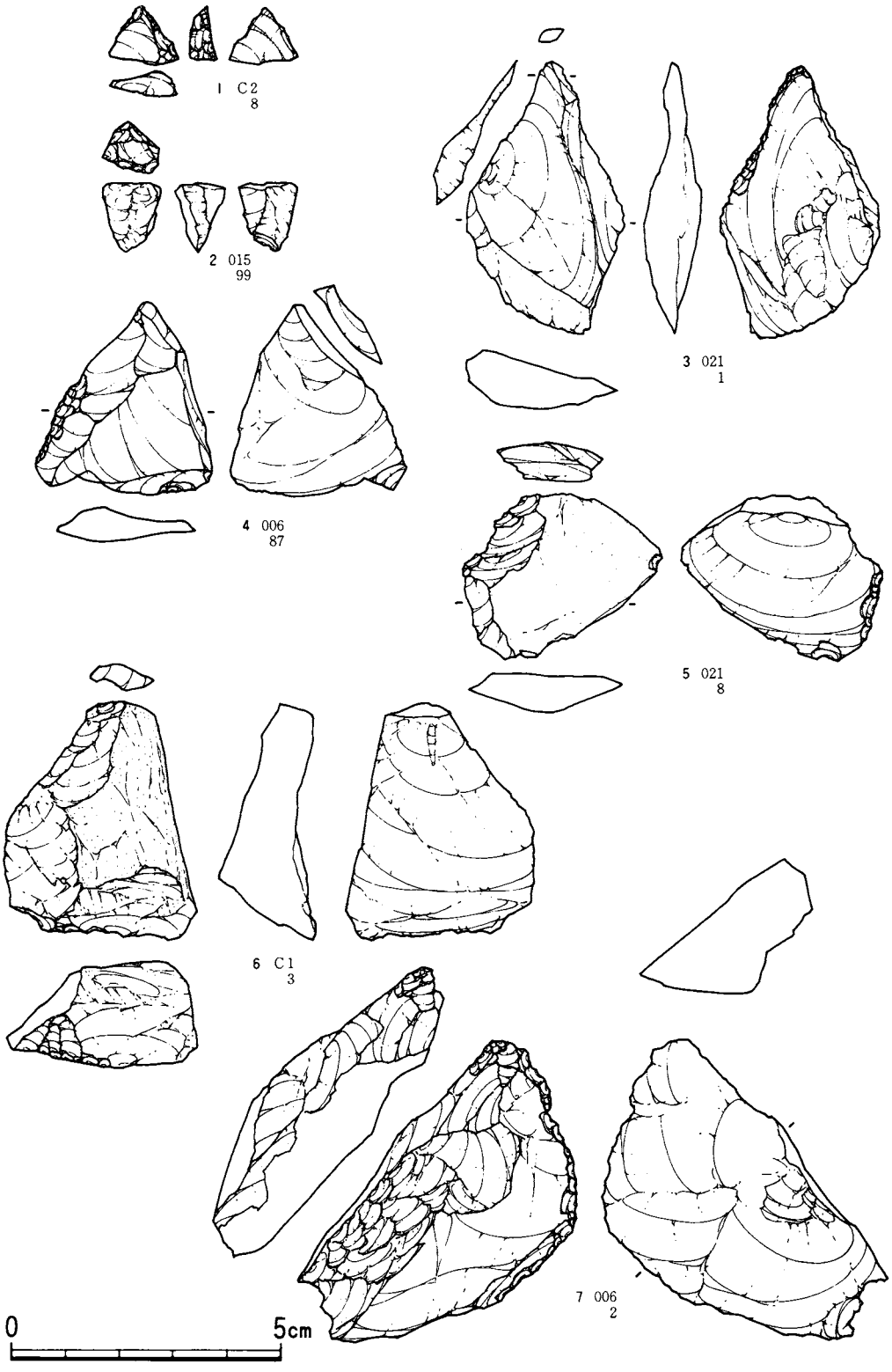


fig. 74　荒久遺跡(1)表面採集の先土器時代遺物

(3)表面採集の遺物（fig.74，PL.26）

上層遺構の検出・精査に伴い若干量の遺物が採集された。先土器時代の遺物と断定できないものもあるが，便宜的に本項で紹介しておきたい。

1は第1ブロックの項で触れた黒曜石製のナイフ形石器。尖頭部の破片で，背面右側縁にブランティングが看取される。2はチャート製の石核。打面の入念な調整痕からみて，細石核であるかもしれない。3～5は細部加工のある剝片。3が珪質粘板岩，4がメノウ，5が珪質頁岩を素材としている。6は珪化した凝灰石の分厚い剝片端部に付刃した端削器。7はメノウ製側削器。厚手の横打剝片製で，側縁から端部にかけて細部加工が認められる

(4)要約

最後に各文化層・ブロックの内容を要約しておきたい。問題点に関しては，Ⅳ．まとめの項において議論したい。

第1ブロック　ソフトローム層中から検出されたブロックである。細石核は遺存していなかったが，19点の細石刃が含まれ，先土器時代終末期の遺物集中地点と判定された。細石刃の他には剝片が卓越するが，明らかに細石核と同一の石材のものが相当量あるところから，その多くは細石核の生産に伴って作出されたものと推定した。かつて，佐倉市大林遺跡の細石器石器群の良好な一括資料を検討した折りに，細石核の生産に随伴して生じる多量の調整剝片の一部が選択的に刃器に転化されていることを知ったが，本ブロックの遺存状況はこの選択が一般的に行われていた可能性を示唆していよう。

第2ブロック　第1ブロックと大体同一の層準から若干の資料の出土があった。帰属時期を判断するのに必要な石器がないので，第1ブロックとの関係は不明である。石核に分厚い剝片のポジ面を打面とする横打のものが一例ある。この種の石核は細石器石器群にも伴うことがあるが，細石器の共伴が確認されない場合，その帰趨の決定は困難である。

第3ブロック　Ⅸa層下部を産出層準とするブロックである。233点の遺物が5箇所の集中分布(クラスター)に分かれて出土した。クラスターには資料数の多いもの（クラスターa)，中くらいのもの(クラスターb，c)，少ないもの(クラスターd，e)の別があるが，これらの形成過程にまで立ち入った議論は不可能であった。ただし，クラスターaに関しては，その資料数(123点・53%）とともに，濃密な炭化物片の集中と重複し，かつ，これ以外のクラスターと比較して，遺物の出土レヴェルが総体的に低いことなど，何らかの遺構の存在を予測させる。この事実は調査時において既に気付かれていたのであるから，意識的な遺構検出が行われなかったことが惜しまれてならない。

石器には，ナイフ形石器，削器，石錐，楔形石器，二次加工・使用痕のある剝片など，いろいろな種類のものがあった。他に，剝片・削片，石核があるが，石核には良好な資料が含まれ

ていない。石斧の有無は不明である。以下，各器種の特徴をまとめておきたい。

ナイフ形石器は大別して2類に分けられる。

1類　剝片製で極小のナイフ形石器。製作手法は資料40の接合状況から，縦長剝片の斜め折断によるもので，二側縁加工の茂呂型ナイフの範疇内にある。大半が本類に帰属する。

2類　石刃製で基部を中心とする細部加工の看取されるもの。基部加工尖頭石刃の範疇内にある。50の一例があるにすぎない。

削器には定型なものがないが，剝片の側縁に簡略な付刃のあるものを側削器とした。

石錐は剝片端部を尖らせたものが少量知られている。

楔形石器　一般的に第2黒色帯上部の楔形石器は大きく3類に分けることができる。

1類　薄手・偏平なもので，表裏にわたって両端からの加撃による多数の剝離痕の切り合う例が一般的である。

2類　厚手・角柱あるいは角錐状のもの。加撃痕の切合いは相対的に少ない。

3類　薄手・偏平である点は1類と共通するが，末端Stepとなる加撃痕が素材縁辺にのみ集中するもの。素材は1類・2類から獲得された剝片である場合が多い。

本ブロック例を見ると，2類の典型例を欠き，1・3類を主体としているおり，石器組成の重要な一環となっている。また，各類にはそれに対応する剝片が生産されるが，そのような剝片を素材に楔形石器が再生産されている。すなわち，石核－剝片という関係は相体的であり，互換的である。

剝片生産技術は大別2類に分けた。

1類　石核上に打点位置を固定せずに適宜移動を行って，長・幅指数100前後の剝片を得るもの。ナイフ形石器1類を始め，大半は石器素材を供給している。

2類　石刃生産技術である。限定的であり，詳細は不明である。ナイフ形石器2類の素材を作出しているが，刃器としての即自的利用が一般的である。

石材としては，たいへん良質の黒曜石が使用されている。将来的に原産地分析を予定しているが，肉眼的には信州系と判定される。このほかには，チャート・珪質頁岩・粘板岩・流紋岩など，何れも本地域における一般的石材が少量ずつ，しかし，多数の母岩がある。

第4ブロック　IX層下部の零細なブロックである。石槌と少量の剝片類，石核1点という構成であり，情報量の不足は否めない。

第5ブロック　第3ブロックと大体同一の層準に帰属している。両ブロックの関連性が気にかかるが，確実な共通母岩・接合関係はない。浮石片を多量に含む粗悪な黒曜石が卓越しており，青葉の森公園の調査区にこれと同一母岩を持つブロックがある。ところが，このブロックには，別に第3ブロックに顕著であった信州系とも見られた良質の黒曜石があり，間接的にではあるが，これら3者が何らかの関連の糸によって結ばれていた可能性が指摘されるに至った。

2．土器類

出土した遺物の殆どは土器である。縄文式土器は遺構外から5点を出土したのみで残りは弥生時代後期以降に属するものである。以下，竪穴住居出土のものから説明する。竪穴住居出土の土器はは大きく3つの時期に分けることができたので,遺構の場合と同様弥生時代終末期～古墳時代前期，古墳時代中期，古墳時代後期の3時期に分け古い時代の順番で記載した。同時期の中では原則として遺構番号が若いものから説明した。また，遺構中から出土しても明らかにその遺構には伴わないと考えられるものについては遺構外出土土器として取り扱った。

土器観察表(tab.50)は巻末にまとめた。

実測図の縮尺は1/4である。但し拓影図は1/3とした。

(1)弥生時代終末期～古墳時代前期

竪穴住居004出土土器(fig.75，PL.27・28)

鉢1，高杯2，壷2，甕1，台付甕2の合計8点が出土し，一通りの器種は揃っている。いずれも遺存状態が良好で,炉から出土した高杯(2)の他は貯蔵穴P1脇の北東隅の床からまとまって出土し，これは住居廃棄時に近い状態を示していると思われる。図示したほかは土師器の小破片が僅かで埋没過程での混入品は少ない。

2は高杯で炉2内から出土した。図示できた中では最も遺存状態が悪く杯部の4分の1しか遺存していない。外面下半部に僅かに稜を持つ。1・3～8は先述したように北東隅にまとまっていたものである。1は鉢である。外面を刷毛調整，内面をナデる。3の壷は8の台付甕の脇から出土した。口縁部を欠損する。底部には明瞭に木葉痕が残っている。火熱により器面の荒れが著しい。4は高杯で，脚部を欠損するが杯部は口縁の一部を欠くだけである。脚部の欠損部分も古いため当初からなかったものと思われる。口縁を下にし，伏せてあった。5の壷は7の甕と8の台付甕にはさまれて横倒しになっていた。口縁部の2分の1と胴中位の3分の1を欠損する。胴部は球形を呈するがかなり歪んでいる。折り返した口縁もその幅が一定ではなく全体に雑な成形である。また内外面の刷毛調整も丁寧ではない。6は台付甕である。4の高杯の脇から横に倒れた状態で出土した。脚部を欠損する以外は完形であった。脚部の割れ口は古く摩耗しており，煤が付着する。脚部欠損後も甕として使用していたのであろう。火熱により外面胴下半部は変色し，外面胴上半部と内面胴下半部には煤が付着する。器表面は火熱により荒れる。7は甕で口縁を下に伏せて置かれていた。胴下半部を欠損する。口端部は面取りし刷毛調整する。8は大型の台付甕でやはり伏せて置かれていた。土圧よって胴中位まで押し潰されているが，中央に脚部がそのまま落下していた。復原したところ一部を欠損するものの遺存状態は良好であった。最大径は胴上位にある。胴部外面は斜方向に丁寧に刷毛調整を行うが下半部では火熱による器面の荒れによりはっきりしない。外面の胴上半部と内面の胴下半部には煤が多量に付着する。

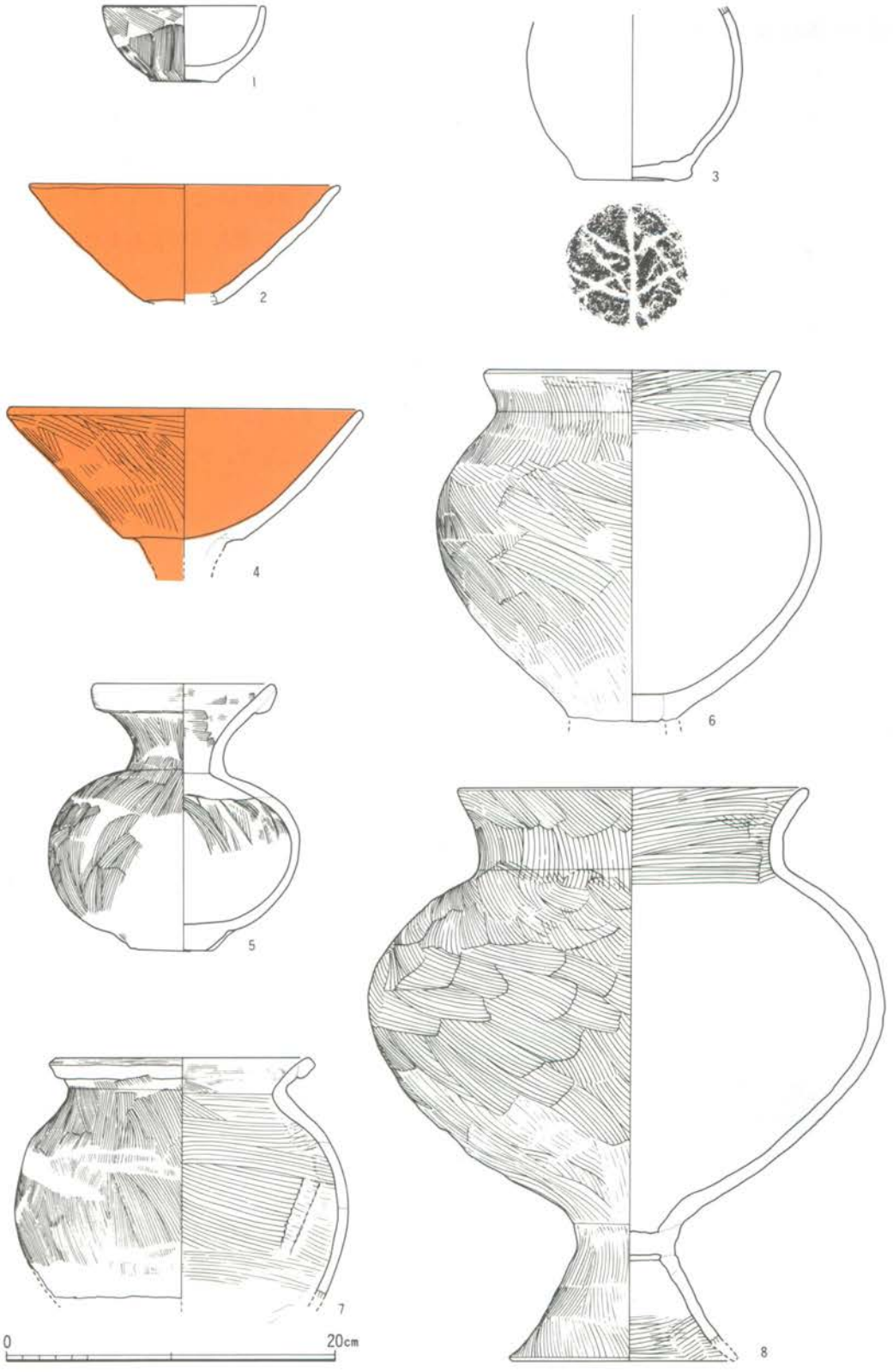


fig. 75　竪穴住居004出土土器

竪穴住居006出土土器(fig.76, PL.27)

柱穴P3の周辺部の床に甕破片が重なりまとまった状態で出土した。しかし復原したところどれも遺存状態が悪く復原実測したものが多い。鉢1，高杯脚部1，甕7，台付甕脚部1で器種は揃っている。小型の甕が多いのが特徴である。この他刷毛目のある甕の大型破片が多数あるが，復原できなかった。検出面から浅いため散逸してしまった遺物がかなりあるようである。また復原できたものも遺構内に破片となって散在したものが多い。焼失住居であるため火熱により器面が荒れる遺物が多い。

1は鉢で南西壁際から出土した。形態は竪穴住居004出土のものと類似するがこれはナデて仕上げる。2は高杯脚部，3は台付甕脚部，4～10は甕であるが6～10は底部である。4・5はどちらも竪穴住居中央部から出土し，外面を刷毛調整する。また肩部に刷毛工具による刺突を持つ。10は大型の甕の底部付近でP3周辺から破片となって出土した。火熱により器表面が荒れ，特に内面は荒れが著しく，剝落する。

竪穴住居009出土土器(fig.76)

出土したのは小破片が10点余りで全て覆土中の遺物である。甕底部1点が図示できた。火熱により器表面が剝落する。

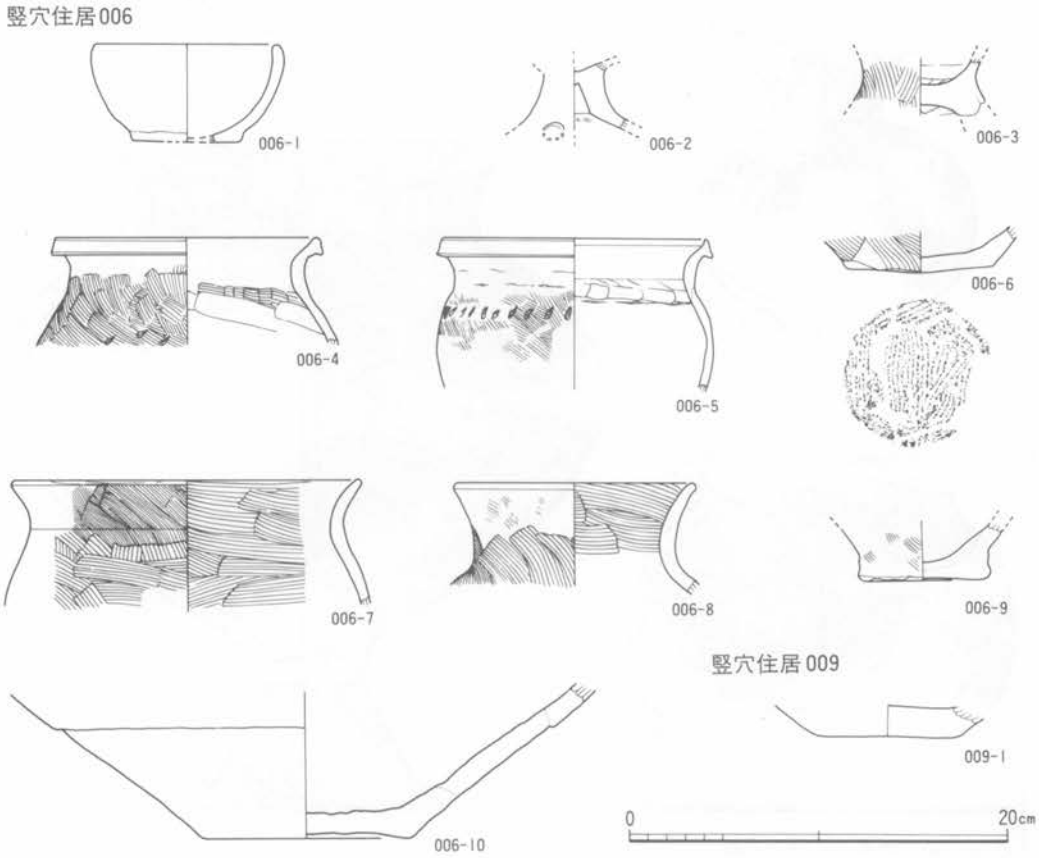


fig.76　竪穴住居006・009出土土器

竪穴住居011出土土器(fig.77)

遺物は少なく高杯脚部と台付甕脚部がかろうじて図示できた。2点が並んで北隅の床から出土した。このほかは土師器小破片が10余点である。

竪穴住居013出土土器(fig.77, PL.29)

高杯杯部5，高杯脚部2，甕1，台付甕1，台付甕脚部1を出土した。高杯が7点と多いが，全容をうかがえるものはなく遺存状態は良くない。他の器種についても同様である。この他は破片が50点余り出土した。床または覆土下層から出土したが同一個体が竪穴住居全体に散っている。高杯杯部はどれも4分の1周で外面下部に稜を持つ。いずれも内外面をヘラ磨きにより仕上げる。8は竪穴住居014の覆土出土の破片と接合したが遺物の様相から本跡に含めた。10の台付甕は6分の1周が遺存している。胴上半部外面と胴下半部内面は煤が付着し黒褐色に変色する。

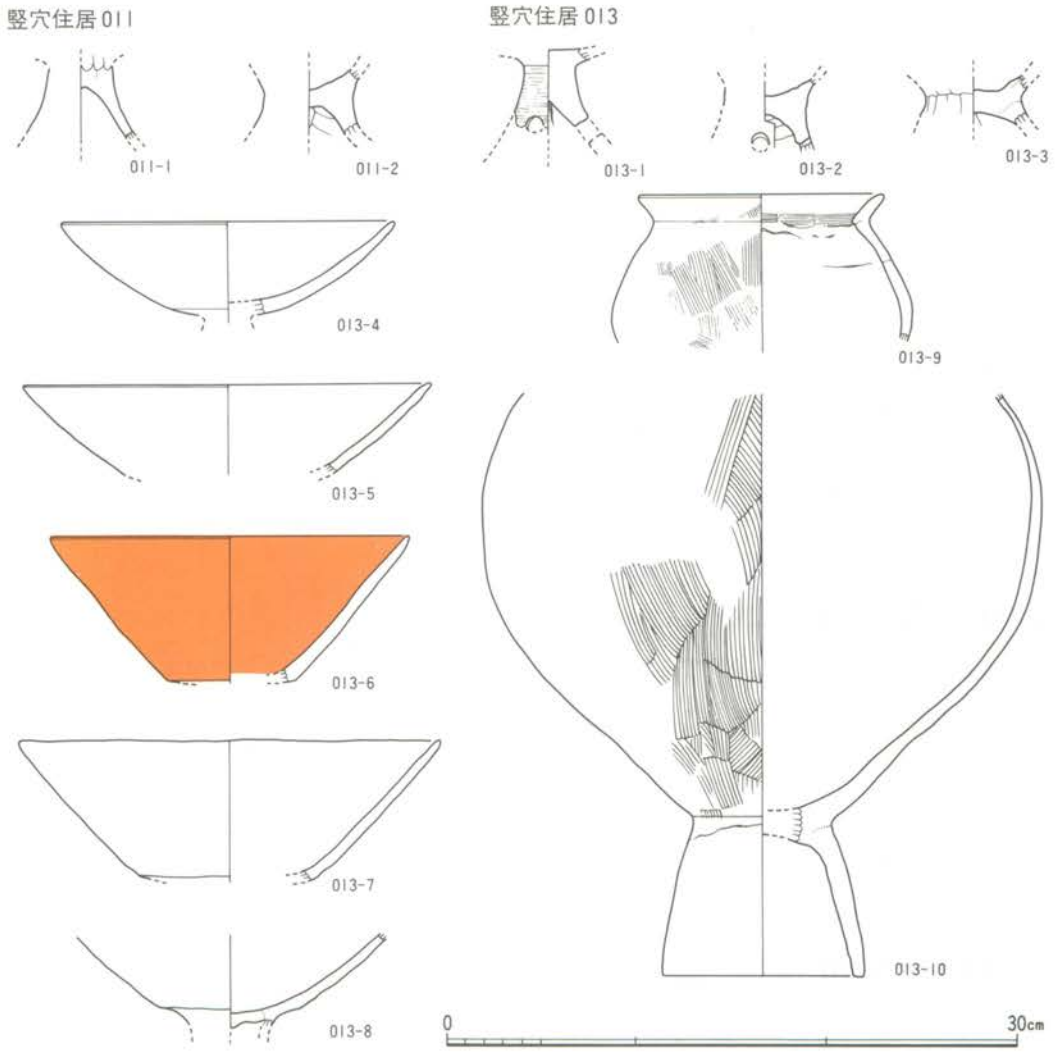


fig.77　竪穴住居011・013出土土器

竪穴住居015出土土器(fig.78, PL.29・30)

片口杯1，鉢2，壷1，高杯5，甕4，台付甕1が出土し器種は揃っている。完形品はなく，どれも一部を欠損する。竪穴住居の規模が大きいこともあり混入品が多く，実測できない破片もかなりある。特に集中するところはなく，竪穴住居全体から出土したが，実測できたものは壁際に多いようである。またこれらは主として床から出土している。

1の鉢は覆土中から出土した。内外面とも赤色塗彩するが，火熱により器面が荒れ，特に内面の一部は剝離してざらついている。2も鉢で，口縁部の4分の1周ほどしかないが，南壁際の床から出土した。5は片口杯で，2の脇から出土したものである。上から見ると先がとがった卵形をしている。

3・4・6・7・8は高杯で，3・4は杯部，他は脚部のみである。3は北壁中央から出土した。小型の高杯で内外面とも赤色塗彩しているが器面の荒れが著しく内面は殆ど剝落している。脚部に透かし孔が6孔あったようである。4も杯部のみで，東壁際の床から出土した。立ち上がりはあまり外方へ開かないため，比較的深い作りとなる。6は竪穴住居026の覆土から出土したが，時期からみて本跡に属するものであろう。

9は小型の壷でP5脇の床から出土した。最大径は胴中位にあるが底径との差は少なく膨らみは緩やかである。

12は台付甕脚部，北隅にあった。火熱により内外面とも暗褐色に変色し，器表面が荒れてざらついている。

10・11・13・14は甕で，13以外は胴下半部から底部である。10・14は12の台付甕脚部と共に北隅の床から出土した。14は遺存部分では破損していない。割れ口は粘土紐接合部分で刷毛目が認められる。接合しやすくするために付けたものであろう。またこの部分は幾らか摩耗しており，破損後も再利用している可能性がある。13は竪穴住居026の覆土から出土したが遺物の時期からみて本跡に属するものとして扱った。

竪穴住居022出土土器(fig.78, PL.30)

2点の他は小破片が20点余りである。火熱により器表面が荒れているものが多い。外面を赤色塗彩した壷胴部破片があるがこれは実測できなかった。やはり火熱により内面は黒褐色になり器面が剝落する。

1は貯蔵穴P5の覆土上面から出土した。壷の胴下半部である。2は甕でP2脇の床からつぶれて出土した。底部は欠損するが小さな平底を呈すると思われる。火熱による荒れが著しく全体が黒褐色に変色する。特に胴下半部は内外面とも器面が剝落する。

竪穴住居025出土土器(fig.78)

図示できたのは甕1点である。東隅のP2脇の床から出土した。この他の破片は60点程で，刷毛調整した甕胴部の破片が多い。

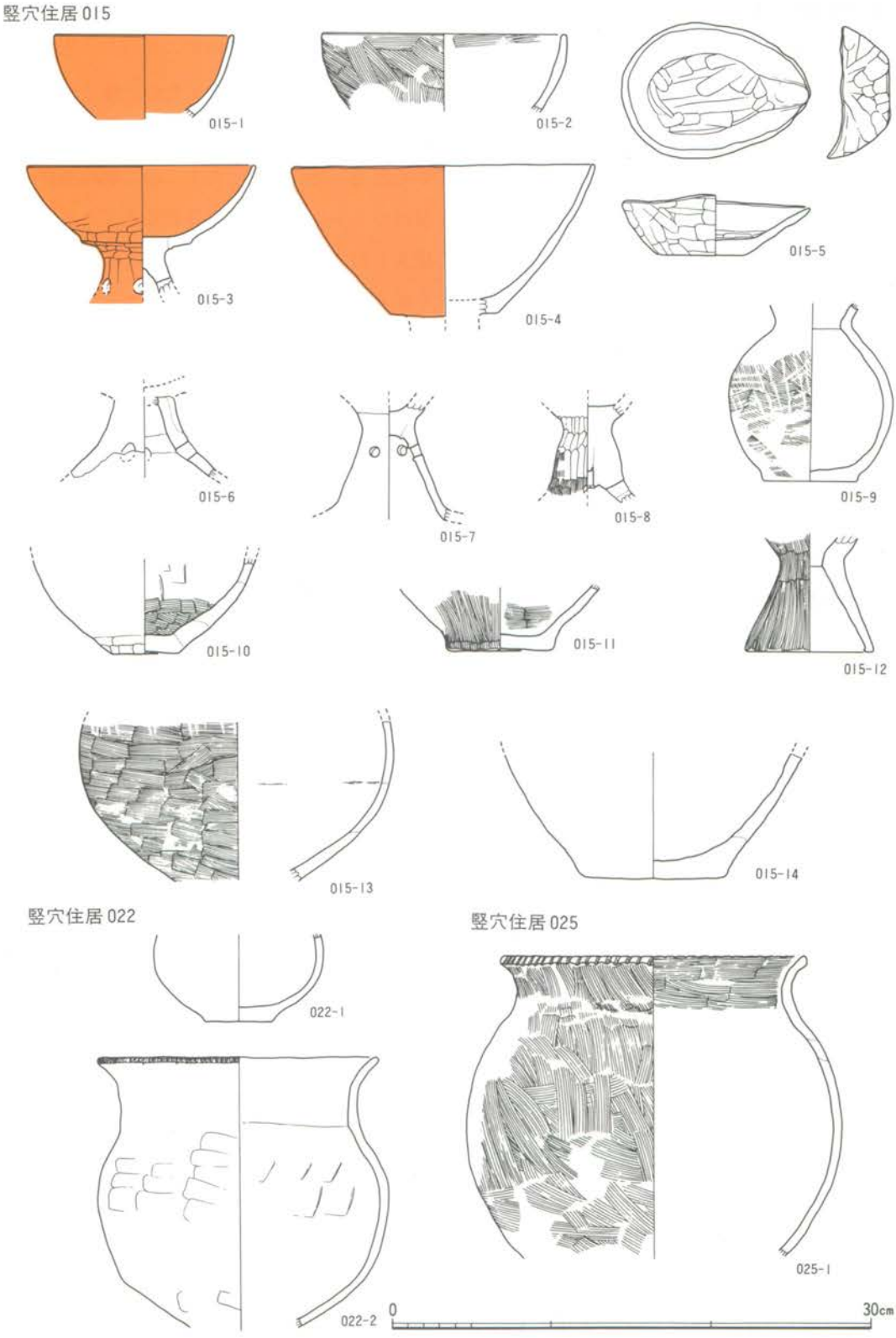


fig.78　竪穴住居015・022・025出土土器

竪穴住居027出土土器(fig.79, PL.30)

壷5，器台1，高杯1，甕1，台付甕1を出土した。竪穴住居中央部の炉の周辺から出土したものが多い。器種は揃っているが，完形品はなくどれも遺存度は余り良くない。多くが床から浮いて出土し，混入品を含むと考えられるが住居の廃絶からの時間差はあまりないであろう。

1・2・4・5は壷である。1は炉の北側の床から出土した。出土した中では比較的遺存状態が良好なものである。口縁は内傾するが外面に稜はつくらない。2は口縁部のみであまり外へは開かず立ち上がる形態である。炉の周囲から床よりわずかに浮いて出土する。4・5とも口縁部の破片である。4は竪穴住居内の広範囲に小破片となって散っていた。床からは浮いている。5は覆土中の出土。8はS字状口縁の台付甕で貯蔵穴P5の覆土上面，床と同じレベルから出土した。1とともに本跡に伴う可能性が高い。S字状口縁の台付甕はこの他竪穴住居013から出土したがこれは口縁部の破片で図示できなかった。また荒久遺跡(2)の竪穴住居101から胴下半部のみが出土している。器壁が非常に薄く外面は煤が多量に付着する。胎土には金雲母を含み，他の土師器とは異なった様相を示す。9は胴下半部の2分の1で，壷であろう。覆土上層から出土した。

竪穴住居030出土土器(fig.79, PL.31)

図示できたのは甕下半部と甑1点である。この他刷毛目のある甕胴部の小破片が50点あまり出土したが，1個体ではなく復原できなかった。火熱を受けているものが多い。

この時期の甑は荒久遺跡(2)を含めても本例1例である。貯蔵穴P5脇の床からやや浮いて口縁部を上に出土した。口縁部の一部を欠損するだけで遺存状態は良好である。最大径は口縁部にあり，器高が口縁部径よりも小さい横長の形態である。焼成も良好で火熱を受けた痕跡は認められない。2は甕の胴下半部で，P3の北を中心にかなりの破片となって床から出土した。胴上半部を欠損する。火熱による器表面の荒れが著しい。

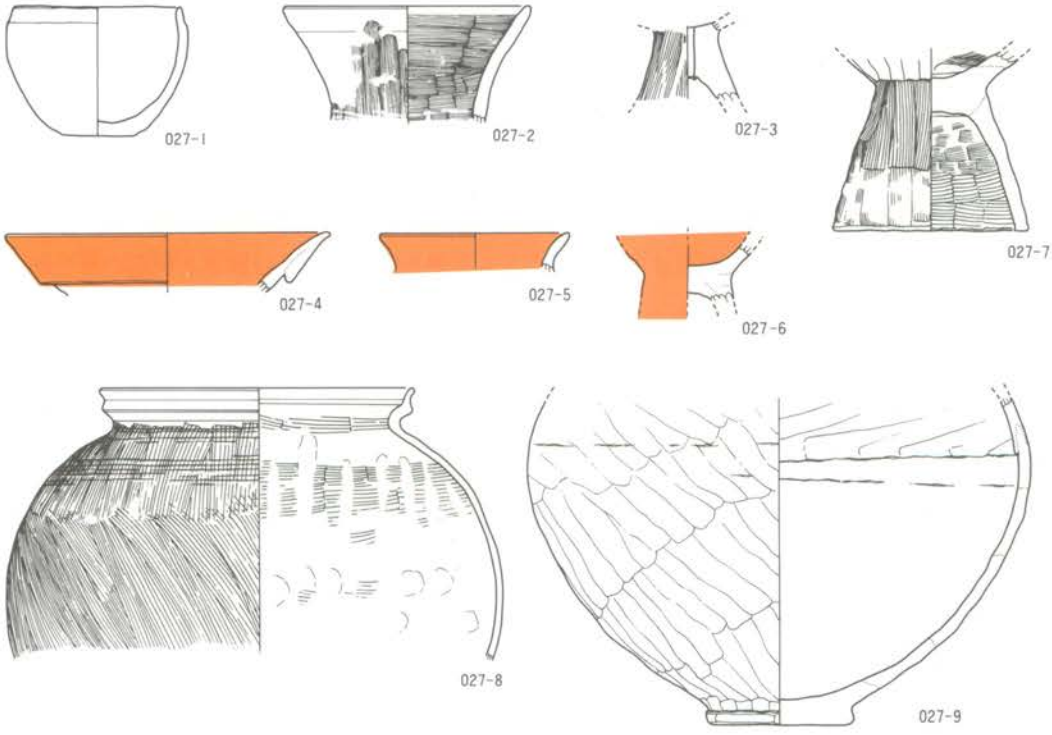
竪穴住居033出土土器(fig.79, PL.31)

南東壁際の床から小型の甕1点が出土した。浅い竪穴住居であるためか胴部の欠損が著しい。この他本跡から出土したのは1cmほどの破片2点と4cmほどの破片1点のみである。

竪穴住居034出土土器(fig.79, PL.31)

器台1，高杯1，甕1が復原できた。器台と高杯は柱穴P2の西脇から出土した。プランを確認したのが掘方であるため遺物検出面が本来の床に近いと思われる。甕は覆土中の遺物である。3点ともかろうじて復原実測できたが，遺存は良好ではない。浅い竪穴住居であるため散逸してしまった可能性がある。またどれも火熱により器表面が荒れているが，本跡は焼失住居ではないため流れ込んだ遺物である可能性がある。しかし出土レベルから竪穴住居廃絶の時期との差は僅かであると思われる。この他刷毛目のある甕の肩部から胴部の破片4分の1があるが図示できなかった。

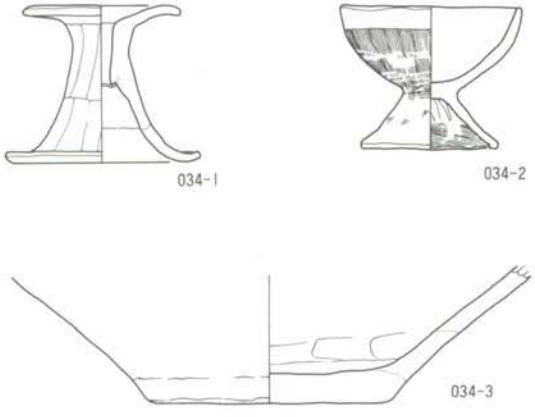
竪穴住居027



竪穴住居030

竪穴住居033

竪穴住居034



0 20cm

fig.79　竪穴住居027・030・033・034出土土器

竪穴住居036出土土器(fig.80, PL.31)

壷2，高杯1，台付甕脚部1，甕胴下半部1が図示できた。いずれも一部のみで2の壷が復原によりかろうじて全容をうかがえるものである。西隅から出土したものが多くまた床からやや浮いている。半分以上を溝048により切られるためか出土した遺物は30点余りと少ない。

1・2は壷である。1はP4脇から出土したが，床から20cmほど浮いていた。口頸部が細くなる。2は南西壁そばから出土した。床面からの出土で，半分以上遺存する。平底で内彎しながら立ち上がり，口縁部は緩く外反する。内外面とも火熱を受ける。3は脚部と胴部の接合部のみだが，高杯であろう。南西壁際からかなり浮いて出土し，流れ込みと思われる。4は台付甕脚部である。柱穴P3の北側脇の床から出土した。5は西隅から出土した。甕の胴下半部であるが，3と同様床からかなり浮いている。

竪穴住居037出土土器(fig.80)

図示できたのは高杯脚部1点である。脚部の4分の1ほどの破片で，杯部との接合部分の直ぐ下に直径5㎜の穿孔が2か所認められ，復原すると6か所穿孔していたと思われる。P2脇の南壁際から出土したが床面からは若干浮いている。この他は小破片が15～16点である。

竪穴住居038出土土器(fig.80, PL.31・32)

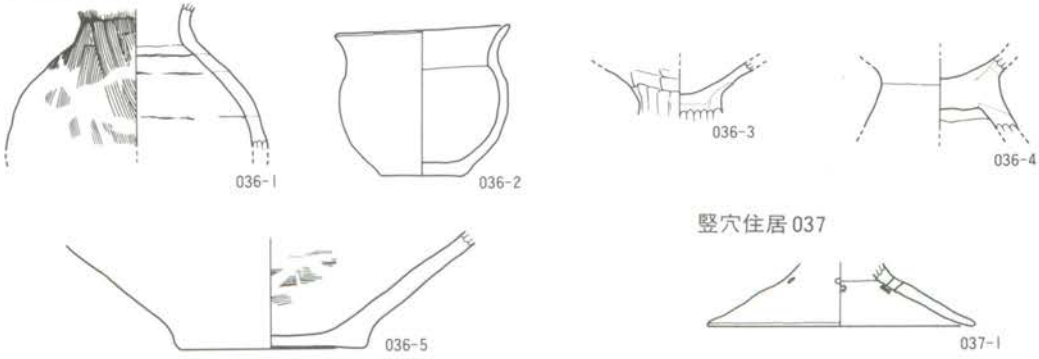
高杯1，壷2，甕9を出土したが，完形品はない。また復原によっても全容をうかがえるものはなくどれも遺存状態は良くない。甕は9点も出土したが，このうち7点が底部のみである。出土層位は覆土中が多く床から出土したものは少ない。竪穴住居全体から出土しているが，図示できたものは特に貯蔵穴P5脇の西隅に多かった。これ以外は2cm以下の小破片である。混入品が多いと思われる。

1は壷の口縁部で12の甕底部とともに西隅から床からわずかに浮いて出土した。2は高杯脚部で，P2脇から出土した。覆土中である。内部は中空でこの上に杯部の底部の粘土を貼り付けて結合したと考えられ，刷毛目は結合し易くするように付けられたのであろう。3の甕と8の壷は2点とも貯蔵穴P5の西脇から出土した。床面から出土し，本跡出土遺物の中では遺存状態が良好な方である。3は口縁から胴上半部の3分の2を遺存する。火熱によりかなり脆くなっている。8は胴下半部の4分の1で本跡に伴う可能性が高い。4は甕の口縁部で竪穴住居中央部の覆土下層から出土した。内面口頸部に指頭で形を整えた跡が残る。5～7・9～12は甕の底部，やはり覆土下層から出土した。

竪穴住居044出土土器(fig.80, PL.32)

炉とピット1本のみしか検出しなかった竪穴住居で，このピットから脚部を欠損する台付甕1点が出土した。底面からやや浮いて，口縁を上にした状態で埋められていた。球形の胴部で，最大径は胴中位にある。口縁部内面は横方向に刷毛調整，胴部はナデ。外面は斜方向に刷毛調整するが，肩部は更に横方向に行って整える。胴下半部はナデにより刷毛目を擦り消している。

竪穴住居036



竪穴住居037

竪穴住居038

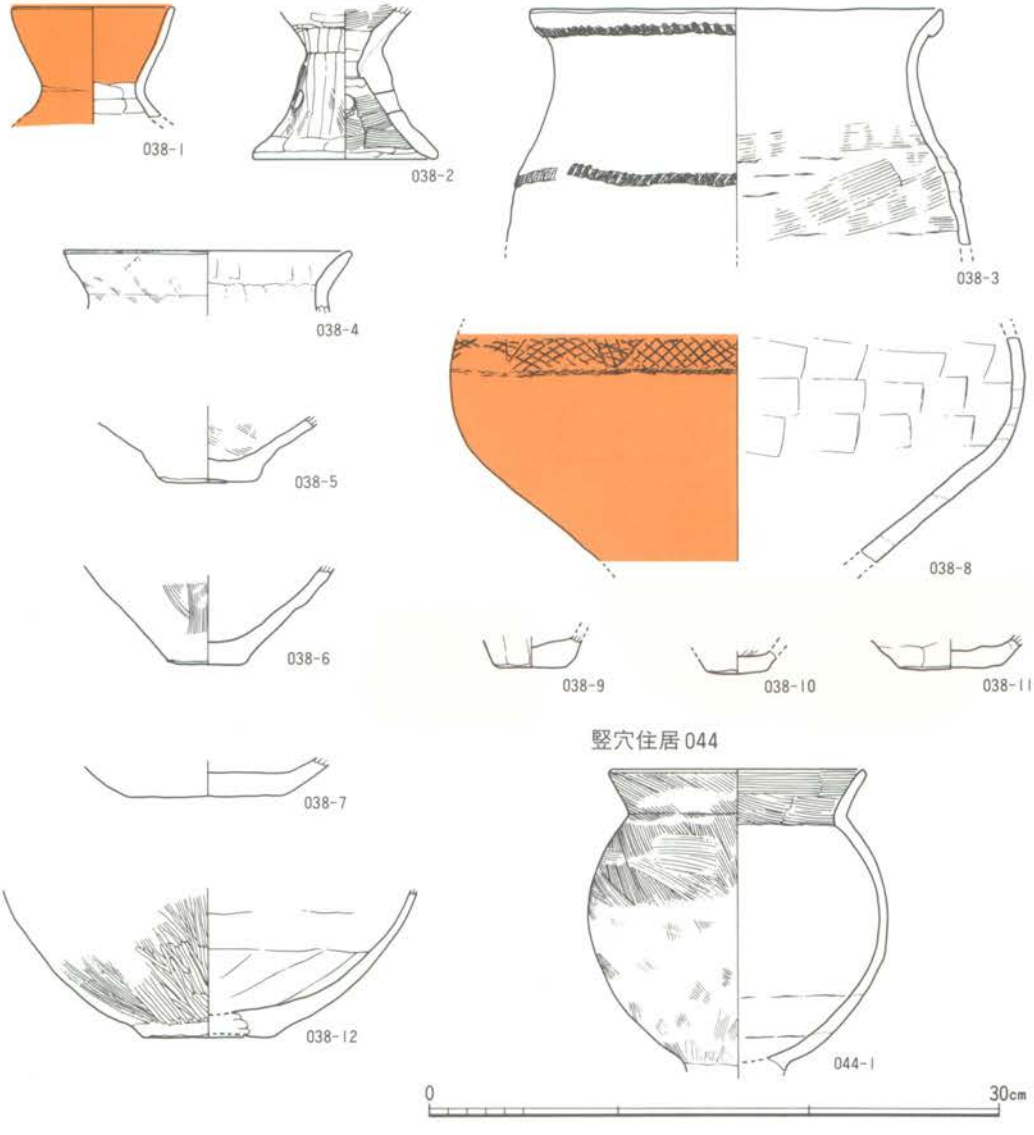


fig. 80　竪穴住居036・037・038・044出土土器

竪穴住居040出土土器(fig.81，PL.32)

器台2，壷1，高杯1，甕底部1，台付甕脚部1を出土した。床から出土しているが器台以外は遺存状態が悪い。この他は破片が50点余である。1の器台は焼土下から出土した。2の器台と3の壷は炉から出土した。2は火熱により器表面が荒れている。

竪穴住居056出土土器(fig.81，PL.32)

図示できたのは壷(1)と甕(2)である。浅い竪穴住居であるためかどちらも半分以上を欠損している。甕は床に押し潰されたような状態であった。

竪穴住居060出土土器(fig.81，PL.32)

高杯1，甕3，台付甕1で出土遺物は少ない。3の台付甕脚部が貯蔵穴P5下層から出土した以外は北西隅から出土し，どれも床から浮いているため流れ込みである可能性が高い。

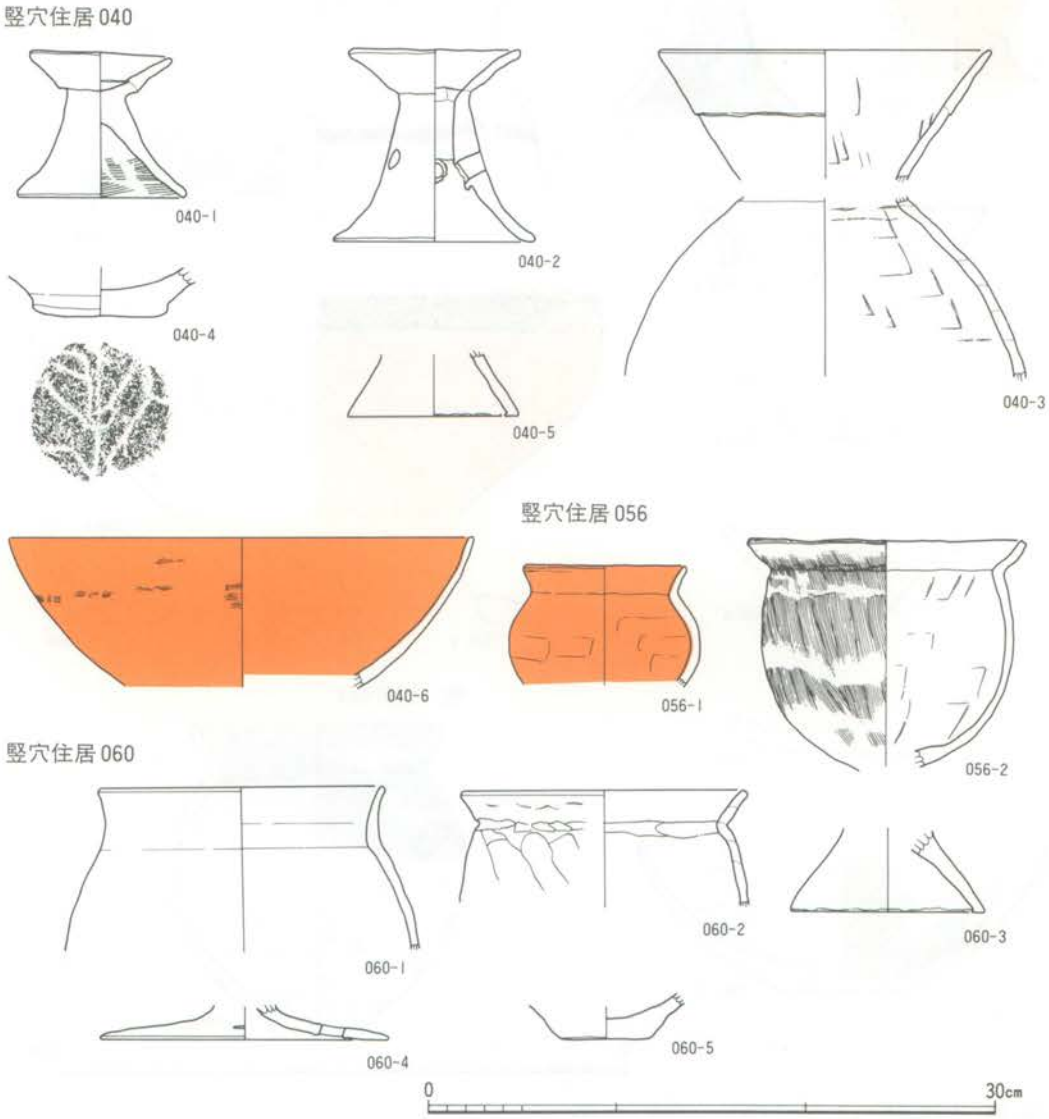


fig.81　竪穴住居040・056・060出土土器

(2)古墳時代中期

竪穴住居010出土土器(fig.82・83・84・85, PL.33・34・35)

出土した遺物は調査区内で最も多く，また遺存状態が良好なものが多かった。坩9，壷1，鉢4，高杯17，器台結合土器1，甕2の合計34点である。土器のほかにも砥石2点と土製品2点が出土する。この中で坩・高杯の数がきわめて多いのが特徴である。また焼失住居であるため遺物は火熱により器表面が荒れる。図示した以外の出土遺物は破片で50点余である。

坩は北西隅にまとまって6点（1・2・4・6～8）出土した。どれも遺存状態がよく，床に並べておいたものが倒れたか壁際にあったものが転落したような状態である。完形に近い坩はこの他貯蔵穴P6の上層から3が出土した。高杯は17点も出土したが，全体がうかがえるのは3点だけである。杯部のみが11点，脚部のみが3点ある。これらは西壁から南壁にかけてと貯蔵穴P5・P6の中やその周辺から出土する。杯部・脚部ともにあるのは29～31である。29は坩がまとまっていた脇から口縁を下にし斜めに転落したような状態で出土した。床からは僅かに浮いている。30は貯蔵穴P6の下層から出土した。貯蔵穴の縁にあったものが転落したような出土状態である。31は西壁の南寄りから鉢（12)と並んでいた。杯部のみは18～22・23・24・25～27である。21・22は南壁際中央から伏せた状態で並んで出土し，24・27はこの東に口縁を上にして並んでいた。23は貯蔵穴P5の，また19・20は貯蔵穴P6の上場の縁，26はP7の上層から壷(10)とともにそれぞれ出土した。貯蔵穴P5では底面から高杯脚部(17)，上層から器台結合土器(32)が，その脇から鉢(14)が出土した。17の高杯脚部は他に出土する高杯の脚部と同様柱状の脚で裾部が横に大きく広がる形態であるが脚柱部の高さが低い。16の高杯脚部は炉内から出土した。高杯の杯部と脚部の結合は臍によるものが多く，18・27のみ杯部に臍をもたない。また脚部が遺存する17・31は臍受けがあるが30は臍受けをつくらず，臍が脚部に貫通する。甕2点のうち33は貯蔵穴P5の西側に，34は竪穴住居中央部周辺に破片となっていた。

fig.82　竪穴住居010炉遺物出土状態

fig.83　竪穴住居010貯蔵穴遺物出土状態

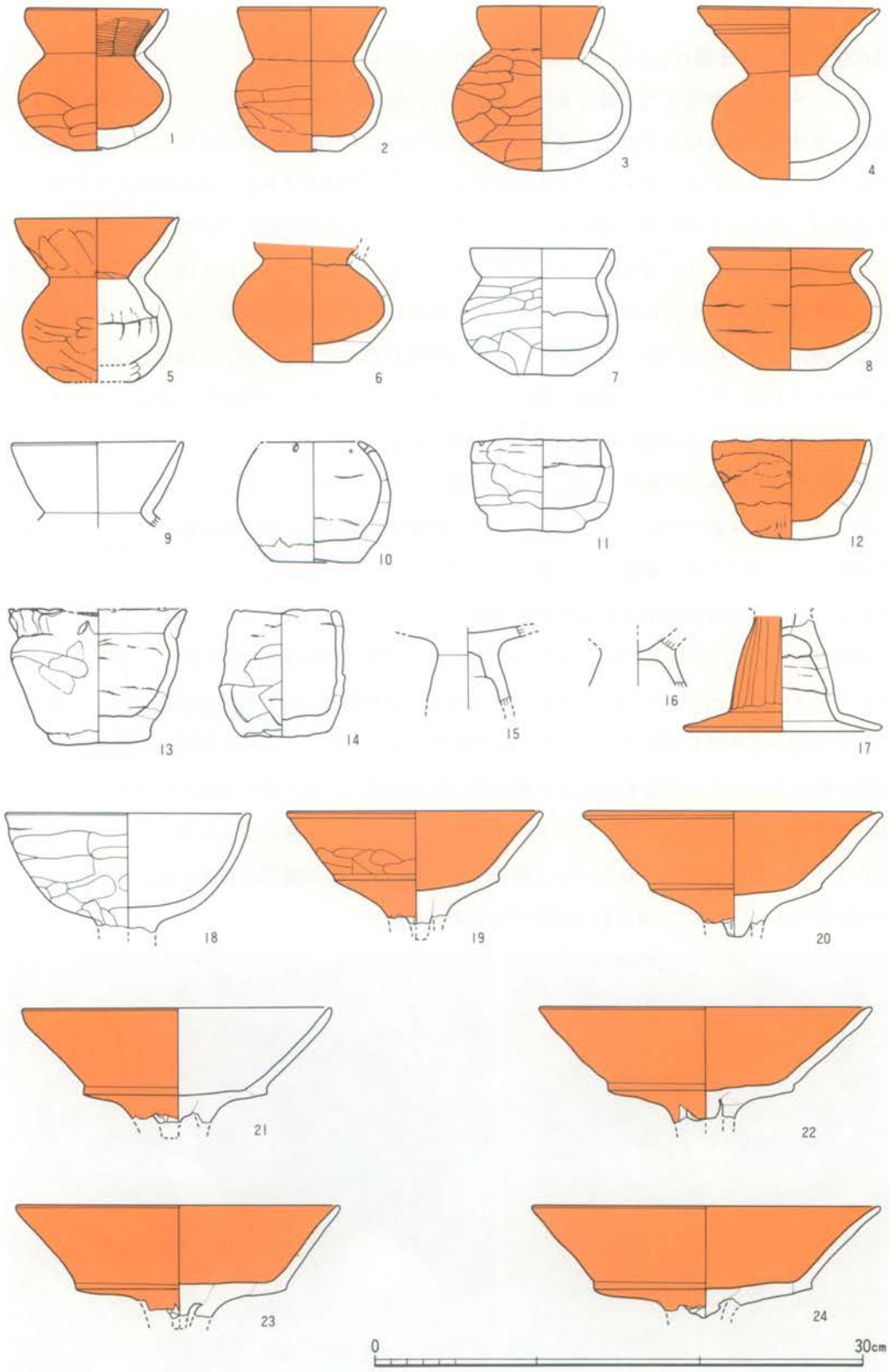


fig. 84　竪穴住居010出土土器 (1)

fig. 85　竪穴住居010出土土器 (2)

竪穴住居012出土土器(fig.86, PL.33・35)

高杯7点，坩3点，鉢1点，甕3点を出土した。高杯が多いが器種は一応揃っている。遺物は主として北隅にまとまって出土した。完形品はなく，下層から出土し，床からは浮いているものが多い。流れ込んだかまとめて廃棄されたとも考えられるが火熱を受けているものが多い。本跡は焼失住居であり，流れ込んだとしても焼失前ということになろう。したがって遺物と住居の廃棄との時期差は少ないと考えられる。この他破片が70点程出土しており，やはり火熱を受けたものが多い。

3・6・10は坩である。3点とも2次的火熱を受けてかなり脆くなっており，遺存状態は悪い。3は上半部の3分の1で南西壁際の壁溝上面から出土した。6・10は北西隅の床面近くから出土した。6は最大径が口縁部にあり，口縁部は短く外反する。胴部の最大径は上半部にあり底部に向かって細くなる。10は胴部の4分の1で最大径を胴部の中位に持つ。

高杯は7点出土している。杯部4点と脚部3点である。1・4・5・7・9は北隅の覆土下層から出土する。8は北東壁そばの床から出土した。1・4・7は口端部，裾端部がつままれて横にのびる特徴的な形態のもので，7の脚部は裾部に段を持つ。胎土・焼成が極めて似ており，胎土は粒子が細かく細砂粒を少量含むもので褐色を呈する。4と7は接合しないが同一個体の可能性がある。2と5は外面に稜を持ち外傾して立ち上がる形態で，どちらも脚部を欠損する。8は柱状の脚部。9は柱状の脚部の裾部。

11・12・14は甕である。11は北西隅の覆土下層から出土した。口縁部の3分の1を遺存する。12は貯蔵穴脇の土堤上から出土したが覆土上層出土の破片とも接合する。14はやはり北西隅の床から出土した。底部を欠損するがその他の部分の遺存は良好である。

13は手捏土器で，覆土下層から小破片で出土したが4分の1を欠損する。

竪穴住居031出土土器(fig.86)

遺物は北壁際と貯蔵穴内から20点程出土した。そのうち復原できたのは壷1点である。上半部の3分の1で，外面をヘラ削りしているが器面にはかなりの凹凸が残っており雑な作りである。このほかの破片は杯部外面に稜を持つ高杯の一部，坩の口縁部などで，古墳時代中期の特徴を持つものが多かった。竪穴住居012で出土した高杯脚部(7)と同じ胎土，同じ形態の裾部の破片も出土している。

竪穴住居035出土土器(fig.86, PL.32)

図示出来たのは甕2点。土器の他に砥石が出土する。この他出土したのは小破片が40点ほどである。

1は土坑064から転落したような状態で出土したが，破片の一部が竪穴住居の床面にもあり本跡に属するものであろう。胴下半部を欠損する。2も甕であるが口頸部から肩部までの破片である。

竪穴住居012

012-1

012-2

012-3

012-4

012-5

012-6

012-7

012-8

012-9

012-10

012-11

012-12

012-13

012-14

竪穴住居035

035-1

035-2

竪穴住居031

031-1

0 30cm

fig. 86　竪穴住居012・031・035出土土器

(3)古墳時代後期

竪穴住居001出土土器(fig.87, PL.36)

出土した遺物は小破片ばかりで，杯1点，甕1点がかろうじて復原実測できた。

1は竈の前の床から出土した。本跡で床から出土したのはこれ1点のみである。杯の4分の1で，内面は放射状に外面は横方向にヘラ磨きし，焼成も良好で丁寧な作りである。2は甕で竈右袖脇から出土したが，床からはかなり浮いている。

竪穴住居002出土土器(fig.87, PL.36)

浅い竪穴住居で，刷毛調整を行うものなど明らかに古墳時代前期に属する破片をかなり混入していた。土器の他に竈の脇から土製支脚を出土した。

1は須恵器長頸壷で竈の前の床から横倒しになって出土した。遺存するのは口縁部から口頸部で胴部との接合部分以下をを欠損するが遺存部分はどこも破損していない。外面の4分の1周には緑色の自然釉がかかる。内面の上半部にも薄く釉がかかっている。細い頸部からラッパ状に開き，口縁部は二重となりその下端は外方に張り出してその下に凹線が巡っている。2は甕で，胴上半部の4分の1周程であり，遺存状態は良くない。柱穴P4の脇の覆土中層から出土した。3は手捏土器で，口端部を僅かに欠損する。竈右袖脇の壁際にあった。床からわずかに浮いている。

竪穴住居008出土土器(fig.87, PL.36)

杯3点，高杯1点，鉢1点，甕2点，手捏土器3点を出土し一応セットは揃っている。これらは他の竪穴住居出土のものに比較すると遺存状態は良好なほうではあるが，どの遺物も3分の1程を欠損し，4が完形に近いのみである。焼失住居であるためいずれも火熱により器表面が荒れる。また，杯・高杯はどれも内外面を赤色塗彩する。遺物は貯蔵穴内から2点出土する他は特にまとまってはおらず竪穴住居内に散在していた。図示した以外の遺物は比較的大きな破片が多いようであるが下層から出土したものが多く，埋没する過程での混入品は少ないようである。土器のほかに土玉1点を出土した。

1～3は杯である。1は4分の1で竈前の床から出土した。2は北西隅の焼土の中から出土した。2分の1を遺存する。3は柱穴P3の脇の床から出土する。4は鉢で貯蔵穴の中位と下層から出土し，復原したところ口縁部の一部を欠損するのみであった。5は高杯で柱穴P4の脇から口縁部を斜め下にして転倒したような状態で出土した。6は甕で竈前の床から出土した。7は小型の甕で貯蔵穴P5の底面からかなりの破片になって出土し，復原したところ約4分の1を欠損していた。やはり火熱を受けている。8～10は手捏土器である。8は覆土下層からの出土で，粘土板を内彎させただけのような簡単な作りのものである。図示できないがこれと同種のものと思われる破片がもう1点ある。9は南壁際の壁溝の上面から出土した。10は柱穴P3とP4の間の床面から出土した。どちらも底部から直立して立ち上がる形態のものである。

竪穴住居001

001-1

001-2

竪穴住居002

002-1

002-2

002-3

竪穴住居008

008-1

008-2

008-3

008-4

008-5

008-6

008-7

008-8

008-9

008-10

0 30cm

fig. 87　竪穴住居001・002・008出土土器

竪穴住居014出土土器(fig.90, PL.37)

図示できたのは2点で杯と甕各1点ずつである。1は杯で南西隅よりやや中央寄りで出土した。2は甕の胴下半部である。

竪穴住居016出土土器(fig.90, PL.37)

杯・甕・甑を1点ずつ出土している。どれも遺存状態は余り良くない。土器のほかに土玉7点が出土している。

竪穴住居026出土土器(fig.90, PL.37)

杯1点を出土した。竪穴住居015を切って構築しているため混入品も多かった。土器のほかに覆土上層から臼玉を出土しているがこれは混入品である可能性が高い。

杯は南隅の炭化材の脇から潰れて出土した。外面に稜を持ち口縁部は外反する。体部下端は外方へ張り出しているため，丸底ではあるが安定した形態となる。赤色塗彩しているが外面は口縁部から稜の部分で，内面は底部を塗り残している。

竪穴住居039出土土器(fig.88・89・90, PL.37)

完形の壷1点，鉢1点のほか砥石，土玉を出土した。この他破片が出土しているが規模，遺存する深さを考えると混入品はかなり少ないようである。

壷は西壁際の炭化材の上から出土した。完形品であるが火熱により器面の荒れが著しく赤色塗彩の痕跡もかろうじて観察できるような状態である。丸底で頸部が長く太く，胴部とのさかいのくびれが殆どない。鉢は竈燃焼部の覆土中から出土した。4分の1を遺存する。

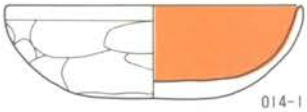
竪穴住居042出土土器(fig.90, PL.37)

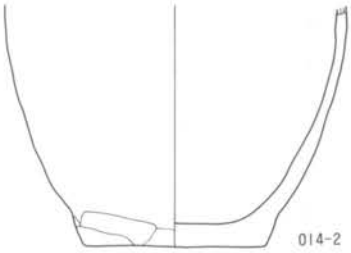
須恵器杯蓋1，杯1，甕1，手捏土器1を出土した。2の杯が南壁際で出土するほかは北壁際から出土している。須恵器蓋は北壁際の覆土下層から破片となって出土した。この内1片は竈燃焼部の覆土中から出土した。つまみを欠損するが欠損部分は既に摩耗する。杯は南壁際の覆土上層からの出土で4分の1の破片である。甕は北西隅の覆土下層から横倒しの状態で出土した。底部付近を欠損する。4の手捏土器は竈左袖脇にあったが出土層位はやはり上層である。

fig.88　竪穴住居039遺物出土状態

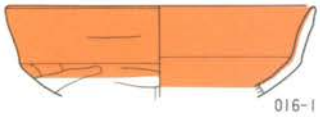
fig.89　竪穴住居039竈遺物出土状態

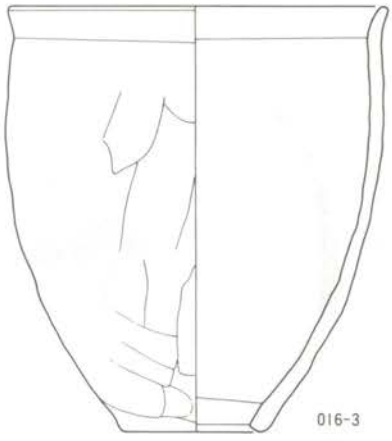
竪穴住居014



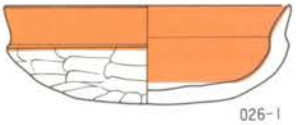


竪穴住居016



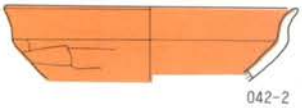


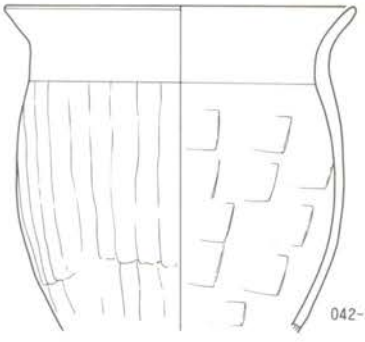
竪穴住居026



竪穴住居039

竪穴住居042





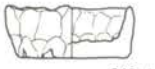


fig. 90　竪穴住居014・016・026・039・042出土土器

(4)その他の遺構

土壙墓007(fig.91, PL.38)

須恵器長頸壷1点を西壁際の中位から出土した。口頸部の3分の1である。ラッパ状に外方に大きく開く。直接接合しないが肩部の小破片があり肩部は稜をつくる。

溝021(fig.91, PL.38)

いずれも調査区西端の溝底部付近から出土したものである。

土坑059(fig.91, PL.38)

貝層中から出土した。

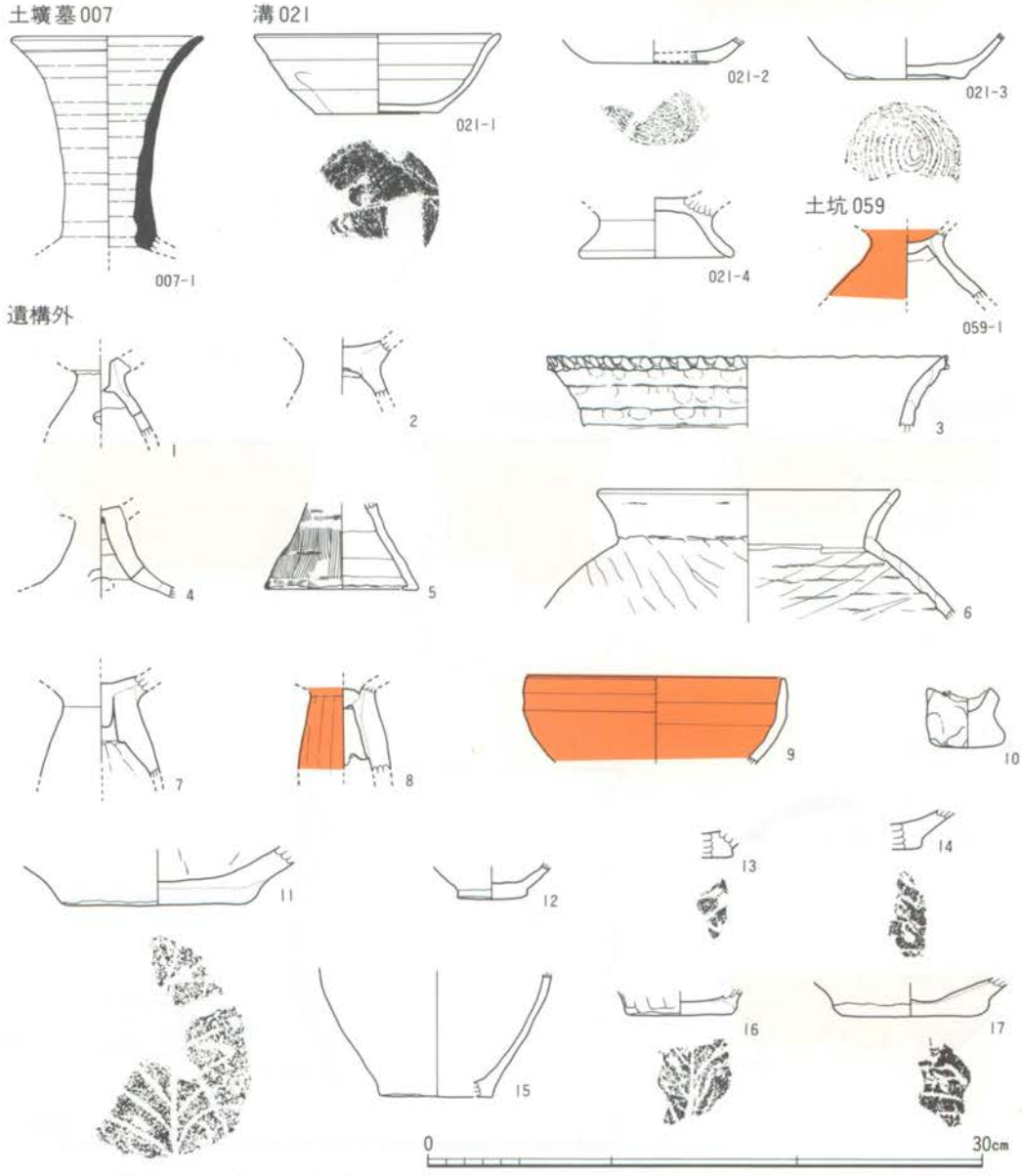


fig.91　土壙墓007・溝021・土坑059・遺構外出土土器

(5)遺構外出土土器

表土中から出土した遺物，遺構内から出土しても時期からみてその遺構には伴わないと考えられる遺物をまとめた。

縄文式土器[1](fig.92，PL.38)

本遺跡より出土した縄文式土器は，ここに図示した遺構外出土の5点が全てである。これらは従来，県内での検出例が少なかった土器群であることから，やや詳しく事実記載をしておくこととする。1は細沈線による文様を主とするものである。数条の横位の沈線文とこれに複数の弧線状もしくは楕円状に重なる沈線文が接しており，これらは文様帯の一部になると思われる。後者の沈線間には沈線文表出と同一と思われる施文具によって，刺突が加えられている箇所がみられる。器面調整は表裏とも比較的丁寧に仕上げてあり，焼成もわりと良好である。胎土中には多量の繊維混入が認められる。2～5は波状口縁を呈し，隆帯文に特徴づけられる土器群である。またいずれの胎土中にも繊維を含まない。2はやや内削ぎ気味の角ばった口端を有す。口縁に平行したやや幅広の隆帯文も比較的高く角ばっており，隆帯貼付後の整形は雑である。口端上や隆帯上には貝殻背圧痕が連続的に施され，体部表裏には貝殻背条痕がみられる。器表面はいくらか平滑に整えた後に貝殻背条痕文が施文され，次いで隆帯文が付されている。焼成は比較的良好である。3は内側がやや丸みを帯び，外側は角ばった口端を有す。口縁にほぼ平行して，幅広で比較的高く丸みを帯びた隆帯文が2条貼付されているが，それに伴う整形はやや雑である。口端上と隆帯上には連続的に，体部裏面には部分的に貝殻背圧痕が施されている。器表面はいくらか平滑に整えた後に，横位に貝殻背条痕を施し，隆帯文を貼付している。焼成は比較的良好である。2・3は同一個体であるかもしれない。4は口端を欠く破片で焼成後の穿孔が認められる。器面調整は表裏ともかなり平滑に仕上げられており，特に裏面が丁寧である。器表面には調整後，貝殻背条痕が施され，次いで貝殻背圧痕が連続的に施される隆帯文が貼付されている。焼成はかなり良好で堅緻な土器である。5は貝殻背圧痕が比較的偏平な隆帯上に連続的に施されている。おそらくこの隆帯文はやや蛇行気味に貼付されているものと思われる。焼成は比較的良好である。

以上の土器の編年的位置についてであるが，1は田戸上層式，2～5は細部に異なりがあるものの，早期末葉～前期初頭に位置づけられる土器群である。後者の土器に比定される型式としては神之木台式・下吉井式が挙げられるが，既述したように形式内容に整合する部分とそうでない部分を雑えているので，今回は資料呈示に留め，類例の追加を待ちたい。

1．記述にあたっては次の文献を参考とした。

赤星直忠「横須賀市田戸先史時代遺蹟調査報告」『史前学雑誌』第7巻第6号　1935

吉田　格「千葉県城ノ台貝塚」『石器時代1』1955

神奈川考古同人会縄文研究グループ編『シンポジウム'83縄文時代早期末・前期初頭の諸問題』1983

弥生式土器(fig.92, PL.38)

遺構外または時期的に出土した遺構には伴わないと思われる弥生式土器は20点余りで，図示しなかったものは小破片か器面が摩耗したり剝落したりして遺存状態が悪いものである。いずれも弥生時代後期に属する。6は口縁部，内外面に赤色塗彩を施す。7は外面に網目状撚糸文を施し，胎土に細砂粒を少量含む。8は2条のS字状結節文で区画し，斜位の縄文を配する。胎土に大粒の長石粒を含む。9はS字状結節文で区画し斜位縄文を交互に配している。外面には赤色塗彩を施す。11はS字状結節文を施しさらに山形の沈線で区画したなかに縄文を配している。12・13は羽状縄文帯をS字状結節文で区画する。12・13とも焼成があまい。

土師器(fig.91)

1～5は古墳時代前期に属する。6～8は古墳時代中期，9・10は古墳時代後期のものである。11以下は底部の破片で，時期の確定は難しい。11・13～17は木葉痕を残す。

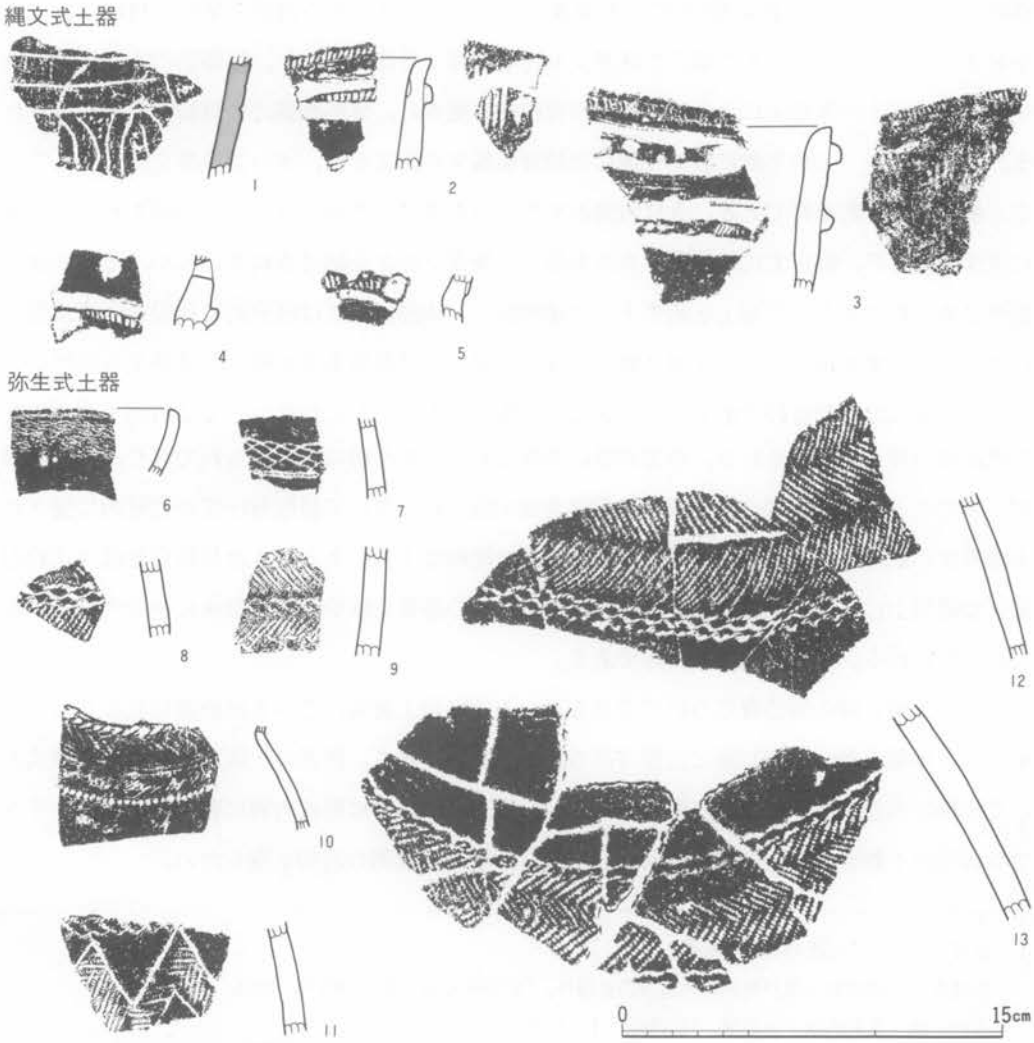


fig.92　遺構外出土土器拓影図

3．銅鏃・鉄製品(fig.93，巻首図版2，PL.39)

出土した金属製品は銅鏃・鉄鎌・鉄斧・刀子の4点である。銭貨については別に説明する。

銅鏃　竪穴住居016(古墳時代後期)の南壁際の床から出土した。遺構の項で述べたように遺構に伴うものかどうかは検討を要する。刃部，逆利，茎の一部を僅かに欠損する。現存長36㎜，重さ4.51g。身の断面は菱形を呈し，鎬は明瞭である。茎は縦方向に研磨して整形しているが，鋳型のずれは殆ど認められず丁寧に作られている。逆利をもつが浅い。峰部に大きな鋳巣がある。これは錆によるものか，鋳造時の湯まわりの悪さによるものかは不明である。また，逆利の下に僅かに鋳張りが残る。

鉄鎌　竪穴住居030(弥生時代終末期～古墳時代前期)の出入口施設であるP6の覆土上面にあった。背部が直線的ないわゆる直刃鎌である。ほぼ完形だが全体的に錆化が著しく，特に中央から先端にかけては亀裂が多く変形している。また基部は不均一に打たれて折り返されている。全長98㎜，刃幅28㎜，背厚2.7㎜，重さ47.1g。

鉄斧　竪穴住居060(弥生時代終末期～古墳時代前期)から出土した。板状の鉄斧でほぼ完存するが刃部付近は錆化が著しい。このため不明瞭ではあるが片刃であると思われる。基部幅40.5㎜，刃部幅は推定で41.5㎜で中央部が僅かに外反し刃部の方がやや幅広になる。中央部が外方へ張る形態が一般的で素材の形を幾らか残しているようである。厚さは上端部が極僅かに外側に突出するが，刃部にむかって厚くなっている。厚みは最小3.8㎜，最大4.2㎜である。全長130㎜，重さ158.1g。

刀子　竪穴住居039(古墳時代後期)覆土中出土。刃部の一部と茎部を欠損する。現存長45㎜，刃幅12.5㎜，背厚3㎜，重さ6.02g。

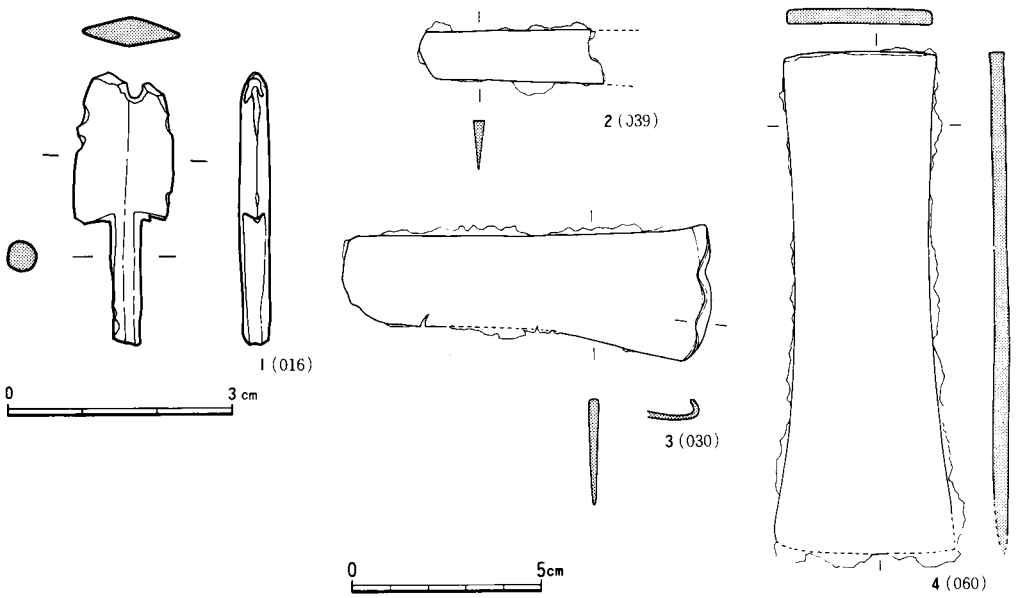


fig.93　銅鏃・鉄製品

4．土製品・石製品類(fig.94・95，巻首図版2，PL.39)

出土した土製品・石製品類は玉類・土玉・土錘・土製支脚・石器・砥石・石製品である。遺構及び遺構外から出土した土製品・石製品類をここでまとめて説明する。

玉類　竪穴住居026(古墳時代後期)覆土上層から3点，表土中(C2-06)から1点の合計4点の臼玉を出土した。いずれも滑石製で，1は薄く偏平に作っているが，2～4は両端を整えるように研磨しており中央部が幾らか膨らみ気味になる。

土玉　土玉は竪穴住居008から1点，竪穴住居016から7点，竪穴住居039から1点，合計9点出土した。3軒とも古墳時代後期の竪穴住居である。

5は竪穴住居008の柱穴P2の覆土上層から出土した。穿孔部分を整え，丁寧にナデて仕上げており，器表面は光沢をもつ。6～12は竪穴住居016から出土した。8は3分の1ほどしか遺存していないが他の6点は完形である。6・8は貯蔵穴周辺，7は竪穴住居中央部，9～12は西壁中央部に4点がまとまって出土した。いずれも床からの出土である。焼失住居であるため火熱により暗褐色に変色する。6のみ赤褐色を呈している。どれも穿孔部分を調整するが面取りして穿孔部分を整えているのは片側だけであるため，穿孔は片側からのみ行っているようである。13は竪穴住居039の竈燃焼部覆土中から出土したものであるが2次的火熱は受けていない。整形は雑でヘラ削り痕が残り，綺麗な曲面にはなっていない。胎土には粒の粗い砂粒を多量に含む。

土錘　14が1点である。表土中(C2)から出土した。4分の1しか遺存しない。両端が細くなった小型の円筒形を呈し長軸方向に孔を持つ。外面は使用によるものか摩耗が著しい。

土製支脚　竪穴住居002(古墳時代後期)出土。竈左袖脇にあったが竈は既に破壊される。下半分を欠損し遺存長9.0cm。断面はほぼ正方形で丁寧に作っている。胎土には粒子の粗い砂粒を多量

tab. 45　玉類計測表

挿図番号	出土遺構遺物番号	縦径 (cm)	横径 (cm)	厚み (cm)	重さ (g)	挿図番号	出土遺構遺物番号	縦径 (cm)	横径 (cm)	厚み (cm)	重さ (g)
1	015-0049	0.50	0.50	0.20	0.07	3	026-0004	0.50	0.50	0.35	0.10
2	015-0050	0.50	0.50	0.40	0.11	4	C2-0006	0.35	0.40	0.30	0.10

tab. 46　土玉・土錘計測表

挿図番号	出土遺構遺物番号	縦径 (cm)	横径 (cm)	厚み (cm)	孔径 (cm)	重さ (g)	挿図番号	出土遺構遺物番号	縦径 (cm)	横径 (cm)	厚み (cm)	孔径 (cm)	重さ (g)
5	008-0021	3.3	3.5	3.3	0.8	33.0	10	016-0017	—	2.5	2.7	0.6	(8.2)
6	016-0004	3.2	3.4	3.3	0.8	30.8	11	016-0018	3.2	3.3	2.9	0.7	31.9
7	016-0013	3.3	3.4	3.3	0.6	40.1	12	016-0019	3.2	3.0	2.9	0.8	25.7
8	016-0015	3.3	3.2	2.6	0.7	29.2	13	039-0025	3.5	3.7	3.5	0.8	45.6
9	016-0016	3.3	3.4	3.2	0.7	36.8	14	C2-0001	3.8	2.6	—	1.1	(9.7)

に含み，器表面は２次的火熱を受けている。この他，竪穴住居042からも支脚が出土しているが遺存が悪く実測出来なかった。

不明土製品　16・17は用途が不明の土製品である。２点とも竪穴住居010(古墳時代中期)から出土した。16は中央部を一部欠損するが長軸16.8cm，短軸5.2cm，厚さ2.5cmの直方体で，長軸方向の両端を少しつまみあげている。17は半分を欠損するが同じ形態のものである。幅4.5cm，厚さ3.0cm，現存長5.8cmを計る。どちらも所々に成形の際の指頭痕が残る。胎土には細砂粒を少量含み，焼成は極めて良好である。15は炉内から半分に割れて出土し，細かいひび割れが入る。16は覆土中から出土。同様の土製品が荒久遺跡(2)の竪穴住居113(古墳時代中期)の炉からも出土している。

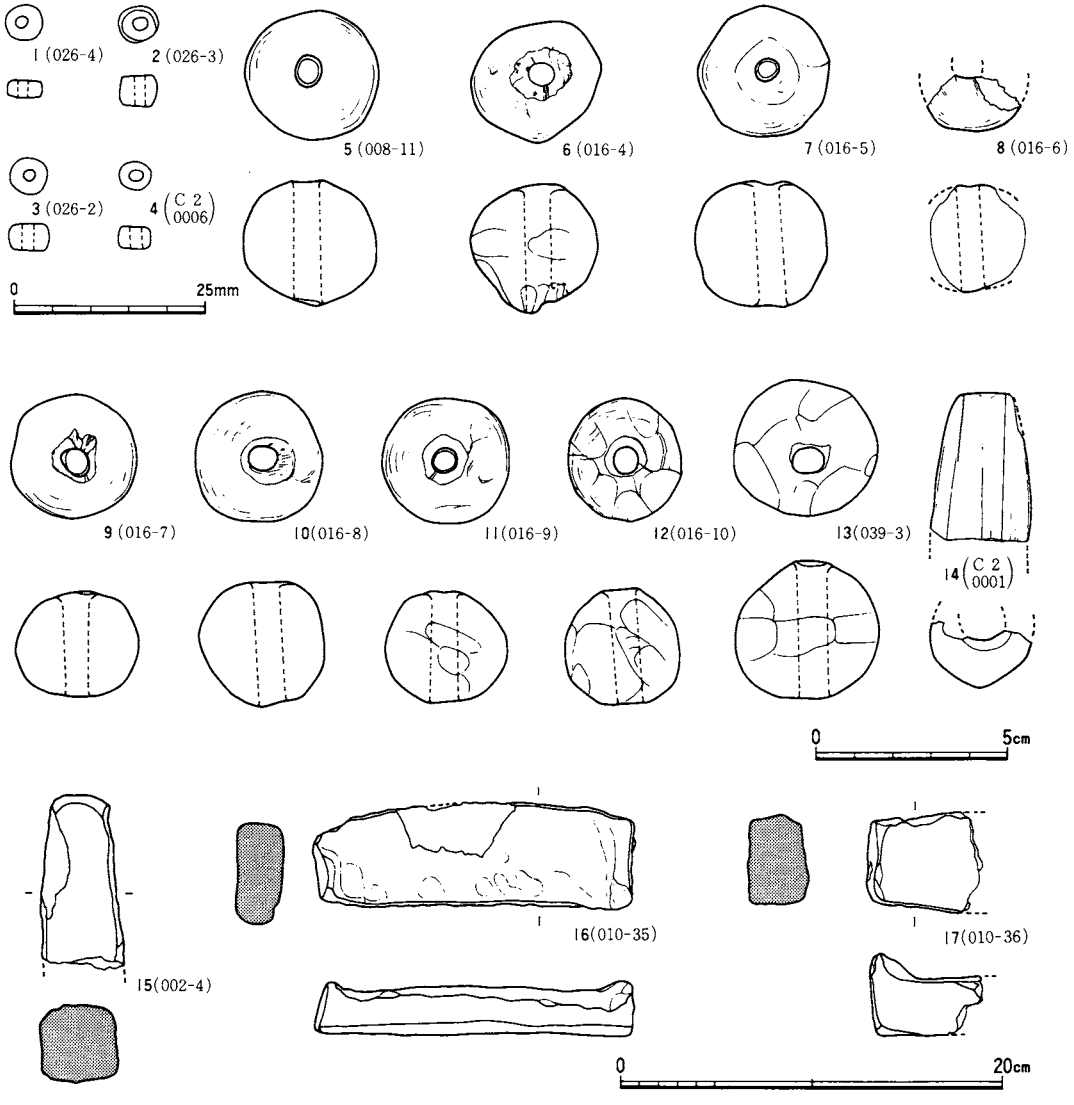


fig. 94　玉類・土製品

石器[1]　今回の調査において検出できた縄文時代の石器は，1～7の計7点である。本遺跡で検出された縄文時代の遺構は，炉穴051が1基のみであるが，石器はいずれも古墳時代以降，或るいは時期不明の遺構の覆土中の出土である。1～3は黒曜石製の石鏃である。1は形態的には基部にほんの僅かに抉りが見られ，側縁は緩やかに外彎するものである。片面の中央部に素材の剝離面が若干認められるが，両面に入念な調整剝離が加えられている。重量0.64g。2は先端部を僅かに欠損し，基部は極く緩やかに外彎しているが，形態的には平基三角鏃に近似している。片面は入念な調整剝離が加えられているが他方は大きく素材の剝離面を残している。現存重量0.36g。3は先端部と両脚に欠損が認められるが，基部に大きな抉りが入り，側縁が緩やかに外彎する形態となろう。両面とも素材の剝離面を大きく残す粗いつくりである。現存重量0.90g。4は一部欠損するが安山岩の円礫を用いた石器で，両面のほぼ中央に被敲打痕が認められる。現存重量199.2g。5は流紋岩の円礫である。肉視的には使用痕跡を認めることができないが，何らかに用いる為に持ち込まれたのであろう。重量132.3g。6は凝灰質砂岩の円礫を用いた石器である。図示した上下に打ち欠きが認められ，更にその部分を含めた周縁と両面のほぼ中央部に敲打痕・被敲打痕が認められる。このうち両端と両面の数ケ所に残る痕跡は，他より強いものである。やや多目的に用いられた石器であろう。重量396.5g。7は砂岩の原礫をそのまま用いた石器で，礫の一端に微少ながら集中的な敲打痕が認められ，ハンマーストーンに相当するものであろう。重量1,100.0g。石器の時期については，既述した出土状況や共伴する土器等，時期決定ができる条件が不充分で言い難い。遺跡より検出できた土器が全5点ながらも全て早期に比定されることや，1・2の石鏃の形態は従来，早期の所産といわれるものであることから，積極的に多くを早期の所産と言及してよいかもしれないが，2と同一母岩より作出の可能性の強い3の形態は，従来の知見によれば明らかに後出のものである。ここでは単に形態のみで時期決定をすることは，やや性急である事を指摘するに留めておく。

砥石　8～11。8は竪穴住居035(古墳時代中期)の床から出土。流紋岩製で，表裏側面に研磨痕が残る。上端にも被敲打痕が認められ縄文時代の円礫を用いた石器を砥石に転用している可能性がある。現存重量943.4g。9・10は竪穴住居010(古墳時代中期)床面から出土。2点とも砂岩製である。9は両面に研磨痕が認められる。表面以外欠損したようだが上端部を除くと欠損面は既に摩耗している。現存重量385.7g。10は裏面と両端を欠損。表面と側面に研磨痕が見られる。11は竪穴住居039(古墳時代後期)西壁際の床から出土。完形で，表裏側面に使用痕が残る。上端部中央に両面から穿孔するが貫通しない。重量264.1g

石製品　12・13で溝018の覆土中から出土。ともに滑石製である。板状の薄い長方形で，長辺の一方を刃状に薄く研磨している。幅はどちらも20㎜で現存重量は12は6.1g，13は4.8g。

1．記述にあたっては，田村隆・原田昌幸『常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅳ』（財）千葉県文化財センター1986を参考とした。

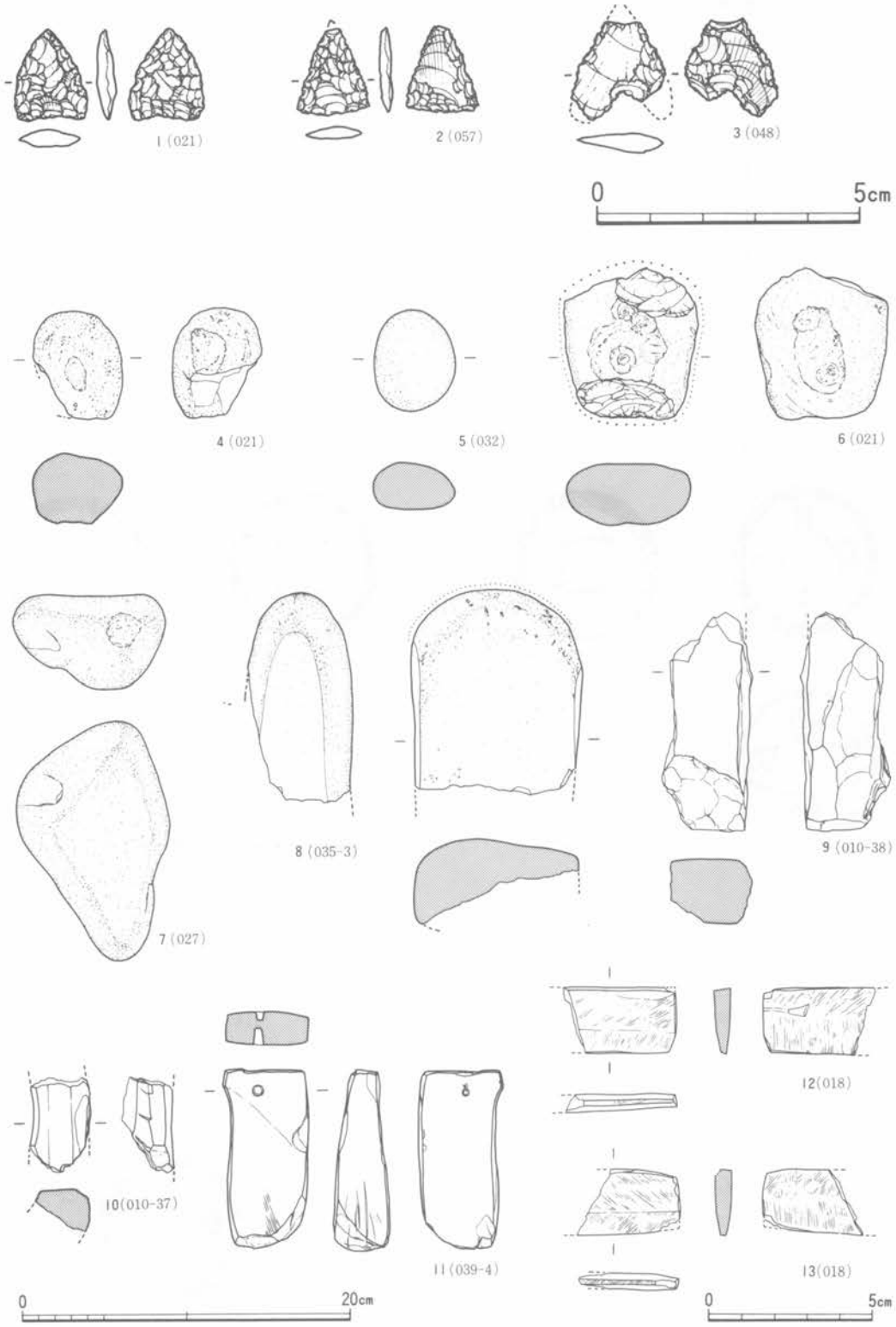


fig. 95　石器・砥石・石製品

5．銭貨（fig.96）

出土した3点の銭貨はいずれも表採資料であり，どこの遺跡でも出土するような量で資料的価値は薄い。計測値については表に示したので，銭文について簡単に触れておこう。

1は新寛永のなかでは比較的字体が整った部類に属す。特徴は「寛」の13画の末端を間延びした縦長の波状に処理することで，そこから「虎之尾寛」とも呼称される。

2は字体の特徴から新寛永に属すのは確実であるが，銹化が進み銭文は不鮮明である。

3は銹化の進行が著しく銭文は不明瞭。銅色・銹化の度合いから渡来銭であることはほぼ確実である。おそらく北宋銭のなかのいずれかであろう。

近藤重蔵「銭録」『近藤正斎全集』第3巻　1906

小川浩編『寛永通寶銭譜』1973

『古貨幣図録　昭和泉譜』第1巻　日本銭　1974

『平城宮発掘調査報告　VI』—平城京左京一条三坊の調査—P189　1975

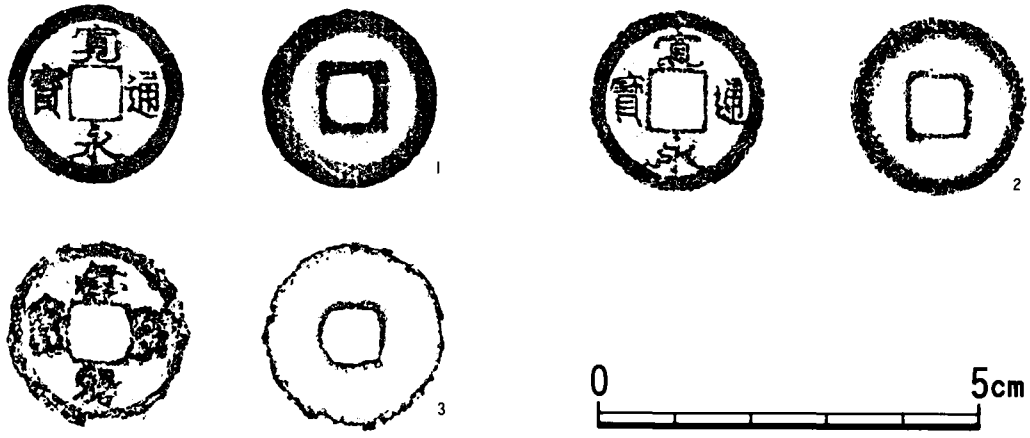


fig.96　銭貨

tab.47 銭種・計測値一覧

番号	銭　貨　名	初　鋳　年	W(g)	G(mm)	N(mm)	g(mm)	n(mm)	T(mm)	t(mm)
1	中之島銭　虎之尾寛	元文5(1740)年	1.78	23.09	18.42	7.14	6.15	0.88	0.59
2	新寛永(銭文不鮮明)		1.97	22.94	18.71	7.85	6.88	0.96	0.62
3	輸入銭(銭文不鮮明)		2.03	(23.36)	20.35	8.68	7.93	1.20	0.95

＊銭貨の各計測点については以下のとおり。

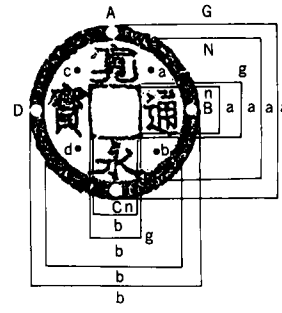
外縁外径 $G=\frac{Ga+Gb}{2}$，外縁内径 $N=\frac{Na+Nb}{2}$，

内郭外径 $g=\frac{ga+gb}{2}$，内郭内径 $n=\frac{na+nb}{2}$，

外縁厚 $T=\frac{A+B+C+D}{4}$，文字面厚 $t=\frac{a+b+c+d}{4}$，

＊＊重量は化学天秤（SHIMADZU Type EB-3200D：0.1mg）を使用。

厚みはダイヤルキャリパー（N・C・K：0.01mm）を使用。



6．瓦(fig.97，PL.38)

出土したのは2点の平瓦と文字瓦の小片で，計3点になる。1は凸面を縄叩き目で成形したもので，やや薄手に作る。端面を残す。2は凸面に0.7cm四方の正格子叩き目を残す。凹面には布目があるがそれ以外は不明瞭。硬質な焼きである。3は文字瓦。凸面は側面に平行する平行叩き目(5本／3cm)，端面を残し凹面に端面側の布端の痕跡を止どめる。文字は端面と平行に書かれ，その範囲は2.9×2.3cm。文字の画数は4画と少ない。1・2画目は横に引き，つぎに縦を引き4画目をまた横に書いている。第3画目は一直線に延びずに上端部でやや折れるものの一筆によるものである。線を引いた窪みには擦痕があり，細い半截竹管状の工具による刻字であることをうかがわせる。おそらくこの一字で完結するものと思われるがその意味するところは不明とせざるをえない。これらは資料も小さく成形方法まで不明であるが，2・3は桶巻作り，1はあるいは一枚作りの可能性がある。

これらの瓦は調査地に近い古代の千葉寺に関連するものであろう。千葉寺の出土瓦については調査が行き届いていないが，今回の出土資料と関係するものに，叩き板の異同は別として同種の正格子の叩き目の4重弧文軒平瓦が出土している。それ以外の軒平瓦の叩き目には斜格子が知られているにすぎない。また文字瓦には「島」・「乙」が出土している。

参考文献　『第7回　関東古瓦研究会資料』下総編レジュメ　1983

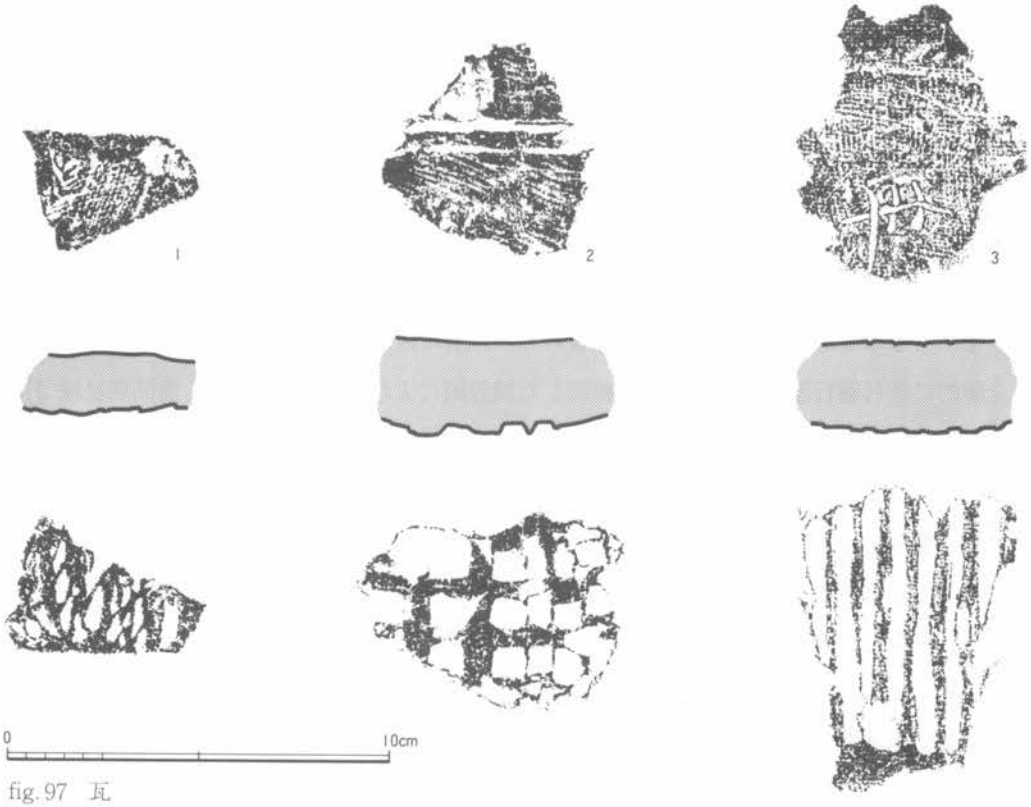


fig.97　瓦

Ⅳ まとめ

1．先土器時代

荒久遺跡(1)の先土器時代石器群を上層，下層という大別2枚の文化層に分かち，その内容を記載してきた。最後に両文化層の総括を行い，あわせて今後に残された問題点を指摘したい。

(1)上層石器群

2箇所のブロックがある。第1ブロックは細石刃を主体とし，これに少量の剝片が加わる。剝片は，細石刃と母岩の共有関係が認められるところから，細石核の生産過程に生ずる調整剝片を主体としている。2次加工や細部加工が看取されるものが多く，細石核の生産・消費の過程にあっては，細石刃と共に多量の不定形刃器の生じることを検知し得た。勿論，細石刃が目的的に生産されるのに対して，不定形刃器は，作出された多数の剝片の一部から選択的に摘出されたものと見られる。

下総台地を代表する細石器石器群の検出された向原遺跡（高木・千葉1974）では，細石核と同一石材の削器や使用痕のある剝片が多くあり，荒久遺跡(1)と同一のプロセスが想定される。また，該期の最も良好な石器群である大林遺跡第Ⅰ文化層（印刷中）においても，細石核と不定形小型刃器との因果関係が検証されているので，本地域にあっては，かなり一般的な手法と考えることができる。従って，第1ブロックの石器群は，細石核の生産・消費過程から生じるものを主体としていることが理解される。

第2ブロックと第1ブロックの関連性は不明であるが，第2ブロックの石器群には，細石器と関係のありそうな石器は含まれていない。比較的横長の剝片を得るための石核や，縦長だが石刃と規定することのできない剝片があるが，これらの剝片はいずれも一般的な剝片剝離過程から生ずるものであり，第1ブロックの資料との差異に注意をはらいたい。

全国的に細石器石器群の石器組成を検証した織笠昭によれば（織笠1984），南関東地域では，細石刃に共伴する石器として各種の削器と片刃礫器が挙げられている。すなわち，製作手法を全く異にする3つの要素の複合的様相が指摘されるという。大林遺跡の資料を中心として，この様相を整理すると，

構成Ⅰ　細石核の生産・消費過程。細石刃の組織的生産と，不定形刃器の選択的生産の過程である。黒曜石，チャート，流紋岩などが用いられる。

高木博彦・千葉建造　1974「向原遺跡」『千葉ニュータウン埋蔵分化財調査報告書』Ⅲ

織笠昭　1984「細石器文化組成論」『駿台史学60』

構成II　回転系多打面型・反転系打面交代型・盤状連続横打型等，一般的剝片剝離手法により，矩型・横長の剝片を生産する。削器のブランクをも量産する。安山岩を多用する。

構成III　チョパーコアの生産・消費過程。片刃打割器と大型盤状の剝片を得る。粘板岩や砂岩など比較的粗粒の石材を用いる。

第1ブロックが構成I，第2ブロックが構成IIに相当することからも明らかなように，細石器石器群と言っても，各構成が常に単一地点に廃棄される必然性はない。しかし，3層的構成はメチエとしては共時的であり，技術的選択というフィードバック・ループを媒介として，多様な表出形態を帰結することになる。

(2)下層石器群

第2黒色帯のほぼ中位を産出層準としており，3箇所のブロックから構成されている。隣接する荒久遺跡(2)に，もう1ブロックあるが，今回は考察の対象外とした。各ブロック間には横のつながりが認められないが，比較的近接した時期に陸続して形成されたものと見られる。これらのブロック中，第3ブロックとした集中分布が，質・量共に卓越しているので，以下，第3ブロックの資料を中心として問題点の摘出にあたりたい。

［1］第3ブロックの石器群に際立って目立つのは，たいへん良質の黒曜石が多く含まれていることである。まず始めに，黒曜石の使い方を検討しよう。黒曜石は184点で，全体の79.3%に相当し，第3ブロックの主体を占めている。幸いなことに，特徴のある母岩が多く，全資料を7母岩に還元し得た。これらのうち黒曜石1が113点と，全黒曜石の61.4%て，次いで黒曜石2が47点，25.5%となり，両者を合計すると，160点，87.1%となる。黒曜石4，黒曜石6はいずれも少数であるが注目すべき資料が含まれていた。

黒曜石1・2には，背面に大きく礫面を残す剝片や，最終的な石核とみられる資料が欠落しており，石材消費の全過程の連鎖の上からは，部分的な過程しか反映されていない。また，両母岩共に，削片を多く含んでいるので，ブロック内で，少なくともその一部が消費されたものと判断される。この場合，母岩消費のプロセスが種々想定されるが，剝片剝離がある程度まで進行した石核が搬入された蓋然性を想定したい。

黒曜石1の14の剝片を見ると，剝片背面の稜線に沿ってジグザグに打点が観察されるところから，打面と剝離作業面の置換過程が認められる。ところが，遺存する剝片の多くは，その背面構成から，求心的剝離によって得られたものであることが推察され，この過程は，39や40の接合資料からも窺うことができる。これはおそらく，ブロック搬入段階の石核と，その後の経緯を暗示しているものと見られる。ただし，14が分割された別個体の石核に由来する可能性を否定することは困難であるから，断定は差し控えねばならない。

しかし，いずれのプロセスを想定するにせよ，黒曜石1・2に適用された技法には，打面と

作業面を入れ換える場合と，石核縁辺に沿うように打点をまわす場合との両者があり，これらが，同一母岩を対象に選択的に行使されていることが看取される。

この一連の剝片生産の産物は，即自的に供用される場合が最も多いが，少数のものに2次加工が加えられ，器種的分化が計られる。2次加工の手法には大きく見て3種ある。ひとつは，剝片の縁辺部に連続的な細部加工を加えるもので，削器や剝片形状の修整に用いられている。第2に指摘されるのは，剝片の折り取りである。これには精細なブランティングが介在し，比較的長手の剝片を平行四辺形にトリミングする例が典型的である。ナイフ形石器の製作に専ら用いられる。

最後にバイポーラテクニックが列挙される。所謂楔形石器の生産・消費過程であるが，やや厚味のある剝片を素材として，細石刃状の剝片を得る曽根型コアあるいは両極石核と，小型のピエスエスキーユを生産する過程とを識別することができる。前者は黒曜石4の46例が典型であり，細石刃の生産過程と見ることもできる。後者に就いては，その機能をウェッヂングに限定せず，刃器製作の細部加工が含まれている可能性を指摘したい。

以上で，黒曜石の使い方の概要は理解し得るのであるが，黒曜石6に就いて注意しておきたい。黒曜石6は3例しかないため，母岩消費の実体は不明であるが，石刃かと見られるものが2例ある(50，51)。50は基部加工のある石刃，51は削器であるが，黒曜石の中では異彩を放っており，上述した一般的剝片剝離手法と共に石刃技法が並在した可能性を示唆している。

次に，黒曜石以外の石材に就いて瞥見したい。非黒曜石系の石材は，いずれも少量ずつ断簡的に搬入されているため，その使われ方に不明のところが多い。こうした中にあって，珪質頁岩1・5には，比較的整った石刃状の剝片が含まれており，黒曜石6と共に，石刃技法の片鱗を窺わせている。また，珪質頁岩3には黒曜石1の14に比較される剝片がある（61)。

［2］以上の如く，第3ブロックの石器群は少量の石刃を客体的に保有しているが，その主体となるのは一般的な剝片であり，また，それらの剝片を素材とする石器類と判断してよいであろう。ところで，剝片素材の石器類のなかには，縦長の剝片を斜めに折り取るように整形した極小のナイフ形石器の一群が含まれ，その位置づけを巡る問題があらたに提起されることにもなった。関東地方のナイフ形石器はその豊富な層位的出土例を背景として詳細な変遷過程が明らかにされつつあり，この脈絡の裡に本遺跡のナイフ形石器の出自も埋めこまれているものと考えねばなるまい。しからば，それはどのように読解し得るであろうか。

ナイフ形石器の変遷に関しては，武蔵野台地Ｉｂ文化期に出現する基部加工尖頭石刃をプロトタイプとし，Ｉｃ文化期（後田段階）に確立する所謂茂呂型をもって確立期とする皮相的見解が，今なお支配的である。しかし，武蔵野台地第2黒色帯上部を産出層準とする石器群に含まれているナイフ形石器の多くには，基部加工尖頭石刃や鈴木遺跡Ⅵ層石器群の石刃ナイフを指標とする所謂茂呂型が殆ど含まれてないことに注意しなければならない。従来の調査事例を静

観する限り，この層準には何れの範疇にも帰属しない剝片製の小型ナイフが卓越しており，上述の単線的発展図式が事実上成立しないことを明示している。それでは，基部加工尖頭石刃→剝片製小型ナイフ→石刃製茂呂型ナイフという三段階説が対置しうるのであろうか。おそらく，このような段階設定にも，なお曖昧なところが残されているように見える。

これまで瞥見してきたような，単線的な発展図式が準備されてきた背景としては，あたかもタイプサイトの資料に立脚して土器の型式が定義されてきたように，少数の特定遺跡の石器群に基づく段階認識の固定化を指摘することができるかもしれない。問題は，この過程でノイズとして棄却されてきた様相を含めたトータルな石器群の評価軸の設定が，従来の技術・形態学のパラダイムでは不可能である点にこそ求められねばならないのだ(安斎 1986a,b 1987a,b 1988)。この問題に抵触する基本的文献は，安斎前掲論文や阿子島の中間領域論(阿子島 1983)に過不足のない引用と紹介があり，ここであえて論及するには及ばないが，所与の石器群の構成を常同的な斉一性に還元しうるとした前提をまず疑わねばなるまい。

これまでのところ，ナイフ形石器の生態的変化に関しては，安蒜による集合概念の提起があり(安蒜 1986 他)，佐藤は社会化した技術の選択的適用としての間石器群的諸変異を提示した(佐藤 1988)。このような考察に従う時，同一層準に包括しうる石器群を対象とする，その様相の摘出が，遺跡間の共通性の抽象と同時に，むしろ，廃棄地点間に表出された異差性においてもなされねばならないことは明らかであろう。廃棄地点間の非還元的異差性が，石器を含めた集団的装備の周回的推移に最もよく象徴される，集団の社会的・自然的適応形態の物質的変換過程に還元しうることは，狩猟・採集民に関する多くの民族誌的データの蓄積から帰納的に推測されているばかりでなく，既に先史学的枠組みとしても古典的モデルとなっていることは改めて指摘するまでもなく，その地域的具体像の提示と，その社会進化論的位置づけこそが問われている。

さて，上述した視野の裡で石器の制作技術や形態，組成，機能等の再検討が不可避の課題として表出しつつあるが，紙面の都合もあり，ここではナイフ形石器に引きつけて論点を指摘し

安斎正人　1986a「先史学の方法と理論：渡辺仁著『ヒトはなぜたちあがったか』を読む(1)」『旧石器考古学』32

安斎正人　1986b「同上(2)」『旧石器考古学』33

安斎正人　1987a「同上(3)」『旧石器考古学』34

安斎正人　1987b「同上(4)」『旧石器考古学』35

安斎正人　1988「斜軸尖頭器石器群からナイフ形石器群への移行―前・中期/後期旧石器時代過渡期の研究―」『先史考古学研究』1

阿子島香　1983「ミドルレンジセオリー」『考古学論叢』

安蒜政雄　1986「先土器時代の石器と地域」『岩波講座日本考古学』5

佐藤宏之　1988「台形様石器研究序論」『考古学雑誌』73-3

ておくに留めたい。ナイフ形石器を理解する上でまず問題となるのは，学史的に言って，切出形石器をその内部に統合してきた過程と，茂呂型，杉久保型，東山型等の型式設定とその適用の経過が指摘されよう。切出型石器をナイフ形石器の一型式とすることは，立川ローム層全層準にわたって観察しうる石刃生産技術と一般的剝片生産過程の共時的展開を構造的に把握する上で大きな支障を来すことは否めず，また，特定型式の固定的認定は，諸地域の技術的脈絡に先験的理念の網を被せてきた。こうした前提にたって，編年的考察をすすめることは，石器群の層位的出土状況の対比と，その恣意的解釈以上の意味を持つことはない。

ナイフ形石器には多数の属性が知られているが，石材の獲得，ブランクの製作，細部加工，形態，機能，リサイクル，廃棄等の属性が線条的に連合した系列(属性的セリー)であると考えることができる。立川ローム層下部におけるその発生段階において，属性的連合は大きく2種に分岐し，その後両者は螺旋的展開を見せながら終末期に及ぶ過程を辿っている。この初源における属性的分岐とは，幾何学的形態と尖頭器という両極的分岐にほかならず，それぞれ固有の属性群の連合的系列を保持していた。しかも，各々の連合的系列を構成する属性は相互に置換可能な分節性を帯び，置換群による個体発生的分化をも重要な機制としている。

(3)この一般的考察に従って，荒久遺跡第3ブロックの石器群を通観すると，前段階における幾何学的形態(台形石器)の素材供給システムを総体的に継承しながら，明らかに尖頭器という形態を意識しており，分節的置換群の個体発生的分化というメカニズムを抽象することが可能であろう。そして，この機制の意識的選択は，遙か後代の所謂砂川型ナイフに一般的である素材の斜め整形というテクニックをいちはやく採用することによって実現しており，技術的適応の反復性という概念をも同時に提起している。さらに，この手法こそは，後田段階の磯山型石刃を素材とするナイフ形石器にしばしば適用されていることも忘れてはならない。

先に，この段階に前後するナイフ形石器を剝片製小型ナイフと規定したが，その形態には，本遺跡例に顕著であった尖頭器様のもののほか，幾何学的なものもあり，一見複雑な様相を見せるかのごとくであるが，この事実はその出自を暗示するとともに，属性間の互換的関係が限定的であった事情を指し示していよう。また，各遺跡で磯山型の粗製・大型の石刃を共伴しており，前記の後田段階の成立前夜の状況を知ることが可能である。しかし，寺尾遺跡(鈴木 1980)の内容を検討する限り，剝片製小型ナイフは大型石刃ナイフと共時的に存在した可能性が示唆され，そこに格別の段階を設定することは困難であるばかりか，ここに，武蔵野台地IV層石器群の殆ど全ての属性は既に醸成されていることを知るのである。また。これ以外に楔形石器に関しても十分の配慮を要しようが，既に予定の紙数を費やしており，南志津地区の報告書(印刷中)を参照していただきたい。

鈴木次郎　1980「第VI文化層」『寺尾遺跡』

2．遺構・遺物

荒久遺跡(1)では限られた調査範囲ではあったが，先土器時代をはじめとし，縄文時代，弥生時代，古墳時代と各時代に渡って生活の痕跡が検出された。荒久遺跡全体の調査は確認調査の成果が出ている他はまだ継続中である。このため当台地における遺跡全体の営みについて述べることは性急ではあるが，とりあえず荒久遺跡(2)[1]の調査成果を考慮にいれながら，今回の調査の成果をまとめ，併せて問題点の指摘を行って今後の調査の一助としたい。

(1)調査の成果

荒久遺跡(1)で検出した遺構は竪穴住居45軒，炉穴1基，土壙墓1基，土坑9基，溝10条である。このうち縄文時代の遺構は炉穴1基で，出土遺物はないが周辺で縄文式土器を出土し関連が考えられる。縄文式土器は，すべて遺構外出土で僅か5点であった。しかし，早期末葉から前期初頭に位置づけられ，現在のところ県内では出土例の少ない貴重な資料である。炉穴以外の遺構は弥生時代以降に属する。竪穴住居と土壙墓は弥生時代終末期から古墳時代である。土壙墓は本地域の古墳時代終末期を考える上で貴重な資料である。また，土坑9基のうち1基は古墳時代前期の遺物を含んでいたものの残りの8基は時期，性格が不明である。溝は出土遺物が僅かで，時期及び性格がわかるものが少ない。いずれも古墳時代までの遺構を破壊する。そのなかで溝032は柵列と思われ，文字瓦が出土して古代の千葉寺と関連が考えられた。また，溝048は荒久遺跡(2)まで延びており確認調査の結果によってもこれよりさらに南東に延びていく様子を見せている。土層の観察によると所々に硬化した層が認められ，谷を利用した道路状遺構のような性格が考えられる。また，畜産試験場時代の建造物の土台に破壊され，寛永通宝や近世の陶磁器破片などを含んでおり，少なくとも近世までは利用されていた可能性がある。

荒久遺跡(2)で検出した遺構は竪穴住居10軒と溝8条である。竪穴住居の所属する時期は荒久遺跡(1)と同じである。溝のうち028・048・058については両遺跡をまたがっている。荒久遺跡(2)は畜産試験場時代の建造物によってやこれを取り壊す際にかなり地山をいためており，撹乱が著しい。荒久遺跡(1)の遺構の検出状況を考えると，本来はこれ以上に遺構があったと推測できる。

以上が荒久遺跡の調査の成果である。荒久遺跡(1)・(2)を合わせても，縄文時代の遺構は炉穴1基のみであった。出土した縄文式土器は総計で20点余りでしかない。しかし，弥生時代終末期から古墳時代になると，検出した竪穴住居は55軒となる。さらに確認調査の結果によると，保存となった台地先端部(調査区の西側)では今回の調査区以上に遺構の密度が高く，これを合わせると，古墳時代を中心にかなりの規模の集落が営まれていたことになろう。先に述べた先土器時代以降，この地に安定した集落が営まれるようになるのは弥生時代終末期からであったといえる。

1．『千葉市荒久遺跡(2)』(財) 千葉県文化財センター　1989

荒久遺跡の南側に立地する中野台遺跡，鷲谷津遺跡，地蔵山遺跡，観音塚遺跡は調査中である。隣接する地蔵山遺跡や鷲谷津遺跡で古墳時代中期の竪穴住居が数軒検出されているが，集落の中心となるのは荒久遺跡で遺構数が少なくなる古墳時代後期以降[1]のようである。荒久遺跡とどの様に関連していったのか調査の結果に興味がもたれる。

(2)集落について

出土土器の特徴と竪穴住居の特徴から集落の時期はⅠ～Ⅲの大きく3つの時期に分けられた。

Ⅰ期

弥生時代終末期から古墳時代はじめの時期である。荒久遺跡(1)で26軒，荒久遺跡(2)[2]で5軒の計31軒がこの時期に属する。

この時期の竪穴住居から出土する土器の器種としては片口杯・高杯・鉢・壷・器台・甕・台付甕・甑がある。

片口杯　竪穴住居015で出土した1点のみである。

高杯　A：杯部外面に稜を持つ。脚部と接合している例がなく，脚部の形態は不明だが，透孔を持ちハの字状に開く形態であろう。B：稜をつくらず内彎して立ち上がる。脚部はハの字状に開く。C：杯部は遺存していないが，脚部が大きく開くタイプ。脚部には透孔を持つ。杯部はおそらく稜のない椀形のものであろう。Aは竪穴住居004・013・015，Bは竪穴住居040で出土する。Cは竪穴住居037・060から出土している。また実測できなかったが，竪穴住居040からも破片が出土している。

鉢　形態的には1種類でA類とする。平底で，緩やかに内彎して立ち上がる。外面をナデて仕上げるものと刷毛調整するものがある。竪穴住居004・006・015で出土する。

壷　A：折り返しの二重口縁のもの。B：口縁部が短く外反し，胴部が長い。C：口頸部が長い。直口壷といわれる形態のものである。D：口縁部はくの字状に外反し，球形の胴部を有する。E：口縁部が内傾する。以上の5タイプに分けられる。Aは竪穴住居004・027，Bは竪穴住居004・015・036，Cは竪穴住居027・038・040，Dは竪穴住居036・056，Eは竪穴住居027で出土する。また胴下半部しか出土していないが竪穴住居038出土の胴中位に網目状撚糸文を施す壷はおそらくAに属すると思われる。

器台　A：受部は外反しながら立ち上がる。口縁下に弱い稜がある。B：受部は横方向にのびる。Aは竪穴住居040で2点，Bは竪穴住居034で1点出土する。どちらも受部径より脚裾部の径のほうが大きい。セットとなるは坩は調査区内では出土しなかった。

甕　A：口唇部に刻目を有する。B：単口縁のもので刷毛調整を行うもの，ヘラケズリ調整を行うものがある。C：折り返しの二重口縁となる。Aは竪穴住居022から出土する。Cの竪穴住

1．本文Ⅰ－2「荒久遺跡の立地と周辺の遺跡」参照。

2．遺構番号が3桁になるものは荒久遺跡(2)の遺構を表す。

居038出土の甕は折り返し口縁の下端と肩部の稜に刻目を持つ。

台付甕　A：口唇部に刻目を持つ。B：単口縁のもの。C：S字状口縁のもの。Cは竪穴住居027で出土するほか小破片で図示できなかったが，竪穴住居013でも口縁部が出土している。また竪穴住居101で出土する台付甕下半部は胎土などからS字状口縁台付甕のものである。いずれも器壁が極めて薄く在地の土器群とは胎土・焼成が異なる。口端部は僅かに外方に開き，S字状口縁が定形化した段階のものであろう[1]。他地域からの搬入品と見られる[2]。

甑　鉢の底部に円孔を穿った形態である。円孔は焼成前で，口縁部に刻目を持ち外面は刷毛調整する。竪穴住居030出土の1点のみである[3]。

竪穴住居の平面形態は隅丸方形が多数を占める。しかし隅丸方形とはいっても各辺が僅かに張る小判形に近い形態のもの(竪穴住居009・022・029・038・060・103)と，各辺が直線的なものがある。また，各辺が直線となるものには面積が40m²以上の大型の住居と40m²以下の小型の住居がある。大型の竪穴住居は縦長の長方形で，小型のものは正方形に近い長方形，または正方形を呈する。この中で竪穴住居015は面積100.23m²で，飛び抜けて大きい。柱穴は対角線上に4本配するものを基本とし，小型の住居では柱穴を持たないものもある。また，大型の竪穴住居は柱穴の掘方が方形のものが多い。炉は2本の柱穴にはさまれた長軸線上に位置するが，柱穴を結ぶ線よりも内側に位置するものもある。貯蔵穴はある住居とない住居がある。位置は炉と反対側の壁際で，炉に向かって，中軸線からやや右によったところに位置する。形態は不整形なものが多くしかも小型である。貯蔵穴の前に土堤状の高まりを持つものもある。また炉と反対側の壁際の中軸線上にピットがある住居もあるがこれは出入口施設に関係するものであろう。竪穴住居の主軸方向は北西が多く一定性が見られる。このように竪穴住居の構築にはある程度の規則性が認められ，特に大型の住居のプランは定形化しているといえる。

I期の中で切り合い関係をもつのは竪穴住居036と037であるがどちらの出土遺物も流れ込みの可能性が高く遺物の新旧を考える決め手とはならない。その中で，竪穴住居022の甕(2)，竪穴住居038から出土している甕(3)・壷(8)が弥生時代の伝統を残した古い様相を呈しているといえる。3点とも床面から出土し，竪穴住居に伴うと考えられる。また竪穴住居の形態をあわせて検討してみると2軒とも各辺が僅かに張る小判形に近い形態を呈している。底部しか出土していないが竪穴住居009などもこの時期に属する可能性がある。また，竪穴住居038は竪穴住居015・034・036・040の立地する間に占地しており，これらと同時に存在したとは考え難い。また荒久遺跡(2)では竪穴住居101と102が切り合っており竪穴住居102の方が切られている。そし

1．大参義一「弥生式土器から土師器へ」『名古屋大学文学部研究論文集』47　1968

2．野沢則幸氏の御教示による。産地は関東以西，名古屋以東の可能性がある。

3．この時期の集落では甑は集落内で1個程度の割合でしか出土しないようである。
柿沼幹夫「甑に関する覚書き」『埼玉県立博物館紀要11』埼玉県立博物館　1984

て，竪穴住居102の大型の甕，竪穴住居103の台付甕が口縁が波状口縁で古い様相を示す。また竪穴住居103の壷は胴部に文様を施している。このほかの竪穴住居については，1軒あたりの出土量が少なく，しかも器種が揃わないため細かい新旧関係をとらえることは難しい。しかし，大きな時期差は認められないようである。

I期の竪穴住居の中で竪穴住居015はその卓越した規模において注目される。出土した土器も片口杯など特異なものを含んでいる。この様な大型住居は炉がないものが多いため居住を目的にしたものではなく，共同家屋ではないかと言われている[1]。松戸市諏訪原遺跡[2]でも同時期の竪穴住居に比べ，傑出した規模をもつ竪穴住居を検出している。やはり炉がないことから通常の住居遺構ではなく，集落全体に係わる竪穴遺構ではないかと想定している。竪穴住居015の場合，中央部を竪穴住居026により破壊されているので，炉の存在については確認できないが，台地の中央に占地し，特別な役割をもっていた可能性は考えられる。

II期

いわゆる和泉式といわれる土器群を主体とする時期である。竪穴住居010・012・031・035・108・109・113の7軒がこの時期に属する。

器種としては杯・坩・高杯・器台結合土器・鉢・甕がある。

杯　A：平底で大きく外傾し，内彎しながら立ち上がる。竪穴住居108から出土している。

高杯　A：杯部外面下部の稜は更に顕著になる。脚部は柱状になり裾部は脚柱部とは明瞭な境を持ち，横へ大きく開く。B：稜を持たず，内彎しながら立ち上がる。脚部を遺存するものがなく，脚部の形態は不明。D：本期でのみ見られる形態である。他の高杯と胎土が全く違う。外方に張り出す明瞭な稜を持ち，口端部と裾端部がつまみだされて水平にのびる。脚部は柱状だが段を持つ。竪穴住居012で杯部と脚部が別々に計3点出土する。Aのなかでも竪穴住居108出土の高杯には脚柱部と裾部の境が不明瞭なものも見られ，新しい要素を持つものを含む。

坩　A：口縁は大きく外傾し，胴部は中位が膨らむ算盤形を呈する。B：口縁が短く外反する。

器台結合土器　高杯形を呈し，杯底部に鍔状の突起を持つものである。器台に壷口縁部をのせたものであるといわれる[3]。竪穴住居010から完形品が1点，破片が竪穴住居108と溝046覆土中から出土する[4]。

1．甲元眞之「農耕集落」『岩波講座日本考古学4』岩波書店　1986

2．『諏訪原遺跡』松戸市教育委員会　1974

3．熊野雅也「特殊な器台形土器について(1)」『史館』第3号　1974
同「特殊な器台形土器について(2)」『史館』第8号　1977

4．この時期の高杯のなかにも杯部の稜が突起するものがあり，船橋市外原遺跡(『外原』船橋市教育委員会　1972)はじめ各遺跡に見られるが，本例の場合突起が2cmもの幅をもちこれらとは形態的に別のものと考えられる。千葉市大森第2遺跡24号住居（『京葉』千葉県都市公社　1973）で出土しているものは本例と同種のものであろう。

壷　D：口縁部がくの字状に外反し，球形の胴部を持つ。E：胴部が内彎して立ち上がる。

鉢　A：体部が外傾して直線的に開く。

甕　B：単口縁。胴部は球形で幾らか長胴化したものも見られるようになる。C：折り返しの二重口縁。胴部は球形を呈する。A・Bとも刷毛調整のものはない。また口唇部に刻目をもつAは消滅する。

I期にみられた小型器台，台付甕は全く見られない。また，杯部に明瞭な稜と柱状の脚部を持つ高杯が特徴的である。I期の土器群とはまったく様相を異にしておりI期との間にはやや時間が有ったようである。

竪穴住居の形態は，正方形となり，各隅は直角となる。面積が30m²以上の大型のものと20m²以下の小型のものがある。小型のものは柱穴を持たない。炉は2本の柱穴の間にあるが前の時期よりも柱穴が壁に近くなっているので，炉も壁にかなり近くなっている。貯蔵穴は炉とは反対側の壁の隅にある。竪穴住居012・108は炉に向かって右隅，他は左隅にある。

III期

竈を伴う竪穴住居を本期とした。001・002・008・014・016・026・039・042・104・110の10軒である。このうち026には竈がなかったが，床から出土した杯は明らかに他の竪穴住居と同じ様相のため本期に含めた。

出土する土器は僅かで，1軒あたり2～3個体である。出土した器種は杯・鉢・高杯・壷・甕・甑・手捏土器・須恵器杯蓋・須恵器長頸壷である。須恵器は全部で4点しかない。

杯　A：外面に稜を持たないもの。B：須恵器を模倣し外面に稜を持つ。

鉢　A：内彎して立ち上がる。B：口縁部下に稜を持つ。

高杯　B：杯部は内彎して立ち上がる。竪穴住居008で1点のみ。

壷　この時期のものは竪穴住居039から出土した広口壷1点である。

甕　B：単口縁。胴部が球形のものと，長胴化したものがある。二重口縁のものはなくなる。

手捏土器　A：平底のもの。B：粘土板を内彎させただけのもの。

甑　長胴のものと，底部のない鉢の形態のものがある。

須恵器杯蓋　竪穴住居042から出土した1点である。返りがあるが既に形骸化している。口径は小さい。7世紀半ばから後半のものである[1]。

須恵器長頸壷　A：口縁部が有段となる。7世紀後半に位置付けられる[1]。竪穴住居002から出土。B：単口縁である。口縁部は外反しながら大きく開く。接合しないが明瞭な稜を持つ肩部の破片が出土している。7世紀後半から8世紀初頭に位置付けられる[1]。土壙墓007から出土。

竪穴住居の形態は，014以外は前期と同様，正方形を基本とする。竈は北側にあり，104のみ東側である。貯蔵穴は持たないもの(001・002・110)，竈の脇にあるもの(104)，竈の対面にあ

1．須恵器の年代は小林信一氏の御教示による。

るもの(008)，張り出しの貯蔵穴を持つもの(016・039)がある。また，貯蔵穴のまわりに土堤状の高まりを設けるものがある(008・016・039)。この中で竪穴住居039と016の2軒，竪穴住居001と002と110の3軒はそれぞれ同じ規格で構築されたようである。この他，本期に属する遺構として土壙墓007がある。これについては後述する。

本期は須恵器を模倣した杯が出現したことを大きな特徴とする。出土土器は少なく1軒あたり2点程度しか出土していない。竪穴住居008のみが一応のセットを揃える。このなかで竪穴住居002，竪穴住居042は出土須恵器の様相から，2軒ともIII期でも新しいほうに属する。竪穴住居の規格を同じとする001・110などもこれらとほぼ同時期に属すると考えられる。また，竪穴住居014も新しい様相を呈している。

竈は破壊されているものが多い。焼失住居である039・104については焼失前に破壊した可能性を指摘した[1]。また，竪穴住居001・002等は火床部がわずかしか火を受けていないため，あまり使用しないまま破壊されたようである。どちらも構築材が自然に流失したのなら構造をある程度確認できたと思う。出土遺物が少ない点も共通する。これら2軒については殆ど使用しないまま廃棄している可能性がある。また，この2軒が出土土器の様相から荒久古墳や土壙墓007と近い時期にあることと関係あるのか興味ある所である。

以上のように荒久遺跡では，集落は弥生時代終末期から古墳時代前期を盛期とした後小規模にまた断続的に営まれ，古墳時代後期以降は中心を台地南の鷲谷津遺跡等に移すようである。

(3)遺物の出土状態について

住居の構築から廃棄に至る人間の行動を考える場合，廃棄時に近い状態の焼失住居は良好な資料である[1]。調査区内では焼失住居を多数検出し，特にIII期では10軒のうち5軒が焼失住居で，それぞれ興味ある状態を示していた。中でも竪穴住居039と竪穴住居104は柱穴に炭化した柱材の一部が遺存しており，柱の切断を行っている可能性がある点など住居の廃棄を考える上で良好な資料であった。これについては，荒久遺跡の中間報告という意味で紹介したことがあるので参照されたい[1]。検出した遺構から人間の行動を考えるとき先ず問題となるのはそれが人為の結果かどうかであろう。竪穴住居の構築から廃棄の過程については，個々の住居によってそれぞれの状況を呈しており，簡単に類型化することは出来ない。しかし，調査区内の焼失住居については，遺物の出土状態，竈の状態，覆土の堆積状態，遺物の遺存状態など，廃棄に至る過程に竈の破壊や埋め戻し，柱の切断などの人為性を認めることができ，焼失も偶然ではなかったことをうかがわせる。また，前述したように焼失住居に限らず竈の破壊が認められる例，

1．小林清隆・山口典子「千葉市荒久遺跡の焼失住居について」『研究連絡誌』第22号（財）千葉県文化財センター 1988。また柱材の取り上げ，柱痕の剝ぎ取りについては前掲書のほか『千葉市荒久遺跡(2)』（財）千葉県文化財センター 1989に詳しく説明してある。

柱を抜き取っている例など住居の廃棄にあたり人為的な意思が働いていると思われる例もある。

この他にも，出土遺物の状態に興味がもたれるものが何軒かあった。例えば竪穴住居004では住居隅に土器類がセットで片付けられたような状態で出土した。また，竪穴住居044は遺構の遺存状態が悪く住居全体の構造などはわからないがピット内に脚部を欠損した台付甕が埋められていた。

そのような中で竪穴住居010は出土遺物の量が群を抜いていた。坩9点，壷1点，鉢4点，高杯17点，器台結合土器1点，甕2点の34点の土器の他，土製品・砥石を出土した。これは1軒の持ち物としてはかなりの量である。しかも完形が多く，赤色塗彩土器を多量に含んでいる。これらは遺存状態が良好なため不用になった物を廃棄したとは考え難い。また，1軒の日用容器としては杯類を欠きセットとしては不完全であり，器種に偏りが見られるので，焼失住居ではあるが不慮の火災に合い，持ち出せなっかったともいえない。遺物は同時期に属し，一括して遺棄されたようである。坩や高杯など床に並べたような状態のものもあった。しかし，どれもが床面から出土しているわけではない。床から浮いているものもある。また，この中で高杯の完形品がわずか3点で，殆どが杯部だけ，しかも脚部が欠失することを除けば破損していないと言うのも不自然な現象である。例えば，杯底部を下に2点が並んでいた24・27は当初から脚部がなかったと考えられるし，その脇に杯部を伏せてあった21・22は，後世の上層の土の移動によって脚部が流されてしまった可能性を考えられなくはないが（南壁は谷に面し，斜面となるため，遺存状態が悪い），それ程の力が加わった場合，この様に口縁を床と水平に安定した状態では出土しないのではないか。したがって，これについても当初から脚部がなかったものと考えられよう。また焼失住居ではあるが焼土，炭化材はそれ程多くない。

竪穴住居における土器の廃棄の問題については小林達雄氏が提唱[1]して以来「吹上パターン」と言われ，縄文時代を中心に多くの類例が検討されてきている。また近年では縄文時代に限らず各時代の検討もなされている。この中で，縄文時代中期の住居内一括遺存土器を検討された山本暉久氏[2]は，事例の検討から一括遺存現象は住居の廃絶と密接な係わりを持つことを明らかにし，この様な現象が人為の結果であることを確認した。更にこの現象が生起した要因について，諸氏の見解とその問題点を検討し，「忌避」を目的とした行為の結果であると推察した。この「忌避」の要因としては例えば居住者の死，しかも疫病死，不慮の死等で，集落を継続・維持するため死者の住居の解体，埋め戻しを行い，同時に生活財も残していった「送り」ではないかとし，「忌避」をより明確化するために「火入れ行為」を行った場合もあると考えた。そして一括遺存土器と遺構の関係を考える場合問題となる第1次埋没土はそれまで言われてきた自然堆積土ではなく，埋め戻しによる人為堆積と解釈した。また，1竪穴成員が必要とした土器

1．小林達雄『米島貝塚』　埼玉県庄和町教育委員会　1965

2．山本暉久「縄文中期に於ける住居跡内一括遺存土器群の性格」『神奈川考古』第3号　1978

量をはるかに上回っている点については，その全てがそこの居住者が使用していた生活財ではなく，集落成員が使用していたものも含まれていたと理解している。また，復原できない破損状態の土器が多い点については，廃絶行為の一連の過程に，土器の破砕が含まれ，遺棄するものと持ち去るものに選別した可能性を指摘した。

これは，縄文時代中期の検討であり，社会構造や文化が違う古墳時代についてそのままあてはめることは出来ないが，竪穴住居010の現象を理解する上で，示唆的な見解である。

竪穴住居010と同時期の例として，長野県佐久市市道遺跡[1]でも古墳時代中期の住居に同様な遺物の出土状況が見られる。第8号住居址では壷，甕には完形品が多々見られるのに対し，高杯は完形3点の他は杯・脚部に二分された状態で30数個体出土した。第2号住居址，第3号竪穴状遺構でも同様の出土状況を示す。調査者は，高杯の杯部と脚部とは意識的に二分され，別々の場所に処理されたのではないかと述べている。そして，このような行動については「日常的ではない」としている。ただ，遺構と遺物の関係については覆土の状態から竪穴住居の埋没がある程度進んだ段階に一括して廃棄したと考えている。しかし覆土の状態に関してはそれを自然堆積と見るか，人為的堆積と見るかについては両者の決定的な識別が困難なため，多分に主観が入ってしまうと言う面倒な問題を抱えている。けれども何種類かの器種の中で供献土器である高杯を多量に含み，また二分すると言うのは竪穴住居010の場合と同様考えさせられる。

竪穴住居010の場合を検討してみると，先ず，何等かの原因が生じ，竪穴住居内に器種を選別して遺物を並べた。高杯は杯部，脚部を二分して主として杯部を残した。この埋め戻しの過程で投げ入れられた土器もある。そして火を入れた。この際上屋がどの様な状態であったかは，検出した焼土・炭化材の量が少ないこと，埋め戻したと考えられる覆土の堆積に特に偏りが認められないことなどからある程度解体していたものと考えたい。同時期と考えられるが床より浮いている遺物があるのは人為的に埋め戻しているため，また器種に偏りがあるのは選別しているためと考えられる。

このような現象の原因については，先の竪穴構成員の不慮の死や狩猟・収穫の不作[2]などの「忌避」的なもののほか，集落内祭祀の際の「宴」[3]など様々な推測がなされている。これは時代や社会によってそれぞれの要因があると考えられ，簡単には解明できないが，時代ごとの類例の集積と検討を待ちたい。ここで取り上げた古墳時代中期は県内の報告例をざっと見ただけでも竪穴住居から高杯を多量に含む土器の大量出土の例が少なくなっかった。時間と紙数の関係でこれらについてふれることが出来なかったが，今後の課題としていきたい[4]。

1．『長野県佐久市市道遺跡』市道遺跡発掘調査団　1976

2．『新山遺跡』新山遺跡調査団　1981

3．高梨修「古墳時代前期の竪穴住居址における土器の大量廃棄について」『法政考古』第3集　1986

4．本項を記述するにあたっては文献の教示始め，多くの点で今泉潔氏の御協力を得た。

(4)土壙墓について

土壙墓は007が1基検出された。これは2段に掘り込んだ長方形の土壙の底面に，長軸と直交させて溝を3条掘り込んだものである。出土遺物は須恵器長頸壷の口縁部から口頸部の3分の1でこれは7世紀後半から8世紀初頭の所産である。

この様な土壙墓は古墳時代終末期に，印旛沼周辺から鹿島川・都川・村田川・養老川の各流域で検出されており，この地域の特徴的なものとして注目されている[1]。これらは終末期の方墳と一緒に検出されたり，また，古墳群の中で変遷を辿れる例も少なくない。本遺跡の土壙墓と同様の形態を持つものは佐倉市立山遺跡[2]で4例，佐倉市明代台遺跡B地点[3]で1例，佐倉市生谷遺跡[4]で1例検出されている。

本遺跡では，調査区北側の台地上に方形周溝状遺構(方墳)が，確認調査によって17基検出され，その規模は6～7mの小規模のものから14m程の比較的大型のものもある。また，小規模ながら墳丘が残っているものも存在するようである。そのほか，調査区南側に終末期古墳であるである荒久古墳[5]が存在するなど土壙墓との関連が注目される。鷲谷津遺跡B区[6]でも2段に掘り込み底面に3条の溝を持つもの，2段に掘り込むが溝は持たないもの，地下式構造を有するもの[7]の3基が検出されている。地下式のものはこの他，山の神遺跡[8]から1基検出されている。荒久遺跡の残りの部分と現在調査中の千葉寺地区の調査が進めば，この地域の古墳時代終末期の様相がより一層明らかになるであろう。

(5)土器以外の遺物について

出土した土器以外の遺物で特徴的なものとしては次のものがある。

銅鏃

銅鏃は竪穴住居016から出土した。千葉県内でも古墳，集落で多くの銅鏃の出土例がある。この中で本遺跡のように集落から出土したものは管見にのぼっただけでも，本遺跡を含めて26遺跡48例を数える(tab.48)。その殆どが弥生時代後期から古墳時代初めの竪穴住居から出土している。最も新しい時期と考えられるのは木更津市請西大山台遺跡や佐倉市大崎台遺跡出土のものでこれは古墳時代中期～後期の竪穴住居から出土している。

1．田中新史「古墳時代終末期の地域色」『古代探叢II』早稲田大学出版部　1985

2．『佐倉市立山遺跡』(財) 千葉県文化財センター　1983

3．『佐倉市向山谷津・明代台・木戸場・古内遺跡』(財) 千葉県文化財センター　1987

4．『生谷』生谷遺跡調査団　1977

5．本文「I－2　荒久遺跡の立地と周辺の遺跡」参照。

6．調査担当の伊藤智樹氏の御教示による。鷲谷津遺跡は現在調査中であり，出土遺物は土師器小破片である。

7．これには合口甕棺を伴っていた。福田誠「千葉寺地区鷲谷津B区において検出された合口甕棺墓について」『研究連絡誌』第22号　(財) 千葉県文化財センター　1988

8．「山の神遺跡」『千葉急行線内埋蔵文化財発掘調査報告書I』(財) 千葉県文化財センター　1983

竪穴住居016はIII期に属し，古墳時代後期の竪穴住居である。出土位置は床であるが，撹乱溝がすぐ脇にあること，検出面から浅いこと，また製作は弥生時代終末期から古墳時代初頭[1]であり，調査区内に該当する住居が多数存在することなど，本跡に伴うかどうかについて疑問点がある。また他の遺跡の状況を見ても流れ込みと考えたほうが妥当であろう。

鉄斧・鉄鎌

本遺跡では斧と鎌が1点ずつ出土している。2点とも弥生時代終末期から古墳時代前期の竪穴住居から出土し，遺存状態が良好で，類例の少ないこの時期の集落出土資料としては貴重である。

斧は竪穴住居060から板状のものが出土した。板状鉄斧は県内では弥生時代中期から出土し，弥生時代中期の例としては木更津市菅生遺跡[2]，市原市番後台遺跡[3]で各2例，佐倉市大崎台遺跡[4]，市原市御林遺跡で各1例出土する。また，弥生時代後期から古墳時代前期にかけての集落から出土したのものは，佐倉市大崎台遺跡，佐倉市上座矢橋遺跡[5]，小見川町阿玉台北遺跡[6]，千葉市田向南遺跡[7]，富津市打越遺跡[8]がある。

鎌は竪穴住居030から出土した。直刃鎌で出入口施設と考えられるP5の覆土上面から出土した。弥生時代後期から古墳時代前期の鎌が竪穴住居から出土した例は松戸市諏訪原遺跡[9]・小見川町阿玉台北遺跡・千葉市柳井戸遺跡[10]・市原市番後台遺跡等がある。

土製品

用途不明の土製品が竪穴住居010で2点，竪穴住居113で1点出土している。どちらも古墳時代中期に属する竪穴住居である。このうち2点は炉の中から検出されている。時期的には古くなるが，市原市草刈遺跡B区[11]の1号跡と70号跡の炉内から類似品が出土している。これらは烏帽子形の土製支脚と共に出土し，出土状況を見ると水平に使用していたようである。支脚と共に土器を固定するために用いられたのであろうか。竪穴住居010では炉から高杯の杯部と脚部の

1．杉山晋作氏の御教示による。
2．『上総菅生遺跡』木更津市教育委員会・木更津市菅生遺跡調査団　1979
3．『市原市番後台遺跡・神明台遺跡』（財）千葉県文化財センター　1982
4．『大崎台遺跡発掘調査報告II』佐倉市大崎台B地区遺跡調査会　1986
5．「上座矢橋遺跡」『第2ユーカリヶ丘宅地造成地内埋蔵文化財調査報告書』（財）印旛郡市文化財センター　1986
6．『阿玉台北遺跡』（財）千葉県都市公社　1975
7．『千葉市文化財調査報告書　第8集』千葉市教育委員会社会教育部文化課　1984
8．「打越遺跡・神明山遺跡」『昭和63年度千葉県遺跡調査研究発表会　発表要旨』　千葉県文化財法人連絡協議会　1988
9．『諏訪原遺跡』松戸市教育委員会　1974
10．『平川遺跡群』（財）千葉市文化財調査協会　1988
11．『千原台ニュータウンII』（財）千葉県文化財センター　1983

tab. 48　千葉県内銅鏃出土集落

№	市町村	遺　跡　名		文献	№	市町村	遺　跡　名		文献
1	柏	戸張一番割	3号住	1	25	千　葉	東寺山石神	40号住	11
2	〃	〃	13号住	〃	26	〃	石神4号墳		〃
3	〃	〃	33号住	〃	27	〃	城の腰	084号住	12
4	〃	〃	37号住	〃	28	〃	〃	表採	〃
5	〃	〃	53号住	〃	29	〃	荒久(1)		
6	〃	〃	グリッド	〃	30	東　金	道庭	住№28	13
7	成　田	公津原 Loc. 40	028号	2	31	市　原	草刈C		14
8	〃	〃	〃	〃	32	〃	〃 D		〃
9	船　橋	夏見大塚	7号	3	33	〃	〃		〃
10	〃	〃	〃	〃	34	〃	〃 F		〃
11	八千代	権現後	D035号住	4	35	〃	草刈六之台		〃
12	佐　倉	飯郷作1号墳	(G13住)	5	36	〃	〃		〃
13	〃	〃	〃	〃	37	〃	川焼台		〃
14	〃	江原台（市）	027住	6	38	〃	小田部新地	攪乱	15
15	〃	〃	106住	〃	39	〃	菊間手永		〃
16	〃	上座矢橋	006住	7	40	〃	天神台		〃
17	〃	〃	012住	〃	41	〃	〃		〃
18	〃	〃	022住	〃	42	〃	上総国分僧寺下層		〃
19	〃	大崎台	197号住	8	43	〃	番後台	073B号住	16
20	〃	〃	287号住	〃	44	袖ヶ浦	大竹	住居	17
21	〃	〃	306号住	9	45	木更津	請西大山台	246号	18
22	小見川	阿玉台北	A021号	10	46	〃	〃	グリッド	〃
23	〃	〃	A023A号	〃	47	富　津	岩出	Y－2号	19
24	〃	〃	A002号墳	〃	48	〃	打越	92号住	20

1．『戸張一番割遺跡』　柏市教育委員会　1985
2．『公津原II』　(財)千葉県文化財センター　1981
3．『夏見大塚遺跡』　船橋市教育委員会　1975
4．『八千代市権現後遺跡』　(財)千葉県文化財センター　1984
5．『佐倉市飯合作遺跡』　(財)千葉県文化財センター　1978
6．『江原台』　江原台遺跡発掘調査団　1979
7．「上座矢橋遺跡」『第2ユーカリヶ丘宅地造成地内埋蔵文化財調査報告書』　(財)印旛郡市文化財センター
8．『佐倉市大崎台遺跡発掘調査報告I』　佐倉市大崎台B地区遺跡調査会　1985
9．『佐倉市大崎台遺跡発掘調査報告II』　佐倉市大崎台B地区遺跡調査会　1986
10．『阿玉台北遺跡』　(財)千葉県都市公社　1975
11．『東寺山石神遺跡』　(財)千葉県文化財センター　1977
12．『千葉市城の越遺跡』　(財)千葉県文化財センター　1979
13．『道庭遺跡　第1分冊』　道庭遺跡調査会　1983
14．草刈遺跡・川焼台遺跡等については現在整理中である。白井久美子氏の御教示による。
15．『第2回 市原市文化財センター遺跡発表会要旨』　(財)市原市文化財センター　1987
16．『市原市番後台遺跡・神明台遺跡』　(財)千葉県文化財センター　1982
17．『袖ヶ浦町大竹遺跡発掘調査報告書』　大竹遺跡発掘調査団　1976
18．『請西』　木更津市教育委員会・木更津市請西遺跡調査会　1977
19．『君津市岩出遺跡・岩出城跡』　(財)千葉県文化財センター　1985
20．「打越遺跡・神明山遺跡」『昭和63年度千葉県遺跡調査研究発表会 発表要旨』千葉県文化財法人連絡協議会　1988

接合部分が一緒に出土し，これが支脚の代用品であった可能性も考えられる。このほか土製品ではないが神谷原遺跡[1]や鴨居上の台遺跡[2]等の炉の縁に固定されている「枕石」と呼ばれる石製品があるが，これらも同じような用途のものであると考えられる。しかし，炉内で使用していたにしては火熱を受けた痕跡が殆ど認められないのが気になる。

石製品

溝018の覆土中から石製品２点を出土した。溝は性格不明である。滑石製で板状の長方形を呈し，先端部は僅かに幅が狭くなっている。長辺の一方を意識的に薄くして刃を表現している。また長辺のもう一方の厚さは先端部に向かって徐々に薄くなる。表裏面，側面とも研磨痕が残り，表裏面では羽状を呈している。以上のような形態的特徴からこれは直刃鎌の模造品ではないかと思われる。

直刃鎌の模造品は石神２号墳[3]で４，上赤塚１号墳[4]で３，七廻塚古墳[5]で２，鵜崎天神台古墳[6]で１例出土する等，古墳の副葬品として出土する例が知られる。農工具の石製模造品は主として古墳の副葬品としてか，祭祀遺跡から出土し，集落遺跡での滑石製模造品の種類は，剣，有孔円板，勾玉，臼玉が中心で，農工具類は見出せないようである[7]。

また，どちらも鎌の先端を示しているが，刃のつけかたから基部は左となる。石神２号墳の１例，上赤塚１号墳の２例，鵜崎天神台古墳の１例も基部が左側である。模造品であるため木柄の着装まで模倣していないのだろうか。実用の曲刃鎌出現の時期[8]から，石製模造品の直刃鎌の時期は５世紀中葉以前とされている[9]。現在のところ遺跡内にこの時期の古墳の存在は認められず，竪穴住居との関連が考えられる。

調査区内では，竪穴住居104から滑石製の剣形模造品が，また竪穴住居026から臼玉が３点出土した。どちらも古墳時代後期で時代的には下るものである。この他，石製模造品ではないが竪穴住居109から土製勾玉が出土している。

以上荒久遺跡の問題点を上げてきたが，問題が多岐にわたり過ぎて１点１点について深く掘り下げることができなかった。本遺跡の場合，調査は継続中で今後の調査の結果を期待したい。

1．『神谷原Ⅰ』八王子資料刊行会　1981
2．『鴨居上の台遺跡』横須賀市教育委員会　1981
3．『東寺山石神遺跡』（財）千葉県文化財センター　1977
4．『千葉東南部ニュータウン13　上赤塚1号墳・狐塚古墳群』（財）千葉県文化財センター
5．「七廻塚古墳」『千葉市史　史料編１』千葉市　1976
6．『佐原市内遺跡群発掘調査概報II』佐原市教育委員会　1988
7．佐原市神田台遺跡で自然石を磨いて鎌を模した遺物が出土している。いわゆる滑石製の模造品ではないので除外して考えた。『佐原市神田台遺跡』（財）千葉県文化財センター　1978
8．都出比呂志「農具鉄器化の二つ画期」『考古学研究』第51号　1967
9．沼沢豊「石神2号墳の諸問題」『東寺山石神遺跡』（財）千葉県文化財センター　1977

tab.49 竪穴住居一覧表

弥生時代終末期～古墳時代前期

遺構番号	平面形態	長軸 × 短軸 m m	主軸の方位	面積 m²	炉	貯蔵穴	主柱穴	壁溝	出入口	備考
003	隅丸長方形	7.40 × 6.55	N-46.0°-W	46.34	北西	無	4	全周	有	抜柱
004	隅丸長方形	4.94 × 4.70	N-90.0°-W	(21.96)	西	東	無	一部	無	
006	隅丸長方形	9.38 × 8.60	N-46.5°-W	79.6	不明	無	4	一部	無	建替え・抜柱・焼失
009	隅丸長方形	[4.56]× 5.46	N-60.5°-W	[22.72]	北西	—	4	無	—	
011	方形	4.27 × 4.04	N-25.5°-E	(17.23)	北	無	無	無	無	
013	隅丸長方形	7.28 ×[6.60]	N-57.0°-W	(43.69)	北西	南東	4	一部	無	土堤・柱痕
015	隅丸長方形	10.10 × 9.66	N-48.0°-W	(100.23)	—	—	4	全周	有	柱痕
020	長方形	[3.20]× 3.54	N-10.0°-W	(13.17)	北	無	無	無	有	
022	隅丸長方形	5.30 ×[3.59]	N-31.0°-W	[16.68]	—	南東	(4)	無	無	
023	隅丸正方形	2.52 × 2.51	N-42.0°-E	5.94	無	無	無	無	無	
025	方形	[1.77]× 2.79	N-63.5°-W	[18.18]	北西	無	4	無	有	
027	隅丸長方形	5.28 × 5.03	N-47.5°-W	24.29	北西	南東	4	一部	有	土堤・柱痕
029	隅丸長方形	4.82 ×(4.48)	N-59.0°-W	(19.84)	北西	南東	4	一部	有	
030	隅丸長方形	4.34 × 4.42	N-41.0°-W	18.13	北西	南東	4	無	有	柱痕
033	方形	[2.00]× 3.44	N-46.0°-E	(39.09)	—	—	無	無	—	
034	隅丸長方形	7.54 × 6.10	N-56.0°-W	(44.99)	北西	無	4	無	—	柱痕
036	隅丸長方形	(9.00)× 7.56	N-31.5°-W	(65.19)	—	南東	4	無	有	
037	方形	[2.88]× 4.00	N-53.0°-E	10.87	北東	無	4	無	無	
038	隅丸長方形	6.84 × 5.72	N-32.0°-W	(34.96)	北西	南東	4	無	有	土堤
040	隅丸長方形	8.00 × 7.18	N-39.0°-W	(55.71)	北西	南東	4	全周	無	土堤・柱痕・焼失
041	長方形	6.02 × 4.98	N-56.0°-W	29.52	北西	無	3	無	無	
043	長方形	4.12 × 3.20	N-40.0°-E	(12.74)	無	無	無	無	無	
044	不明	— × —	—	—	—	—	—	—	—	
056	方形	2.06 ×[1.06]	N-47.0°-W	[2.05]	—	—	—	無	—	
060	隅丸長方形	5.40 × 4.78	N-29.0°-W	(23.21)	北西	南東	4	無	有	土堤・焼失
061	方形	2.95 × 2.62	N-57.0°-W	7.31	北西	無	無	無	無	

古墳時代中期

遺構番号	平面形態	長軸 × 短軸 m m	主軸の方向	面積 m²	炉	貯蔵穴	主柱穴	壁溝	出入口	備考
010	長方形	7.04 × 6.82	N-90.0°-W	46.10	西	南東	4	一部	無	間仕切り溝・焼失
012	正方形	4.30 × 4.27	N-47.0°-W	(17.96)	北	南東	無	一部	無	土堤・間仕切り溝・焼失
031	正方形	6.33 × 6.34	N-63.0°-W	(37.09)	—	南	4	無	無	
035	正方形	3.60 × 3.46	N-60.0°-W	12.34	西	南	無	無	無	

( ) は復原値，[ ] は現存値を現す。

古墳時代後期

遺構番号	平面形態	長軸 × 短軸 m m	主軸の方向	面積 m²	竈	貯蔵穴	主柱穴	壁溝	出入口	備考
001	正方形	4.62 × 4.69	N-14.0°-W	21.30	北	無	4	一部	有	
002	正方形	4.81 × 4.96	N- 5.0°-E	22.94	北	無	4	全周	有	
008	正方形	7.83 × 7.37	N- 0°-W	57.39	北	南	4	全周	無	土堤・間仕切り溝・焼失・柱痕
014	長方形	3.55 × 2.83	N-18.0°-E	(9.77)	北	無	無	全周	無	
016	正方形	7.19 × 7.16	N-25.5°-E	(52.40)	(北)	南	4	全周	無	土堤・焼失
026	正方形	4.20 × 4.18	N-23.5°-W	(17.65)	無	無	無	全周	無	火災
039	正方形	5.90 × 5.90	N- 9.0°-W	(34.90)	北	南	4	全周	無	土堤・間仕切り溝・焼失
042	正方形	4.30 × 4.27	N-26.0°-W	17.01	北西	無	4	全周	無	柱痕

時期不明

遺構番号	平面形態	長軸 × 短軸 m m	主軸の方位	面積 m²	炉・竈	貯蔵穴	主柱穴	壁溝	出入口	備考
024	方形	[2.50]× 2.50	N-34.0°-E	[9.52]	—	無	無	無	無	
047	方形	— × —	—	—	—	—	無	一部	無	
049	隅丸長方形	3.60 × 3.18	N-28.5°-E	(10.63)	炉	無	無	無	無	
055	方形	2.78 ×[2.36]	N-60.0°-W	(6.45)	炉	—	無	無	無	
057	方形	2.68 × 2.40	N-33.0°-E	[3.16]	—	—	—	—	—	
063	方形	5.20 × 5.22	N-38.5°-W	25.85	無	無	4	無	無	
065	方形	3.82 × 3.72	N-42.0°-E	14.39	炉	無	無	無	無	

( ) は復原値，[ ] は現存値を現す。

tab.50 出土土器観察表

弥生時代終末期～古墳時代前期

竪穴住居004(fig.75, PL.27・28)

挿図番号	遺物番号	器形	法量	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	胎土	焼成	色調
1	8	鉢	(10.0) —— (4.1) 4.7	2/3を欠損。	平底で内彎しながら立ち上がる。 内面ナデ，外面刷毛調整。	細砂粒を含む。	良好。	内外面とも褐色，底部付近は黒褐色。
2	9,10,11,12,13,17,20	高杯	[19.2] —— —— [7.3]	杯部1/4。	杯部外面下部に稜がある。 外面は縦方向，内面は横方向のヘラ磨き。遺存状態は悪いが赤色塗彩。	粒子の粗い砂粒を含む。	良好。	暗赤褐色。内外面赤色塗彩。
3	7	壺	—— 12.8 7.2 [10.2]	胴部2/3，底部	平底で胴部中位が僅かに膨らむ。 内面はナデ，外面は刷毛整形後ナデ。 底部に木葉痕がある。火熱による器面の荒れが著しい。	粒子の粗い砂粒を多量に含む。	あまい。2次的火熱を受ける。	明褐色。
4	6	高杯	22.0 —— —— [9.0]	脚部と口縁部の一部を欠損。	杯部外面に稜がある。 内面は刷毛整形の後ナデ。外面も刷毛整形後軽くナデる。	粒子が粗い砂粒を多量に含む。	良好。	内外面とも赤褐色。内外面とも赤色塗彩。
5	3	壺	10.9 15.4 5.3 11.1	口縁部の1/2と胴部の1/3を欠損。	平底で胴中位が大きく膨らみ，頸部で細くなる。口縁部は外反して立ち上がり折り返しの二重口縁となる。	砂粒を多量に含む。	あまい。2次的火熱を受ける。	暗褐色。

挿図番号	遺物番号	器形	法量	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	胎土	焼成	色調
6	5	台付甕	18.2 23.6 —— [21.1]	脚部欠損。	最大径は胴中位より上にある。脚部の割れ口は古く摩耗している。 外面は斜方向，口縁部内面は横方向の刷毛調整。胴部内面はナデ。	砂粒を多量に含む。5㎜前後の小石を含む。	良好。2次的火熱を受ける。	黒褐色。
7	4	甕	15.5 20.2 —— [14.4]	胴下半部を欠損。	口縁部は短く外反し，折り返しの二重口縁となる。内外面とも刷毛調整，外面の胴下半部の刷毛はナデにより擦り消す。内面と外面の刷毛工具は違う。口縁端部も刷毛調整。	微細な砂粒を少量含む。2～3㎜の小石を含む。	きわめて良好。	内外面とも茶褐色。
8	1,2	台付甕	21.4 31.7 (13.9) 39.7	口縁部・胴部・脚部のそれぞれ一部を欠損。	口縁部は僅かに外反する。最大径は胴中位より上にあり底部に向かって急にすぼまる。 外面と口縁の内面・脚裾部の内面は刷毛調整。胴部内面はナデ。	細かい砂粒を含む。	あまい。2次的火熱を受ける。	暗褐色。胴部は煤の付着により黒褐色。

竪穴住居006(fig.76, PL.27)

挿図番号	遺物番号	器形	法量	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	胎土	焼成	色調
1	86,88	鉢	(9.8) —— (5.6) (5.1)	口縁部から底部の1/4。	平底で内彎しながら立ち上がる。 体部は内外面ともヘラ削り後ナデる。口縁部は横ナデ，底部はヘラ削り。	砂粒（長石・石英粒を含む）を多量に含む。	良好。	暗赤褐色。
2	35	高杯	—— —— —— [3.3]	脚部上半分。	透孔4孔（3孔遺存） 外面は横方向にナデ。脚裾部内面は刷毛整形後ナデ。	砂粒（長石粒・雲母片を含む）を少量に含む。	良好。2次的火熱を受ける。	暗褐色，一部黒褐色。
3	33	台付甕	—— —— —— [2.9]	脚部。	内面は胴部脚部ともナデ，外面は刷毛調整。	砂粒を多量に含む。	良好。2次的火熱を受ける。	内面明赤褐色，外面暗褐色。
4	17,27,76	甕	(14.0) —— —— [5.6]	口縁部から肩部の1/4。	二重口縁の小型の甕。 口縁部横ナデ，外面刷毛調整，口頸部内面刷毛整形後ヘラ削り，胴部内面ナデ。肩部に刷毛工具によると思われる刺突を施す。	細砂粒を多量に含む。	良好。	暗赤褐色。
5	15,60,90,	甕	(14.3) (14.8) —— [7.8]	口縁部から肩部の1/4。	二重口縁の小型の甕。口縁部横ナデ，外面刷毛調整，内面口頸部はヘラ削り，胴部はナデ。肩部に刷毛工具によると思われる刺突を施す。火熱により器表面が荒れる。	砂粒を含む。	普通。2次的火熱を受ける。	暗黄褐色。
6	82	甕	—— —— 8.0 [2.1]	底部の2/3。	胴部，底部とも外面は刷毛調整する。内面はナデ。	砂粒（長石・石英粒）を多量に含む。	あまい。2次的火熱を受ける。	内面黒褐色，外面暗褐色。
7	42,43	甕	(18.8) —— —— [6.5]	口縁部1/4。	口縁はくの字状に外反する。 内外面とも刷毛調整を行うが，口縁部外面は他の部分と刷毛工具が違う。 この他に接合しないが同一個体がある。	粒子の粗い砂粒（長石・石英粒）を含む。	良好。2次的火熱を受ける。	内外面とも褐色を基調。一部火熱で黒褐色に変色。
8	81,85,86	甕	(13.0) —— —— [5.2]	口縁から肩部の1/4。	口縁は僅かに外反する。 内外面とも刷毛調整する。	粒子の粗い砂粒を含む。3～5㎜の小石を含む。	あまい。2次的火熱を受ける。	内面暗褐色。外面赤褐色，一部黒褐色。
9	50	甕	—— —— (6.9) [2.9]	底部。	内面はナデ。外面は刷毛整形後ナデている。	粒子の粗い砂粒を含む。	良好。2次的火熱を受ける。	内面暗褐色。外面赤褐色。
10	25,39,46,47,48,72,73	甕	—— —— (11.0) [7.6]	底部の2/3。	外面は縦方向のヘラ磨き。内面は器表面が剝落し凸凹が著しいため調整は不明。	粒子の粗い砂粒を含む。	あまい。2次的火熱を受ける。	内面明褐色。外面赤褐色。

法量は上から口径・胴部径・底径・器高を現す。（　）は復原値、[　]は現存値を示す。

竪穴住居009(fig.76)

挿図番号	遺物番号	器形	法量	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	胎土	焼成	色調
1	1	甕	—— —— 7.6 [1.6]	底部2/3。	内面はナデ。外面は胴部，底部ともヘラ磨き。火熱により内面は剝落する。	粒子の細かい砂粒（長石・雲母）を含む。	あまい。2次的火熱を受ける。	内面赤褐色。外面暗褐色，一部黒色に変色する。

竪穴住居011(fig.77)

挿図番号	遺物番号	器形	法量	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	胎土	焼成	色調
1	1,6	高杯	—— —— —— [3.8]	脚部。	外面ヘラ磨き。	粒子の粗い砂粒を含む。	良好。	茶褐色。
2	4	台付甕	—— —— —— [3.4]	脚部。	内面は雑なナデ。外面の脚部はヘラ削り，接合部は刷毛調整。 内面は火熱を受ける。	粒子の粗い砂粒を多量に含む。	普通。2次的火熱を受ける。	内面茶褐色。外面暗褐色。

竪穴住居013(fig.77, PL.29)

挿図番号	遺物番号	器形	法量	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	胎土	焼成	色調
1	10	高杯	—— —— —— [4.1]	脚上半部。	穿孔3孔。穿孔後の調整を行っていない。 外面は横方向に刷毛整形後ヘラ磨き。杯部内面もヘラ磨きし，どちらも光沢を持つ。	細砂粒を少量含むが混和物は少ない。	あまい。	明褐色。
2	7	高杯	—— —— —— [3.4]	脚上半部。	穿孔4孔。 外面はヘラ削り後ナデていると思われるが器表面の荒れが著しくはっきりしない。	粒子の粗い砂粒を多量に含む。	普通。	茶褐色。
3	15	台付甕	—— —— —— [2.4]	脚接合部。	内面ナデ，外面ヘラ削り。	粒子の粗い砂粒を多量に含む。	普通。	暗茶褐色。
4	27	高杯	(17.6) —— —— [4.8]	杯部2/3。	杯部は内彎し杯下部に弱い稜がある。 火熱による器表面の荒れが著しいが，内外面ともヘラ磨きしているようである。	砂粒と1～2㎜程の小石を含む。	あまい。2次的火熱を受ける。	内面黒褐色。外面白っぽい褐色。
5	24	高杯	(21.6) —— —— [4.6]	杯部1/6。	内外面ともヘラ削り後ヘラ磨き。	細砂粒を少量含む。	良好。	内面褐色。外面僅かに赤味がかった褐色。
6	13,30,33	高杯	(19.0) —— —— [7.6]	杯部2/3。	内外面ともヘラ削り後ヘラ磨き。	粒子の粗い砂粒を少量含む。	良好。	暗黄褐色。内外面赤色塗彩。
7	32,35,	高杯	(22.2) —— —— [7.2]	杯部1/4。	火熱による器表面の荒れが著しいが，内外面ともヘラ磨きしているようである。	粒子の粗い砂粒を含む。	あまい。2次的火熱を受ける。	暗黄褐色。
8	5,014-16	高杯	—— —— —— [4.8]	杯部下半の1/4。	内外面ともヘラ磨き。	粒子の粗い砂粒を少量含む	良好。	暗褐色。
9	12,19,21,25	甕	[13.0] —— —— [7.6]	口縁部2/3，胴上半部1/4。	口縁はくの字状に短く外反する。外面と口縁部内面は刷毛調整。口縁部は横ナデ。内面に粘土紐巻き上げ痕が残る。	粒子の細い砂粒を含む。	良好。	内面褐色。外面黒褐色。

挿図番号	遺物番号	器形	法量	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	胎土	焼成	色調
10	11,18,34,38	台付甕	—— (29.6) (10.6) [30.0]	口縁部欠損。肩部以下の1/6。	最大径は胴中位にある。 内面ナデ，外面縦方向の刷毛調整。脚部は火熱による荒れが著しいが内面はナデ，外面は刷毛整形後ナデ。	砂粒を多量に含む。	あまい。2次的火熱を受けてる。	内面上半と外面下半褐色。内面下半と外面上半黒褐色。

竪穴住居015(fig.78, PL.29・30)

挿図番号	遺物番号	器形	法量	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	胎土	焼成	色調
1	1	鉢	(11.4) —— —— [5.2]	口縁部～体部の1/4。	内彎しながら立ち上がる。 内面ナデ。外面ヘラ磨き。	細砂粒を含む。	良好。	赤褐色。内外面を赤色塗彩する。
2	24,25,26,139,140,	鉢	(15.6) —— —— [4.9]	口縁部～体部の1/4。	内彎しながら立ち上がる。 内面の口縁部と外面は刷毛調整。体部内面はナデている。	粒子の粗い砂粒を多量に含む。	普通。	内面赤褐色。外面暗褐色。
3	94,95	高杯	(14.4) —— —— [7.4]	口縁部の2/3と脚下半部を欠損する。	杯部に稜がある。脚部には6孔透孔がある。 外面はヘラ削り後杯上半部のみナデる。内面はヘラ磨きしていたと思われるが，器表面が荒れているためはっきりしない。	粒子の粗い砂粒を含む。	普通。	赤褐色。内外面を赤色塗彩する。
4	131,132,133,146	高杯	19.3 —— —— [9.4]	脚部欠損。	杯部の立ち上がりはあまり外傾せず，深くなる。脚部と臍を欠失する。 外面は縦方向にヘラ磨きする。	細砂粒を含む。	普通。	内面橙褐色。外面暗褐色，一部赤褐色。外面赤色塗彩
5	32,33,34,137	片口杯	11.8 —— 6.0 3.4	口縁部の1/2欠損。	上から見ると卵形を呈し，卵の尖ったほうの立ち上がりが著しく外傾する。 外面と内面底部はヘラ削り，体部内面ナデ。	粒子の粗い砂粒を含む。	普通	明褐色。
6	43	高杯	—— —— —— [4.9]	脚部1/4。	ハの字状に開き，透孔は3孔。 内面ナデ，外面ヘラ磨き。 器表面の荒れが著しい。	細砂粒を含む。	良好。	淡い褐色。
7	52	高杯	—— —— —— [7.3]	杯部と脚裾部欠損。	ハの字状に開いた後脚裾部は横方向にのびると思われる。透孔は2孔一単位で2単位ある。 外面は縦方向にヘラ磨き，内面は脚裾部をナデている。	細砂粒を多量に含む。	良好。	内面暗褐色。外面褐色。
8	15	高杯	—— —— —— [6.0]	杯部と脚裾部欠損。	柱状の脚部。 外面ヘラ削り，脚裾部外面刷毛調整。	細砂粒を多量に含む。	良好。	暗褐色。
9	127,128	壺	(5.8) (10.4) 5.9 11.1	口縁部欠損。胴部の一部欠損。	平底で胴中位が緩やかに膨らむ。 外面胴部は刷毛整形後ナデ，口頸部は縦方向のヘラ磨き。	粒子の粗い砂粒を含む。	普通。	茶褐色。
10	70,72,73,74,75,76,78	甕	—— —— 4.2 [5.8]	底部。	緩やかに内彎しながら立ち上がる。 内面底部付近は刷毛調整，胴部はナデ，外面はヘラ削り後ナデ。	細砂粒を含む。	良好。	明褐色。
11	21	甕	—— —— 6.8 [3.8]	底部。	内面ナデ，外面刷毛調整。 内外面とも火熱により器表面が荒れる。	粒子の粗い砂粒を含む。	良好。2次的火熱を受ける。	暗褐色。
12	66	台付甕	—— —— 8.2 [7.1]	脚部。	内面ナデ，内面刷毛調整。 内外面とも火熱により器表面が荒れる。	粒子の粗い砂粒を多量に含む。	普通。2次的火熱を受ける。	暗褐色。
13	026-46	甕	—— 19.8 —— [4.7]	胴下半部1/4。	内面はナデ，内面は刷毛調整。	細砂粒を含む。	良好。	暗褐色。

法量は上から口径・胴部径・底径・器高を現す。（ ）は復原値、[ ]は現存値を示す。

挿図番号	遺物番号	器形	法量	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	胎土	焼成	色調
14	87	甕	—— —— 9.2 [7.6]	底部。	粘土紐接合部分で欠損する。接合面には刷毛目が残る。 外面はヘラ削り後ナデている。	粒子の粗い砂粒を含む。	良好。	内面茶褐色。 内面暗褐色。

竪穴住居022(fig.78, PL.30)

挿図番号	遺物番号	器形	法量	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	胎土	焼成	色調
1	1,7	壺	—— (10.8) 4.1 [5.4]	底部と胴下半部の1/4。	平底で，球形の胴部である。 内面はナデ，内面はヘラ削り後ナデ。	細砂粒を含む。	良好。2次的火熱を受ける。	明褐色。
2	6,7	甕	(17.6) (18.3) —— [16.6]	口縁部から胴部の1/3。	最大径は胴中位にある。口頸部は緩やかにくびれる。内面はナデ，外面はヘラ削り後ナデ，口縁部は横ナデする。口唇部に刻みを施す。火熱により器表面の荒れが著しい。	細砂粒を含む。	良好。2次的火熱を受ける。	内面暗茶褐色。外面と内面の胴下半は黒褐色。

竪穴住居025(fig.78)

挿図番号	遺物番号	器形	法量	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	胎土	焼成	色調
1	1,2,3,4,5,	甕	(19.2) (23.8) —— [18.6]	口縁部から胴部の1/4。	球形の胴部にくの字状に外反する口縁部からなる。内面は口縁部を刷毛調整，胴部はナデ。外面は刷毛調整，口唇部には刻目を施す。	粒子の粗い砂粒を含む。	良好。	内面暗黄褐色。 内面暗褐色。

竪穴住居027(fig.79, PL.30)

挿図番号	遺物番号	器形	法量	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	胎土	焼成	色調
1	51	壺	8.8 —— 3.9 6.8	口縁部1/3欠損。	平底で内彎しながら立ち上がった後口縁部は内傾し，弱い稜を作る。口縁部は横ナデ。内面はナデ，外面はヘラ削りの後軽く磨いている。	粒子の粗い砂粒を含む。	きわめて良好。	明褐色。
2	5,6,28	壺	13.2 —— —— [6.2]	口縁部の3/4。	口縁部は緩やかに外反しながら立ち上がる。口端部横ナデ，内面横方向の刷毛目，外面縦方向の刷毛目。刷毛目は細かい。	細砂粒を含む。	きわめて良好。	明褐色，一部暗褐色。
3	29	器台	—— —— —— [4.2]	脚部上半部。	受部内面ヘラ削り，外面縦方向の刷毛目。	粒子の粗い砂粒を含む。	普通。	暗褐色。
4	1,2,14,23,48,50	壺	(17.2) —— —— [3.2]	口縁部の1/4。	二重口縁。口縁部横ナデ。	粒子の粗い砂粒を含む。	きわめて良好。	橙褐色，内外面赤色塗彩。
5	54	壺	(10.2) —— —— [1.8]	口縁部の1/4。	外反して立ち上がる。口縁部横ナデ。	粒子の粗い砂粒を含む。	良好。	暗茶褐色。内外面赤色塗彩。
6	54	高杯	—— —— —— [2.8]	脚上半部。	外面ヘラ磨き。	粒子の粗い砂粒を含む。	普通。	赤褐色。内外面赤色塗彩。
7	52	台付甕	—— —— 10.4 [9.2]	脚部。	ハの字状に開く。脚部内面横方向の刷毛調整，外面縦方向の刷毛調整。底部内面ナデ，胴部内面は刷毛調整。	粒子の粗い砂粒を含む。	きわめて良好。	明褐色。

挿図番号	遺物番号	器形	法量	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	胎土	焼成	色調
8	25	甕	(16.6) (26.8) —— [13.9]	口縁部から胴上半部の1/4。	S字状口縁。器壁がきわめて薄い。口縁部横ナデ，内面ナデ。外面は斜方向に刷毛調整するが肩部はさらに刷毛目を横方向に重ねる。	砂粒，金雲母を含む。	良好。	内面灰褐色。外面黒褐色。
9	8,9,10,11,34,37,38,39,54	壺	—— (26.6) 7.6 [16.9]	胴下半部の1/2。	僅かに内傾した後大きく内彎して立ち上がる。外面は斜方向のヘラ削り，内面はヘラ削り後胴下半部はナデる。内面には粘土紐痕が残る。	細砂粒を含む。	良好。	明茶褐色。

竪穴住居030(fig.79, PL.31)

挿図番号	遺物番号	器形	法量	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	胎土	焼成	色調
1	39	甑	16.8 15.6 6.8 12.1	口縁部の一部欠損。	底部中央に直径2.2mmの穿孔。外面は刷毛整形後胴下半を軽くヘラ磨き。口縁内面も刷毛整形後ナデ，胴部内面はヘラ削り後ヘラ磨き。口唇部に刻目を施す。	混和物が少ない。	良好。	明褐色。
2	4,5,9,10,12,16～19,21,24,31,44,49,51,54,57～59	甕	—— —— 4.4 [10.5]	胴下半部。	胴部外面上半部は刷毛調整。胴下半はヘラ削りし，さらにナデて仕上げる。内面は横方向にナデる。火熱により器表面が荒れる。特に内面下半部は器面が剝落している。	砂粒を多量に含む。	あまい。2次的火熱を受ける。	内外面とも暗褐色。

竪穴住居033(fig.79, PL.31)

挿図番号	遺物番号	器形	法量	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	胎土	焼成	色調
1	1,2,3,4,5	甕	15.6 (16.7) 4.8 15.3	口縁部2/3,胴部1/3。	最大径は胴上位にあり口縁はくの字状に外反する。内外面の口縁部は横方向に刷毛調整。胴部外面は刷毛整形後胴下半部はさらにナデて刷毛目を消す。胴部内面はナデ。	粒子の粗い砂粒を多量に含む。	良好。2次的火熱を受ける。	内面上半褐色，下半部は火熱により暗褐色。外面暗褐色。

竪穴住居034(fig.79, PL.31)

挿図番号	遺物番号	器形	法量	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	胎土	焼成	色調
1	2,5,10	器台	(8.4) —— (10.3) 8.1	受部から脚部の1/3。	受部と脚裾部が横方向へ開く。内外面ともヘラ削り後ナデて仕上げてあると思われるが火熱により器表面が荒れて調整は明瞭ではない。	粒子の粗い砂粒を多量に含む。	あまい。2次的火熱を受ける。	暗褐色。
2	4,5,10	高杯	(9.6) —— (7.2) [7.4]	杯部2/3と脚裾部1/2欠損。	小型の高杯。脚部はハの字状に開き，杯部は内彎して立ち上がる。口縁部は横ナデ，外面は刷毛調整後一部をナデている。杯部内面はヘラ削り後ナデ，脚部内面は刷毛調整。	細砂粒を含む。	あまい。2次的火熱を受ける。	暗褐色。
3	1	甕	—— —— (12.8) [6.6]	底部1/2。	内外面ともナデて仕上げていると思われるが器表面の荒れが著しく調整は明瞭ではない。	粒子の粗い砂粒を多量に含む。	あまい。2次的火熱を受ける。	淡い褐色。

竪穴住居036(fig.80, PL.31)

挿図番号	遺物番号	器形	法量	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	胎土	焼成	色調
1	6	壺	—— (13.8) —— [7.3]	胴上半部3/4。	胴部から口頸部にいたり急に細くなる。外面刷毛調整，内面ナデ。内面に粘土紐接合痕が残る。内面は火熱により荒れて，一部器表面が剝落する。	粒子の粗い砂粒を多量に含む。	普通。2次的火熱を受ける。	内面暗褐色。外面上半部黒褐色，下半部褐色。

法量は上から口径・胴部径・底径・器高を現す。（　）は復原値、［　］は現存値を示す。

挿図番号	遺物番号	器形	法量	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	胎土	焼成	色調
2	4	壺	9.4 8.9 4.4 7.9	口縁から胴部2/3。	口頸部が僅かにくびれ，口縁は外反する。口縁部は横ナデ，胴部内外面はヘラ削り後軽く磨いていると思われるが火熱により器表面の荒れが著しく調整は明瞭ではない。	細砂粒を含む。	普通。2次的火熱を受ける。	暗褐色。
3	1	高杯	—— —— —— [2.4]	杯部の底部。	内面ナデ。杯部外面はヘラ削り後ナデ，脚部は縦方向のヘラ削り。	細砂粒を含む。	良好。	橙褐色。
4	20	台付甕	—— —— —— [3.8]	杯部と脚部の結合部。	底部内面ナデ。脚部外面ヘラ削り後ナデ，内面はナデ。	粒子の粗い砂粒を含む。	普通。2次的火熱を受ける。	内面暗褐色。外面明茶褐色。
5	12	甕	—— —— 5.8 [5.4]	底部の1/4。	内面は刷毛整形後ナデ。外面はヘラ削り後ナデ。	粒子の粗い砂粒を含む。	良好。	内面暗褐色。外面淡い褐色。

竪穴住居037(fig.80)

挿図番号	遺物番号	器形	法量	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	胎土	焼成	色調
1	1	器台	—— —— (14.2) [3.2]	脚部1/4。	脚部はハの字状に大きく開く。受部との結合部分のすぐ下に直径5㎜の透孔がある。現状では2孔確認できるが，復原すると6孔になると思われる。	粒子の粗い砂粒を含む。	良好。	内面茶褐色。外面暗褐色。

竪穴住居038(fig.80，PL.31・32)

挿図番号	遺物番号	器形	法量	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	胎土	焼成	色調
1	7	壺	(8.6) —— —— [5.6]	口縁部の1/2。	口縁部は僅かに内彎して外方へ立ち上がる。内面は横方向にナデ。外面はヘラ削り後軽く磨いている。	粒子の粗い砂粒を含む。	普通。	内外面赤褐色。内外面赤色塗彩。
2	2	高杯	—— —— (9.8) [7.6]	杯部と脚裾部の2/3欠損。	脚部中央に透孔3孔。内面は横方向の刷毛調整，裾端部はヘラ磨き。外面は刷毛整形後軽く磨いている。	粒子の粗い砂粒を含む。	良好。2次的火熱を受ける。	暗茶褐色。
3	16,22	甕	(22.1) —— —— [12.0]	口縁から胴上半部の2/3。	下端に刻目のある複合口縁で，頸部のくびれは緩やか。肩部に原体を押捺して刻目をつけた稜をもつ。口縁部横ナデ，内外面ともヘラ削り後横方向にナデる。	細砂粒を含む。粒子の粗い砂粒を少量含む。	あまい。2次的火熱を受ける。	暗茶褐色。
4	3,5,15	甕	15.2 —— —— [3.2]	口縁部の2/3。	口縁部横ナデ。 火熱により内外面とも器面が荒れる。	粒子の粗い砂粒を含む。	普通。2次的火熱を受ける。	暗褐色。
5	3,16	甕	—— —— 5.2 [3.4]	胴下半部と底部。	内面は刷毛調整後ナデ。外面ナデ。 火熱により内外面とも荒れている。	粒子の粗い砂粒を含む。	あまい。2次的火熱を受ける。	暗茶褐色。
6	3,15	甕	—— —— 4.2 [5.1]	胴下半部と底部。	内面ナデ。外面刷毛調整。 火熱により内外面とも荒れている。	細砂粒を含む。	あまい。2次的火熱を受ける。	暗茶褐色。
7	9,10	甕	—— —— (8.6) [1.9]	底部2/3。	内面ナデ。外面ヘラ磨き。	細砂粒を含む。	良好。2次的火熱を受ける。	暗赤褐色。

挿図番号	遺物番号	器形	法量	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	胎土	焼成	色調
8	16,21,23	壺	—— (30.4) —— [5.8]	胴下半部の1/4。	胴部が大きく膨らむ。胴部に網目状撚糸文を施す。内外面ナデ，内面にはナデ工具痕が残る。	細砂粒を含む。	良好。	内面明赤褐色。外面赤褐色。外面赤色塗彩。
9	1	甕	—— —— 3.6 [1.6]	底部。	内外面ナデ。	粒子の粗い砂粒を含む。	普通。	内面褐色。外面黒褐色。
10	14	甕	—— —— 3.2 [1.2]	底部。	内外面ともナデ。	砂粒を含む。	良好。	橙褐色。
11	15	甕	—— —— 5.2 [2.6]	底部。	内面ナデ。外面ヘラ削り。	粒子の粗い砂粒を多量に含む。	普通。2次的火熱を受ける。	内面褐色。外面暗褐色。
12	6,7,8	甕	—— —— (6.9) [7.6]	胴下半部1/4。	内彎しながら立ち上がる。 内面ナデ。外面縦方向のヘラ磨き。	細砂粒を含む。	良好。	内面褐色。外面暗褐色。

竪穴住居040(fig.81, PL.32)

挿図番号	遺物番号	器形	法量	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	胎土	焼成	色調
1	12	器台	7.6 —— 8.8 7.4	受部と脚裾部の一部欠損。	受部下部に稜をつくる。内面に受部と脚部の接合痕が明瞭に残る。受部から脚部に貫通する孔は開けていない。受部内外面・脚部外面はヘラ磨き。脚部内面は刷毛整形後ナデ。	粒子の粗い砂粒少量を含む。	きわめて良好。	暗橙褐色。
2	4,5,6	器台	9.2 —— (10.8) 9.8	受部の2/3と脚裾部のほとんどを欠損。	受部は僅かに外反しながら外方へ開く。透孔は脚中位に3孔。受部内外面・脚部外面はヘラ磨き。脚部内面はナデ。火熱により器表面が著しく荒れている。	粒子の粗い砂粒を多量に含む。	普通。	暗褐色。
3	7,9,10,19,20	壺	(17.8) —— —— [15.8]	口縁部1/4。胴上半部1/2。	口縁部と胴部は直接は接合しないが同一個体である。口縁部外面に粘土紐痕を残す。口縁部横ナデ。内面はナデおりナデ工具の痕が認められる。外面は縦方向にヘラ磨き。	細砂粒を含む。	あまい。	明茶褐色。
4	13,20	甕	—— —— 7.2 [2.6]	底部。	底部外面に木葉痕。 内面は火熱により器表面が剝落する。	細砂粒を含む。	良好。	内面明褐色。外面暗褐色。
5	20	台付甕	—— —— (9.2) [3.1]	脚部。	内面ナデ。外面縦方向のヘラ削り。	細砂粒を含む。	きわめて良好。	明褐色。
6	11,20	高杯	(24.8) —— —— [7.6]	杯部1/3。	杯部は内彎しながら外方へ立ち上がる。このまま稜をつくらずに脚部にいたると思われる。口縁部横ナデ。内面縦方向にヘラ磨き。外面刷毛整形後横方向にヘラ磨き。	砂粒を含む。	きわめて良好。	赤褐色。内外面赤色塗彩。

竪穴住居044(fig.80, PL.32)

挿図番号	遺物番号	器形	法量	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	胎土	焼成	色調
1	1	台付甕	13.6 15.8 (5.2) [15.6]	口縁部1/2と脚部欠損。	内面口縁部横方向の刷毛目。胴部内面はナデ。外面は斜方向を主とした刷毛調整，胴下半部はさらにナデて，刷毛目を擦り消す。火熱により内外面ともざらついている。	細砂粒を含む。	良好。2次的火熱を受ける。	内面赤褐色，底部付近は黒褐色。外面褐色。

法量は上から口径・胴部径・底径・器高を現す。（　）は復原値、［　］は現存値を示す。

竪穴住居056(fig.81, PL.32)

挿図番号	遺物番号	器形	法量	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	胎土	焼成	色調
1	4	壺	(8.8) (10.2) —— [6.3]	上半部2/3。	球形の胴部に短く外反する口縁とからなる。口縁部横ナデ。内面ナデ。外面はヘラ削り後軽くヘラ磨きする。2次的火熱により器面があれ，特に内面は器表面が剝落する。	粒子の粗い砂粒を含む。	良好。2次的火熱を受ける。	赤褐色。内外面色塗彩。
2	2,3	甕	(14.8) (13.6) —— [11.7]	上半部1/3。	小さい底部から内彎して立ち上がり，口縁部はくの字状に外方へ開く。最大径は口縁にある。口縁部は横ナデ。内面はナデ。外面は縦方向に刷毛調整。	粒子の粗い砂粒を含む。	良好。2次的火熱を受ける。	内面明褐色。外面暗褐色，一部煤が付着する。

竪穴住居060(fig.81, PL.32)

挿図番号	遺物番号	器形	法量	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	胎土	焼成	色調
1	9,14,17, 20,21,34	甕	15.2 —— —— [8.4]	口縁部2/3と胴上半部1/4。	口縁部は僅かに外反し直立して立ち上がる。口縁部横ナデ，胴部内外面横方向にナデ。	粒子の粗い砂粒を含む。	普通。2次的火熱を受ける。	内面暗褐色。外面暗茶褐色，一部黒褐色。
2	22	甕	15.4 —— —— 5.8	口縁部1/4。	口縁部は短くくの字状に外反する。口縁部横ナデ。内面ナデ。外面ヘラ削り。	粒子の粗い砂粒を含む。	普通。	内面暗褐色。外面赤褐色，一部暗褐色。
3	30,31	台付甕	—— —— (10.4) [4.4]	脚部1/4。	内面ナデ。外面縦方向にヘラ削り。	粒子の粗い砂粒を含む。	良好。	明褐色。
4	5,6,7,34	高杯	—— —— (15.2) [1.7]	脚部1/4。	透孔は1孔確認できた。かなり大きく開く脚部である。 内面ナデ。外面ヘラ磨き。	粒子の粗い砂粒を含む。	良好。	赤褐色。外面の一部黒褐色。
5	13	甕	—— —— (4.8) [1.7]	底部。	内面ナデ。外面ヘラ削り後ナデ。	粒子の粗い砂粒を含む。	普通。	内面黒褐色。

古墳時代中期
竪穴住居010(fig.84・85, PL.33・34・35)

挿図番号	遺物番号	器形	法量	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	胎土	焼成	色調
1	75	坩	8.7 9.4 2.0 8.6	口縁部の一部欠損。	底部は上げ底気味で小さい。最大径は胴中位にある。胴部外面下部ヘラ削り。口縁部内面横方向の刷毛調整。火熱により器表面が荒れる。	砂粒を多量に含む。1～2㎜の小石を含む。	良好。2次的火熱を受ける。	暗赤褐色。内外面赤色塗彩。
2	74	坩	9.2 9.1 4.1 8.8	口縁部の一部欠損。	平底。口径と胴部径はほぼ同じで頸部も余りくびれない。口縁の一部は歪んでいる。口縁部内外面ナデ，胴部はヘラ削り。内外面とも火熱により器面が荒れてざらついている。	砂粒を多量に含む。3～6㎜の小石を含む。	良好。2次的火熱を受ける。	暗赤褐色。外面胴下半部黒褐色。内外面赤色塗彩。
3	67	坩	7.8 11.1 —— 10.1	完形。	丸底。胴部は押し潰したような球形を呈する。口縁は短く，内彎しながら立ち上がる。最大径は胴中位にある。口縁部横ナデ。外面胴部はヘラ削り，上半部はさらにナデる。	砂粒を含む。	良好。	胴下半内外面暗褐色。外面と口縁内面赤色塗彩。
4	78	坩	11.1 9.8 3.8 10.5	口縁部の一部欠損。	平底。口縁は大きくラッパ状に開き，最大径は口縁にある。口縁に凹線がまわる。口縁部は歪む。口縁部横ナデ。内外面はナデ。火熱により器表面が荒れてざらついている。	細砂粒，小石，黒色粒子を含む。	良好。2次的火熱を受ける。	暗赤褐色，一部黒褐色。外面と口縁内面赤色塗彩。
5	70	坩	(10.0) (9.2) (4.4) [9.9]	1/3。	口縁部横ナデ。内面ナデ。外面ヘラ削り後ナデ。内面に粘土紐接合痕が残る。	粒子の粗い砂粒を含む。小石を含む。	良好。	口縁部内面と外面は赤色塗彩。内面胴部黒褐色。

挿図番号	遺物番号	器形	法量	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	胎土	焼成	色調
6	77	坩	—— 9.9 4.2 6.9	口縁部欠損。	平底で最大径は胴中位にある。口縁部横ナデ，内面ナデ，外面はヘラ削りの後横方向にナデる。火熱により器表面が荒れてざらついている。	細砂粒，小石を含む。	良好。2次的火熱を受ける。	赤褐色，一部黒褐色。内外面赤色塗彩。
7	76	坩	8.8 9.7 5.9 7.6	口縁部の一部欠損。	平底で口縁は内彎して短く立ち上がる。最大径は胴中位にある。口縁部横ナデ，内面ナデ，外面ヘラ削り。	砂粒を多量に含む。	良好。2次的火熱を受ける。	褐色，一部黒褐色。
8	79	坩	10.2 11.0 4.3 7.4	口端部の一部欠損。	平底で口縁は短く外反する。押し潰されたような楕円形の胴部である。口縁部横ナデ。内面ナデ。外面はヘラ削り後丁寧にナデる。火熱により内面は特に荒れる。	細砂粒を多量に含む。	良好。2次的火熱を受ける。	赤褐色，外面の半分は暗褐色。内外面赤色塗彩。
9	2,48	坩	(10.6) —— —— [5.3]	口縁部1/4。	口縁部横ナデ。	砂粒を含む。	良好。	内外面とも赤褐色。
10	12	壺	(5.8) 9.5 5.5 7.2	口端部の3/4欠損。	平底の底部から内彎して立ち上がる。口縁部に2か所穿孔する。内面ナデ，外面縦方向に丁寧にヘラ磨きする。内面に粘土紐接合痕。	細砂粒を含む。	良好。	褐色，外面の一部黒褐色。
11	51	鉢	5.0 —— 5.9 5.5	口端部の一部欠損。	平底で僅かに内彎しながら立ち上がる。粘土紐接合痕が残る。内面ナデ，外面ヘラ削り。	細砂粒を含む。	良好。	内外面黒褐色。外面の一部暗褐色。
12	5	鉢	9.6 —— 5.5 6.0	口端部の一部欠損。	平底で体部は逆のハの字状に開いて立ち上がる。外面には粘土紐接合痕が残る。内外面ナデ。	砂粒を多量に含む。	良好。	内外面赤褐色。内外面赤色塗彩。
13	52	鉢	10.9 —— 6.2 3.1	口端部の一部欠損。	体部は内彎して立ちあがり，口縁部は弱く外反する。	細砂粒を多量に含む。	良好。	内外面黒褐色，外面の一部褐色。
14	53,54,82	鉢	6.4 —— 5.3 7.7	体部の一部を欠損。	体部はほぼ直立し，口縁部から底部まで径が殆ど変わらない。内面ナデ，外面ヘラ削り。	細砂粒を含む。	あまい。	暗褐色，外面の一部赤褐色。
15	37	高杯	—— —— —— [4.8]	脚部。	杯部内面と脚部内面はナデ。脚部外面はヘラ削り後ナデ。	細砂粒を含む。	良好。	内外面赤褐色。
16	10	高杯	—— —— —— [2.8]	脚上半部1/2。	内外面ともナデ。火熱により器表面が荒れる。	砂粒を多量に含む。	あまい。2次的火熱を受ける。	明赤褐色。
17	83	高杯	—— —— 12.3 [6.8]	脚部。	柱状の脚部で裾部は横へ大きく広がる。内面ナデ，外面は軽くヘラ磨き。脚裾部は横ナデ。内面は粘土紐痕が残る。	細砂粒を含む。	良好。	内外面とも明赤褐色。外面は赤色塗彩。
18	13,16,73	高杯	(15.2) —— —— [6.8]	杯部。口縁部の2/3欠損。	杯部は内彎して立ち上がる。口縁部横ナデ，内面ナデ，外面横方向にヘラ削り，下半部は縦方向に削る。内面底部は使用によるものか器表面が荒れる。	細砂粒を含む。	良好。	内外面とも赤褐色。
19	66	高杯	15.9 —— —— [6.7]	杯部。	杯部は外面に稜をつくって外方に立ち上がる。内面ナデ，外面はヘラ削り後丁寧にナデている。	細砂粒を含む。	良好。	内外面とも赤色塗彩し赤褐色。
20	64	高杯	18.5 —— —— [7.5]	杯部。	杯部は外面に稜をつくって外方に立ち上がり口端部は僅かに外反する。内面ナデ，外面はヘラ削り後丁寧にナデている。	細砂粒を含む。	良好。	内外面とも赤色塗彩し赤褐色。

法量は上から口径・胴部径・底径・器高を現す。（　）は復原値、［　］は現存値を示す。

挿図番号	遺物番号	器形	法量	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	胎土	焼成	色調
21	32	高杯	19.1 —— —— [6.8]	杯部。	杯部は外面に稜をつくって僅かに内彎しながら外方に立ち上がる。内面ナデ，外面はヘラ削り後丁寧にナデている。	細砂粒を含む。	良好。	内面黒褐色。外面赤褐色。外面は赤色塗彩する。
22	31	高杯	25.6 —— —— 7.0	杯部。	杯部は外面に稜をつくって外方に立ち上がる。内面ナデ，外面はヘラ削り後丁寧にナデている。火熱により内面は器表面が剝落する。	細砂粒を含む。	良好。2次的火熱を受ける。	内面黒褐色，一部赤褐色。内外面赤色塗彩。
23	54	高杯	19.0 —— —— 6.6	杯部。	杯部は外面に稜をつくって外方に立ち上がる。内外面ともヘラ削り後丁寧にナデている。	細砂粒を含む。	良好。2次的火熱を受ける。	暗赤褐色。内外面とも赤色塗彩。
24	35	高杯	21.5 —— —— 6.7	杯部。	杯部は外面に稜をつくって外方に立ち上がる。内外面ともヘラ削り後丁寧にナデている。	細砂粒を多量に含む。	良好。2次的火熱を受ける。	暗赤褐色，一部赤褐色。内外面赤色塗彩。
25	1,2,22,40,41,42,47	高杯	(19.6) —— —— [4.7]	杯部1/3。	杯部外面下部に稜を持つ。口縁部横ナデ。内外面横方向にヘラ削り。	細砂粒を含む。	良好。	赤褐色。
26	11,82	高杯	19.7 —— —— [6.2]	杯部2/3。	杯部外面下部に稜を持つが丸みを帯びている。内外面ともナデる。	粒子の粗い砂粒を含む。小石を含む。	良好。2次的火熱を受ける。	赤褐色。内外面とも赤色塗彩。
27	33	高杯	19.2 —— —— [6.6]	杯部，一部欠損。	杯部外面下部に稜を持ち外方に開きながら直線的に立ち上がる。内外面とも底部の一部を除き黒褐色を呈するがこれは2次的火熱のためで，内外面赤色塗彩していたと思う。	砂粒を含む。5㎜前後の小石を含む。	良好。	黒褐色。底部の一部赤褐色。内外面赤色塗彩。
28	68	高杯	—— —— —— [3.2]	杯部底部。	杯部外面下部に稜を持つ。内面ヘラ磨き。外面ヘラ削りの後ナデ。	細砂粒を多量に含む。	良好。	赤褐色。内外面赤色塗彩。
29	4,14	高杯	(20.0) —— (12.0) (15.3)	杯部2/3,脚柱部1/4,脚裾部4/5欠損。	杯部外面下部に稜を持つ。脚部は柱状で裾部は短くハの字状に開く。内面に粘土紐接合痕が残る。口縁部横ナデ。脚部ヘラ磨き，他はナデ。	粒子の粗い砂粒を多量に含む。	良好。	赤褐色。脚部内面を除き赤色塗彩。
30	65	高杯	19.2 —— 14.6 14.9	脚裾部1/4欠損。	杯部外面下部に稜を持つ。脚部は柱状で裾部は横へ広がる。脚部内面ヘラ削り。他は丁寧にナデて仕上げる。内面の赤色塗彩は2次的火熱により器表面が荒れ殆ど残らない。	砂粒を多量に含む。	良好。2次的火熱を受ける。	杯部内面暗褐色，底部黒褐色。外面赤褐色。内外面赤色塗彩。
31	6,7	高杯	20.8 —— 13.5 14.3	口縁部と裾部の一部欠損。	杯部外面下部に稜を持つ。脚部は緩やかに開き，脚裾部で横にのびる。脚部内面に粘土紐接合痕とシボリ目が残る。脚裾部口縁部横ナデ。脚部外面ヘラ磨き，他はナデ。	砂粒を多量に含む。	良好。	赤褐色。脚部内面を除き赤色塗彩。
32	55	器台結合土器	21.0 —— 14.9 14.4	脚裾部の1/3欠損。	口縁は大きく外反する。杯底部に鍔状突起を有する。脚部内面にシボリ目と粘土紐接合痕が残る。	砂粒を多量に含む。	良好。2次的火熱を受ける。	暗赤褐色。脚部内面を除き赤色塗彩。
33	49	甕	(16.4) (23.3) (6.6) 27.0	口縁部の1/2,胴部の1/4欠損。	底部はやや上げ底となり胴部は長胴で緩やかに膨らむ。口縁は僅かに外傾して立ち上がる。外面はヘラ削り後ナデる。内面はナデ。口縁部横ナデ。	砂粒を含む。4～5㎜の小石を少量含む。	良好。	内外面とも赤褐色。
34	2,3,4,18,20～25,27,28,31,38,40	甕	(13.0) (21.4) 7.0 12.3	口縁部の1/4，胴部1/2,底部欠損。	球形に近い胴部から，底部が僅かに突出する。口縁はくの字状に外反し折り返しの二重口縁となる。内面ナデ。外面ヘラ削り。口縁の折り返し部には指頭痕が残る。頸部はヘラ磨き。	砂粒を多量に含む。2～3㎜の小石を含む。	あまい。	内面下半部は黒褐色。他は暗褐色。

竪穴住居012(fig.86, PL.33・35)

挿図番号	遺物番号	器形	法量	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	胎土	焼成	色調
1	13	高杯	(16.8) —— —— [4.6]	杯部1/4。	杯部外面に明瞭な稜を持つ。口縁部は外反し，口端部は横にのびる。4と胎土・形態が極めてにているが別個体である。口縁部横ナデ，体部内外面ナデ。	粒子が細かい。細砂粒を含む。	良好。	明褐色。器肉は明灰褐色。
2	38	高杯	(17.4) —— —— [3.8]	杯部1/4。	杯部外面に明瞭な稜を持つ。内外面ヘラ削り後ナデ。	細砂粒を含む。	良好。	赤褐色。内外面赤色塗彩。
3	5	坩	(8.0) —— —— [6.0]	口縁部から胴上半部1/3。	口縁部はくの字状に曲がり，僅かに内彎して立ち上がる。外面は縦方向にヘラ削り。口縁内面は刷毛調整。	砂粒を多量に含む。	あまい。2次的火熱を受ける。	内外面とも暗褐色。
4	10,11	高杯	(21.6) —— —— [6.1]	杯部1/3。	杯部外面に明瞭な稜をつくる。口端部はつまみだされて横方向にのびる。口端部横ナデ。内外面ナデ。	粒子が細かい。細砂粒を含む。	良好。	明褐色。
5	21	高杯	9.6 —— —— [7.3]	杯部1/2。	杯部外面に明瞭な稜をつくる。口縁は外傾しながら直線的に立ち上がる。	粒子の粗い砂粒を含む。	良好。	赤褐色。内外面赤色塗彩。
6	24	坩	8.4 8.1 2.3 6.4	胴部1/3欠損。	口縁部横ナデ。内面ナデ。外面はヘラ削りし上半部は更にナデて仕上げる。	砂粒を含む。	あまい。2次的火熱を受ける。	暗褐色。
7	16,20	高杯	—— —— (18.4) [11.1]	脚部1/4。	柱状の脚部から屈曲して横にのび，更に稜をつくって裾部になる。裾端部はつまみ出される。裾端部横ナデ，内面と裾部ナデ。脚柱部はヘラ磨きしていると思われる。	粒子が細かい。細砂粒を含む。	あまい。	明褐色。
8	27,29,30	高杯	—— —— (13.3) [7.4]	脚部1/4。	裾端部に稜をつる。脚柱部外面はヘラ磨き。裾端部は縦方向，内面は横方向のナデ。内面に粘土紐接合痕が残る。	砂粒を含む。	良好。	暗赤褐色。外面赤色塗彩。
9	19	高杯	—— —— (13.3) [1.7]	脚裾部1/4。	脚裾部に稜をつくる。内外面ナデ。	粒子の粗い砂粒を含む。	良好。	暗赤褐色。
10	12	坩	—— (4.7) (3.8) (6.0)	胴部1/4。	底部はやや上げ底気味となる。内面ナデ。胴部外面はヘラ削り後ナデ。底部ヘラ削り。火熱により荒れが著しい。	細砂粒を多量に含む。	あまい。2次的火熱を受ける。	暗赤褐色。
11	15	甕	(16.2) —— —— [5.7]	口縁部1/3。	口縁部横ナデ，内面は頸部にヘラ削り痕が残るが他はナデ。外面肩部ヘラ削り。	砂粒を多量に含む。	良好。	赤褐色。
12	31,32,34,38	甕	—— —— 5.3 [4.9]	胴下半部1/2。底部。	内外面ヘラ削り。	粒子の粗い砂粒を含む。	良好。	内面黒褐色。外面茶褐色。
13	38	鉢	(10.4) —— (6.0) 6.5	口縁部～体部1/4欠損。	平底の底部から内彎して立ち上がり，口縁部を折り返す。内外面ナデ。外面は凸凹が著しい。	砂粒を少量含む。	あまい。	赤褐色。
14	14	甕	16.7 21.7 —— 19.9	胴上半部。	最大径は胴中位にあり球形を呈する。口縁部横ナデ，内面はナデ。外面の頸部から肩部にかけてはヘラ磨き。胴下半部はヘラ削り後ナデ。内面は火熱により荒れる。	細砂粒を含む。	良好。2次的火熱を受ける。	暗褐色，一部赤褐色。

法量は上から口径・胴部径・底径・器高を現す。（　）は復原値、［　］は現存値を示す。

竪穴住居031(fig.86)

挿図番号	遺物番号	器形	法量	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	胎土	焼成	色調
1	3	甕	(11.8) 10.3 —— [5.3]	胴上半部の1/3。	内外面ヘラ削り後ヘラ磨き。	粒子の粗い砂粒を含む。	良好。2次的火熱を受ける。	暗茶褐色。

竪穴住居035(fig.86, PL.32)

挿図番号	遺物番号	器形	法量	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	胎土	焼成	色調
1	7～16, 20～24	甕	17.1 22.1 —— [18.8]	胴上半部。	最大径は胴中位にあり球形を呈する。口縁部横ナデ。内面ナデ。外面はヘラ削り後ヘラ磨き。	粒子の粗い砂粒を含む。	良好。2次的火熱を受ける。	暗茶褐色。
2	26,27	甕	—— —— —— [6.8]	頸部から肩部。	器面の荒れが著しくはっきりしないが内外面ともヘラ磨きしているようである。	粒子の粗い砂粒を含む。	良好。	明褐色，一部黒褐色。

古墳時代後期
竪穴住居001(fig.87, PL.36)

挿図番号	遺物番号	器形	法量	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	胎土	焼成	色調
1	4,6	杯	(12.4) —— —— [2.8]	口縁部から体部の1/4。	内面は横方向にナデた後放射状にヘラ磨きする。外面はヘラ削り後横方向にヘラ磨き。	粒子のきめが細かい。細砂粒を少量含む。	良好。	赤褐色。内外面赤色塗彩。
2	5,10	甕	(15.8) —— —— [8.7]	口縁部から胴上半部の1/4。	口縁部横ナデ。内面ヘラ削り後ナデ。外面縦方向のヘラ削り。	砂粒を含む。2～3㎜の小石を多量に含む。	良好。	暗茶褐色。

竪穴住居002(fig.87, PL.36)

挿図番号	遺物番号	器形	法量	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	胎土	焼成	色調
1	27	須恵器長頸壺	9.6 —— —— [10.0]	胴部欠損。	口頸部はラッパ状に開き，口縁部は二重となる。内外面ともロクロを利用して丁寧にナデる。口頸部内面の下半部にはシボリ目がある。	粒子が細かくよく精選されている。	良好。	灰褐色。釉のかかった部分は暗緑色。
2	18,22,26	甕	12.8 —— —— [14.2]	口縁部から胴上半部の1/4。	口縁部横ナデ。内面ナデ。外面縦方向のヘラ削り。	砂粒を含む。	良好。	暗褐色。一部黒褐色。
3	1	手捏土器	5.0 —— —— 1.8	口縁部の一部を欠損する。	粘土板を内彎させただけのような雑な作りで指頭による押圧後がそのまま残る。	砂粒を少量含む。	良好。	内面赤褐色。外面黒褐色。

竪穴住居008(fig.87, PL.36)

挿図番号	遺物番号	器形	法量	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	胎土	焼成	色調
1	20	杯	(14.2) —— —— [4.2]	口縁部1/4。	外面に明瞭な稜を持つ。口縁部は僅かに外傾して立ち上がる。口縁部横ナデ。体部内面ナデ。体部外面ヘラ削り。	砂粒を含む。	良好。	赤褐色。内外面赤色塗彩。

挿図番号	遺物番号	器形	法量	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	胎土	焼成	色調
2	9	杯	(14.0) —— —— 5.1	口縁部の1/3欠損。	外面に明瞭な稜を持つ。口縁部はほぼ直立して立ち上がる。口縁部横ナデ。内面ナデ。外面は丁寧にナデており光沢をもつ。火熱により器面が荒れる，特に内面は剝落する。	細砂粒を含む。3～4㎜の小石を含む。	良好。2次的火熱を受ける。	内面黒褐色。外面暗赤褐色。内外面赤色塗彩。
3	12	杯	13.2 —— —— 4.8	口縁部の1/3欠損。	外面に稜を持つ。口縁は外反しながら立ち上がる。口縁部横ナデ。内面ナデ。外面は丁寧にヘラ削りしている。	細砂粒を含む。	良好。2次的火熱を受ける。	暗褐色，口縁部は赤褐色。内外面とも赤色塗彩。
4	35,37,39	鉢	8.3 —— 5.7 6.6	体部の一部欠損。	外面に稜を持ち，口縁部は外反する。口縁部横ナデ。内外面ともヘラ削り後ナデる。内外面とも火熱により器面が荒れてざらついている。	細砂粒を含む。	良好。2次的火熱を受ける。	赤褐色。内外面とも赤色塗彩。
5	8	高杯	(13.3) —— 9.1 9.9	杯部の1/2欠損。	杯部外面に稜を持つ。脚部は短くハの字状に開く。口縁部と脚裾部は横ナデ。杯部内面ナデ。外面と脚部内面はヘラ削り。	細砂粒を多量に含む。3㎜前後の小石を含む。	良好。2次的火熱を受ける。	内外面暗赤褐色。内外面とも赤色塗彩。
6	3,4,5,6,7	甕	17.2 23.4 7.2 24.4	一部を欠損する。	やや長胴気味で最大径はほぼ中位にある。口縁部は僅かに外反する。口縁部横ナデ。外面にはヘラ削り後ナデ。内面は器面がほとんど剝落している。	細砂粒を少量含む。	良好。2次的火熱を受ける。	赤褐色。
7	28～34,36,38,40,41	甕	15.3 16.3 6.3 16.0	口縁部から胴部の1/4欠損。	内彎しながら立ち上がり口縁部で外反する。頸部ははっきりしない。口縁部横ナデ。内面ナデ。外面ヘラ削り。内面の胴下半部は器面が剝落する。	細砂粒を含む。2～3㎜の小石を含む。	良好。2次的火熱を受ける。	内面暗褐色。外面赤褐色。
8	44	手捏土器	[5.7] —— —— [2.1]	1/2。	粘土板を僅かに内彎させただけの簡単な作りである。指頭痕がそのまま残り。特に調整は行っていない。	細砂粒を多量に含む。	良好。	内面暗褐色。外面黒褐色。
9	15	手捏土器	4.1 —— 4.6 1.6	完形。	平底で体部はほぼ直立する。内面に指頭痕が残る。	細砂粒を多量に含む。	良好。	暗赤褐色。
10	16	手捏土器	3.6 —— 3.8 2.4	口縁部の一部を欠損。	平底で体部はほぼ直立する。内外面に指頭痕が残る。	細砂粒を多量に含む。	ややあまい。	暗褐色，一部黒褐色。

竪穴住居014(fig.90, PL.37)

挿図番号	遺物番号	器形	法量	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	胎土	焼成	色調
1	6,7,8	杯	(15.7) —— —— 4.9	口縁部から体部の2/3欠損。	体部は緩やかに内彎しながら立ち上がり，口端部で弱い稜をつくる。口縁部横ナデ。内面横方向のヘラ磨き，外面横方向のヘラ削り，底部は平底を意識してヘラ削りする。	細砂粒を含む。	良好。	白っぽい褐色。内面赤色塗彩。
2	4,6	甕	—— —— (9.6) [10.3]	胴下半部。	胴部はあまり外方へ開かず立ち上がる。底径と胴部径の差が少ない長胴の甕であろう。内面はナデ。外面は上から下へヘラ削りし，底部付近は更に横方向に行い形を整える。	細砂粒・雲母片・1～5㎜の小石を含む。	良好。	褐色。

竪穴住居016(fig.90, PL.37)

挿図番号	遺物番号	器形	法量	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	胎土	焼成	色調
1	28	杯	(16.4) —— —— [4.7]	口縁部から体部1/4。	杯部外面に稜を持つ。口縁部は僅かに外傾して立ち上がる。口縁部横ナデ。体部外面ヘラ削り。	細砂粒を多量に含む。	良好。	赤褐色。内面と外面の稜の下まで赤色塗彩。

法量は上から口径・胴部径・底径・器高を現す。（　）は復原値、[　]は現存値を示す。

挿図番号	遺物番号	器形	法量	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	胎土	焼成	色調
2	28	甕	12.4 17.3 —— [10.7]	胴上半部。	胴部の膨らみは僅かで，口縁部は緩やかに外反する。口縁部横ナデ。胴部はヘラ削り後ナデ。火熱により器面が荒れ，ざらついている。内面の一部は剝落する。	細砂粒を含む。2～5㎜の小石を多量に含む。	良好。2次的火熱を受ける。	赤褐色，一部煤が付着し黒褐色。
3	2,3,4,27	甑	20.1 19.7 7.2 21.8	1/3欠損。	底部から緩やかに内彎し，外方に広がりながら立ち上がる。口縁部は僅かに外反し，胴部との境は明瞭でない。内面ナデ。外面はヘラ削り後ナデ。	細砂粒を多量に含む。	良好。2次的火熱を受ける。	暗褐色，一部黒褐色。

竪穴住居026(fig.90, PL.37)

挿図番号	遺物番号	器形	法量	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	胎土	焼成	色調
1	41,42	杯	15.2 —— 6.7 5.1	1/4欠損。	外面に僅かに突出した稜を持つ。口縁部は外反する。口縁部横ナデ。内面ナデ。外面ヘラ削り。	粒子の粗い砂粒を少量を含む。	良好。	赤褐色。内面の体部と口縁部外面を赤色塗彩する。

竪穴住居039(fig.90, PL.37)

挿図番号	遺物番号	器形	法量	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	胎土	焼成	色調
1	9	壺	10.8 11.9 —— 12.7	完形。	丸底で楕円形の胴部である。長い頸部は外反し，胴部との境のくびれは僅かである。口縁部は横ナデ。その他の調整は火熱による器面の荒れが著しく不明。	細砂粒を含む。	良好。2次的火熱を受ける。	暗赤褐色。口縁部内外面と外面肩部を赤色塗彩する。
2	29,30,31,32,33	鉢	(14.8) —— —— [7.1]	1/4。	丸底で内彎しながら立ち上がり，口縁部は短く外傾する。火熱による器表面の荒れが著しく調整ははっきりしない。	粒子の粗い砂粒を含む。	良好。2次的火熱を受ける。	暗褐色。内外面赤色塗彩。

竪穴住居042(fig.90, PL.37)

挿図番号	遺物番号	器形	法量	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	胎土	焼成	色調
1	7,10,14,18,19	須恵器杯蓋	12.9 —— —— [2.6]	つまみと体部の一部欠損。	かえりは僅かで横にのびる。天井部は回転ヘラ削り後ナデ。他もロクロを利用したナデによって仕上げる。	粒子が細かくよく精選されている。	良好。	明青灰色。
2	1,14	杯	(15.6) —— —— [3.8]	口縁部から体部の1/4。	外面に稜を持ち，口縁部は強く外反する。	細砂粒を含む。	良好。	暗褐色。内外面赤色塗彩。
3	12,13,14	甕	18.8 17.6 —— [16.8]	底部付近を欠損。	最大径は口縁部にある。胴部はわずかに膨らみ，口縁部は外反する。口縁部横ナデ。内面はナデており工具痕が残る。外面は縦方向にヘラ削りするが単位がはっきりしない。	粒子の粗い砂粒を多量に含む。	良好。2次的火熱を受ける。	明赤褐色。
4	9	手捏土器	(6.5) —— 5.8 2.7	体部1/2欠損。	平底の底部から直立して立ち上がる。内外面に指頭痕が残る。	砂粒を含む。	あまい。2次的火熱を受ける。	内面暗褐色。外面褐色。

その他の遺構
土壙墓007(fig.91, PL.38)

挿図番号	遺物番号	器形	法量	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	胎土	焼成	色調
1	1,2,3	須恵器長頸壺	(10.5) —— —— [11.3]	1/3。	口頸部は外反しながら大きくラッパ状に開く。口端部は丸くおさめている。ロクロを利用してナデによって仕上げる。	よく精選され，黒色の微粒子が混じる。	良好。	明灰色，一部に緑色の自然釉がかかる。

溝021(fig.91, PL.38)

挿図番号	遺物番号	器形	法量	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	胎土	焼成	色調
1	3,4,5,6,7,9,10,11,12,30	杯	(13.5) —— (6.8) 4.2	1/4欠損。	体部下端は所々手持ちヘラ削りする。底部はヘラ切り離し後縦方向と横方向にヘラ削りする。	細砂粒を含む。	良好。	白っぽい褐色。
2	29	杯	—— —— (9.0) 1.2	底部1/4。	底部は回転糸切り後未調整。	砂粒を含む。	あまい。	褐色。
3	12,16	杯	—— —— (6.2) [2.2]	体部下半から底部の1/2。	底部は回転糸切り後未調整。	細砂粒を含む。	良好。	褐色。
4	29		—— —— (8.4) [3.2]	脚部	内外面ナデ。	粒子の粗い砂粒を含む。	あまい。	白っぽい褐色。

土坑059(fig.91)

挿図番号	遺物番号	器形	法量	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	胎土	焼成	色調
1	1	高杯	—— —— —— [3.4]	脚部上半部1/4。	脚部内面ナデ，外面ヘラ磨き。外面は摩耗が著しい。	細砂粒を含む。	良好。	内面褐色。外面赤褐色。内外面を赤色塗彩。

遺構外出土土器(fig.91, PL.38)

挿図番号	遺物番号	器形	法量	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	胎土	焼成	色調
1	028-1	高杯	—— —— —— [3.8]	脚部1/4。	脚部に穿孔するが単位は不明。外面はヘラ磨き。杯部と脚部は臍による結合。	細砂粒を含む。	良好。	暗褐色。
2	046-9	台付甕	—— —— —— [2.9]	脚部。	内面ナデ，外面縦方向にヘラ磨き。	粒子の粗い砂粒を多量に含む。	良好。	暗褐色。
3	010-45	甕	(21.8) —— —— [3.7]	口縁部1/4。	口端部は波状口縁となる。口頸部には粘土紐の輪積み痕と指頭痕を明瞭に残す。内面ナデ。	細砂粒を多量に含む。	良好。	暗褐色。
4	028-5	高杯	—— —— —— [4.8]	脚裾部欠損。	脚部中位に4か所（3か所遺存）穿孔する。内面ナデ，外面縦方向にヘラ磨き。	粒子の粗い砂粒を多量に含む。	あまい。	明赤褐色。

法量は上から口径・胴部径・底径・器高を現す。（　）は復原値、[　] は現存値を示す。

挿図番号	遺物番号	器形	法量	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	胎土	焼成	色調
5	032-6	台付甕	—— —— (8.4) [4.6]	脚部1/4。	内面ナデ，外面縦方向の刷毛調整。	粒子の粗い砂粒を含む。	良好。2次的火熱を受ける。	暗褐色。
6	048-9	甕	(16.4) —— —— [6.8]	口縁部1/4。	口縁部横ナデ。肩部は内外面ヘラ削り。内面には粘土紐接合痕が明瞭に残る。	粒子の粗い砂粒を含む。	良好。	明褐色。
7	028-3	高杯	—— —— —— [5.3]	脚部1/2。	脚部外面ヘラ磨き。内面にはシボリ目が残る。杯部と脚部は臍による結合。	粒子の粗い砂粒を含む。	良好。	赤褐色。
8	032-5	高杯	—— —— —— [4.5]	脚部。	内面ナデ，外面ヘラ磨き。	粒子の粗い砂粒を多量に含む。	良好。	赤褐色。外面赤色塗彩。
9	046-11	杯	(14.2) —— —— [4.6]	口縁部から体部1/4。	外面の稜は緩やか。口縁部横ナデ，体部内外面ナデ。	細砂粒を多量に含む。	良好。	赤褐色。内外面赤色塗彩。
10	021-29	手捏土器	3.5 —— —— 3.1	口縁部の一部欠損。	円筒状の粘土塊の上面をくぼめている。指頭痕が残る。	砂粒を少量含む。	良好。	内面黒褐色。外面赤褐色。
11	046-5・7	甕	—— —— (10.2) [2.9]	底部1/2。	底部外面木葉痕。	粒子の粗い砂粒を多量に含む。	良好。	赤褐色。
12	046-11	壺	—— —— 3.8 [1.7]	底部。	内外面ヘラ磨き。	細砂粒を含む。	良好。	褐色。
13	046-18	甕	—— —— —— ——	底部。	底部外面木葉痕。	細砂粒を含む。	あまい。	赤褐色。
14	046-18	甕	—— —— —— [2.0]	底部。	底部外面木葉痕。内外面ナデ。	細砂粒を含む。	良好。	赤褐色。
15	018-10	甕	—— —— (6.2) [6.6]	底部。	内外面ナデ。	粒子の粗い砂粒を多量に含む。	良好。	赤褐色。
16	表採	甕	—— —— 5.9 [1.3]	底部。	底部外面木葉痕。内面は器面が剝落する。	細砂粒を含む。	良好。	褐色。
17	032-1	甕	—— —— (8.3) [1.9]	底部。	底部外面木葉痕。内面ナデ。	粒子の粗い砂粒を含む。	あまい。	内面暗褐色。外面褐色。

法量は上から口径・胴部径・底径・器高を現す。（　）は復原値、［　］は現存値を示す。

図面・図版

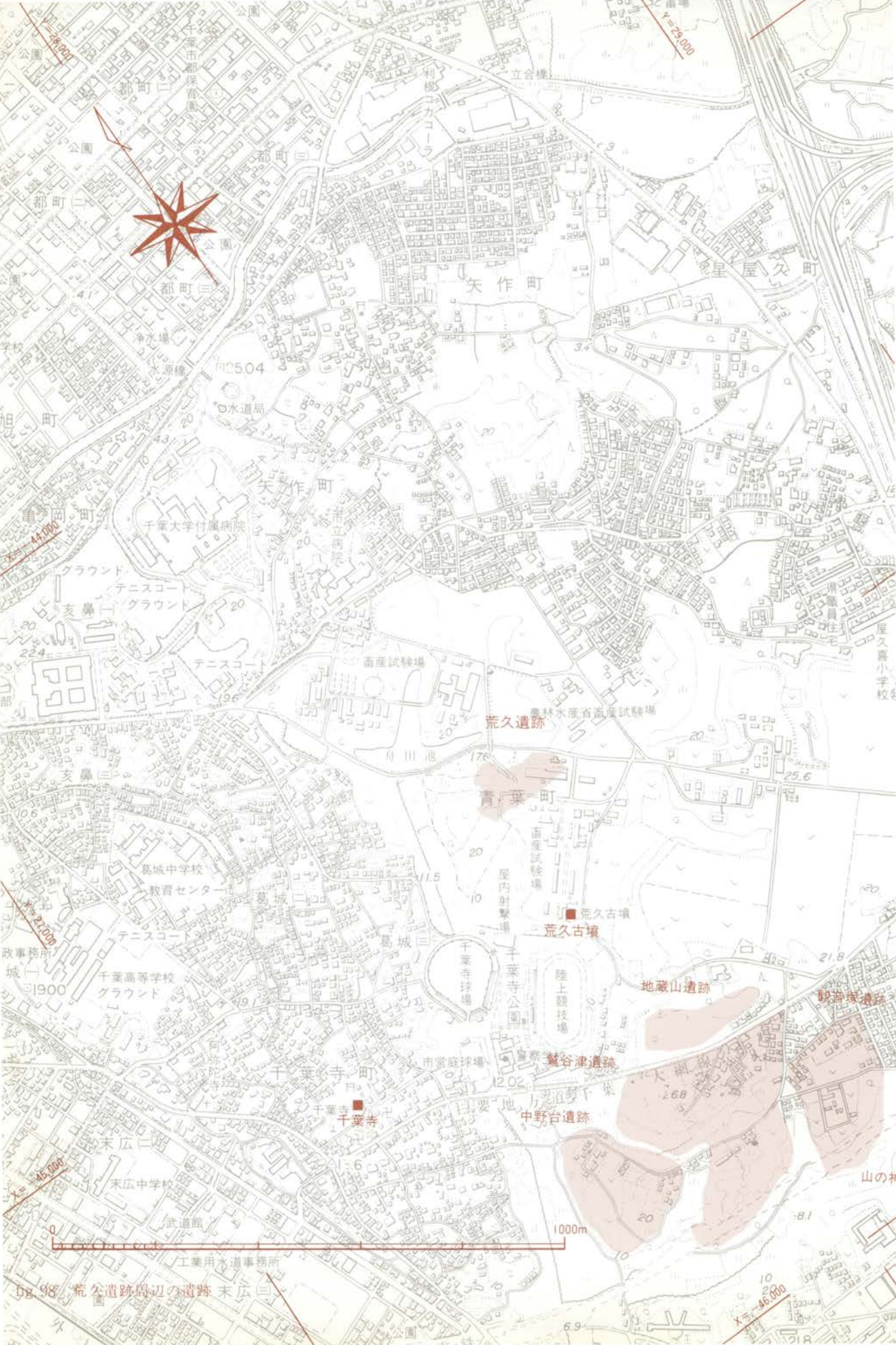


図98 荒久遺跡周辺の遺跡

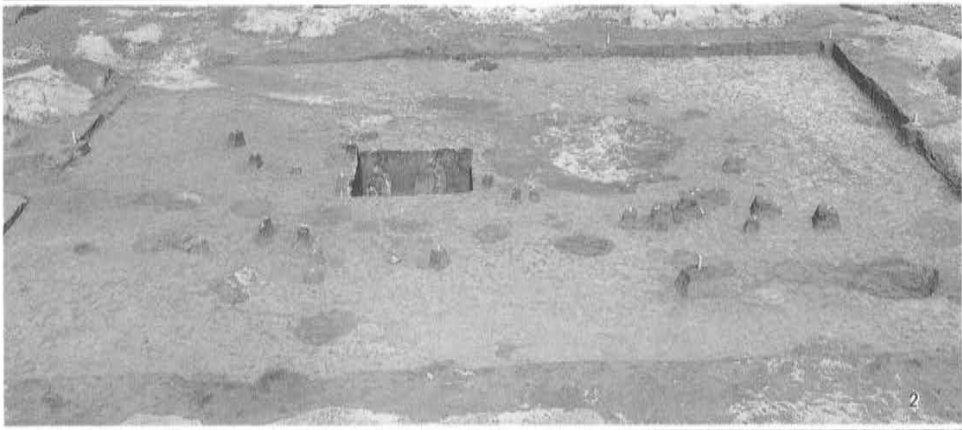
荒久遺跡周辺の航空写真

fig. 99　荒久遺跡の地形

東久留米全景

3
2

荒久遺跡
基本層序



第1ブロック

第4ブロック

1
2
3

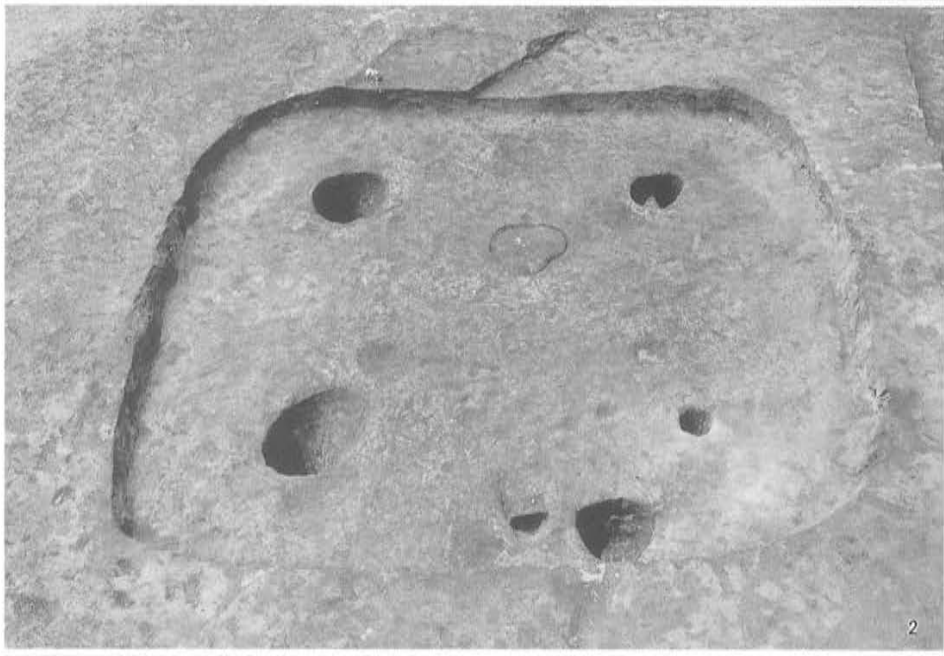
第5ブロック

第3ブロック

第3ブロック

1
2
3

竪穴住居022



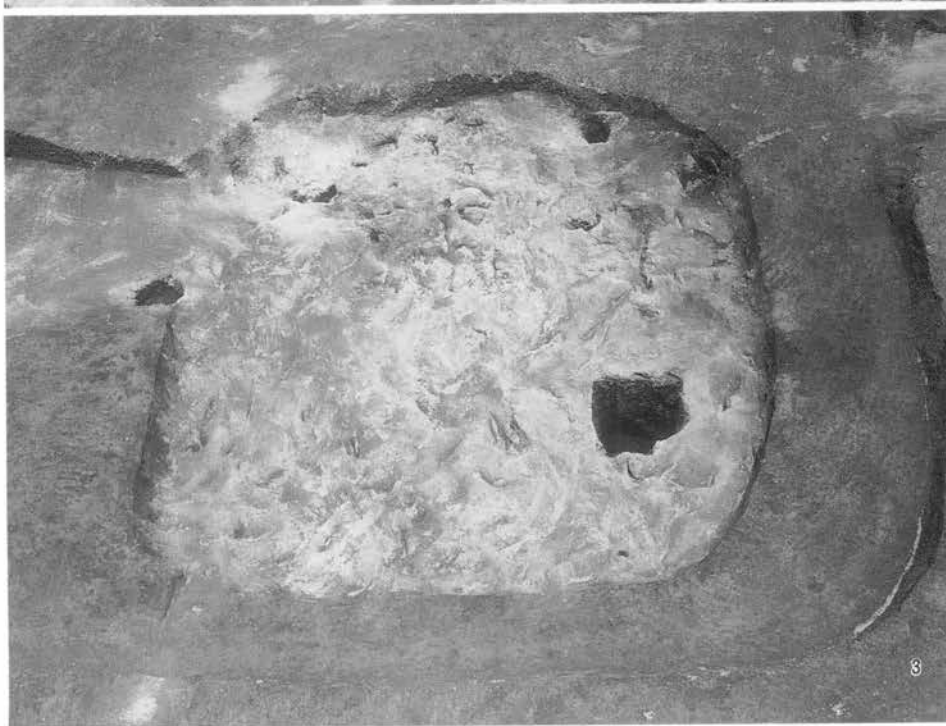
竪穴住居030

竪穴住居031

1
2
3

竪穴住居023

竪穴住居034



竪穴住居049

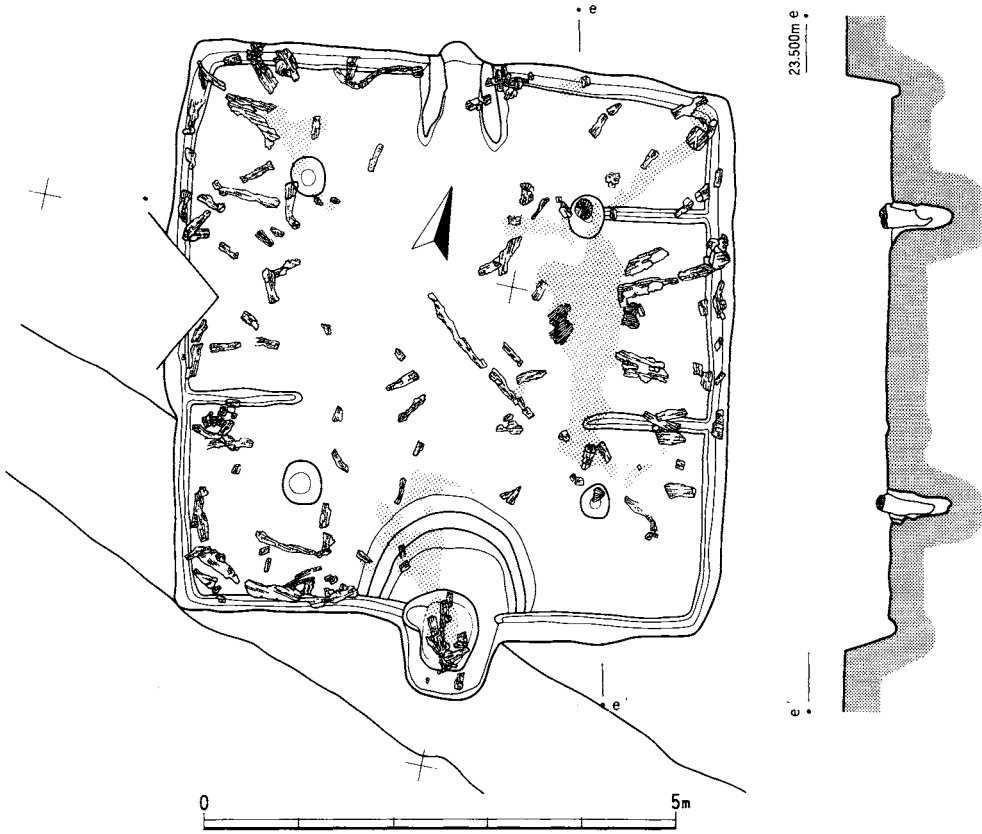
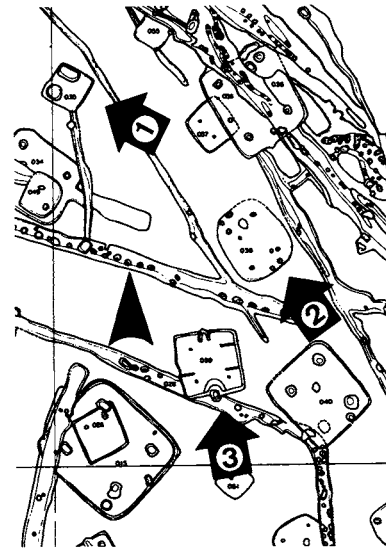
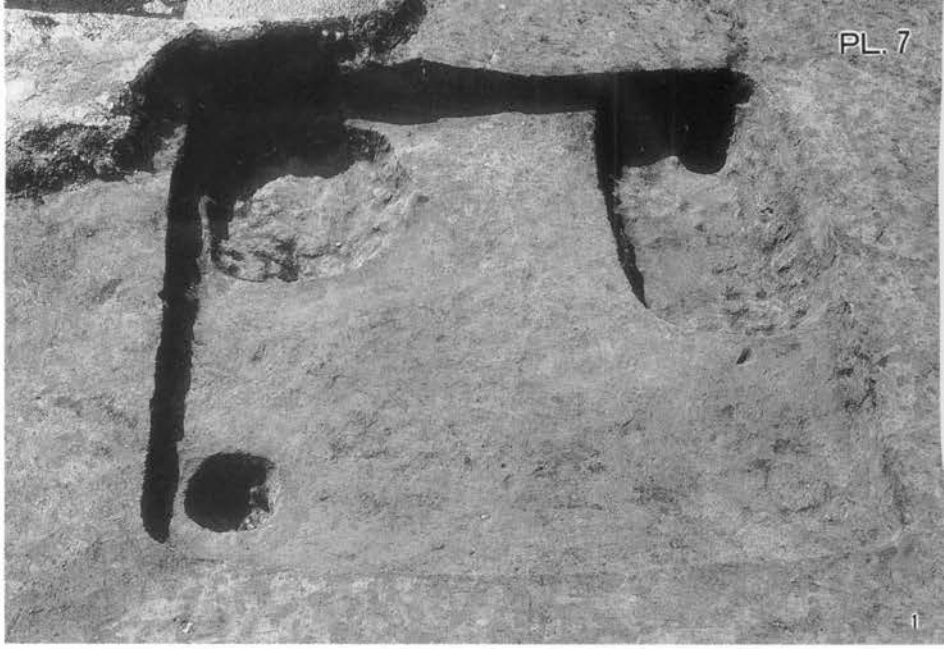
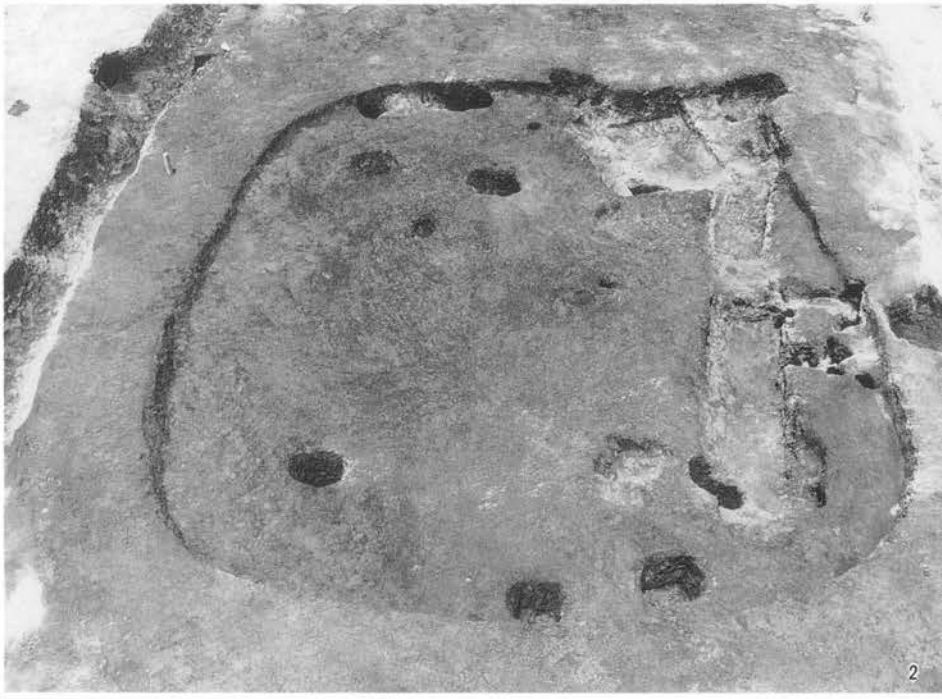


fig.100　竪穴住居039焼土・炭化材出土状態





竪穴住居035



竪穴住居038

竪穴住居039

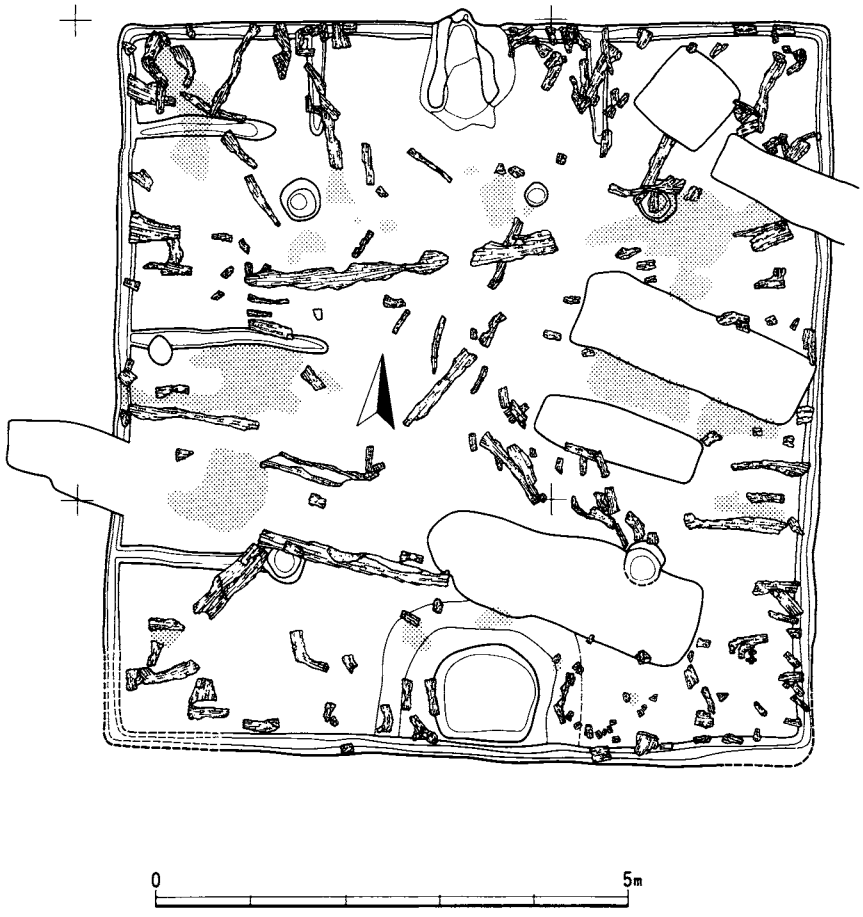
1
2
3

竪穴住居027

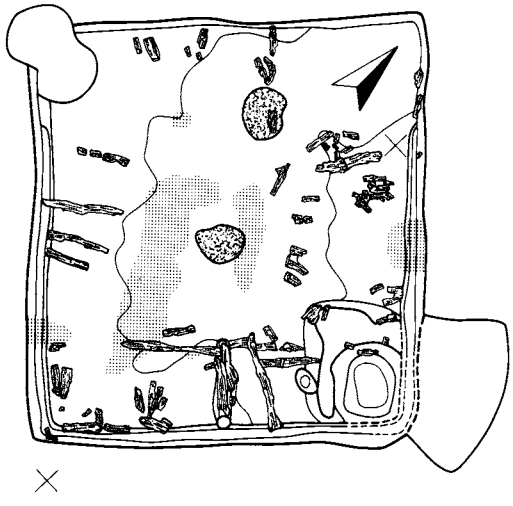
竪穴住居036

竪穴住居037

竪穴住居008



竪穴住居012



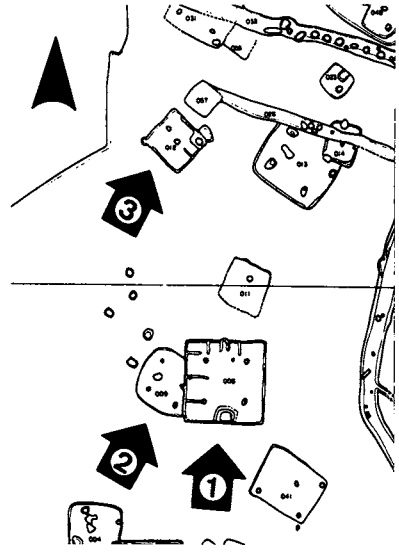


fig.101　竪穴住居008・012焼土・炭化材出土状態

竪穴住居008

竪穴住居009

竪穴住居012

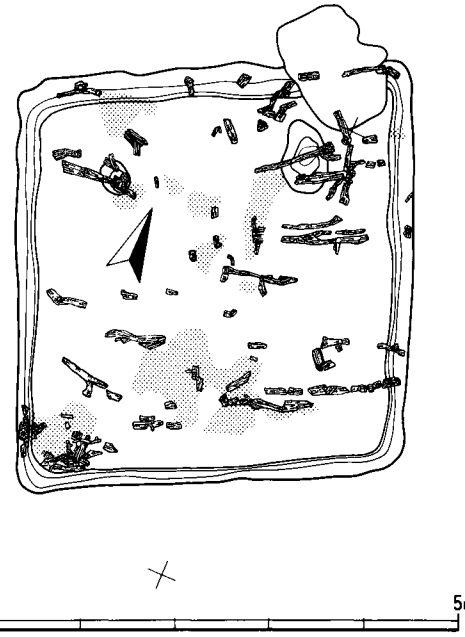
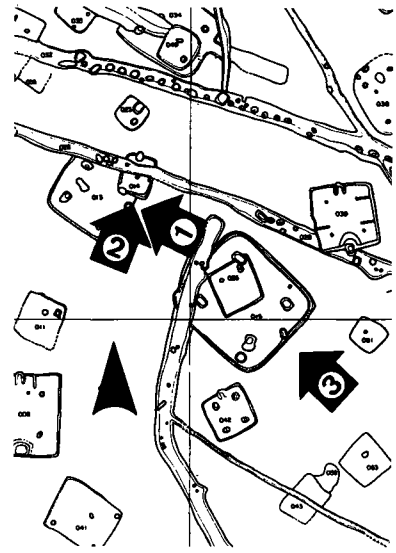
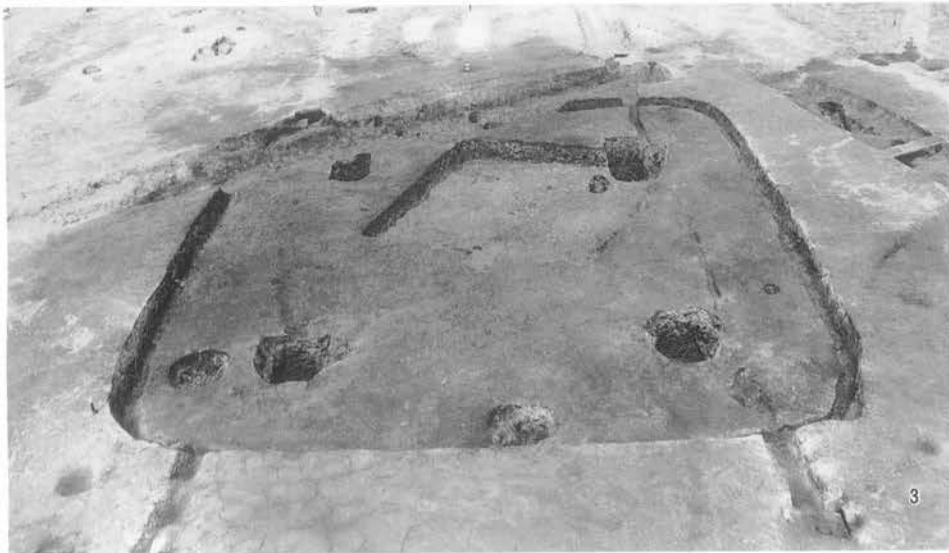


fig. 102　竪穴住居026焼土・炭化材出土状態



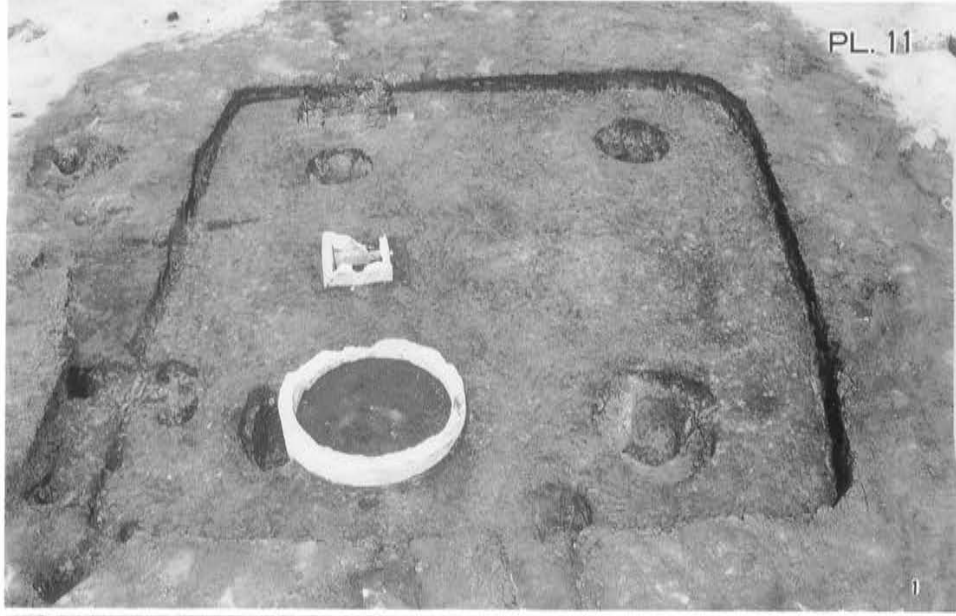
竪穴住居013

竪穴住居014



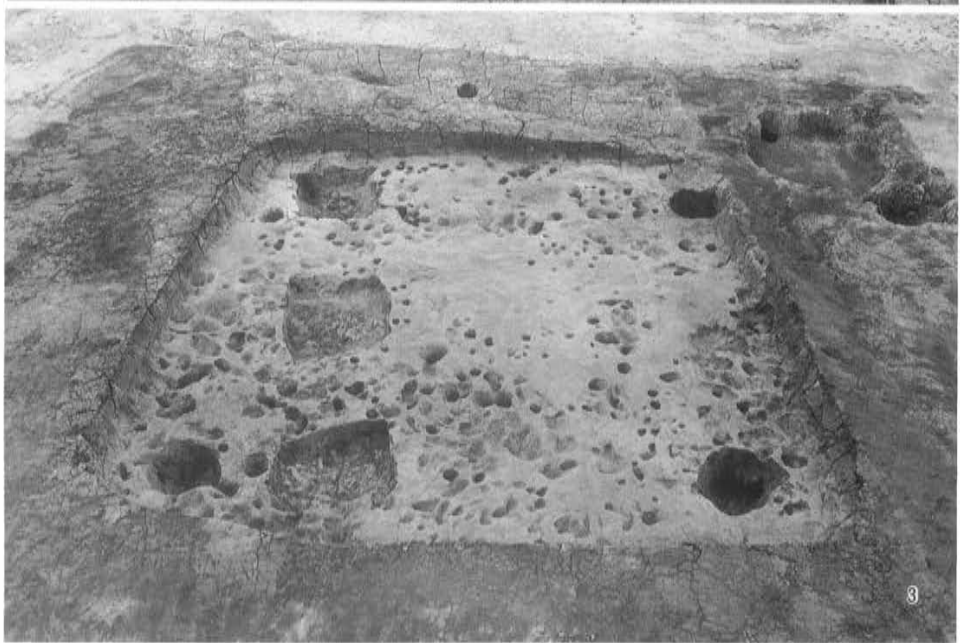
竪穴住居015
竪穴住居026

1
2
3



竪穴住居040

竪穴住居060

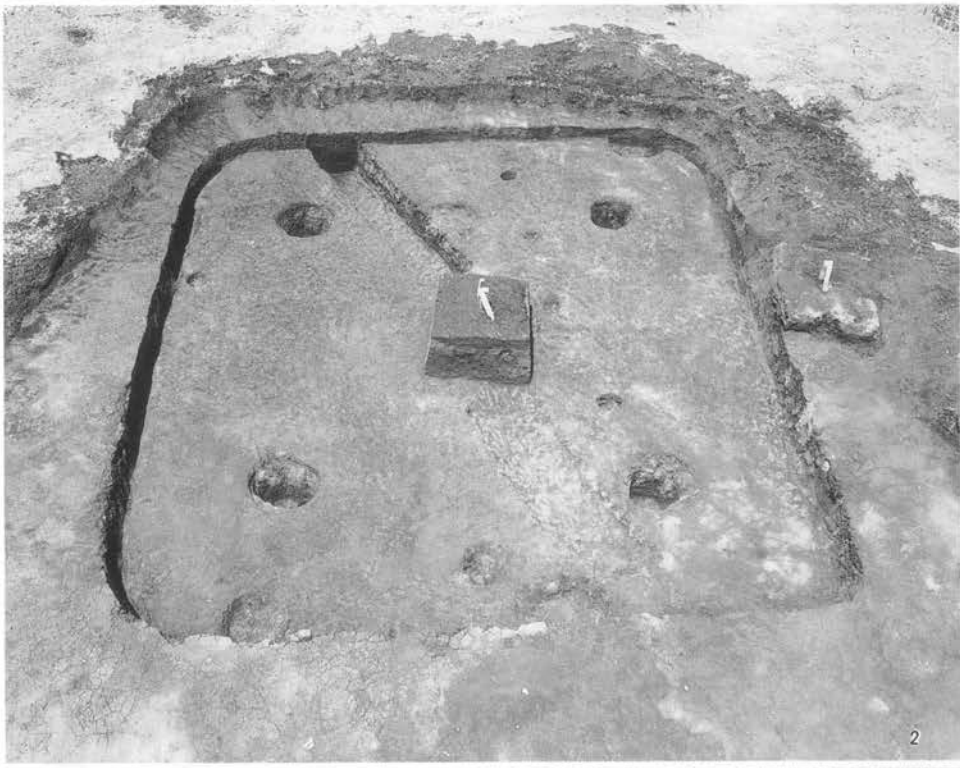


竪穴住居063

1
2
3

1

竪穴住居002



2

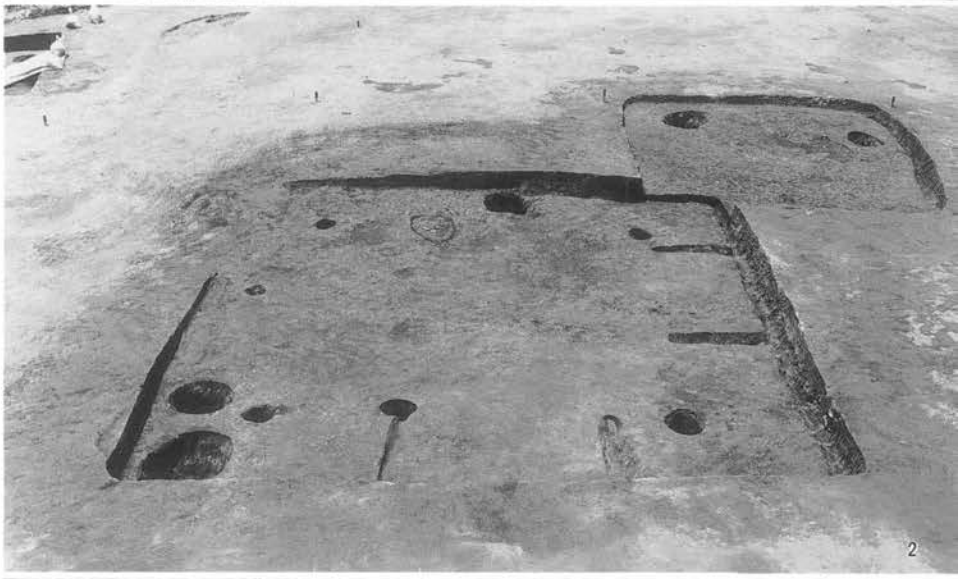
竪穴住居003

3

竪穴住居006

73
1
2
3

竪穴住居001



竪穴住居010

竪穴住居004

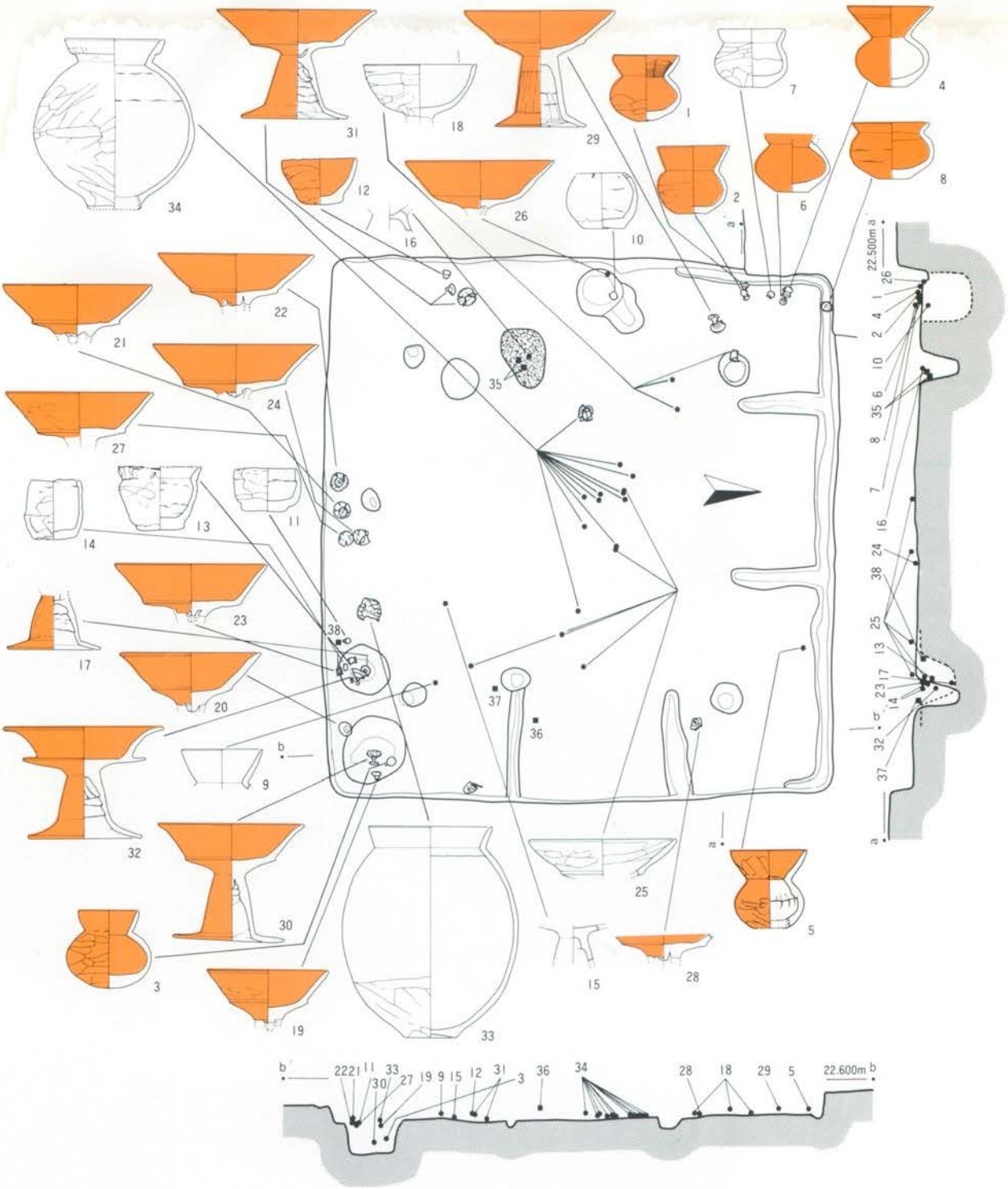
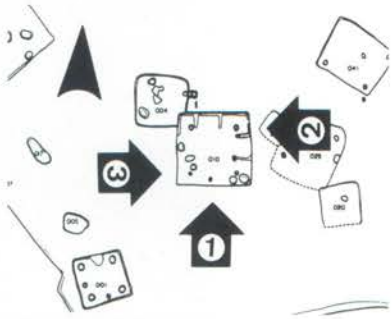


fig. 103　竪穴住居010遺物出土状態



竪穴住居010

竪穴住居010

竪穴住居010

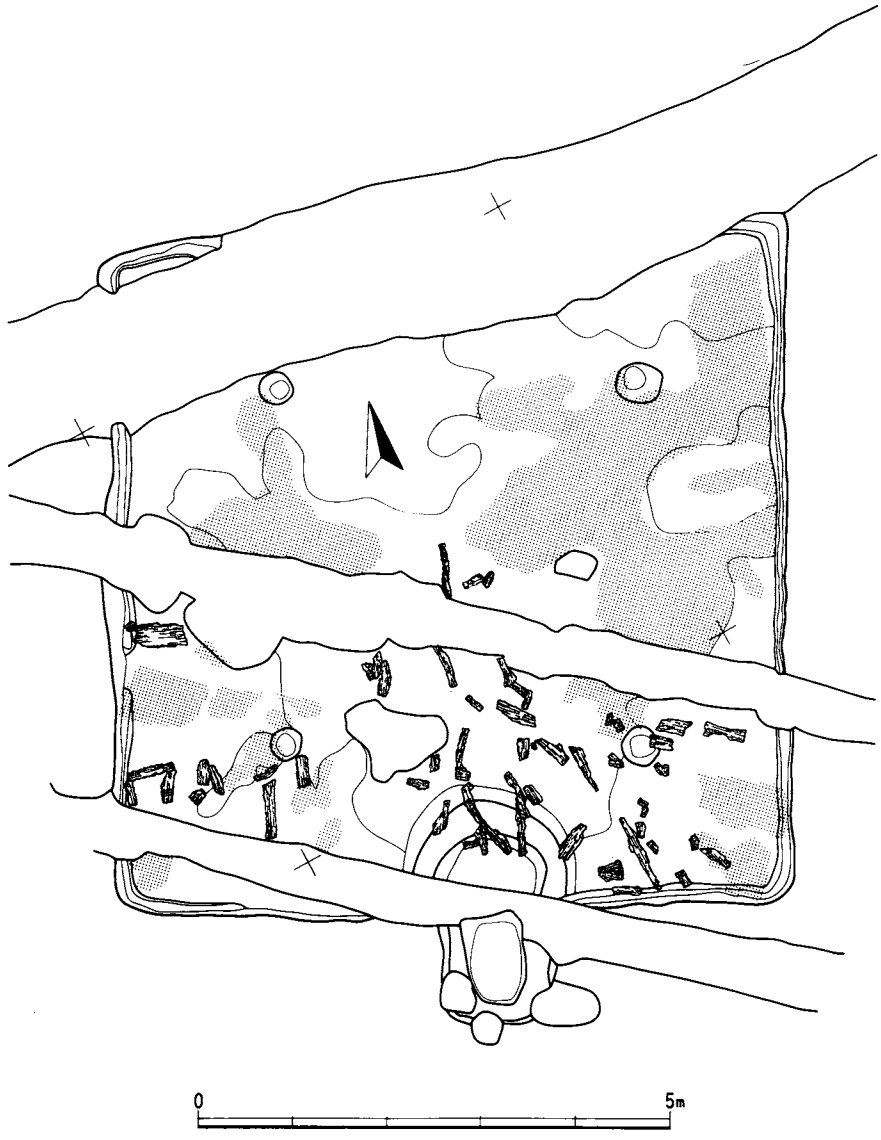
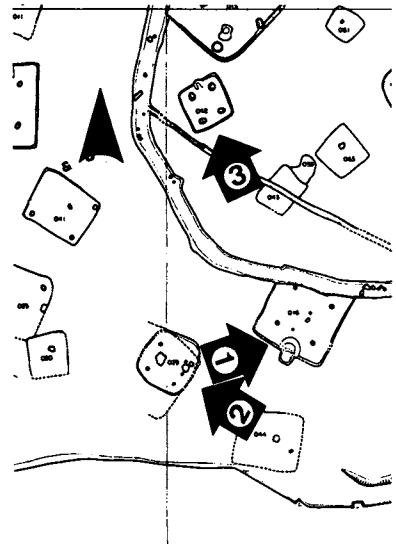
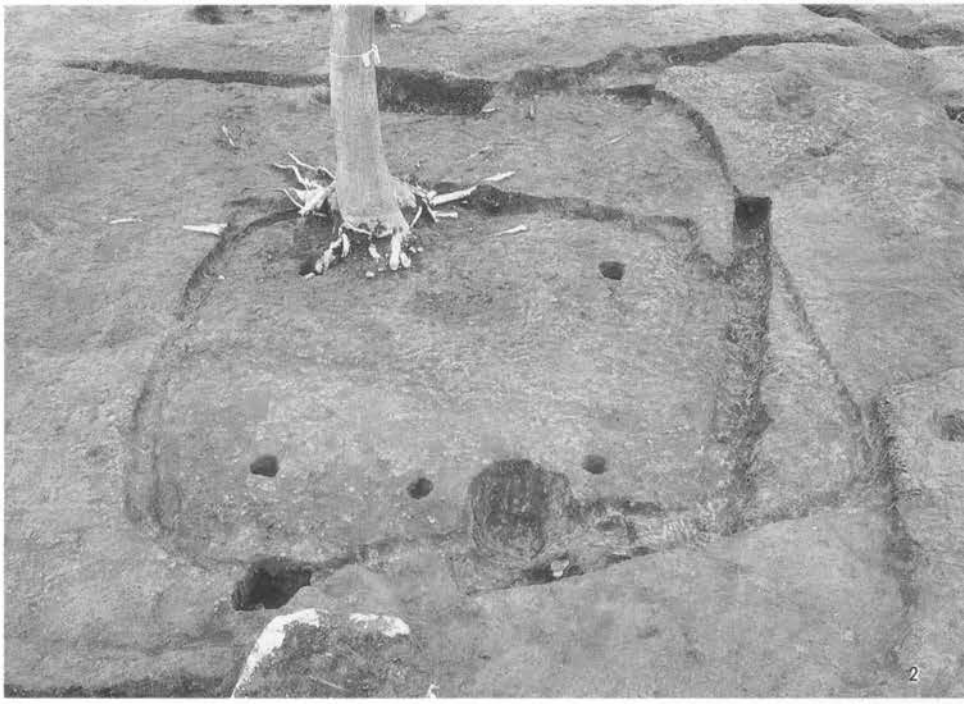


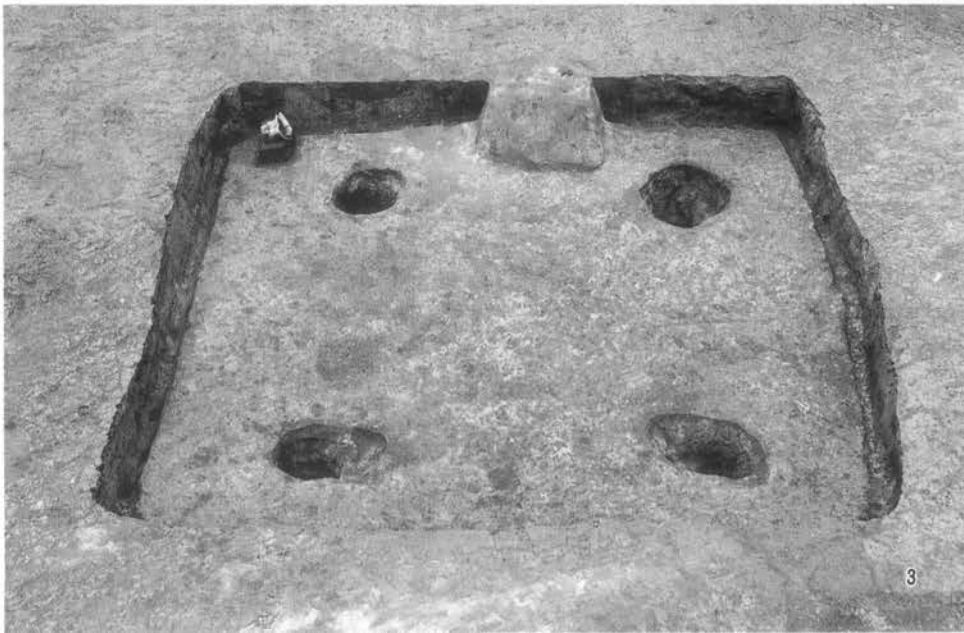
fig. 104　竪穴住居016焼土・炭化材出土状態



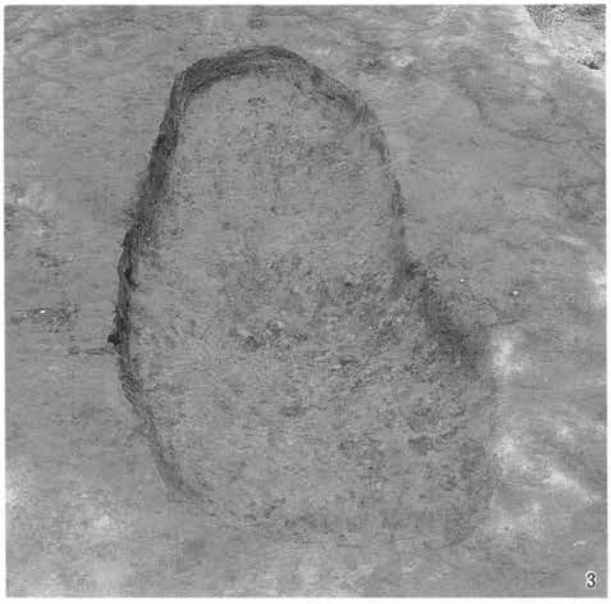
竪穴住居016

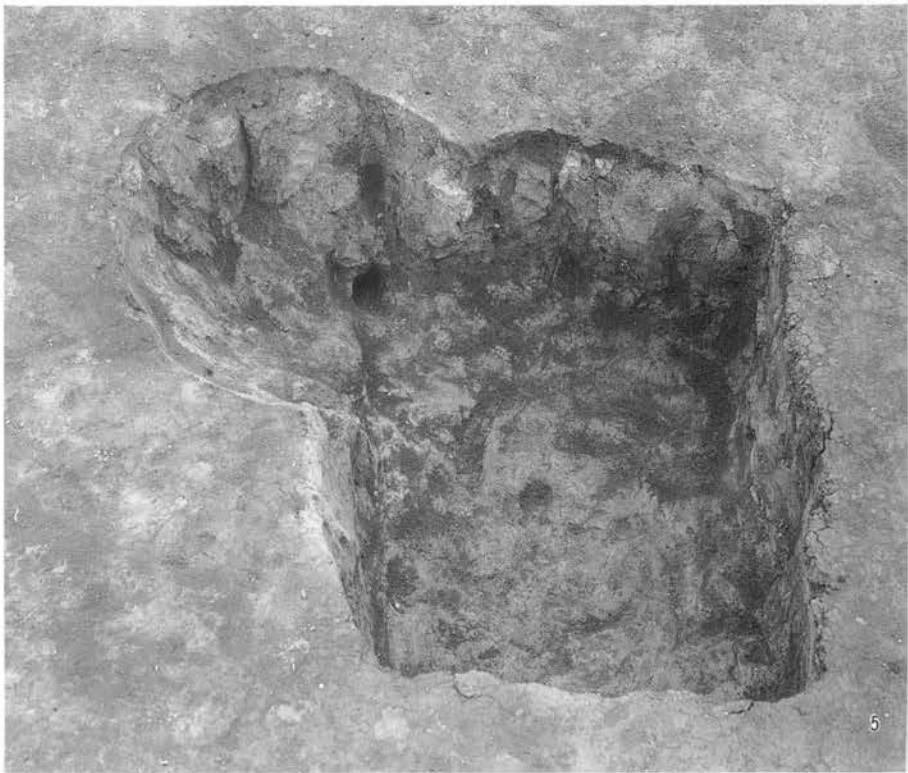


竪穴住居029



竪穴住居042





1. 炉　穴 051
2. 土壙墓 007
3. 土　坑 017
4. 土　坑 059
5. 土　坑 045

1
2
3

溝 018

溝 021

溝 048

1-1

1-2

1-3

1-4

1-5

1-6

1-7

1-8

1-9

1-10

1-11

1-12

1-13

1-14

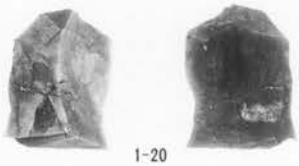
1-15

1-16

1-17

1-18

1-19


1-20

1-21

1-22

1-23

1-25

1-24

1-27

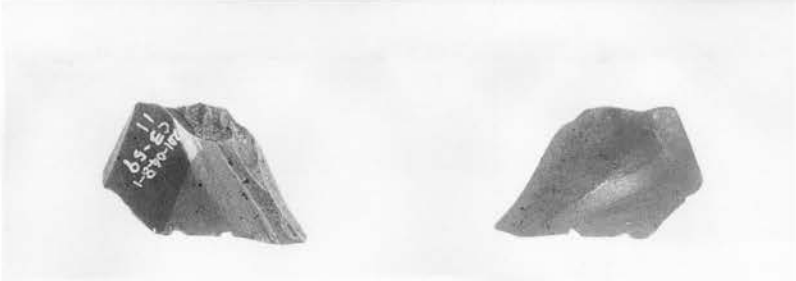
1-26

1-28

2-1

2-2

2-3

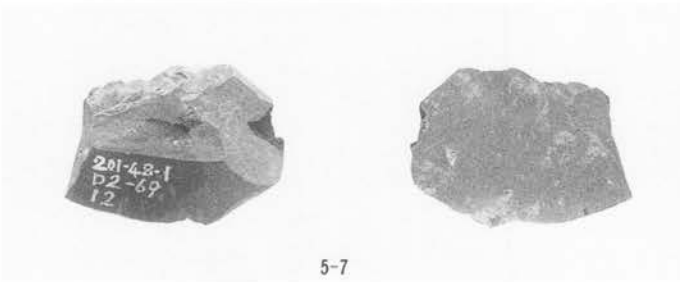


ブロック外-2

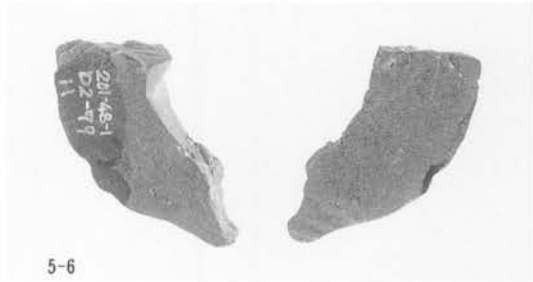
5-1　5-2

ブロック外-1

5-4　5-5　5-3



5-7



5-6

4-2

4-3

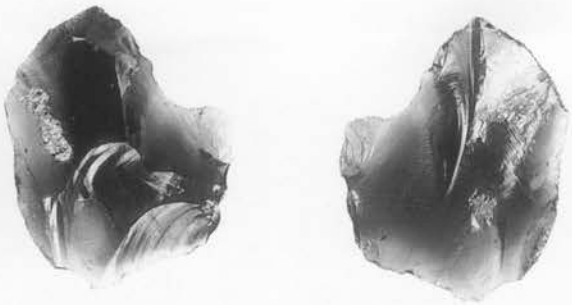
4-1

3-1

3-2

3-3

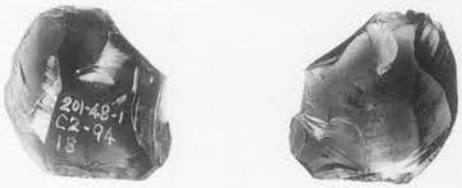
3-4



3-5

3-6

3-7



3-8

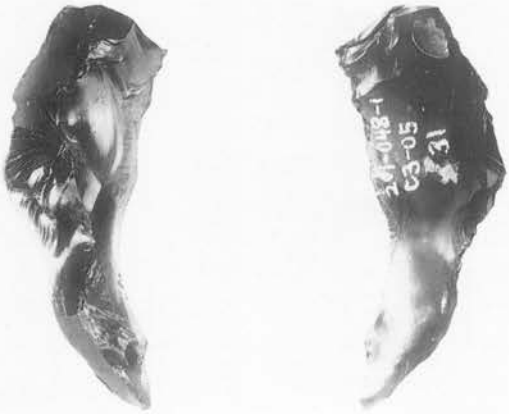
3-9

3-10

3-11

3-12

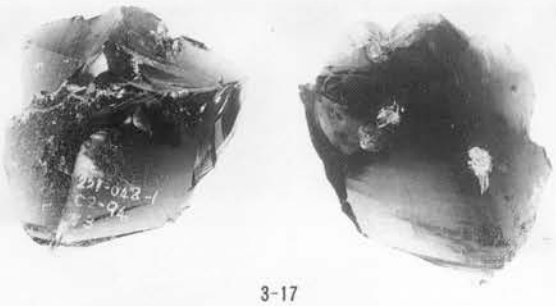
3-13



3-14

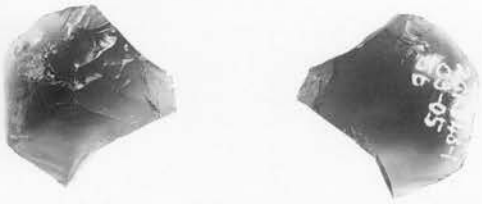
3-15

3-16



3-17

3-18



3-19

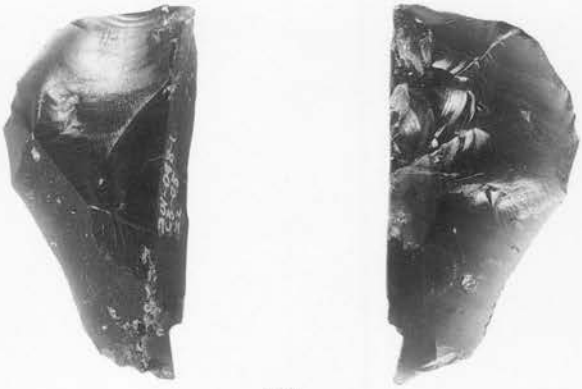
3-20

3-21

3-22

3-23

3-24



3-25

3-26

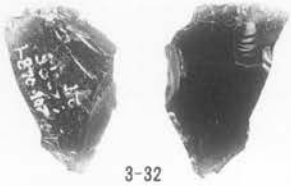
3-27

3-28

3-29

3-30

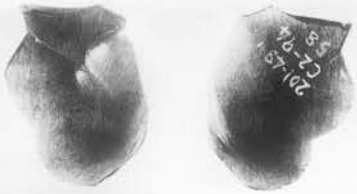
3-31



3-32

3-33

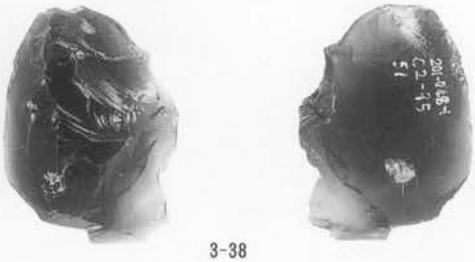
3-34



3-35

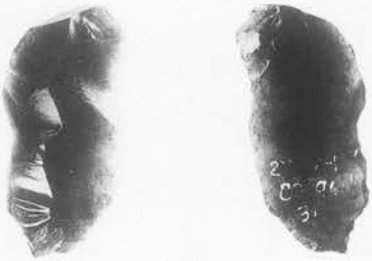
3-36

3-37

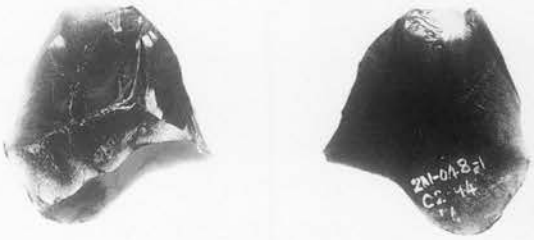


3-38

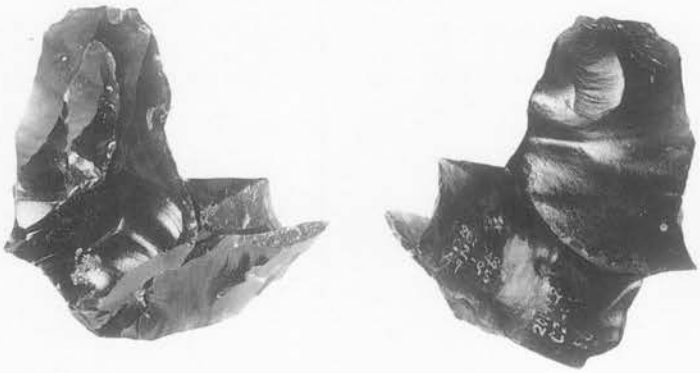
3-39a+b



3-39a



3-39b



3-40a+b+c+d

3-40a

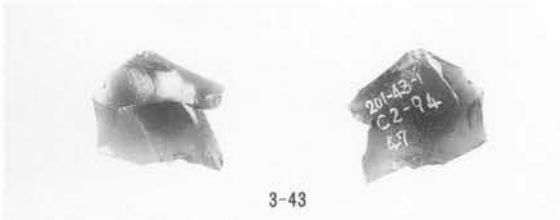
3-40c

3-40d

3-40b

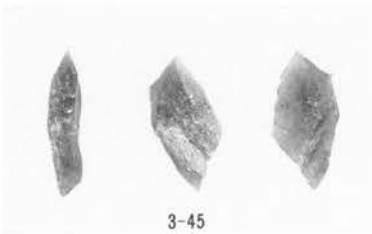
3-41

3-42



3-43

3-44

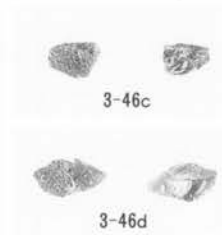


3-45

3-46a+b+c+d+e+f

3-46a

3-46b

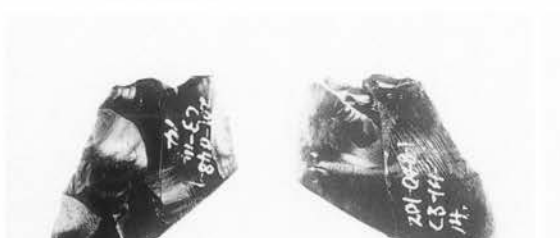


3-46c

3-46d

3-46e

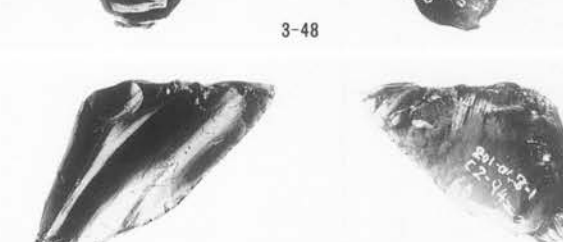
3-46f



3-47

3-48

3-50



3-49

3-51

3-52

3-53

3-54

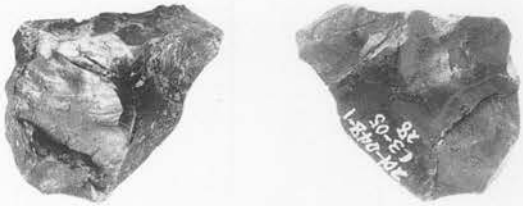
3-55

3-56a+b

3-56a

3-56b

3-57



3-58

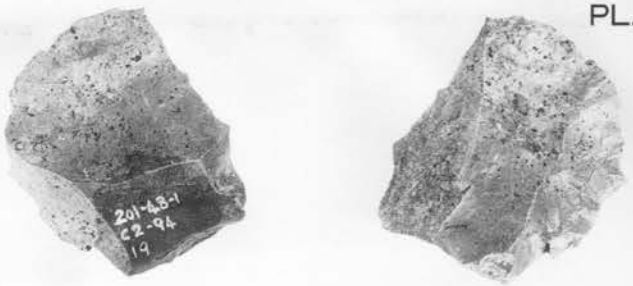
3-59

3-61

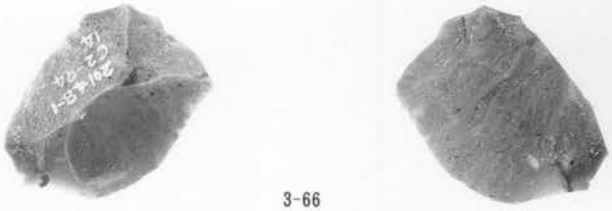
3-60

3-62

3-63

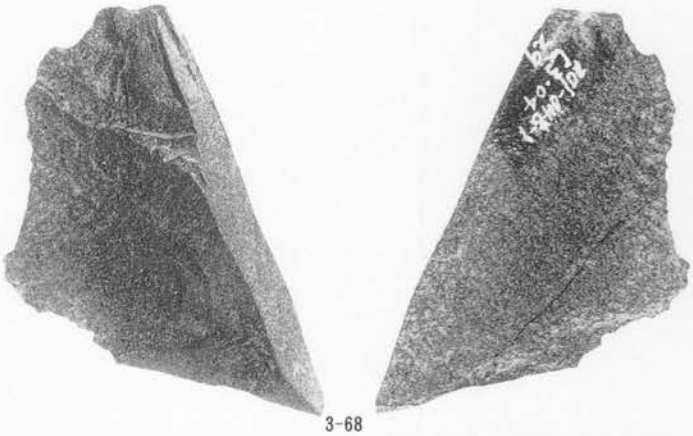


3-64



3-66

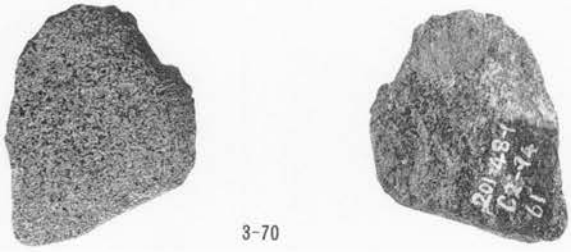
3-65



3-68

3-67

3-69

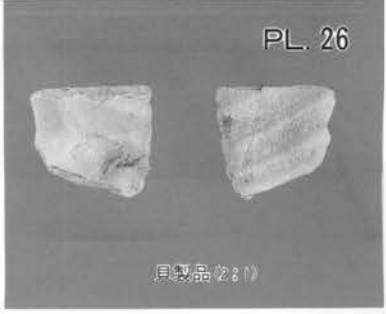


3-70

3-71

3-74

3-72



貝製品(2:1)

3-73

炭塊

表-3　表-6

表-4　表-5

表-1

表-2

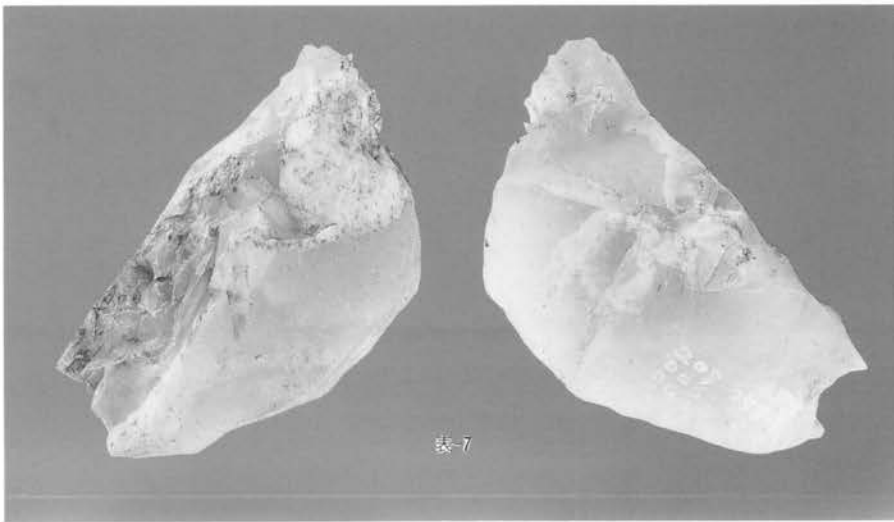


表-7

1 : 2.5 4-1

1 : 2.5 6-1

1 : 2.5 4-4

1 : 2.5 4-3

1 : 2.5 4-5

1 : 2.5 4-7

1 : 2.5 6-10

1 : 2.5

4-6

1 : 2.5

4-8

1 : 2.5 13-4

1 : 2.5 13-9

1 : 2.5 15-9

1 : 2.5 15-4

1 : 2.5 15-5

1 : 2.5 13-10

1 : 2.5 15-7

1 : 2.5 15-12

1 : 2.5 15-3

1 : 2.5 15-14

1 : 2.5 15-10

1 : 2.5 22-1

1 : 2.5 22-2

1 : 2.5 27-1

1 : 3 27-9

1 : 2.5 27-2

1 : 2.5 27-7

1 : 2.5 27-8

1 : 2.5

34-2

1 : 2.5

30-1

1 : 2.5

34-1

1 : 2.5

33-1

1 : 2.5

36-2

1 : 3

38-3

1 : 2.5

38-1

1 : 2.5

38-2

1 : 2.5

30-2

1 : 2.5 40-2

1 : 3 40-6

1 : 2.5 40-1

1 : 2.5 38-8

1 : 3 35-1

1 : 2.5 44-1

1 : 2.5 60-1

1 : 2.5 56-2

1 : 2.5 10-2

1 : 2.5 10-1

1 : 2.5 10-7

1 : 2.5 10-3

1 : 2.5 10-4

1 : 2.5 10-6

1 : 2.5 10-8

1 : 2.5 10-13

1 : 2.5 10-12

1 : 2.5 10-11

1 : 2.5 10-10

1 : 2.5 10-14

1 : 2.5 12-6

1 : 2.5 12-13

1 : 3 10-18

1 : 3 10-19

1 : 3 10-20

1 : 3 10-21

1 : 3 10-27

1 : 3 10-23

1 : 3 10-25

1 : 3 10-26

1 : 3 10-24

1 : 3 10-31

1 : 3 10-22

1 : 3 10-32

1 : 3 10-17

1 : 3 10-30

1 : 3 10-29

1 : 3 12-5

1 : 3 12-7

1 : 3 10-33

1 : 3 10-34

1 : 3 12-14

1 : 2.5 2-1

1 : 2.5 8-10

1 : 2.5 8-9

1 : 2.5 8-8

1 : 2.5 2-3

1 : 2.5 8-3

1 : 2.5 8-5

1 : 2.5 8-2

1 : 2.5 1-2

1 : 2.5 8-4

1 : 2.5 8-7

1 : 3 8-6

1 : 2.5 14-1

1 : 2.5 26-1

1 : 2.5 39-2

1 : 2.5 39-1

1 : 3 42-3

1 : 2.5 14-2

1 : 2.5 16-2

1 : 3 16-3

1 : 2.5 42-4

1 : 2.5 42-1

1：2.5　遺構外-10

1：2.5　21-4

1：2.5　21-1

1：2.5　7-1

1

2

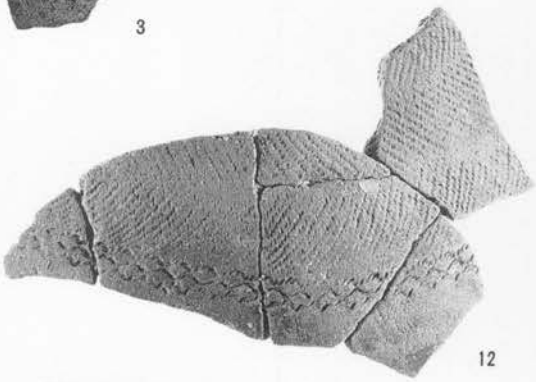
3

4

5

6

7



12

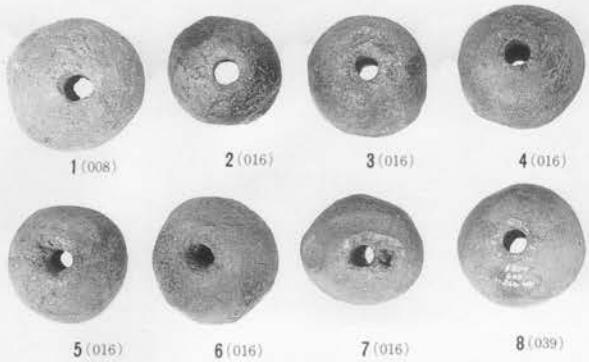
8

9

10

11

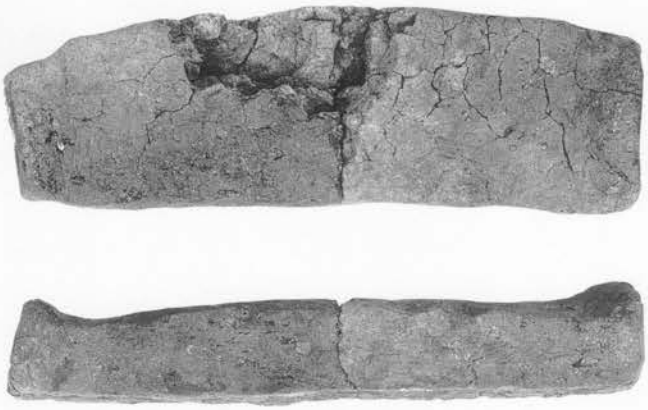
13



1 (008)　2 (016)　3 (016)　4 (016)

5 (016)　6 (016)　7 (016)　8 (039)

9 (002)



10 (010)

11 (010)

12 (035)

13 (021)

14 (021)

15 (032)

16 (遺構外)

19 (039)

21 (060)

17 (遺構外)

20 (030)

18 (遺構外)

千葉県文化財センター調査報告第153集

千　葉　市　荒　久　遺　跡　(1)

－千葉県立中央博物館野外観察地建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

平成元年３月25日　印刷
平成元年３月31日　発行

発　　行　千　葉　県　教　育　委　員　会
千葉市中央４丁目13番28号

編　　集　財団法人 千葉県文化財センター
千葉市葛城２丁目10番１号

印　　刷　有限会社 正　　文　　社
千葉市都町２丁目５番５号